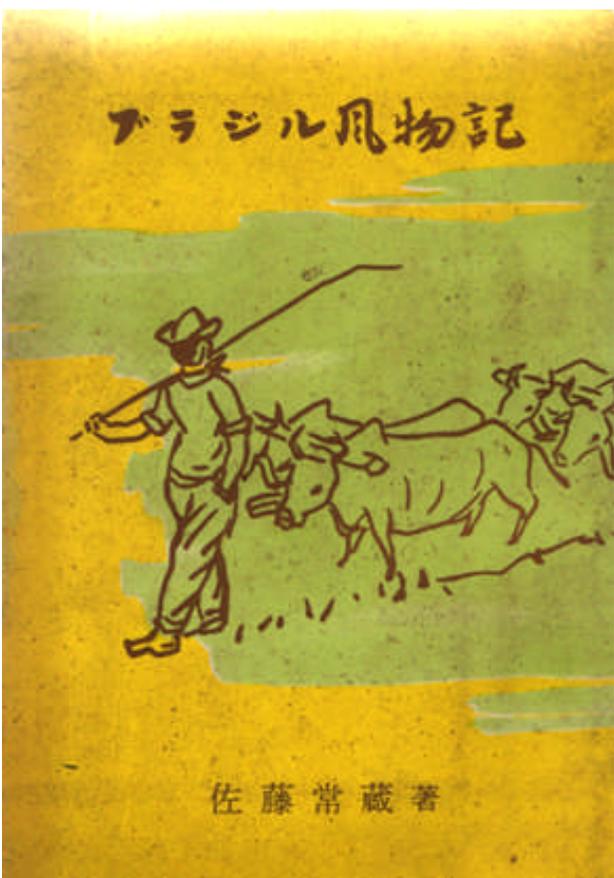


ブラジル風物記

佐藤常蔵 著

― 広大無辺の国土の歴史風俗人情の素描 ―



目次

序のことば

6

随筆・評論

8

新旧の境に立つて

8

鉦泉郷リンドイア

ニッポン・ブームの行方

日本人の名刺と肩書

21

アルブケルケ・リンス

カンポス・エリゼオス宮の歴史的饗宴

コロニア婦人の自覚

33

移民という字

フェルナンド・デ・ノローニヤ島

誕生日の偶感

54

紫陽花咲く庭

マッシュヤード・デ・アシス逝去五十周年の所感

アメリカ人の作った日本時代劇映画

66

ワシントン・ルイスの面影

観光地ウバツバの昔話

わが家の実態とコロニアの実態

79

道楽の価値

リオ海岸に建てられた一つの胸像………	
エウクリーデス・ダ・クーニャの作品と風格 ……	91
エウクリーデス・ダ・クーニャ五十年忌所感………	
言葉と文化………	
ブラジル文化体系の執筆に当って ……	105
クリスマスと七面鳥………	
孟蘭盆の一日 ……	
ヘーグ世界平和会議とルイ・バルボーザ ……	117
墓前の冥想 ……	
移民随話………	
昔のカフェー店と珈琲貴族 ……	132
ピアーダの妙味 ……	
リンドイア鉱泉の余徳 ……	
記念塔の美 ……	146
カリオカの由来 ……	
ガルボン・ブエノ街の変遷 ……	
映画の生態 ……	158
亡友と豚の足 ……	
セマーナ・サンタの一日 ……	
リオ市の建設史 ……	169
新聞人プリニオ・パレット ……	
上塚周平氏とその周辺の人々 ……	

ブラジル音楽の巨匠ビラローボスを語る	185
洋上の誕生(小説)	193

ブラジル史話・風物記

カボクロの感覚	204
サン・フランシスコ河の奇蹟	204
マウア子爵の偉業	204
ブタントン研究所	219
北東ブラジルのジャンガーダ	219
歴史的名所サン・クリストヴアン宮	219
世紀の中央寺院	238
サンタ・カタリナの開拓史と先駆者ヘルマン・ブルメナウ	238
史的広場の回想	238
モンテローロ・ロバット	261
ドン・ジョアン六世	261
ドン・ペードロー一世の横顔	261
ドン・ジョアン六世と作曲家ジョゼ・マウリシオ	285
バイアの特徴バイアーナ	285
熱風吹きまくる半砂漠地帯カアチンガ	285
天才画家ペードロ・アメリカ	302
ブラジル画壇の巨星アルメーダ・ジュニオール	302

植民期の製糖工場エンジエーニョ

312

パウリスタ博物館

奴隷時代の遺風アグレガード

アマゾンの特産魚ピラルクー

334

パラグアイ戦史を飾るリアシユエーロの海軍戦

黒人の特殊部落モカンボ

ルイ・バルボーザの滞英通信

352

ペトロボリスの紫陽花

ベレン河岸の野外市ヴェル・オ・ペソ



序のことば

さきに私はブラジルの風味の一書を出版した。本書はその姉妹篇ともいふべきものながら随筆と史話に併せ、ブラジル風物記を主とするところに特徴がある。

もとより学者の論文でなく、また系統だった著述でもなく、随時思いつくまま書き綴った難文を収録したに過ぎない。しかしそれ等の文章を書くために眼を通した参考文献が相当の数に達していることに今更ながら驚く。また機会を得て日頃尊敬する当国の著述家や新聞人と直接面談することができたのは本書の資料を得る上に好都合であり、私にとってよい刺激ともなった。ただ私の才能が足らず、本業の傍ら僅かの暇に執筆したためか、今原稿を見直すのに充分に意を尽し得なかったことを遺憾とする。

さて今年（一九六〇年）をもって在ブラジル三十八年となる私はどうやら算数の点ではマカコ・ヴューリヨ（古猿、またはブラジル旧移民の意）の仲間入りができそうである。これはブラジルぼけ、善悪何れの意味にもカボクロ（ブラジルの白人と土人或いは土人と黒人の混血系土着人）化していることでもある。ところがこのカボクロにこそ眞にブラジルのものがあるかも知れない。

従ってカボクロはそれなりに利口ぶることなく、せめて鈍い

感覚に磨きをかける心構えが必要かと思う。

事実ブラジル文化の根底をなすものはイベリア文化と共にカボクロ文化であることを考えれば、カボクロ的感覚には何かしら捨てがたいものがある。そうした解釈をもつてこの書を一読して頂ければ幸である。

今回の出版に関してはサンパウロ日本文化協会々長山本喜誉司博士、日伯中央協会並びに帝国書院社長守屋結実雄氏の多大の御配慮をうけ、また本書に挿入される写真はブラジル地理統計局、内国地理学部の提供によるものであり、表紙題字は帝国書院取締役佐藤温氏に、 図案と挿絵はブラジル聖美会創立会員、田中重人画伯によることを伝え且つお礼申上げる次第である。

一九六〇年四月二一日

(ブラジル遷都の日)

新旧の境に立つて

老眼鏡と銀婚式の感懐

今までに私は幾度か随筆や感想のようなものを綴ったが、しみじみ過ぎ去った年を偲び、新年に思いを馳せながらペンを執る改まった心境になったのは今回が始めかも知れない。それほ一つは齡のせいであり、一九五八年度を通して私の個人的に曾て経験しなかつた幾つかの記念すべき出来ごとがあつたからである。

その昔、ノロエステで知人を年始訪問の途中、たまらなく喉がかわき、夢中で小川の水を飲んだところ、少し川上で馬が小便をしていたなど、懐かしい思い出はあるが私の人生の記録とはならない。その後田舎からサンパウロに出てからも、私は言わば平凡な新年を繰返して来たのみで、今数えて見るに三十六回の新年をブラジルで過ごしていることに驚く。

しかし先駆移民でないまでも、大正末から昭和初めにブラジルに移住した人は、平均三十回の新年を迎えているのだが、四季の変化に乏しく、天災地変とてない当国で多忙の中にも大体がのんびりした生活を送っているためか、格別年頭の印象を新たにせずして歳月を重ねる人が多いのではなからうか。こうして善悪何れの意味にもブラジルぼけして行くのが一世移民の姿かと思われる。

ところが一昨年（一九五六年）を境にして齢五十となった私に、独身時代には自覚しなかった人生社会観が生れたのは中年の悟りというべきであろうか。およそ年齢にこだわるなど、私としてはつとめて避けたいことだが、一九五八年に入って止むを得ず使い始めたのが老眼鏡である。しかし視力の衰える生理的現象が、精神面によく影響して、何物かを悟ったのは事実だ。これは老眼鏡の功德であろう。

私が老眼鏡を必要とした直接の原因は、昨年（一九五七年）の七、八月頃に拙著「ブラジルの風味」の校正をやったことに発している。八ポイントの活字で普通より小さいためでもあるが、拡大鏡を用いながら辛うじて校正を終えた私は、検眼をして老眼鏡を用いる決心をした。そして新調の老眼鏡をかけて昨年末、日本の出版社から届いた拙著に眼を通したが余りに鮮明に見え、各所に誤植や文章のまづい点までがはっきりして恥かしい感がした。元来モーローとしていたのが明瞭に見え過ぎるのはきまりの悪いものである。

人は恥を知るのが一つの進歩であろうが、もし私が将来第二回の出版をする時は充分に意を用いて、悔いを残さないだけのものを作り上げたいと思う。

さて「ブラジルの風味」は文字通りの拙著にもかかわらず各方面の方々から読後感についての書面を頂いたのは感謝である。しかもそれが一家の主婦であり数人の子のお母さんである

方が多いのは、私をして大いに考えさせるものがあつた。友人が私を冷かしているに、『君はどうやら中年婦人にウケるらしいね』

私自身が中年であるから、若い女性にモテようなどと大それたことは望まない。むしろ中年以後の人々に関心をもつて読んで頂けるのが喜ばしい。時にはそれ等の婦人に偶然お目にかかるが、その折に意外の面持ちでしげしげ見られるのはテレざるを得ない。それは想像の人物とは全く異ると思われているようで、これまた初めて老眼鏡をかけて自分の作品を見た時と同じく恥かしい。

しかし拙いながらも単行本を出したために街上で多くの人達から、貴方の著書を読みましたと、いわれるのは張合いがある。また日系コロニアでは一冊の単行本が平均七、八人に読まれていることを知ったが、その割合から計算すれば一千部が七、八千人に読まれていることを思つて、今更のように単行本出版の責任の重大さが感じられる。

次は一九五八年を以て私共の結婚二十五周年を迎えたことである。忘れもしない、一九三三年八月にサンパウロ、リベルダーデ街のメソジスト教会で私共が結婚式を挙げてから二十五年が流れた。つまり、日本移民五十周年は私共にとって銀婚式に相当し、本来なれば眠懇の先輩友人を招待してボード・デ・プラタの祝宴を張るべきだが、感ずるところあつて当日は、私達二人きりでささやかな祝いをした。子一人ない私共は二人の

みの生活に馴れきっているせい、か、人数の増えることが却って家庭の調和を破ることになる。それと反対に常に大勢の子や孫にとり囲まれている人が、もし老夫婦二人きりになったなればさぞかし寂しいであろうと想像される。

そうした他人の事はさておき、私共の銀婚式当日だが、私は危い手つきでシャンペーンを抜き、妻が焼き鳥を切る時に猫が窓越しにのぞきにやって来る外には人の訪れもなく、庭の池に降りる一対のサビヤは私共の家庭を祝福するかのようだと、気儘な解釈をしてみる。思うに私共二人は恋愛によって結ばれたのではなく、極めて月並みの結婚をしたが、それを悔いてはいない。結婚前に青春期を楽しむこともなかった私共は、家庭をもつてから恋人同志が将来に夢を抱くにも似た気持で生活設計をし、その第一歩として現在の宅地購入を決定した。こう書き立てると何だかオノロケを語るようで恐縮だが、私共には楽しい反面悲壮の気持もあった、というのはあの当時数十コントもの宅地を月賦払いで求めるのは相当の冒険であったからである。

天は自ら助くるものを助く、これが古今東西に通ずる格言であり、一生懸命やればきつと何とかありますよ、というのが妻の処世哲学でもあった。その時に私は、いざとなれば女性の方が揺がない決意のホドを示すことを知った。それから十七、八年が去り、私達が現在の家を建てて住んだのが七年前である。そして今年度の銀婚記念のため増築と改築の着手したのが四月

始めであった。今年内に完成の予定が資材や部分品の不足で延び延びとなり、どうやら来年の二、三月頃までかかりそうである。

改築には新築以上の種々の煩わしきがあるだけに完成の日に対する楽しみもあるが、新年を目前にして私共には特に感慨深いものがある。(一九五九年一月)

鉾泉郷リンドイア

ブラジルに三十八年も住んでカゼと下痢の他には病気をした経験もなく、血圧すら計ったことのない私がこの一、二年来は少しく腹工合が悪いので医者診断をうけたところ、胃酸欠乏症とのことであった。まさしく胃酸過多の反対である。この状態をほっておけば胃ガンになる怖れがあるとおどかさされ、X線でとつてみたが幸いそれらしい形跡もなくやつと安心した。

その後は薬用塩酸の補給を始め幾つかの療法をつづけたあげく、胃もさることながら腸の手当ての必要を感じた。そこで腸の洗浄を思いついたのが数カ月前である。それにはリンドイアのラジューム鉾水で洗うのがよいと聞き、早速地図を拡げてリンドイアの所在を確かめる有様である。

およそ私達の地理的常識はこんなもので、北パラナやマツト・グロツソはよく知っていても、距離的にサンパウロにずつ

と近いリンドイアについて無知なのである。もっとも、ビン詰の、アグア・リンドイアより知らない人との比較で私の方がましであろう。

さて、リンドイア行きを計画したのはよいが、仕事の都合や悪天候のために中々出かけられない。どうかして早く行かなければ貴方のおなかは段々悪くなりますよと妻はしきりに私を促すが、これこそせにハラほかえられぬであろう。

かくする間に二、三カ月が過ぎ、やつと都合が叶ってリンドイア行きを決行したのが三週間前のことである。午前九時発のエスプレッソ・フラジレーロのバスに乗った私共二人は、久しぶりにゆつたりとなって窓外の景色に見とれる。時折見るジュンジャイー近傍のブドー園もその日は特に美しく、カンビーナス一帯の牧場の遠望も格別である。やがてバスはカンピーナスの市街を貫通してモジミリン街道に出で、次いでアンパード道に入るに及んで道巾が狭く起伏が多いので余り快適とはいえない。揺れるバスの中で本を読む間に古色を帯びたアンパードの町を過ぎ、セーラ・ネグラに向う。

セーラ・ネグラとリンドイア間は二十五キロだが車道の悪条件のためか一時間を要する。現在開設工事中のアスファルト路が完成すればこの間は時間的に大いに短縮されるであろう。バスはいよいよリンドイアに近づくが、私の頭の中には修学旅行の学生のように、リンドイアはサンパウロから百七十キロ、標高九百五十メートル、人口二千三百などの数字が浮かぶ。リ

インドイアは市街というよりは大きな文化農園の感じで、周囲が山でかこまれ、散在する建物の主なものはホテルである。目抜き通りは一つだけで、幾軒かの土産物を売る商店と唯一のシネマ館があるに過ぎない。

私共はモジー・ダス・クルーゼスの本多慶三郎氏のすすめによつてインドイア・ホテルに泊ることにしたが、これはサンパウロ州政府がインドイア観光奨励のために経営するもので、眺望のよい高台に所在している。宮殿風の宏壮な建物でサロン、食堂、客室、廊下の何れも広々とし、しかも清潔であることは他に余り類を見ぬであろう。

旅装を解いた私共は王侯貴族の気持になる。正面の窓から前方を望むに、ゆるやかな線を描いてつづく山の姿は日本の奈良の三笠山を彷彿せしめる。シーズン外れであるせいか泊り客も少なく頗る閑散で、ホテル雇員の客に対するサービスは懇篤を極め営業感を超越するものがある。

インドイアは起伏した地形を巧みに設計してつくられた鉱泉水で、至る処に植込みがあり、街路は塵一つ見ない美しさである。大して肥沃土とも思われない小公園や広場に種々の草花が咲いているのは、気候風土が通す他に住民がそれを大切にすることからであろう。

名高いラジューム鉱泉はインドイア・ホテルから五百メートルほどで、徒歩で十分に達する。

この鉱水は地下四百メートルから湧出するもので全く臭気も

味もなく、幾種類かの鉱物質とラジウムを含むのが特徴である、しかしラジオ・アチビダーデは噴泉から出て一分二十秒でその効力を殆んど消失するとか。

そのリンドイアの鉱泉が発見されたのは十八世紀末である。サンパウロとミナス間を旅する馬匹商人がそれを見出し、万病に効きめあることを流布して広く知られたものである。

コロニアの一世には、温泉といえれば日本の温泉情緒を想像するであろうが、ブラジルの鉱泉地ほそれとは趣きを異にする。リンドイアの鉱泉も謂う所の温湯ではないが、入浴して身ぶるいするほどの冷たさではない。

ブラジル語のテルマは日本の湯治場のことである。現在のリンドイアのテルマは余り立派ではなく、大規模のものを目下建設中である。その前面のプールは豪壮な感じで、これに鉱水が満たされてアグアマリーナの宝石のような碧色を呈している。絶えず新しい鉱水が流れ込んで古い水が流出される。プールの容積は四十万リットルというからサンパウロでの「アグア・リンドイア」二瓶七クルゼーロ五十センチターボの計算では約三千八百コントスに相当する。この中で泳ぎ廻るのであるから贅沢なものである。

昔エジプトの女王クレオパトラは牝馬の乳の浴槽に浸ったとか、リンドイアのプールもまさに豪華風呂を想わせる。しかしこの湯治場での入浴とプール遊びには、予め医者診断が必要

である。

また鉱水を飲むのにも医者指定により、適量を時刻正しく飲まねば効果がない。そういえば人々がプラスチック製の目盛りをしたコップを持っているのが目につく。私共がリンドイアに着いた当日は日曜で医者を訪れられなかったので、無料の鉱水を飲まねば損のようにガブガブ飲んだところ、傍に居合わせた人から「貴方達はそんなに沢山この水を飲んででは却って害がありますよ」と注意された。その日の夕刻、二人共に軽い頭痛と目まいを感じたのはそのためかも知れない。

プールの近くにはユーカリ林があり、その樹蔭に数頭の馬が客を待っている。これは乗馬を楽しむ人々の貸馬で、どれも活気に乏しい温順そのものの馬であるから、まず落馬の心配は無用であろう。それから子供用の山羊に引かせた小型の車のあるのが面白い。

プールの正面には、テルマの創立者ドトール・フランシスコ・トツジの胸像が建てられている。

ドトール・トツジは第一次欧州大戦の勃発当時サンパウロを訪れたキューリー夫人をリンドイアに招嘱して、あのラジューム鉱泉についての確証を得たといわれる。その後リンドイアの鉱泉はリユーマチや神経痛を始め当国に多いエクゼマ、アレルジアなどの皮膚病及び種々の内臓疾患に特効あることで有名となり、次第に訪問客が増えた。

その湯治場の裏側には「リンドイア水」の工場があつて昼夜

兼行で働いている。これこそ自然に湧き出る水を瓶詰にして送り出せばよいので、正しく水商売で不景気知らずと羨やましい限りである。このリンドイア鉱泉の所有権はイルモンス・カリエリ商会によって占められている。工場内に、鉱水と共に酸素を発散せしめる噴泉があつてこれが一般の観覧に供されている。

それから問題の腸の診療所であるが、これはリンドイア水の工場の近くにあつて、浴槽に据置された洗浄器によつて洗われる仕かけである。一回当り約三十リットルの鉱水で洗うのであるが、私は生まれてから五十年間の腸の汚物を洗浄したことになる。プラスチック管を通つて排出されるいろいろのモノを眼前に見せつけられ自分の体内に愛想のつきる気がした。

腸を洗つた当日はひどく倦怠を覚え、一日中寝そべっていた。気持ちであつた。その日は特に暑かつたが午后四時頃に豪雨があつて涼しくなり、草木の緑色が一段と美しかった。ところで当夜の夕食であるが、全くの空腹に食べた若鶏のスープの味が忘れられない。

リンドイアには何処にも下級労働者の住家らしいものはなく、上品な落付きのある別荘地の感じである。森林つたいに細道を歩みながら谷川のせせらぎを聞き、雑草の中に咲く可憐なコスモスに、見とれるなど、私共は珍らしくも詩的境地に浸つた。街路は浴客を運ぶホテルの自動車走のみで揆も立たない。それらの自動車にはホテル・タモヨ、グランデ・ホテル・

ド・ラーゴ、ホテル・グロリアなどと書かれている。リンドイアには一流ホテルの他に二流、三流のホテルもあるのでこれに永逗留して保養する人も多い。常に多忙の日を送っている人が年に一回位はリンドイアで腸の洗浄をやり、休養がてら読書をし思索をするのは悪くないであろう。

リンドイアを引揚げる日の早朝、私共は同地の名所の一つであるシオン山に登って、爽快な山の空気を満喫することが出来た。僅か数日の滞在ではあるが、身と心を洗い清めた気持で帰路につき、山蔭に消え去った鉱泉郷リンドイアの名から何となく音楽的な響きを感じた。

ニッポン・ブームの行方

昨今アメリカとブラジルにニッポン・ブームを現出しているが、これは一つには映画に負うところが大きい。航空網の発達した現在では、映画撮影所に大掛りなセットを作るよりは現地ロケーションが手取り早く、しかも実感を出すに効果的なので、近頃は盛にこのロケーション撮影が行なわれる。もつと進んだのは現地国とアメリカとの合作映画として市場に現われる。

しかし外国の何処にロケーションしても映画の観客の眼にはそれが特に珍らしくも映じないようだ。ところが、日本で撮つ

たものはその背景や風物が、外国（とくにヨーロッパ）とは全く一変するので、文字通りの異国情調が味われて人々の好奇心を満足させるらしい。さりとしてそれを以て外国人に日本文化が理解されたなどと考えるのは早合点であろう。もの珍らしいのと理解は全く別である。

その点、同じく外国人でも英国人・アメリカ人・フランス人・ドイツ人には其の日本文化の研究家もあるし、彼等の東洋趣味（日本を主とする）には当の日本人に劣らないものがみられる。いかえれば、それらの外国人のニッポン研究には私どもの頭の下がる様な熱情と深みがある。それは少くとも戦後の風潮に乗った御都合主義からではなく、国と国、人と人、との愛に根ざしたものである。したがって日本文化という中でも能楽や、茶道、絵画、活け花、建築、造園など、それらの芸術を生んだ時代的流れと歴史を深く学んでいることでは、ブラジルほけしている私どもの及ぶところでない。

しかしながら、ブラジル人にそのような人は極めて稀でなかろうか。

大多数の当国人のニッポン趣味は、日系人から贈られた日本陶器や人形、扇子を喜ぶ程度を出ない。甚だしいのはあくどいようなカレンダーの日本的な絵を飾って得意然としている。もつともその罪の大半はコロナの人達にある。

ここで述べたいのは往年ジャパン・エア・ラインと東京銀行から寄贈されたカレンダーである。

印刷が実に素晴らしく、外国人への日本美術の紹介には最適のものと思う。宣伝とはいえ国家的見地からもあのような美挙に對して敬意を表したい。

それから映画の影響であるが、ほとんどの日本で撮った映画にはゲイシヤの出る場面がつきもので、これが何処でも相当喜ばれる。問題はそのゲイシヤである。当国の知識階級に、キモノを着た日本婦人がゲイシヤであるかのように思いこんでいる人があるには驚かざるを得ない。事実ゲイシヤ・ガールは日本特有のものであるから、おりにふれてこれをよく説明する必要がある。キモノ姿の一般の日本婦人とゲイシヤを混同されてはそれこそたまらない。日本文化の紹介もさることながら、当国では差当りゲイシヤについての誤らない認識をもたせるためのネンゴロな説明が大切である。日本の女性美はブラジルの邦人一世の郷愁の一つをなすというも過言ではないが、その感じと外国人の日本婦人観は必ずしも一致していない。

人の寄るところでは宗教と政治ほ禁物で、酒や女性に話題を向ければ天下泰平とはいうが、外国人に日本婦人の話をするには冗談の中にもよほどの慎重さを要する。戯れ気分で話すなればとんでもない誤解を生むことがあって、およそ日本文化の紹介とは反対の結果をもたらすかも知れない。

この頃ではニッポン・ブームの現われとして、当国人の間に日本語の勉強熱が起っているが、これが動因となって真摯な日本文化の研究家の出るのは遠い将来ではないと思う。大体ブー

ムとは新興気分、にわか景気を意味して永続性のない感じを与えるが、それにしてもニッポン・ブームによ一って、次第に日伯文化交流の種子がまかれて行くのは事実かと思う。

また日本の提灯やアンドン、ゾーリ、スダレなどが流行するのは他愛もないものだが、案外こんなところから日本研究熱が芽生えるらしい。

要はブラジル人からの日本文化の質問に対して、不用意な答えをしないことである。

日本人の名刺と肩書

この頃は移民五十年祭を機会に、日本から有名人が相次いで来伯するが、これ等の人は型のようにカメラを携帯し、懷中に沢山の名刺をもっている。

そして初対面の人には必ず名刺を差し出して紹介に及ぶが、これは礼儀とほ云え日本人の間に多く見る習慣のようである。空港などで、出迎えの人全部に名刺を配るインギンさには感心のほかなく、あれでは日本出発前に相当の名刺を用意せねばならぬだろう、と余計な心配をしてみる。

しかし名刺は重宝なもので、一見してその人の姓名、住所、職業、社会的地位までが解る。後日の参考にと保存しておいた名刺が意外な時に役立つことがあるから、名刺交換も馬鹿にな

らない。

ところで、日本人の名刺には肩書の披露のために作られたようなものがある。その肩書も堂々たるもの一つか二つ位はよいが、大して世間に知られていない会社の重役や団体の幹部などの名誉職を幾つも連らねてあるのは、何だか虚勢を張っているようで、時にはおかしくすらある。更に念の入ったのは、沢山の現職の他に、前〇〇会長、前〇〇議員、と昔の肩書が並べてあるのには恐れ入る。又英国流にミスター某としているのがあるし、日本的なポルトゲースで肩書を附してあるのがどうもピッタリ来ないのもある。

面白いのは著名人士の名刺の蒐集家もあると聞くが、私にはそんな道楽はなく、人から名刺をもらって直ぐ無くする方である。

おそらく日本人の名刺交換癖は昔も今も変らぬらしいが、この名刺を振りまく数によってその人物の社会的立場がわかるような気がする。官庁の例をとれば、属官、課長位まではよく名刺を出す、局長、次官、大臣級は矢鱈に名刺を出さない。今更名刺でもないからであろう。つまり、著名人であるほど名刺を必要としないのである。儀礼的に刺を通ずる場合の多いことはいうまでもないが、概して自己の存在を他に知らしめねばならない人が名刺を差出すという結論になるかも知れない。こうなると、成るべく名刺を必要としない身分になりたいものである。

私の場合は無精のために、ブラジルに三十七年もいて今までに名刺をつくったことは前後二、三回よりない。二十六年前の訪日の折は、拓務省委嘱講師という臨時の辞令をもらったので、地方へ講演旅行の都合上、人から奨められて肩書入りの名刺を急造した。

その時は、旅行先きでなるほど名刺は用い方によって便利なものと思った。第一、肩書きなるものは自分で云うのほてれ臭いが、名刺によって相手に知らしめるのは一種の重みがあつてよいものである。しかし名刺に記入される肩書き如何によって相手の応待振りを異にするとところに、日本の社会の世智辛さが感じられる。

私は日本の地方農村の旅行中に、至る所で村長・助役・中学校長・県会議員・郵便局長・青年団長・農会技師・在郷軍人会長などの肩書入りの名刺を沢山もらった。僅か四ヶ月の滞在で大きな函一杯の名刺をもってブラジルに帰ったが、これは私だけの経験ではあるまい。

ここで話を地元のブラジルに転ずるが、当国では総てにおおまかなところがあつて、日本ほどに名刺の必要性を感じないが、肩書がモノをいうのは日本に劣らない。

とくに官省や公共団体などを初めて訪問するときには、肩書入りの名刺が大いに役立つ。手ブラでは受付で門前払いされることもあるが、名刺のお蔭で堂々と高官に面接することも出来る。

私は最近悟るところあって、自分の名刺に肩書をつけ、専ら官省や公共文化団体の訪問に用いているが、そのために思いがけない恩典に浴すことがある。何かの記述に先立って資料集めをするに、肩書入りの名刺が如何ほど効を奏するか知れない。当国では或る程度の良心的？な押しが強さが必要と思う。

次に肩書に関連しての尊称であるが、ブラジルの社会で最も耳にするのがドツール、コロネル、コメンタドルなどである。

大学出にあらざる相当の学識ある人にドツールとして敬意を払ってもその人が怒ることはなく、地方農村の大地主や資産家をコロネルと呼ぶのは一種の親しみがある昔のブラジル、特に帝政前にはメリシアーノ（市民兵）の制度があり、これが一つの名誉職でもあった。従ってこのメリシアーノは出世が早く、地方の豪農などには直ちに佐官の位が与えられ、中にはデレガード（警察署長）代理をつとめ、或いは税吏を兼ねるのもあった。それ等の人の尊称が謂うところのコロネルであった。その後は必ずしも軍籍に関係がなくなるとも、政治的に勢力のある地方のモノ持ちを、習慣的にコロネルと呼ぶようになった。

コロネルと聞けば、五、六十台の金持ちで大して教養はなく、しかも精力型の人物が頭に浮かぶ。このコロネルが女性にもてるのはその風格や人望ではなくて、背後のカネの光によることはいうまでもない。従って、コロネルは尊称であると同時に少しく冷かしを意味する。

日系コロニアも五十年にしてコロネル型の御仁が相当現われつつあるのは、善悪の批判は別として一つの成長であろう。

それからコメンダドルであるが、これは名誉帯勲者であつて、ブラジル政府からの叙勲者となることは当然であるが、
・ 当人はそれが満足らしい。私は、現在の織物工場の創業当時、市場開拓のためにリオに行き、或る旧舗を訪れたが、その当主はポルトガル人のコメンダドルであつたので「セニョール・コメンダドル」と尊称をもつて挨拶したらそれが気に入つたのか、五十コントほどの注文をもらった。

その他帝政の貴族制華やかなりし頃は、豪農や大耕主はほとんど例外なく授爵されてバロンとなつたが、それ等の没落した子孫は昔日を懐かしみ、父祖の代には爵位のあつたことを未だに誇りとしている。

また新時代の潮流に乗つて大資産家となつている旧男爵家も多く、その当主をして未だにコンデやバロンと習慣的に呼んでいるのがある。

肩書と尊称の何れも、用い方によつて人情の機微にふれ、その心理的効果は大きい。

アルブケルケ・リンス

笠戸丸移民着伯当時の聖州州統領

数日前に末松夫人の案内を得て、曾てのサンパウロ州州統領アルブケルケ・リンスの息女エレナさんと面談することが出来た。

アルブケルケ・リンスの名は日系コロニアにとって特に忘れ難いものがあるが、それは同氏がサンパウロ州州統領に就任間もなく日本の笠戸丸移民がブラジルに着いたからである。

アルブケルケ・リンスはジョルヂ・チビリツサの後継として一九〇八年五月に州統領となったが、それより一カ月余を経て日本の第一回移民が着いたのである。

現在、同氏の遺子としてほエレナさんとその兄一人あるのみだが、その子息は失明しているために実質的にはエレナさんが遺産を管理している。

この事実を知った日本移民五十年祭委員会では早速エレナさんに祭典への招待状を送った。

二十数年別のサンパウロを知る人は、リベルダーデ街とラルゴ・ダ・ポルヴォラの角に一つの邸宅のあったことを記憶するであろう。あの建物がアルブケルケ・リンスの邸宅であって、其処において彼は一九二六年に六十八才で逝去した。

彼の洗礼名はジョアキン・マノエル・アルブケルケ・リンスで、一八五八年にアラゴアスのサンミゲル郡に生れた。彼の父コロネル・ジョアキン・アルブケルケ・リンスはアラゴアス有数のセニョール・デ・エンジェーニョ（製糖工場主）で、数ヶ所にエンジェーニョを所有して政治的にも相当の勢力があり、豪邁不屈の性格であったところからマリンボンド（野蜂）のあだ名で知られていた。

さて問題のジョサキン・マノエル・アルブケルケ・リンスであるが、彼は将来の侶呂たるべくバイアの神学校に入学したが、卒業間際となつて翻心し、聖衣を載くかわりにレシフェの法科大学に学んだ。而してアラゴアス・プロビシア議員を振り出しに、連邦議員、上院議員の席を占め、又アントス裁判所の判事ともなっている。

一八八一年に彼は、サンパウロの大耕主として名高いソーザ・ケーロス男爵の息女と結婚し、良き家庭の夫であると同時に政界人としても重きをなした。勿論これは夫人の内助の功に負うところが大きい。

アルブケルケ・リンスのサンパウロ州州統領任期ほ一九〇八年から一九一二年であり、笠戸丸が着いた当時の農務長官は、カルロス・ポチーリヨで、司法長官は昨年（一九五七年）物故した前大統領ワシントン・ルイス・ベレーラ・デ・ソーザであった。

ところで、アルブケルケ・リンスのサンパウロ州州統領時代

の一九一一年度に、青柳郁太郎氏が東京シンジケートの代表者としてブラジルを訪れ、サンパウロ州政府と折衝を重ねた結果、イグアペ郡の官有地一万五千ヘクタールの無償分譲を受けたことよって、レジストロ植民地が建設されたのである。これはいうまでもなくアルブケルケ・リンスの好意的取計らいによることを知らねばならない。

その後彼は農務長官カルロス・ボテーリヨと歩調を一つにして日本移民の導入に尽した。

アルブケルケ・リンスは、感情に支配される親日家ではなく、実の日本人の理解者であったことを終りに付け加えて置きたい。

(一九五八年六月)

カンポス・エリゼオス宮の歴史的な饗宴

日本移民五十年祭の主な記念行事としてはサンパウロのセー寺院で謝恩ミサを初め、アニヤンガバウー大通りに展開された日伯合同の大行列と、イビラプエラ公園の工業館で催された祝賀式が挙げられた。

また三笠宮両殿下を主賓とする、サンパウロ州知事主催のレセプションが豪華絵巻ともいふべきものであろう。

三笠宮御夫妻が、リオからゴヤス平原に目下建設中の将来の

ブラジリアを、クビチエツク大統領と共に訪れ、サンパウロに到着されたのが六月十七日である。当夜の州知事公邸で催されたレセプションに集った人々は千数百名といわれる。この中でコロニア側から約二百五十名が招待されたが、夫婦相携えての出席であるから五百名の日系人が三笠宮両殿下を囲んで歓を尽くしたことになる。

このような饗宴はコロニア有史以来のことで、現在中年以上の一世にとっては、その生涯を通して初めにして最後であろう。それだけに印象深いものがある。

またカンポス・エリゼオス宮（移民文庫注・以下カンポスが正しい）としても、おそらく外国の皇族を迎えてかくも盛大なレセプションを催したことは曾てなかったかも知れない。

これは偏えに三笠宮両殿下の、日本代表並びにブラジルの国賓としての、当国訪問によると同時に、日系コロニアの成長を物語るものと思う。こう考える時に、今日の礎石を築いた先駆移民に対する感謝の念を禁じ得ない。

いうまでもなくカンポス・エリゼオスの語訳は、パリーのシャンゼリゼーに相当し、サンパウロの高級住宅地として最も早くから開けた場所で、歴史的に由緒深く、此処に名門旧家が豪壮な邸宅を造営し、それぞれの趣向を凝らした庭園が貴族的な感じを現わしていたものである。

カンポス・エリゼオス宮は、帝政期のサンパウロの代表的大地主且つ珈琲王ユリアス・シャーベスの邸宅であったもので、こ

れが一九一二年度のアルブケルケ・リンス州統領の折に州政府によって買収され、以来州知事公邸として現在に及んでいる。サンパウロ州政府があゝの建物を買収した頃のシャーベス家の当主は二代目のエズー・シャーベスで、同氏はサントス・ズモンに次ぐ民間飛行家として知られている。

カンポス・エリゼオス宮は街の一区画の殆んど半分の面積を占め、庭園の老樹は帝政期の貴族制華やかなりし日を偲ばせる。しかしシャーベス家は父子共に爵位を固辞して受けなかつたところは変人的存在であつた。

この建物が州政府の所有に属してからは幾度か増築改装が施こされたが、最も大掛りの改築の行われたのがアルマンド・サーレス執政官の時である。

さて本論のレセプションであるが、当夜の少し雨曇りの空気に電燈が映え、列をなして続く自動車から降りる盛装した紳士淑女は何れもファッション・ブックから抜け出たようである。大理石の階上入口にはドン・ペードロ時代の礼装そのままの宮廷衛兵が槍を交叉させて立っていて、人々をして前世紀にあるがよゝな錯覚を感じさせた。各々のサロンにはシャンデリアが煌煌と輝やき、オルガンの奏樂が静かに流れて来る。こうした絢爛な雰囲気から、私は芥川竜之介の舞踏会に措かれる鹿鳴館を思い浮かべて見た。

ところで当夜のレセプションの席上に一段の美観を添えたの

は、優雅なキモノ姿のコロニアの婦人連であった。彼女達があの饗宴のために予てから準備怠りなく、一斉にキモノを着飾った迅速な連絡とその手際には感服する。世の男子も大いにこの準備の鮮やかさに学ぶものがあるろう。

テレビジョン技師は、いち早くキモノ姿のコロニア婦人に目をつけ、あらゆる角度からハンドルを動かしていた。あの晩は数十万のサンパウロ人がテレビジョンに映ずるコロニア婦人の美しさに感嘆したことであろう。

特に近来のキモノを見て感ずるのは、その色彩や模様到老若の差が殆んどなく、おしなべて派手になったことである。そのせいか中老婦人までが令嬢のように見えるのは、キモノのもたらず魅力と神秘さかも知れない。

しかし派手の中にも床しい美を生むのがキモノの特異性であり、しかもこれは日本婦人が着こなしてこそ典雅の美が現われる。外国婦人がキモノを着てこの感じを出すのは不可能に近い。

あの夜は僅か一人二人でなく、数十名のコロニア婦人が話し合わせたかのように日本着姿で現われたので、一層集合の美が醸されたともいえる。ブラジルにおいての苦闘数十年、三笠宮御夫妻を迎え、この饗宴に美しい日本婦人に心行くまで陶然となったのは私だけではあるまい。

やがて人々の拍手が起るや、三笠宮両殿下がジャニオ州知事夫妻に導かれてサロンに現われる。

妃殿下も日本着を召されて高貴な気品は溢れるばかりである。三笠宮は通訳を介して新聞班の応接にいとまなく、しかし少しのお疲れの様子もなく極めて御元気であられたことは心強い限りであった。

広大な庭園に配置された卓を囲んで人々の談笑が始まり、噴水は高く飛沫を上げて色彩電燈に反映し、池の周囲には白鳥がゆるやかに歩を運んでいる。檻の中の一対の白色オームが嬉々と戯れながら止り木を揺がすのが面白い。また駝鳥が恰かも賓客然として人々を眺めながら悠歩するなど、カンボス・エリゼオス宮の特異風景であろう。

さすがに千数有名の人々であるから相当数のボーイを動員したのであるうが手不足の態である。先にシャンペンやカクテルが運こばれ、次いでスープと七面鳥の焼肉が現われる。しかしこのような会場では、食べることよりは周囲の来賓の美に見とれ、豪馨なレセプション気分には無上の快感が湧く。他のサロンではジャニオ州知事が何時になく上気嫌で人々の挨拶に応えながら微笑んでいる。その様たるや州知事就任直後に官吏肅清を断行してジャニオ旋風を捲き起した人とも思われな

い。

人々が豪華な饗宴気分を満喫し、小雨降る中を帰路については十時頃であった。そのコロニア人各々の胸に抱かれる幸福感には日本移民半世紀の苦闘を要したのである。

(一九五八年七月)

コロナ婦人の自覚

〃へソクリ女房〃から脱却を

先日、友人数名が集まったの雑談に、私に対する意見として「何時も歴史モノでなく、時にはコロナの婦人問題、殊に恋愛観などについて書いてはどうか」という説が出た。これは私にとって相当の難題といわざるを得ない。扁平足で身軽でない私に、高い屋根の上に登れと強いられるようなものである。わけても恋愛だが、この方面に全く無経験の私が客観的に恋愛批判をやっても大して面白くもなく、塩を入れ忘れたフェジヨン（ブラジル特産の常食用の豆）を食べるような味気のないものになるかも知れない。

三年ほど以前に一人のモデルを選び、恋愛突入論というテーマで軽い評論を綴るつもりでペンを執ったが、一向に実感が湧かず、学説とも論文ともつかないものが出来たので、その原稿を破り棄てたことがある。それ以来なるべく恋愛のテーマには触れないようにしている。これは必ずしも恐れをなすのではないが、この問題に関する限り私の柄でないと悟ったからである。

さりとして広い見地から、コロナの女性問題には無関心ではないつもりでいる。

ここで私はアダム、イブから説き初める野暮さはないが、女

性あつての男性であることは原子論が巾を利かせる今日とても変りがなく、科学の進歩が人工衛生から月世界の探険まで飛躍しても、女性が男性の母である至極当然の事実を私共は考えることも必要であらう。

この位を前提として、扁平足で不器用な私が屋根ならぬ高山の頂点を征服するアルピニストの快絶と冷厳さを味わうつもりで、思いきつてコロニアの婦人觀を語ることにする。これは私の眼に映じたコロニア婦人の一面でもある。

ところで、私がこんな野心を起すに當つては次の理由と動機とがある。

その一つは、コロニア実態調査のために染色業組合の方々がサンパウロのそれぞれの区域を完全に調べた結果として、女性の数が男性よりも多い事実を知ったことである。この一例によつて全コロニアの結論は出せないとしても、おそらく總体的に女性が男性よりも多いかと想像される。これは末オソロシイことであると同時に心強くもある。

今から三十数年前は、コロニアでの婚期の男女の比率は四十対一で、男子にとつて配偶者を得ることは殺人的の悩みであったが、昨今の男女の比率は四十対四十二であるかに思われる。年頃の女性が理想の男性を射止めるに自ら真剣ならざるを得ないわけで、また娘数人をもつ親の氣苦勞は充分察しられる。今一つは、私事を引合いに出して恐縮だが、拙著「ブラジルの風味」が意外に多くの婦人に愛読されることを知ったにある。

特にブラジル史伝が喜ばれるとか、これはコロニア婦人の向学心の表われを物語るものであろう。

これによつても、多くのコロニア婦人が自身の向上のために男子以上に何物かを求めていることが解るような気がする。その求める態度が、他から与えられるのを待つか、進んでそれを獲得するかがコロニア婦人が旧態依然の域を脱して伸びる分岐点であると思う。私の謂うコロニアの女性は、強ち一世婦人だけでなく、日系婦人の全体を意味するから、率において当国生れの女性が遥かに多いのは当然である。それ等の女性が早晚妻たり母たる人であることを考える時に、女子教育の重要性を痛感する。

先ず中年以上の一世婦人を観察すると、糟糠の妻型の人が比較的多い。この型の婦人の夫には、概して世間的には立派な紳士であつて、家庭では封建的な亭主に変るのがある。こんな夫に限つて若干の金に窮し悩む時に、妻からへソクリを並べられて女房の有難さを感じるが、次第にそれを忘れて暴君振りを発揮する有様である。

この意味でコロニアの婦人は、へソクリ女房の域を越えて社会的にはコロニアの良き妻であらねばならない。家庭改善のためには痛烈に夫をコキ下ろすのもよく、その場合は、犬も食わない夫婦喧嘩に終らぬようにそのコツを心得ることが肝要かと思ふ。

もつともコロニアの或る家庭のオヤジの封建さと我侭は慢性となっていて、老妻の悲壮な覚悟では手に負えないものもあるが、その時は若い二世の妻の登場と協力にもよらねばならない。殊にコロニアでは我侭オヤジの見本のような人で良き夫を自認しているのがあるから始末が悪い。こんな亭主の悪癖矯正には妻の普通以上の賢明と根気と愛情が必要である。その根底をなすのは、婦人の優れた教養から来る理性と積極性であるう。

昨今では一世婦人にも、従来の方への盲従から離脱し、訪日の夫の一人旅を禁じて断固として随伴を主張する人が現われつつあるのは頼母しい。ところで夫の訪日旅行の随伴が単なる虚栄や夫の安全弁的存在であっては意義がない。仮に日本で夫と共に豪華な宴会に出席しても、その席に侍べるゲイシャなどを顔色なからしめるだけのモノを身につけているべきである。それには女性の立場から不断に修養勉強につとめねばならぬが、これとても男子依存でなく、自ら書店でも訪れて良書を選択する気概があつて欲しい。今ではコロニアでの流行の観ある華道や茶道の他に、広く芸術や美術の鑑賞眼を養うこともひいては家庭生活を豊かならしめるものであろう。母モノ映画に感激の涙を流すだけが能ではない。

次は若い日系女性だが、一世婦人の大多数が消極的であるに反し、都会地ではアメリカ映画にみるグラマー・ガールのよう

な人が目につく。勿論、日系女性にはあらゆる面で立派な人は多いが、此処では悪い点を指摘して世の父兄と当の女性の反省を求めたい。

二十才前後の若い女性に中年婦人の分別と教養を望むのは無理だが、肢体や服装の美しい割合いに知性に乏しく、話をして失望することが度々ある。あまつさえ、それらの女性の所作態度が軽佻に見えるのはどうしたものであろうか。

特にノド自慢に熱中する女性には一つの共通的な型があるように思われる。従ってノド自慢の質的改良がそのファンである女性の向上を期することになろう。

結局私のコロニア婦人観は味気ないものになったが、コロニアの各家庭と社会的発展には男子よりはむしろ女性の自覚にまつところが大きい。

移民という字

日本の外務省やブラジル関係の団体には「移民」の語はよく使われるであろうが、他の方面の人にこれは大して縁のないものであり、よし聞いても遠い他人ごとの感がするかも知れない。

この点コロニア人にとって「移民」は一種の親しみがあり、この一語ほど私どもの生活と密接な関連性をもつものはない。

ところが日本では移民の語は何となく耳触わりが悪く、移民を志望する人に劣等感と反感をもたせるので、移民を移住者と改めるなどの説を聞くが、これはつまらない見栄を張るにも等しい。そもイミグランテは何処までも移民であって、これを殊更に移住者とするところに却って不合理がある。

日本の神戸にある移民収容所としても、「海外移住者教養所」とか称されていたらしいが、それとても移民教養所というて悪い理由はないと思う。もつとも現在のことは私は知らない。

早い話が、コロンビア移民五十年祭にしても、移住者五十年祭というのでは実感がなくておかしいものである。

ここで参考までにブラジルの外国移民史を見ると、公認の移民が入れたのは、ポルトガルの摂政王子ドン・ジョアン六世がナポレオンのポルトガル侵略戦を逃れて、ブラジルに遷居した一八〇八年度に始まっている。この外国移民導入の法令は、一八〇八年十一月二十五日付をもって公布された。従ってそれ以前にブラジルに入ったフランス人やオランダ人、スペイン人は、INVASORA（侵入者）IMIGRANTEであって、移民ではないといわれている。

日本の笠戸丸移民のブラジル着が一九〇八年であるから、丁度それより百年前にブラジルの外国移民史が始まっている訳である。日本人が侵入者でなくて、立派な移民として当国に入つたことに誇りをもつべきであり、それを卑下して「移住者」と変えることはないのである。

ブラジルの外国移民導入と同時に、外国人に対する土地の有権も認められ、最初の移民集団村の建設されたのが一八一九年度のプロビンシア・ド・リオ・デ・ジャネイロのノーバ・フリブルゴである。それは主に百家族のスイス移民から成るもので、珍らしくもポルトガル色のない一つの村として現在に及んでいる。ノーバ・フリブルゴを訪れてそれ等スイス系ブラジル人に会って語るさで、話ほ少し外れるが、今から二十六年前に私が訪日した頃、東京の拓務省に奨励課というのがあった。この奨励課が主としてブラジル移民の宣伝とその移民事務に当たっていた。大きな見地からは、拓務省がブラジル移民の監督省であった訳で、現在の外務省と同様である。

在ブラジル十二年と農業雑誌の主幹という私の立場が、拓務省と関係をもたしめ、私は毎日のように日比谷公園近くのあのバラック建ての同省を訪れた。一つには、ブラジルの総領事館や勸業部にいた二、三の旧知が、当時の拓務省の役人であったからでもある。

或る日、「どうせ君は大して用事がないだろうから、ブラジル事情の講演旅行をする気はないかね」とすすめられ、お蔭で私は拓務省委嘱講師の肩書きをもらって遊説することになった。

日本では肩書きがモノをいうのは現在も昔も変りがなく、私に拓務省委嘱講師の肩書き入りの名刺をつくるように云う人もあった。

なにしろ拓務省から講師として派遣されるので、予め講演原稿を奨励課に提出せねばならない。

私は大急ぎで一つの「ブラジル事情」の原稿を作り上げて差出したものである。その原稿が奨励課から拓務局長に廻り、遂にほ大臣官房まで送られ、大臣が眼を通すことになった。一日、永井拓相が私に会いたいとの通知をうけ、私は恭しく大臣室を訪れたが、ちようど昼食の時刻であったので、永井氏は省内の食堂から取り寄せた質素なうなぎ丼かなにかを食べながら私と対談された。

永井柳太郎氏は歯ぎれのよい口調で、「貴方の講演原稿を見ました。なかなかよく書けています。

貴方はこれから疲弊している農村で講演されるのですから、まずそれら農村人の海外移住についての関心を喚起せねばなりません。彼等は相次ぐ疲弊困億で事物に対する思考力も批判力も鈍り、発奮心もなく、ましてや海外雄飛の気塊もありません。しかし、彼等百人の中から一人でもブラジル移民に興味をもつ者が現われれば、貴方の講演は成功といふべきです。

それからもう一つ、とかく日本人には移民を曲解する向きがありますから、イミグランド即ち移民には相違ないが、場所によつては、この移民の解釈にご注意願いたい」と。

私は永井拓相から、日本農村人の心理的傾向と現状（昭和九年頃）について聞かされるところがあつた。大臣室を辞し去る時には、長身の永井氏が不自由な足をひきながら戸口まで送ら

れたのは恐縮であった。

それから二日を経て、私は神奈川県の農村に出かけたが、東京や横浜などの大都市に近いところほど海外発展熱の振わない理由を知りたいと思った。神奈川県では十一カ所かで講演をしたが、至る所で型のように村長と助役さんに迎えられ、小学枚の雨天体操場が講演会場であった。

ところで、問題の移民と移住者の使いわけであるが、私は話が高潮に達するや、そんなことに捉われておらず、盛んに移民を連発して、イミグランテのために気を吐いたものである。講演会が終ってからには、有志のみで座談会をやったこともあるが、或る村では小学教師からブラジルは北米かと聞かれて面喰った。こんなところでは移民と移住者の使いわけなどおおよそ野暮な話である。

もつとも今頃の日本では、こんな馬鹿げた質問をする人ほないであろう。

神奈川県に次いで旅行したのが私の郷里の北海道で、これは拓務省と海外興業会社の共催講演会であった。帯広を振り出しに十三カ所で講演をやったが、その出発前に海興の井上社長からひと通りの注意と注文があった。井上雅二氏は学生肌の人で、趣味はゴルフと漢詩で、恰かも「人と詩と境」という著書を出された時で、私にも署名入りの同書を寄贈された。井上氏は拓務省や外務省とは異り、移民会社としての立場と営業の見

地からも理想と希望が述べられた。同氏は移民の語には少しもこだわっていないかったようである。

あの当時はブラジルの議会で、日本移民の二歩制限案が問題となっていたので、海興としては盛衰の岐路にあった訳である。そのためか、海興の事務所には緊張した空気が感じられた。私が北海道を訪れたのは二月初めの厳寒の時期として、ブラジルの温暖な気候がしみじみ有難いと思った。

青森から函館への連絡船では、奇しくも文学者の吉田絃二郎氏と相識り、種々と話し合ったので退屈することがなかった。その折もブラジル移民が話題となったが、矢張り著名の文学者だけに、青田氏は専門の文学を離れても一般常識が高く、ブラジルの移民事情に相当の知識があるのに敬服した。

北海道の講演旅行の感想を書けば余り永くなるから省くが、北海道こそ日本での移民地的感じのところである。そのためか、北海道各地で「移民」を語りながら如何にもびったりしたものがあつた。

或る見方から、日本の北海道は、ポルトガルにとってのマデーラ島やアソールレス島に相当するであろう。十六世紀初頭にマデーラ島とアソールレス島に移住してその開拓に当ったポルトガル人で、後にブラジルに再移住した者も少なくない。それらが優れたブラジルの開拓者であつたのである。

私は必ずしも郷里と同郷人の自慢をするのではないが、北海

道からブラジルに渡った人が比較的開拓についての好成績を挙げているのは、移民の素質があるからでなかろうか。

神秘と科学の自然境

フエルナンド・デ・ノローニヤ島

一九五七年初めに当国の輿論を沸かせたものにフエルナンド・デ・ノローニヤ島問題がある。

それは同島がアメリカの誘導弾観測基地に選定され、その譲渡交渉がブラジルとアメリカ政府の間に行なわれたからである。それ以来フエルナンド・デ・ノローニヤ島が当国人の興味をひき、幾度か地図を見直した人も少なくない。凡そ一般人の地理的関心はこんなものである。

去る七月一日から国際地理学研究会が開始され、これに各国一千余名の科学者と技術家が参加しているが、この機会にせめてブラジルの地理的常識を養う気運を高めたものである。

そのアメリカの軍当局がブラジル領のフエルナンド・デ・ノローニヤ島を誘導弾基地に最適と決定したのは、軍略、地理、地質、天文物理学的の見地からであろうが、たとえ一小島にしてもそれを他国へ譲るのは一種の身売りにも等しく、これに對

して民衆の間に反対の声が出たのは当然でもある。

さて、私共はともすると地理的に無知であることが多く、特にフェルナンド・デ・ノローニヤ島は当のブラジル人にすら余り知られていなかったようである。事実地図を拡げても、この島はかなり注意せねば見当らないほど大西洋上の泡粒にしか過ぎない存在である。

同島の所在点を示せば南緯三・五〇、経度三二・二四であり、サン・ロツケ岬から百九十八哩、ベルナンブーコのレシフェから三百哩である。従つて、ブラジルの海洋線百哩幅を描く程度の地図にはこの島を見ることが出来ない。

フェルナンド・デ・ノローニヤ島の発見史についての正確な記録はないが、大体に於いて一五〇三年六月二十四日にポルトガルの航海家フェルナンド・デ・ノローニヤによつて発見されたというのが事実とされている。一五〇〇年度のカブラルのブラジル（ベラ・クルース）発見から、一五三〇年度のマルチン・アフアンソ・デ・ソーザのブラジル探検隊までに二十数回に亘つてポルトガルやスペインの航海家がブラジル沿海を訪れているが、或るものはその名前と年月日が明らかでない。

カブラルのブラジル発見直後は、一五〇一年度にアンデレ・ゴンサルベスとガスパール・デ・レーモスがサン・ロツケ岬から南下してプラタ海域に達した記録はあるが、それにフェルナンド・デ・ノローニヤ島については何等記されていない。

その後一五〇三年六月二十四日にフェルナンド・デ・ロロー

ニヤ（後にノローニヤと改名されたもの）が話題の島を発見し、当日が恰もサン・ジョアン祭であったのでそれをサン・ジョアン島と命名した。

しかし又その以前、一五〇二年の四旬祭にスペインの航海家アルベルト・カンチーノが同じくこの島を見出し、クワレスマ島と名付けて、彼の作製した航海図に記載したと云われるが、それが果してフェルナンド・デ・ノローニヤ島であるや否やが明確でない。

又、一五〇三年八月に同じくゴンサロ・コエーリヨと有名なイタリー人の航海家アメリコ・ヴユスプッチが同島の発見を報告しているなど、誰が実の発見者であるやに迷うのであるが、史実の示す限りではその名の通りフェルナンド・デ・ノローニヤを以って発見者と見なすのが最も正当のようである。或る歴史家は、ゴンサロ・コエーリヨとアメリコ・ヴユスプッチ及びフェルナンド・デ・ノローニヤが一五〇三年五月に五隻から成る船隊をもってリスボアを出発し、大西洋上で暴風に遭って四散し、フェルナンド・デ・ノローニヤが避難のために偶然発見したのがサンジョン島即ちフェルナンド・ア・ノローニヤ島であると記述している。

この島の発見された当時は、ポルトガルの王ドン・マノエルの治世であった。その一五二二年となってドン・ジョアン三世によって、同島はその発見者フェルナンド・デ・ノローニヤに譲与されたが、利用価値のないこの島は彼にとって無用の長物

であったに違いない。十六世紀初頭のポルトガルにとってはブラジルの開発は重大な関心事ではなく、むしろ印度貿易に主力を集中したものである。ましてやブラジル近海の一小島の如き問題視されなかったのは不思議でない。

その後、オランダ戦争の前後にはフェルナンド・デ・ノローニャ島は海賊の根拠地とされ、住民とともないまま歳月は流れ、無数の海鳥の巣となって最近に及んでいる。

この島が現在アメリカの誘導弾観測基地に選ばれるとは思議な縁である。

フェルナンド・デ・ノローニャ本島の面積は約二十七平方キロ（巾三キロ長さ九キロ）で、その周囲には沢山の小島が散在するからそれらをフェルナンド・デ・ノローニャ群島と呼ぶのが適確である。それらの小島には、ラッタ、ローザ、セラ・ジャネッタ、メーオ、サン・ジョゼ、モンテ・レドンド、ペードラ・フラータ、プラドロ、ドイス・イルモンス、シャンシヨ、レオンエス、シャペオ、オーヴオス、カペルータ、フラータ、アタライア、エスピゴンエス等の名称がつけられている。

ところでこの群島の起源であるが、著名の地理、地質、博物学者の説によれば、第三世紀初期の海底火山の頂点であったものがその前身をなしているとのことである。おそらくそれは人類がこの地上に現われる数百万年前の出来事であり、地殻の変動によって海上に突出したのがフェルナンド・デ・ノローニャ群島を形成している由。

同島が火山質土から構成されることを見究めたのは、一八三二年度にこれを訪れた博物学者チャールス・ダーウィンである。

フェルナンド・デ・ノローニヤ島とその周辺の小島の大部分は黒褐色の岩でおおわれているが、それはかつての海底火山の熔岩であることが想像される。また、地表に散在する俗にタツアと呼ばれる岩石は半透明の酸化鉄を帯び、或るものは永年の風化のために少しく白色を呈し、桂砂質にして割れやすく磁土を含む。その他、一面石炭に似る黒色の玄武岩も各所に発見される、というのが数名の地質、博物学者の学説を綜合したものである。

この島は気候温暖にして平均温度は二十五度、一年を通して一、二度の昇降を示す位の気温の差よりなく、乾燥期は九月から十二月であるが、雨期とても雷雨を見るのは稀である。

フェルナンド・デ・ノローニヤ本島には四つの噴泉があり、この水が文字通りの甘露で知られ、航海中の帆船がわざわざ碇泊して飲用水を積み込むほどである。しかしこの島には埠頭も栈橋の設備もないので、船員は胸までも海水に浸って上陸する始末である。

同島の自然美は、リオのン・デ・アスーカルをほうふつせしめる高さ三百二十メートルの岩山が聳えていることである。その他ボルトン・グランデと称されるトンネル型の巖額とフニルと云われる漏斗型の大岩がある。又、ラッタ島には波浪で削り

掘られた岩が数メートルの高さに姿を現わし、その中に海水が突入する度に、うめきのような音を発する奇現象が見られる。

植物ではブーラ・レイテイラという木がおおく、その樹汁一滴は灼鉄のような燃焼力をもつものである。その他カジユの樹木が至る所にあつて、これが年中果実を稔らせているのは将に楽天地である。

動物としては、岩間に生息する大蟹と、カルトラスと称される海鳥（鷗の一種）が注目される。

その他過去数世紀にも及んで形成されたグラノ（海鳥の糞層）が見ものである。

パケタ島の自然美

もし私をしてリオ近傍の最も美しい風景の場所を言わしめるなれば、グワナバラ湾のパケタ島を挙げるであろう。

今から数年前に初めてパケタを訪れた私は、ブラジルにもこんな景勝の地があるか、と暫し感歎した。かねてパケタの自然美については聞いていたが、実際に見るこの島の美しさは想像以上であった。さすがは画家と詩人の理想郷と言われるだけに、眼前に展けるパケタの風光美は例えようもない。

日頃の仕事や生活の煩雑さから解放されて、時にこの別天地

の空気に浸ることは精神の憩いであると共に脳の細胞を清めることにもなる。

さて先日、リオでの慌ただしい商用を終えた私は妻を伴ってパケタに一日の清遊を試みるためにキンゼ広場の埠頭に向つた。



それは水曜日にもかかわらず、恰も学校の休暇とてパケタ行きの人が多く、小蒸気船は満員で私共二人は辛うじて席を占めることが出来た。しかも薄曇りの空からは雨が降り初め、小蒸気船が出た頃は風まで加わって、グワナバラ湾の景色も眺められない。船窓に雨が斜めに打ちつけ、時折は波の飛沫を浴びて

いる。折角のパケタ遊行が悪天候に当たったものであると半ば後悔の気特になる。

雨はいよいよ強く、後方のボンデアスーカルと対岸のニテロイがかすかに見えるのみ。しかし其処に雨曇りの風情がある。

昨年の四月も私はパケタを訪れたが、その折は快晴日和で、俗にパルコと呼ぶ大型の渡し船の甲板から四囲の眺めをほしいままにすることが出来た。あの日に遙か前方にそびえていたテレゾポリスの奇峰も今回は霧に包まれて見えない。

グワナバラ湾最大の島イリヤ・ド・ゴヴェルナドルだけが左舷につづき、その先端に大規模な貯油庫が見える。貯油庫と言えば此処彼処の小さい島に設けられたガソリンや燃料油の貯蔵庫は、グワナバラ湾の特異風景であろう。

船がパケタに近づくにつれてところどころに岩が現われ、それにカモメに似た大きな海鳥が悠然と止っている。又水面をかすめ飛ぶ魚の群も見られる。幸い雨は小止みとなり、キンゼ広場の埠頭を出発して約一時間で満目緑色のパケタが現われる。それはまさしく海上に滴るばかりの緑である。やがて雨は全く止み、船着場の附近は波浪が一つも立たずして鏡のような静けさである。

昨年私は、船上から望んだこの島の美しさをグワナバラ湾の緑の宝石と形容した。その印象は今も変わらない。それは単なる島でなくして紺碧の海原にぽっかり浮き出た緑色の美しさである。又は緑衣を纏った美女が湖畔に佇む姿を想わせる。船から

降りた私共は、前面の小公園に設けられた詩人画家ペードロ・ブルーノの胸像に敬意を表し、その碑文を読むに、彼がパケタ島の植物や鳥類を愛しつつ自然美の中に生活し、それを謳い且つ措いたと記されている。絵筆とパレットを手にするペードロ・ブルーノの表情は理智と温情に盗ふれ、その周囲の樹々の梢に啼く小鳥は彼の人徳を讃えるようである。

私達は船着き場の側からゆる／＼歩を進めるに、港と言うよりは湖水に等しく、小魚の吐き出す泡が披紋を描き、その水面に故意に配置したかのように円味を帯びた岩が顔を出している。

リオの中心から僅か二時間でこうした別天地に着けるのは、現実とも思われない夢心地である。

山水の美に融け込む忘我の境地とはこのことであろうか。わけでも今度はパケタ島の名物フランボヤン樹の開花に廻り合わせた。そのフランボヤンの枝が傘を広げたかのように海面まで垂れて紅い花を咲かせているのは、乙女がカンザシを挿した観がある。

或る住宅のフランボヤンの大樹の枝が、街路を横切って浜辺に伸びているのに支え台が施されているのは、如何に樹木が大切にされているかが知られる。人も住まない朽ちかけた古家と、岩の間から海が見えてその傍にフランボヤン一樹が寂しく立っているなど、パケタは何処を見ても一幅の絵画である。

更に海辺に添うてタモヨ大通りを行くに、一つの太い老木の恰好がさながら肥満した洗濯女を思わせるところから「マリア・ゴルダ」と名付けて石に刻まれているのが面白い。その近くで若者が生きのよい魚を売っているので魚の名を聞けば、ペルナ・デ・モツサ（少女の脚）とのことである。

歩を転じて他の街路に入ると、両側の樹木は道をおおわんばかりで、沢山の小鳥の囀りは緑の交響楽を奏でるようである。

実にパケタの美しさは天然林が大切に保存されていることで、あの多種多様の植物を見るに島全体が植物園であると言うも過言でない。それらの天然林を初め、公園や街路の並木が少しも傷められずに保存されているのは、住民に植物愛護の観念がよく徹底しているからである。特に悪戯盛りの子供にまで樹林愛護の気風が養われている事には感服させられる。

又パケタの特色は、僅かのトラックを除く他ほ一台の自動車もなく、唯一の交通機関は乗用馬車であるという事である。つまりこの島に住む風流人の申し合わせで、平和郷ピケタから一切の機械的騒音と刺戟を避けようとするのである。もしこの島に自動車を駆り海辺で喧騒なジャズ・レコードをかけて踊り狂う若者の群があるならば、あたら詩的情緒を破壊することになる。パケタに自動車がないので、別荘地に有り勝ちなドライブウエーがないのが私は好きである。コンクリートやアスファルトの舗装絡もなく、火山灰質の硅砂土そのままを固められた街路には挨も立たず、雨降りにぬかるみともならない。

又豪著な別荘はなく、中産或いは第一線を引退した風雅人の簡素なヴィラ風の住宅が大部分のようである。それらの人々が悠々自適の生活を送り、余技に絵を描き、詩を綴り、著述に親しむとは羨ましい限りである。従つてこの島では、超モダンな建物と徒らに人の官能を刺戟する類の装飾が見られない。稀に大きな別荘風の建物があつても手入れもされずに放置されている。その荒れ果てた庭の樹木が季節の花を咲かせているのは寂しくもあり微笑ましくもある。

何時しか私達の眼の前には別の海が現われ二、三人の娘が日向ぼっこをしている。此処は船着き場の側とは異り相当大きな波が打ち寄せている。

その前方に見える孤島はリオ連邦直轄庁の所有に属し、森の中の城閣風の建物は歴代市長の別荘に当てられているとか。それは、文豪ウオルター・スコットの小説に描かれる貴族の城を想わせるものがある。パケタは住民三千人余りの小さく細長い島であるから、遊歩一巡するに三時間程度である。この島に曾つて土人タモヨ族が住んだことがあるので、そのタモヨに因んだ名称の街路が各所に見られ先住民を尊ぶ床しい気持が偲ばれる。

眼にしみるような緑色を満喫しながら私共は帰路につき、途中アカシアの種子を採った。船着き場近くの小島に一軒家が見えるが、あの島に住む当地人よりは他からそれを眺める方が美しいかも知れない。

午後三時過ぎるまでに島の一巡を終えた私と妻は、こんな所に短期間でも住み自炊生活をしたらどんなに素敵かと語り合った。

私達は再び小蒸気船に乗り名残り惜しい気持でパケタを去ったが、空はよく晴れて波浪少しく高い。船が出て十数分を経た頃には遠く彼方にコルコヴアドが見え、彼方に小さい緑の蔭が消えさらんとしていた。

誕生日の偶感

誕生日のフェスタ(祝宴)というものを私が本当に知ったのは、ブラジルに来て当国人の社会をのぞくようになってからである。

それ以前は話に聞くだけで実際に見たことはなく、また自分の誕生日を祝ってもらった経験もなかった。これは昔の日本の世智辛さでもあるが、習慣の差というのが当たっているであろう。

ところで今から二十数年前、私の独身時代にポルトゲースと共に少しばかり英語を勉強したことがある。その英語教師はモーリスランダーというケンブリッジ大学出の英国人であった。或る日の授業に先立って、彼が改まって私に挺手を求め、

「メニー・ハッピー・リターン・オブ・ザデー」といいながら満面に微笑みをうかべた。私は少なからず面喰ったが、それが誕生祝いの言葉であるところから、当日が私の誕生日であることを思い出した。何時かの雑談の折に、私が自分の生年月日を話したのを彼が記憶していて当日祝いの言葉を述べてくれたのであるろうが、外国人の識者間にはこのような一面のあることを知って嬉しかった。あの頃の私には誕生日を祝ってくれる人もなかったので、つい自分の生れた日を忘れていたとは何たる迂闊さであろうか、否忘れていたというよりは、誕生日を意識することが寂しかったのである。

私は生れて以来、第三者から自分の誕生祝いの挨拶をされたのはあの時が始めてである。おそらくこの感慨は私だけではなく、僅かの例外を除いては日本の明治時代に生れた人の共通感ではなからうか。

しかし近来は日本での誕生祝いは貧富の別なく盛に行なわれるらしく、そんな場面をよく映画にも見る。またブラジルの日系社会でも誕生日のフェスタを派手にやるようになったのは、当国生れの子が成長してからである。過去の苦闘期には誕生祝いどころか、自身の誕生日すら忘れ勝ちであったのが、時勢は変って子供同志の交際が始まり、誕生日のスエスタに招ばれ且つ招ぶことが普通ともなった。

この習わしが親や祖父母にも及び、大勢の子や孫に囲まれながら誕生日を祝ってもらうのは、想像するだけでも美しく和や

かな家庭情景である。過去の苦労を刻んだ顔に笑みをたたえてポーロに立てられたローソクの火を吹くところなどはおかしくもあるが、どうしたことか涙を催させるものがある。

このように誕生日の祝いは本人がやるのではなく家族、親戚、友人から祝ってもらうものらしいが子のない家庭では夫婦だけで祝うほかはない。私達の場合は正しくその通りである。一つの特典というか、私の誕生日は新年劈頭一月二日なので、正月の御馳走で誕生祝いが出来るから好都合である。せいぜい赤飯でもつくり足せばよいので、妻がいうには「貴方は都合よく生れたものですね、いつそのこと元日生れなれば世界中の人から間接に貴方の誕生日を祝ってもらえるのに。

これはこじつけとしても、私は年改まると同時に年令を一つ加えるから、昔の日本流に本当の年とりになる訳である。

しかるに妻の誕生日は十一月下旬で何等の特徴もないためか、私はその日を覚えていたことは殆んどなく、何時も過ぎ去ってから思い出す始末である。当の妻とても、旧知の真摯なクリスマスチャンで几帳面な「夫人からの祝電や電話に接して自分の誕生日を知ることがあるらしい。昨年十一月の当日にも、妻と「夫人との電話の会話を私は書斎で聞きながら、又しても妻の誕生日を忘れていたことに気づいて悔いに似たものを感じた。

子福者を誇る旧友のAやMが私に語るには、「子はいいものだ

よ、この頃は父の日や、親の誕生日をちゃんと知っていて立派なフェスタをしてくれるもの」と。私達はこんな境地は味わえぬとしても、夫婦だけの情愛をもって感謝し善べるはずである。

晩年のルイ・バルボーザ夫妻はむしろ二人だけであることに満足し、誕生日などには彼等のみで祝福し合ったといわれる。ルイが公務の旅行先から愛妻マリア・アウダスタに、彼女の誕生日の祝電を送るところには荘厳なまでに老夫婦の美しさがある。

近頃は日系コロンビアにも、このような老夫婦を見受けることはこよなく喜ばしい。およそ植民地の苦闘時代には生活が殺伐に流れ易く、ややもすると人々は外に享樂を求める。この点、現在のコロンビア人の生活が家本位になりつつあることは過去半世紀を通しての進歩であろう。こうした見地からも誕生日のフェスタなどは家族を中心とした楽しいものであらしめたい。今年もやがて十一月、妻の誕生日も近いが今年こそ妻のために大きな贈物がある。

それほ私共の住宅に思いきって増築と改築をしたことで、妻の設計によって曾て夢に描いていた通りの理想のものが出来上りつつあるからである。十一月下旬には大体の型が完成するであろう。

紫陽花咲く庭

帝政最後の日とドン・ペードロ二世の思い出

今年（一九五九年）の十一月十五日（キンゼト・デ・ノベンブロ）は恰かも日曜であつたせいか、家にあつてもブラジル共和国宣言記念日の感じがしない。やはり国際日は週間である方がそれらしい気がする。一つには近頃の当国の新聞は史的回顧の記事をほとんど掲げないからでもある。もつとも月世界の探険が可能となりつつある現在では、過去の出来ごとに感傷的になるなどはおかしい話かも知れない。

しかし思うにブラジルは今年で第七十回の共和制誕生日を迎え、また私は当国に三十七回目の同記念日を過ごすことになる。若い頃はブラジルの史的記念日にもさまで感興が湧かなかつたが、近来は当のブラジル人以上にこの国の過去のことさらに興味を覚えるようになったのは齡をとつたためか、それとも自らの同化現象であらうか。

さて今日は休日というに平日のように五時前に起床し、一人でトマ・カフェーをしてから原稿書きを始めた。妻は昨日から高橋宅（妻の実家）に行つて居らず、家の中は閑静そのものである。一カ月ほど前に庭で生れた野良猫の子の鳴き声が耳に障るくらいだ。

早起したせいか、相当の時間を原稿書きをやったがまだ正午前である。それにしても少しく疲れたので、庭に出て背のびをしながらあたりを見廻すに、日頃は眼につかない様々の草花が発見される。

一年余も前に家の改築にかかって以来、庭の手入れが行き届かぬため少しく荒れ気味だが、妻が丹精して植えた花卉類がそれぞれ季節の花を咲かせている。

特に隣家との境界の堀際の紫陽花の、青藍から薄赤色を帯びる花には濃艶な美しさはないが貴婦人のような気品がある。この花こそドン・ペードロ一世がこよなく愛してペトロポリスの荘園に植えたものである。以来ペトロポリス市民はドン・ペードロを偲ぶ意味で沢山の紫陽花を植え、ペトロポリスは紫陽花の町とまでいわれるようになった。従ってペトロポリスは個人の住宅といわず公園路傍に至るまで紫陽花が見られる。わけでもリオ・ネグロの川辺に咲く紫陽花は美しく、またドン・ペードロの銅像の広場の紫陽花は在りし日の彼を思わしめる。

今こうしてわが家の庭の紫陽花を見ると、過ぎし日の出来ごとが活写図のように浮かび出る。

一八八九年十一月十五日の早暁、急便としてペトロポリス離宮にドン・ペードロを訪れたソロン陸海軍の決起による帝政打倒革命の通告書が振られていた。いよいよ来たるべき日の到来を悟ったドン・ペードロは馬車を駆ってペトロポリスを降り、リオの臨時政府政庁において軍部の提出条文に署名したのは午

後四時過ぎである。それは帝政の終局を意味するものであった。

かくして同日の夕刻サンタアンナ兵営前の広場（現在のプラッサ・ダ・レプブリカ）でデオドロ・ダ・フォンセツカ元師によって、ブラジル共和国が宣言された。当時のドン・ペードロの胸中は如何ばかりであったか。

しかもその翌日、ブラジルからの追放状に接したドン・ペードロは怒気を含んで「余は逃亡黒奴ではないぞ」と叫んだとは無理からぬものがある。せめてもの思い出にペトロポリス離宮の庭園を一巡した彼の眼には涙があった。夕暮れの庭には紫陽花が淋しく咲いていたことであろう。

持病に悩むドン・ペードロが同じく病弱の妻テレザ・クリステナと息女イザベルとその夫デュー伯爵、並びに側近者と共に祖国ブラジルを去って汽船「アラゴアス」でポルトガルに向つたのは、ブラジル共和国誕生から二日目の十一月十七日の夜であった。船の甲板上で家族と共に遙かに海原を望んでもの思いにふけるドン・ペードロの面影は実に印象的であり、その写真は涙なくして見ることは出来ない。

同じく帝王という中でも風雲児ナポレオンの生涯は他国遠征に終始したが、ドン・ペードロ二世は平和と祖国愛に徹し、その私生活はあくまで質素にして清廉、学者肌で詩人でもあった。彼をして哲人皇帝という所以である。十一月末から十二月の大西洋の航海は寒気がきびしかったに相違ない。

然無きだに病身のドン・ペードロと妻のテレザ・クリステナには耐え難いものがあつたと思われる。あまつさえ愛する祖国を追われる彼等の心境は想像にも絶する。

思わず永い時間を庭に過ごした私は十一月の半ばというに薄寒さを感じて家に入り、何時もあまり聴かないハイドンのシンフォニー四十五番「告別」のレコードをかけた。

その最後の楽章「告別」のリズムが切々と胸に迫るようである。

私は当国に永年も住んで、今日ほど静寂なキンゼ・デ・ノベンプロを経験したことがない。それはブラジルの意義ある記念日を祝福するよりは、ドン・ペードロ二世を偲ぶ気特に浸ったからでもある。

マツシヤード・デ・アシス

逝去五十周年の所感 作品と人物素描

一九五八年の九月二十九日はマツシヤード・デ・アシス逝去五十周年に当るので、サンパウロやリオの各書店では彼の作品を一斉に陳列し、不朽の名著と共に文豪の面影を偲ばせた。

それ等の書店には何れもマツシヤード・デ・アシスの晩年の写真である鼻眼鏡をかけたのが飾られたが、如何にも気品高い

文学者の感じで同時に親しみのある風貌である。

私がマツシャード・デ・アシスの作品を読み初めたのは、一九三九年度に彼の生誕百周年祭がリオのインスチット・デ・リーブロ（書籍院）の主催で盛大に挙行された新聞記事に刺戟されてからである。

一九三九年といえば私の在ブラジル十七年目だが、その頃ようやくブラジルの代表文学に興味をもち出したとはひどく遅蒔きの話である。しかし全く無関心よりはましかも知れない。この点、最近日本から来る人には、着伯早々にしてブラジル文学や社会民族学などを研究する熱心家のあることに敬服するが、結局これも時代の差であろうか。

さて、ブラジル文学史を辿るに植民時代（十八世紀末葉まで）には、多少なりとも欧州文学の影響をうけていたが、十九世紀となって始めて純ブラジル文学が生まれ、数人の浪漫派詩人に次いで散文の大家が現われた。その一人としてマツシャード・デ・アシスを指さねばならない。しかも彼は珍らしくモリオ出身で、北東ブラジル系の文学者によって圧倒的勢力を占められていた文壇に、正しく異彩を放ったといえるであろう。

おそらくブラジルの文学者でマツシャード・デ・アシスほど、人物と作品について参考文献の多いものはない。彼の伝記と作品批評の主なものだけで三百数十にも達する。

その代表的執筆者を挙げるに、シルビオ・ロメロ、カビスト

ラノ・デ・アプレウ、アルツール・バレーロ、ヴァレンチン・マガリャンエス、トリストン・デ・アラリペ・ジエニオール、ジョゼ・ヴェリツシモ、アルシーデス・マヤ・マヌエル・オリベーラ・リーマ、アフォンソ・デ・カルヴァーリオ、アルフレド・プジョル、ダラサ・アラニーヤ、アマデウ・アマラル、ジョアン・リベーロ、ルイス・ムラト、アグリピノ・グリエコ、ビアンナ・モーグ、アウダスト・メーエル、エロイ・ボンテス、アンドレ・モロアー（フランス語） などがある。

ところで、一九五六年六月二十八日のサンパウロ新聞に、私はマツシャード・デ・アシスの小伝を紹介したが、今回は改めて彼の人物点描を試みたいと思う。

マツシャード・デ・アシスは一八三九年六月二十日に、リオの貧民区リブラメント街の一隅に生まれた。つまり彼はリオに生まれてリオに育ち、而して一九〇八年九月二十九日午前三時単にリオのコスメ・ヴェーリオの邸宅に歿したから、名実共にカリオカ（カリオカ人）である。彼は同じコスメ・ヴェーリオの邸宅において、一九〇四年二月十日に愛妻カロリナに先立たれたのである。

彼は半黒の父の血を享けて同じく半黒であり、あまつさえドモリという宿命的の悪条件をもって赤貧の家庭に生まれ、体質虚弱で、辛うじて初等教育をうけたに過ぎないが、克苦独学によって遂にブラジル文壇の雄となったことは注目に価いする。

この彼の文字者としての立身栄達は、妻カロリナの内助に負うところが絶大であると共に、時代的影響による点も大きい。もしこれが十八世紀であったなれば、如何にマツシヤード・デアシスの文才と天分を以てしてもあれほど名を成したかが疑問である。

彼の生い立ちを少しく語ると、実母が早く世を去ったために彼はマリア・イネスという慈愛に富む継母に養育され、更に父の死によって少年期に既に労働に従事して家政を助けている。彼の最初の働きはランバドール教会の納室係りであり、次いでパウラ・ブリトという印刷出版工場の小僧をつとめ、余暇に詩を綴ったのが彼の文筆生活の出発である。

一八五六年、彼が十七才の時にパウラ・ブリトの推めによって、リオの小新聞「マルモッタ・フルミネンセ」に詩を投稿したことに始まり、「レビスタ・ポプラーレ」やガルニエー出版社発行の「ジオルナル・ダス・ファミリアス」にも寄稿して彼の名は次第に知られた。

引き続いて彼はリオの一流紙「デアリオ・ド・リオ・デ・ジャーネーロ」にも執筆したが、当時同紙の論説欄にはサルダーニヤ・アリーニョやキンチーノ・ポカユーバなどの静々たる人物の名が見られた。

凡そマツシヤード・デアシスの活動期を三つに大別出来るが、第一期は土民文学と浪漫派の詩時代で、ジッセ・デアレンカールに相似るものがある。

第二期はフランスの高踏派文学の影響を少しくうけた詩作と共に彼独自のコント、小説、劇作、フィクションによって確固たる地位を築いた。「アス・メモリアス・ボスツーマス・デ・ブラス・クーバス」はその頃の作品である。

彼の第一期の活躍時代にはブラジル文学界に取立てていうほどの文芸評論家もなく、第二期に至ってジョゼ・ヴェリツシモやシルビオ・ロメロなどの斯界の権威が現われ、その批評を通して彼の作品ほ広く読書人の話題に上った。

彼の第三期は晩年の代表作「ドン・カスムロ」を発表した前後であり、アカデミア・ブラジレーラ・デ・レトラス（ブラジル文芸院）が創立されるに及んで、彼がその初代会長に推されて、ブラジル文壇の惑星的存在をなし、一九〇八年にその栄光の生涯を閉じた。

マツシャード・デ・アシスをして文壇に名を成さしめた背後に、カロリナ夫人の深い愛情と理解協力のあつたことは先に述べたが、彼女はリオの著名の素封家の生れでありながら、半黒で臆病、貧しくて風采頗る振るわぬ上にドモリの青年文学者マツシャードと相愛の仲となり、彼の求婚を容れて親族の反対を押し切って質素な結婚式を挙げたのが、一八六九年十一月十二日であった。

このカロリナ夫人との恋愛と結婚生活については、マツシャード・デ・アシスの最後の著作である「メモリアル・デ・アイレス」に叙されている。

マツシャード・デ・アシスの文筆生活は五十年の永きに及んで
いるが、この中で家庭生活は三十五年であり、その間に彼は
文壇人としての揺がない地位を築いた。結婚後のマツシャード
は家庭人としても公人としても実に恵まれているが、彼等夫妻
の間にほ一子もなく、従ってカロリナ夫人の一切の愛情はマツ
シャードに集中された。

彼女はマツシャードよりも五つ年長であつたところから彼に
対しては良き妻であると同時に理解に富む姉であり、或いは慈
愛深い母性的の態度をもつて接した。

このカロリナ夫人は七十才の時にマツシャードよりも先きに
他界したが、それから五年間の寂しいヤモメ生活を送つたマツ
シャードは、亡き愛妻を迫つて同じくコスメ・ヴェーリオの邸
宅に永眠した。

マツシャードとカロリナ夫人三十五年の家庭生活こそ夫婦愛
の極致であり、その豊かにして優れた雰囲気から、あのブラジ
ル文学の粹ともいふべき作品の生れたことを知るべきである。

アメリカ人の作つた

日本時代劇映画

或る日、新聞の映画広告に「バーベリアンとゲイシャ」とい
うのを見て奇異の表題だと思つた

が、それがアメリカの初代駐日領事として来朝したタウンゼン・ハリス（一八〇四—一八七八）と唐人お吉の史的物語りの映画化と知って好奇心からシネ・レプブリカに入った。

正直のところ、近頃のアメリカ映画に倦怠を感じている私は一つの映画を全部見る辛抱がなく、途中で出ることすらあるが、「バーベリアンとゲイシャ」は一回が終ってから更に居据って二回目を見るという私にはまれな熱心さ（或いはバカさ）であった。

この映画の世評はとりどりで、何れが当を得ているともいい難い。しかし私は同映画の劇的構想と主演俳優、背景のよさに感心した。

二十世紀フォックス社が、全面的に日本で撮影したものと最初に説明してあるが、いかに日本映画人の協力があり、ドルの威力にモノを言わせたにせよ、アメリカ人であれほどのニッポン時代劇映画を完成したことは賞讃に値いすると思う。

或場面には面をそむけたくなるようなところはあるが、それがあの時代の日本の真実の婆とすれば、国辱映画だなどとムキになっても始まらない。

どの程度まで史実をとり入れてあるかは別とし、幕末日本の風潮と鎖国日本を描き、ハリスの主張する開港、通商条約をめぐって幕府の大老や各藩の大名の進歩派と保守派の葛藤に取材し、ハリスとお吉の情愛物語りを繰り展げるところに監督ジョン・ヒューストンの腕の冴えが見られる。

この映画をバカらしいと評すればそれまでだが、アメリカ人のニッポン観としては比較的正確且つ適所をついているし、ほどよくユーモアを盛っているのが注目される。

ハリスに扮するジョン・ウエインは相当の老練さを見せ、サン・ジャップの通訳ヒュースケンもナラチープの発音が余り上手なので、アンドウ・エーコとはアメリカの二世かとも想像した。

しかし、キモノの着こなしが優美で艶やかな線を表わす所作からアメリカの二世とも思われず、或る映画通に尋ねたところ、あの英語のナラチープはアンドウ・エーコの声に似る他の女性によって、アメリカで後で録音されたものとのことであった。

ブラジル人の或るバレエ研究家で、お吉の日本着姿の美しさに感嘆し、三度あの映画を見たというのがある。

伊豆下田の盆踊りの場面も微笑ましく、豪華なこと世間の話題となったハリス上府の行列と將軍家大広間においてのハリスと將軍（第十四代徳川家茂）との謁見、琴の合奏をとり入れたハリス歓迎宴の場面が見ものである。特に日本古来の貴族的武芸とされる流鏝馬（やぶさめ）を見られるだけでもこの映画の価値がある。

一つ付け加えたいのは、ブラジルに永く住む邦人一世は郷愁に捉われながらも日本歴史に案外通じていない点である。かくいう私も「バーベリアンとゲイシャ」の映画に刺戟されて日本

近代史を繙き、ハリス来朝当時の日本の国情を知る有り様である。また日本史とブラジル史を対照して学ぶものがあつた。

ハリスが下田を訪れたのが一八五六年（安政三年）であるから、ブラジルの帝政第二期であり、皇帝ドン・ペードロが三十才の時である。ウルグワイ戦争が一段落をつけ、パラグワイの独裁者ソラノ・ローペスがブラジルに特使を派遣して、ブラジル商船のパラグワイ河の自由航行権を認めて調印した年でもある。

結局アメリカ人の作った日本時代劇映画や日米合作映画などを観念的にバカらしいものとせず、それを見る感覚と常識をもちたいものである。

もう一つ、「バーベリアンとゲイシャ」のタイトルは「野蛮人とゲイシャ」よりは「異邦人とゲイシャ」が適訳かと思う。

ワシントン・ルイスの面影

人は未知の人物に尊敬の念を抱くこともあるが、私の過去永い間のワシントン・ルイスに対する気持がそれであつた。

一つには私の渡伯当時の一九二二年度に、ワシントン・ルイスがサンパウロ州統領であつたこと、又後日に同氏の令息ラファエル・ルイスと同僚となり、折にふれて彼を通して公人並

びに私人としてのワシントン・ルイスを知り得たからである。共和国の政治家の最高地位につき、政変のために異邦に追放されて十七年間の沈黙の生活をつづけ、愛妻に先立たれて単身祖国ブラジルの土を踏んだワシントン・ルイスの胸中は如何にあったか。

特に彼は外国に在る間に、誰にもブラジルの政治問題を論ずることなく、些かも過ぎし日の憾を述べなかつたものである。ただ一つ、リオの埠頭に降りた彼が洩らした言葉は、「自分の過去ほ悲痛の思い出である」と。

おそらくこれに彼の心境が端的に表現されているであろう。サンパウロ州のバタタエスの町長を振り出しにサンパウロ市議員、州議員、サンパウロ市長、連邦議員、州統領を経て遂に大統領としての栄光の絶頂にあった時の彼よりは、久しい追放の旅から一人寂しくブラジルに帰り、船の甲板に立つ面影が、より印象的である。

それは永年の風雨霧雪に耐える夕映えの老木の壮嚴さにも以ている。

凡そ栄枯浮沈は政界人の人生図であるが、同じく政治家でも、ルイ・バルボーザの場合は不遇という中にも異国追放から戻るや、再び彼の頭上に太陽が輝やき老境を飾っている。この点ワシントン・ルイスは敢えて名誉職を避け、社会との交渉を絶って専ら史学の研究と著述に親しむ余生を送り、一九五七年八月四日夜、親族に取囲まれつつ八十七才で他界した。

この遺言に「葬儀一切は家族によって営まれたく、公けの儀式は謝絶する」とあった。

翌くる五日早暁、哀愁に包まれた大サンパウロを望み私は、約三カ月前を思い併わせて感慨深いものがあつた。それは、その年五月初めの土曜日の午後、霧雨の中をワシントン・ルイスに面会のため、私は約束の時刻にハドック・ローボ街の同氏邸を訪れた時のことである。

同氏と私の対話は世間話に始まり、サンパウロの開発に因んでバンデiras・パウリスタスの党主となつた。さすがに彼はパンデiras史の権威だけに、老衰の眼を輝やかせて語り出し、予定の 三十分が一時間余ともなる有様。特にフェルノン・ジーアスとラボーズ・タヴァーレスの人物観が面白く、従来の史書に見られない奥深い研究は、私にとって少なからず参考となつた。私もブラジル史の勉強に興味をもち、参考文献を集めている旨を述べれば、同氏は喜んで自身の蔵書を見せたが、目下絶版となつているものが多いようであつた。

サンパウロ州の文書局は、ワシントン・ルイスの州統領任期中に創設されたもので、当時は彼自らサンパウロ史の古文書の蒐集と整理に当る熱心さであつたといわれる。その話を私から切り出せば彼は微笑みながら、「そうです。埃だらけの書類を取扱つて服が汚れるのでよく妻から叱られたものですよ」と、亡き夫人の肖像写真を見上げるのであつた。

そのソフィア・オリベira・バツロス夫人は、サンパウロの

名門ピラシカバ男爵の息女であり、又り・オクラーロ子爵の姪に当る人である。

私は、約二十年前にラファエル・ルイスと共にアララクアラ線カンジド・ロドリゲス駅にワシントン・ルイスの義弟（夫人の令弟、ラファエル・ルイスの叔父）の農場を訪れ、ワシントン・ルイスの私生活についての話を聞いたことを記憶している。その思い出を話したところ、彼が言うに「それでは貴方が私のことを私よりも知っている」とて笑われた。

余りに時間が過ぎるので私は気を利かせて辞し去ろうとしたが、ひきとめられ、同氏がサンパウロの司法長官時代に自動車が初めてフランスから入れられ、それが上流人の間でスポーツとして流行したこと、その自動車をサンパウロとサントスの間を走らせたこと、又、イタペセリカの街道で自動車競走をやったなどについて語る様は若人そのものようであった。

当時の彼の仲間には、航空界の先駆者サントス・ヅモン、シルビオ・ペンテアード及び一九五五年他界したアントニオ・プラード・ジュニオールがいた。

「私に先見の明があつたのではないが、何となく将来自動車が富裕人のスポーツでなく、実用的に普及することを信じていました。それには車道が必要になるので能うる限り州の予算を車道の開設に向けましたよ」

今にして思えばあの日の訪問が、私にとってワシントン・ルイスとの最後の面会となったのである。別れに際し、温顔を

もって私を見送られた同氏の面影が見えるようである。

人も知る通り、ワシントン・ルイスはリオ州マカエーの生まれであるが、サンパウロ人は彼を恰もパウリスタとして誇っている感がある。それはサンパウロ州出身のプルデンテ・デ・モラエス、カンボス・サーレス及びロドリゲス・アルベスの三人が相前後して大統領となったと同じく、サンパウロに縁故深いワシントン・ルイスが、前期共和政最後の大統領であったことに、限らない歓びと懐かしさを感じるからであろう。

私の知るところでは、ワシントン・ルイスは他の著名政治家のように自伝を書かなかつた。従つてブラジルから追放後の彼の動静を知るには、家族や親族に宛てた私信以外にはない。

ラファエル・ルイスが私に時折見せた書翰によれば、ワシントン・ルイスがブラジルを去つて比較的永く滞在したのがフランス、特にパリ―とニースであり、その後スイスにも居を移している。

彼が季節によつて時々ヨーロッパの各地に移つた理由は、ソフィア夫人の健康のためであつた。

或る時はスペインを訪れ、又第二次戦の勃発当時はポルトガルに居住した。

しかし、この折角の転地養生の甲斐もなく、ソフィア夫人はスイス滞在中に逝去した。その時のワシントン・ルイスの失意落胆は想像に余りあるものがあつた。それは帝政の終局と共にブラジルから追われたドン・ペードロ二世が、異郷に於いてテ

レーザ・クリステナ夫人と死別した境涯にも等しい。

第二次戦となるやワシントン・ルイスは、ヨーロッパからアメリカ合衆国に渡って七年を過ごし、ジュツリオ独裁が終りを告げて一九四七年度のズトラ將軍大統領就任となって、十七年振りに故国ブラジルに帰り着いたのである。

現在私の手許にあるワシントン・ルイスの伝記としては、ルイス・フォンセツカ著の「ワシントン・ルイス・ペレーラ・デ・ソーザ伝」で、これには一九二〇年度のサンパウロ州統領就任までの経歴が記述されているのみで完璧なものではない。

しかし同書によって、ワシントン・ルイスの誕生からリオのドン・ペードロ二世高等学校枚在学に始まり、サンパウロ法大卒業後にリオ州バラ・マンサの検事の任を経て、彼の政界人としての目覚ましい活躍はサンパウロに終始していることが知られる。

殊に彼が、ジョルジ・チビリツサとアルプケルケ・リンスのサンパウロ州統領任期中に、司法長官となつて警視庁内部の拡充と警察網の改革に尽した功績は絶大といわねばならない。

つづいて一九一五年からサンパウロ市長の任につき、一九二〇年にはアルチノ・アラントスの後を継いで州統領となったが、彼がサンパウロ市長在任中になした市の改良工事は枚挙にいとまなく、又州統領時代に行なつた公共施設は計り知れないほどである。

ところで、数年前に私が偶然手に入れたものに、一九二〇年一月二十六日の「コレーオ・パウリスターノ」紙の記事切抜きがある。それは当時、テアトロ・ムニシパルで催されたサンパウロ共和党のサンパウロ州統領と副統領候補者に対する祝賀式の記事である。その記事によれば、ワシントン・ルイスは州統領候補の立場から彼の抱懐する主義理想について堂々と雄弁を揮い、カルロス・デ・カンボスはサンパウロ共和党を代表して挨拶を述べている。

当夜はサンパウロの政府要人と政界の代表人物が一堂に会し、嘗って見ない緊張と豪華さを呈していた。儀式の演説が終ると同時に晚餐会となるのであったが、それに先立ってマエストロ・エドワルド・ゴンサルベスの指揮による交響楽があった。最初の国歌の奏楽に次いで、カルロス・ゴメスなどが奏されたとある。

その時のワシントン・ルイスは五十一才、自信満々として食卓に向いつつ名曲の流れに陶然となるのであった。

それ・以来三十七年の歳月が逝き、ブラジルの政界は著しく変って、人物の払底を嘆かれる今日、ワシントン・ルイスの在りし日を偲んで感慨尽きないものがある。

(一九五七年八月)

観光地ウバツバの昔話

夢に終わった鉄道

この数年来はサンパウロ州北東部の海岸地帯が別荘または観光地として人々の訪れが絶えない。

特にカラガタツバとウバツバが有名となりつつあるのはあの風光明媚の海岸と気候絶佳によるであろう。従って近頃はウバツバの土地分譲が行なわれて賑わいを呈しているが、余りに都会化しては同地旧来の自然美が矢なわれるおそれがある。

聖憎アンシエタとタモヨ土人に因む史的物語りのイペロイグの海浜などはそのまま保存したいものである。

ところで前世紀末にウバツバの築港を目指して同地とタバテ間の鉄道を企画し、その会社が設立されて起工したが資金難で中絶し、それが遂に夢に終わった話は世間にあまり知られていない。

未だにウバツバ附近の山中に錆びたレールが放置されているのが目につく。よしんばこの鉄道が実現してもサントス港やサントス・ジュンジャイー鉄道（前サンパウロ鉄道）とは到底争にもならなかったことを考えれば、それが着工初めに立消えとなったのはウバツバのためにかえって幸いであつたかも知れない。ウバツバは矢張りサンパウロ州の観光地たらしめる

ことがあらゆる点から得策である。しかしタウバテ、ウバツ―バ間の鉄道が計画されたのは単なる好奇心からではなく、あの当時のパライバ盆地の珈琲産業の隆盛に刺戟されたことはいうまでもない。もともとのこの鉄道 案は将来サンパウロ州北東部と南部ミナスとをつなぐ計画のもとに樹てられたものであるから、もしこれが実現したなれば一時的にせよあの一帯の経済地理がかなり変っていたことが想像される。

それはマウア子爵と英国の資本団によってサンパウロ鉄道が設けられ、またセントラル鉄道がカショエーラまで開通した直後のことである。

他方十九世紀末から現世紀初めにパライバ盆地の珈琲産業が衰微してパウリスタ、モジヤナ方面に新しい珈琲地帯の延びたことを思えば、ウバツ―バの鉄道会社は所詮破産の運命を辿つたであろう。人間の先見も結局は時勢に左右されるほかはない。

帝政終局の直後、一八八九年一月五日にドン・ペードロ二世によつてタウバテ、ウバツ―バ間の鉄道建設権認可の法令が署名された。この鉄道はウバツ―バから起工され、サン・ルイス・ド・パライチンガを経てタウバテに達するもので、投下資本に對しては年六歩の利子を保証し、一キロメートル当りの工事費は三十コントを限度とするなどの条項が政府との契約文に見られる。当時の政府首脳はアントニオ・シルバ・プラードであった。

問題の鉄道開設はウバツバのポンタ・グロッサ本島から着手されたが、緑色の花崗岩層の破碎が言語に絶する難工事であった。面白いのは後日に知ったことだが、この緑色の花崗岩は非常に貴重なもので外国ではギリシャだけに産出されるということだ。

さてサンパウロ州の珈琲栽培がセントラル地方に始まることは周知のところだが、十九世紀中葉にはパライバ盆地の珈琲産業がその全盛期であった。一八五〇年から一八六〇年までのパライバ盆地の平均年産は二百七十万アローバ（一アローバは十五キロ）であり、これは当時のサンパウロ州全生産高の六割以上を占めるものであった。その凱排はブーロの背に積まれて海岸山脈の岐路を越え、ウバツバを初めパラチー、アングラ・ドス・レーズの港に運ばれたが、その搬出作業がいか
に難事であったかは現在の人々に想像もつかない。その旧道がエストラダ・ド・カツフェ（珈琲の道）として今でも部分的に見られる。ある場所は石で舗装されていて人目をひくが、これはサンパウロのプロビンシア統領フランシスコ・マルコンデス・オーメン・デ・メーロによって開設された。その費用の大部分をパライバ盆地の珈琲農園主が負担したのを見ても彼等がいかに珈琲景気に乗じて巨富を築き豪勢な生活をしたかが解る。現在は廢墟に等しい耕主の邸宅が往時の名残りを夢に終った。それがウバツバのために好都合であったことが今にしていえるのであろう。

わが家の実態とコロニアの実態

或る年の暮に、私は殊勝にも埃にまみれてわが家のガラクタ整理をやった。ところが、物置きに乱雑につみ上げてあった古本や日記帖、手紙の束、新聞スクラップの中から思いがけないものを発見した。私の過去に関する限り情緒纏綿たるラブレターや料亭の勘定書など現われる艶やかさはないが、全く、忘れていたもの、または貴重な資料を見つけたのは有難かった。すべての資料は整理分して自分の家にあつたものを、手に入れて有難いとはおかしな話だが、保存しておいてこそいざ必要の時に役立つ。雑然と重ねておくだけでは資料としての用をなさない。

私は十余年ぶりにガラクタの整理をやったおかげで、曾て探して見当らなかつた重要書類と資料を見つけ出して今更のように嬉しかった。また結婚当時の妻の家計簿が目につくまま開いて、物価の安かつた頃にせよつましやかな家庭経済にはほろりとなる。その他古い手紙に眼を通すと遠い昔の事が偲ばれて微笑ましくもある。

つまり私はガラクタ整理によって、失いかけていた昔の記憶を新たにすると同時にわが家の家態の一面を知り得たのである。

このように、わが家のことでありながらもその全部を知る人は比較的少ない。早い話が、自分の机の中に何が入っているかを完全に知る人は皆無といってよく、誰しも稀には机の引出しを整理するが、或る期間を過ぎるとまたしても雑然となるのが普通である。時にはあまりにもものを大事に仕舞い過ぎて、それが何処であったかを忘れ、青くなつて探す悲喜劇を現出する。細君のヘソクリの隠し場所などがその一例で、これが大掃除の折に偶然発見されるとは滑稽である。

こうなるとガラクタ整理や大掃除はバカにならない。とくに日本人の家庭にはガラクタがつきもので、捨てるのは惜しく、さりとして使用もせずに貯えておくものが多い。しかるに、そのガラクタから大事な品物が出るのを殆んどの人が経験しているのでなからうか。しかもそのガラクタの中に一家の実態がひそんでいる場合がある。

さて家庭のガラクタ整理と、コロナの実態調査を一緒に論じては叱られるかも知れないが、コロナ実態調査も結局はコロナという大世帯の大掃除のようなものであるろう。何故かというに大掃除をするためにあらゆるものが整理されるからである。私共は、わが家の実態を知り抜いているかのように案外知らないことが多い。ましてやコロナ全般と来ては臆測や推算だけであつて、その実態は知るべくもないであろう。

ところでコロナの実態調査を実際に始めてみたら想像にあまり大仕事で、もしそれが着手前にわかつていたなればさすが

の鈴木悌一さんも委員長を引受ける勇気がなかったと思う。机上のプランは殆んど役に立たず、実地にぶち当たって最適の方法を講ずる他はない。世間には、コロナ実態調査のやり方を無計画と評している向きもあるらしいが、むしろ計画のたたなかつたのが当然であろう。

それは調査資金の面を見てもうなずける。始めに計上した予算を遥かに上廻って、今後の調査完了までに相当の金額を必要とするとは常軌を外れた話で、余りにケタが違い過ぎるが、それほどにこの仕事は地域的に広汎で事務と技術上の複雑さがあり、加うるに数字的に表わし得ない調査進行の思惑違いがあるらしい。

何れの事業でも多少の思惑違いはあるが、コロナ実態調査は何分にもコロナ有史以来の大仕事であるから、始めに予想した思惑違いのワクからずつとはみ出た形で、これが必然経費に影響することになる。

そこで実態調査部では資金獲得の手段として、リップア（抽籤券）を売出したのは周知の通りである。昨年（一九五八年）の十一月には力道山の慈善興業で一息ついたようだが、今後の資金捻出はリップアの売れ行き如何にかかっている。まさか力道山に味を占めて日本からミソラ・ヒバリを招ぶことも出来ないであろう。

サン・ジョアキン街の実態調査本部へ行ってみると、五十余名の職員が調査用紙の整理に忙殺されていて、さながら学校の

試験を覗くようである。それ等の人達は奉仕的に最少の給料に甘んじている由。最低給料が五コント九百に決定された現在とても、それ以下の文字通りの、ミニモで働いて貰っているのは気の毒に耐えないが、これも実態調査部の財政状態から見て止むを得ない。一つ大きな強身であり感謝であるのは、この事業に対して最切から新聞、ラジオ等のコロニアの言論報道機関が挙って全幅の協力をしてくれていることと、多くの調査員の方々が最大限の努力と熱意をもってこれに奉仕していることである。

それなればこそ調査用紙の回収は今のところ順調で、この分ならば三月中には大方の回収が可能であろうと見られている。しかしそれは予測であって絶体に確実とは断言できない。こうなれば調査の遂行上には資金調達と共に残余の調査用紙の回収に拍車をかけねばならない。この調査用紙の回収の速度の早いほど経費が減ぜられるのはいうまでもない。

先日の委員会の集りにも話し合ったことごとだが、残りの調査用紙の回収の永びくのは、実態調査をして動脈硬化に陥れることである。従ってもし一人でも調査進行を妨げるスネ者がいるとすればその罪は大きい。

およそこの類の大掛りな調査には、その性質からして調査事務進行に対する「心理的影響」が重要視されるが、これに人々の教育と教養の程度が如実に反映するようである。特に各自の陳述が正確でなければ折角の調査の意義をなさない。ただ資産

評価などは何をもつて正確な基準とするやうだが、それは人々の常識と良識にまつ外はないであろう。何れにせよ、調査用紙の回収に全力を奉げることが焦眉の問題であり、その後のことは鈴木委員長と大給技術部長の腕に期待するのみである。

(一九五五年三月)

道楽の価値

人は誰しも予算以内で生活することは困難なもので、殆んどは予算を超過するらしいが、私の場合も御多分に洩れず、いつも月末には赤字になってしまう。

月初めに今月こそはと決意するところがあるが結局は黒字を見ることなく、数カ月が過ぎ、悔いを年末まで持越す始末である。どうかすると月半ばにして予算の大部分を使い尽して妻から苦情をいわれるが、さりとて悪いことには金を浪費していない。「人によると余り健康的でないことに一晩に数コントも散財するのがあるんだよ」というのが私のいい訳である。

「何も悪い遊びをする人を対象にすることはありません。しかしこう世の中が不景気になると、貴方のように金さえあればレコードと本を買うのは考えものです。わけでもレコードなど、いざとなれば何の役にも立たないでしょう。」

なるほど妻の理論は実利的で至極当然だが、私からレコードと本を買う楽しみを取り去るのは、愛煙家に禁煙を強制するよなものかも知れない。尤も妻とて、全然レコードも本も買ってはならないというのではないが、ある月の如きは私自身が気のひけるほどレコードを買過ぎたものである。その購入高を合計したら十コント近くもなっているので、今更ながら驚いた次第である。

一度は流石に堂々とレコードの包みを家に持ち帰れず、寝室の窓からそれをこっそり入れ込もうとしたら、はからずも妻が寝室に居合わせて私の密計も発覚し、却って大笑いであった。

一つには昔と異って、一枚のロングプレー・レコードが教百クルゼイロもするので、何枚かを買えばたちどころに二、三コントになるからである。殊に外国からの輸入盤は一枚が七、八百クルゼイロから一コント以上もするので、レコード道楽もこの頃は相当高価につく。それから私の行きつけのレコード店員Mが私の好みや性格までをよく知っていて、良いレコードを薦めるので、人好しの私は遂に財布を叩いて買ってしまうことが度々である。しかし財布は空になっても、以前から欲しかったレコードを抱えて帰宅するのは楽しい。

「又レコードですか。」

と、妻は半分諦めているようである。

凡そ本にしろレコードにせよ、必ずしも探し求める時に手に入るものではない。むしろ思いがけない機会にそれを見出すこ

とがあるので、その時は予算も何も考えずに買ってしまおうが、これは強ち私だけでほあるまい。つまり、その月は私にとって偶然の発見が多かったのである。

その一つはモーツアルトの宗教音楽のミサ曲で、これなどは数カ月前から探していたものであった。

次はハイドンのクワルテットで、これはボストンのハイドン・ソサエターの特製レコードであるだけに実に素晴らしい。何れも外国盤であるのでかなり高価についている。問題はその他にも数枚のレコードを買ったために意外の金高に達したことは止む得をない。

「その代り服の新調は当分見合わすよ。」

これが私の妻に対する諒解を求める言葉であった。

しかし日曜日の午後など、お茶を喫した後 ゆっくり前庭の芝生の芽生えを眺めながら、名曲を聴く気分は何とも云えない。

「とてもいいですね。」

と、元来がクラシック音楽を愛好する点で私と趣味の一致する妻は、美しい音律に陶然となっている。

人の生活に経済を無視することは許されないが、そうかといつて明け暮れ金利計算をするのも味気ないものであろう。ましてや、名曲の調べも牛の鳴き声も同じというにあっては論外である。

五十年の歴史を閲したコロニアは、これから各自の生活に磨

きをかけたものである。いまでも「勤勉なる日本人コロニア」と称讃されて、それだけでいい気でいてはならぬと思う。レコードの曲が一つ終わった時に私の頭の中にこんな考えが去来する。

ところで或る時、近日に迫っているキリスト受難日に、私はラジオ・クルツラの日語時間を利用し、宗教音楽を放送するつもりでその選抜をやったが、矢張りヘンデルのメシアが適切との結論を得た。この曲は全部やれば少くも二時間を必要とするので、部分的に放送する他はなく、ハレルヤ・コーラスを以て終りとするように一通り聴いた。

大体において宗教音楽のオラトリオには壮重なものが多く、従って私とても稀にそれらを聴くのであるが、メシアの合唱曲には何か偉大なものに触れる感じがある。それは神と人間が接近する境地でもある。私達の生活を通し一年に一度位はこうした気分に入ることも必要かと思う。

次に今一つ、私自身についてのみ書いて恐縮だが、名著者の著書を買うのが私の道楽でもある。

これもレコードと同様で、外国書は為替の関係で相当高価だが、総体的に印刷と装幀がよいので何れも立派な蔵書となる。近来は書籍の月賦買いの便法もあるので、私はある程度それを利用するが、原則として現金買いをしている。これも先きに述べた通り、偶然の発見のために買い過ぎて予算を狂わすことが

多い。

さて買った本だが、あるものは殆んど眼も通さぬまま書架に飾っておくが、名高い著者の名に接するだけでもよい刺激になる。ここでルイ・バルボーザを引合いに出すと、ブラジルの古今を通じて彼ほど優れた蔵書家はないであろう。

しかし、リオのサン・クレメンテ街のルイの邸宅（現在の博物館カーザ・デ・ルイ・バルボーザ）に見るあの数万冊の書籍を全面的に彼が読破したとは考えられない。それにしても彼の読書生活が五十余年にも及んでいるところからすれば、或いはあの凶書の大部分が読まれているかも知れない。事実ルイにとって書籍が生命であり、読書が彼の生活であった。

余り豊かならぬ財政の中から度々書籍を買うのがいかにルイとても愛妻に遠慮があったらしく、購入した本を携えて帰宅する度に、彼を出迎えるマリア・アウグスタ夫人に向って、「真に相済まん、本買いがどうやら私の病癖となったらしい。」と述べたとは微笑ましくもある。

果してルイ・バルボーザがどれほどの資産を残して死んだか私は知らない。しかし彼の宏壮な邸宅に整然と配置される夥しい蔵書は、計るべからざる遺産である。しかも一冊の仮製本もなく、全部に美しい装幀が施されているのは偉観でもある。それにとっても書帝の蒐集がルイにとっての至上道楽であったことが知られる。

ルイ・バルボーザの蔵書との比較では、私の蔵書の如き大海

の一滴に過ぎないが、せめて雑木林のような感じにならない書架を作り上げたいと希っている。人が死んだ後に何が残るかは問題であるが、凡そ遺品によってその人柄を偲び得るであろう。蔵書などがその最も代表的なものかも知れない。

こうなると、一冊の書籍を求めるにも自ら慎重ならざるを得ない。

リオの海岸に建てられた

一つの胸像

ブラジルの生んだ世界的声楽家に二人の女性がある。それは十数年前からアメリカのメトロポリタン歌手として名声を博しつつあるビジー・サイヨンと、一九五五年に物故したヴェラ・ヤナコプロス (Vera Janacopulos) である。

晩年のヴェラ・ヤナコプロスは独唱会に出ることを避け、専ら声楽教師として後進の指導に当たっていたため、彼女の名は若い人達の間には比較的知られていなかったようである。しかし、現在中年以上の当国の音楽愛好家でヴェラ・ヤナコプロスを知らない人はなく、彼女がブラジル人であることに大きな誇りすらもっている。

ところで、昨年（一九五八年）十二月に、彼女の生れ故郷で

あり、また逝去前の十五ヶ年を過ごしたりオ市の海岸通り、プラサ・パリヌに彼女の胸像が設けられ、偉大な芸術家としての風貌が偲ばれることになった。しかもその胸像は、亡きヴェラ・ヤナコプロスの実妹である彫刻家アドリアナ・ヤナコプロスの畢生の力作であるところに一層の意義がある。

プラサ・パリヌといえば、ブラジルの共和宣言者デオドロ・ダ・フォンセツカの銅像のある場所であるが、あの馬上の将軍と芸術家ヴェラ・ヤナコプロスの胸像が面白い対象をなしている。

ヴェラ・ヤナコプロスはオペラ歌手として舞台に立ったことはなく、室内音楽家としてヨーロッパ諸国、とくにフランスで著名の存在をなしたものである。おそらく一九二〇年前にフランスを訪れた人で彼女の名を聞かなかった人はないであろう。第一次欧州大戦直後に、ロンドンのアルバート・ホールで彼女の独唱会が催された折には、ジョージ五世夫妻の臨席の光栄に浴した。

ヴェラの豊かな声量の中に崇高な甘美と壮厳さがあり、聴く人に限りない感銘を与えたといわれる。それは彼女のみのもつ天賦の美声で、人々を陶然の境地を導く、とは嘗てロンドンの大新聞デーリー・テレグラフに載った批評である。

また、彼女が第一次大戦当時フランスの各地で戦傷軍人の慰問独唱会を催したことは未だに有名な逸話ともなっているが、こうした事実はブラジルの女性としては唯一であろう。そ

れほどに彼女は第二の祖国フランスを愛したことが知られる。しかしながら、彼女が一九二〇年にフランスから祖国ブラジルに戻って数年を過ごす間に、パリーの音楽学牧から音楽教師として招牌されたが、それを固辞してブラジルに止まり、当国の不運な声楽家の指導と援助につとめたものである。

彼女はその名の示す通りギリシヤ系であり、それは母方の血統であるといわれる。

ヴェラ・ヤナコプロスはブラジル生れではあるが、少女時代にフランスに渡り、芸術の都パリで音楽を学び、精進努力の結果その優れた天分と相まって遂に彼の地で名声を馳せ、ヨーロッパ各国を旅行しては著名となった。それほどに名高くなった彼女が全盛期に祖国ブラジルに帰って謙虚な態度を持し、子弟の教育に専念したところは彼女の人柄が偲ばれる。

或る時、商用でリオを訪れた私は日没前にプラサ・パリスに赴いて、ヴェラ・ヤナコプロスの胸像を眺め、しばし感慨を禁じ得ぬものがあつた。

私は不幸にして彼女の芸術に接したことはないが、あの胸像に見る眼をつむって冥想するヴェラ・ヤナコプロスは、独唱前に敬虔な祈りを捧げるかに想像された。

カンピーナスのカルロス・ゴメスの銅像を望む時には、何処からともなく壮麗な「グワラニー」の序曲が流れて来る様であるが、ヴェラ・ヤナコプロスの胸像を見ては、バッハやヘン

デルのオラトリオが耳に響くかに感ぜられた。

リオに『ヴェラ・ヤナコプレス会』が組織されたのは三年前（一九五六年）で、その目的はブラジルの誇りとする偉大な声楽家を永久に記念するにあるが、同会の発起により篤志家の参加を得、政府の援助にまたずしてあの青銅の胸像が建立されたのである。それは、リオに多く見る銅像との比較で、一つの小さな胸像に過ぎないが、芸術家ヴェラ・ヤナコプロスの人物を知る時に限らない尊敬の念が湧く。

これでリオ市の何処にも殆んどなかった芸術家の記念像が設けられた訳である。特にそれが女流声楽家であるところに打たれるものがある。

（一九五九年三月）

エウクリーデス・ダ・クーニヤの 作品と風格

日本での明治文学の惑星的存在をなした森鷗外と、ブラジルのエウクリーデス・ダ・クーニヤの人物と生産に相通ずるものがある。前者は、軍医ながらむしろ文学者として知られたが、後者エウクリーデス・ダ・クーニヤも同じく軍属土木衛生技師よりは著述家をもって聞こえ、その代表作 『オス・セルトン

エス』がブラジル最高の古典文学と評されるのは、何を物語るであろうか。

今から恰も五十年前の八月十五日の出来ごとである。小雨降るリオ郊外ピュダーデ駅頭で、エウクリーデス・ダ・クーニャが一士官候補生によって暗殺された報は人々をして愕然たらしめた。

当時エウクリーデスが四十三才の働き盛りで、『オス・セルトンエス』の出版について外相リオ・ブランコの懇望により、ブラジルとペルー国境問題の現地調査に赴き、その重大使命を果して、彼の名声は隆々たるものがあつた。

一九〇九年といえ、笠戸丸のブラジル着翌年であるが、これらの日本の先駆移民が苦闘生活をなめていた時に、ブラジルの生んだ偉大な著述家エウクリーデス・ダ・クーニャが惜しくも世を去つたのである。エウクリーデスの他界したのが八月であるが、奇しくも彼の著作『オス・セルトンエス』の出版されたのも一九〇二年の八月であるところから、毎年八月には『エウクリーデス週間』が記念されている。

今年（一九五九年）は、エウクリーデスの逝去五十周年に当るので、『エウクリーデス週間』が特に盛大に挙行された。周知の通り、この『エウクリーデス週間』がサンパウロ州モジアナのサン・ジョゼ・ド・リオ・パルドで行われるのは、エウクリーデスが同地で巨作『オス・セルトンエス』を脱稿したから

である。それは、彼が交通省の委嘱技師としてサン・ジョゼ・ド・リオ・パルドの鉄橋架設工事の監督に当たった時のことである。従って同地にはエウクリーデス博物館が設けられ、彼が架橋工事の監督に使用した河畔の小屋ほ、『オス・セルトンエス』の出版記念物として保存されている。

ところがエウクリーデスは聖州人ではなく、リオ州カンタ・ガール郡サンタ・リタ・ド・リオ・ネグロのサウダーデ農園に生れたのが一八六六年一月二十日である。彼が成長するに及んでパラグワイ戦争が終局し、一八八八年には奴隷解放が実施された。次いで共和連動が勃興し、殊に軍部に共和主義の代ア・ベルメーリヤの兵学校に在る間に有名な教官、ベンジャミン・コンスタンから少なからぬ人格的感化をうけた。やがてエウクリーデスは兵学校卒業と同時に、サンパウロの新聞人ジュリオ・メスキータの招聘によって、サンパウロの一流紙『オ・エスタード・デ・サンパウロ』に働くことになった。

それから約三年後に『エスタード』の特派員としてバイアのカヌードスの反乱戦現地に赴き、つぶさに綴った従軍記が、『オス・セルトンエス』の主要部をなしている。

カヌードスの従軍によって現実のブラジルを直視し、感傷的な共和主義者の夢破れて人生社会観が根本から一変した、とは後日にエウクリーデスが述懐したことである。

さて、『オス・セルトンエス』とはどんな書物であろうか。その内容は、十九世紀末にバイアのセルトン地帯カヌードスに

起った住民の坂乱が主題をなしている。この書は、第一、第二、第三部から成っていて、第一部は中央、北東ブラジルの地理的描写で、第二部は住民即ち人物について叙述されている。第三部が本論のカヌードス戦であるが、エウクリーデスが戦乱の現地にあつてあらゆる面を綿密に観察した通信をまとめ、補足したのが『オス・セルトンエス』である。これを一読してカヌードスの反乱戦を知るばかりでなく、ブラジル北東部の風土と社会を学ぶことが出来る。

この書に描かれているのは前世紀の北東ブラジルであるが、現在もそれと同様の社会を見られるところにブラジルの特異性がある。

カヌードスの叛乱戦は、路傍伝道者アントニオ・コンセルエーロをリーダーとする五千余人のジャグンソといわれる邪教徒の暴動であつて、その討伐に数千の政府軍が派遣され、約一年に亘つて多大の犠牲を払つてようやく鎮圧されたものである。

何処を問わず天恵豊かで教養ある社会には邪教は普及しない。つまりカヌードス叛乱戦の大きな原因は、住民の無教育にある。加うるに相次ぐ旱魃によつて、住民の生活は極度に疲弊し、初めは神への救いの嘆願が恵まれぬ余り呪阻に変わり、遂には反逆的となり、大挙して一揆に発展した。

これを単なるジャグンソ族の一揆と見ればそれまでである

が、何故にバイアの一角にこのような社会革命が起ったかを知るのは、北東ブラジルの社会を学ぶ上に重要性がある。

従ってカヌードス坂乱戦は、ブラジル北東部の地理、歴史、社会、人種、心理学的研究の興味深い問題とされている。凡そ革命や叛乱は領土の侵略または政治的野望のために起るが、カヌードス叛乱戦は邪教徒の狂信的行為であるところにその性格を異にするものがある。

『オス・セルトンエス』が一度英訳されるや、各国の著述家や新聞人は挙つてこれをブラジル古典文学の最高峯であると評したほどである。著者エウクリーデス・ダ・クーニャは、デッケンスやカーライルと相並ぶ文学者ともいわれ、その雄渾にしても良心的な構想はトルストイの『戦争と平和』にも匹敵するとの定評もある。

『オス・セルトンエス』が普通の文学書と異なるのは地理、動物、人類学上の術語が多い他に、通常殆んど用いられないブラジル特有の単語が相次いで現われることである。しかも文体と筆致が逞しく、あたかも巨岩を望む観がある。

(一九五九年九月)

エウクリーデス・ダ・クーニャ

五十年忌所感

一九五九年の八月でエウクリーデス・ダ・クーニャの逝去五十周年になり、それを記念するために、サンパウロのフランシスコ・アルベス書店とコンパニア・メリヨラメントは、エウクリーデス伝と彼の代表著作「オス・セルトンエス」をショーウインドー全面に陳列して注目をひいた。

フランシスコ・アルベス書籍会社は、「オス・セルトンエス」の四版（一九一一年）以来の版權を所有する関係からも特にエウクリーデスの五十年忌を記念することがうなづける。

またブラジル翰林院を初め教育省、インスチット・デ・リーブロス（書籍院）、ブラジル歴史地理学会などの主催のエウクリーデス五十年忌記念行事が同年八月以降を期して行なわれた。更に新聞『オ・エスタード・デ・サンパウロ』もエウクリーデス・ダ・クニャ特集号を発行した。

それはエウクリーデスが同紙の特派員として一八九七年にバリアのカヌードス蕪乱叛乱戦に従軍した現地報告が、「オス・セルトンエス」の主要部をなしているからである。それを前世紀末にバリアの一角に起った邪教徒の一揆と云えばそれまでだが、現在も北東ブラジルの社会と住民を研究する上に、カヌードスの叛乱は興味深い課題とされている。

ブラジルの *Odyssey* の称ある「オス・セルトンエス」を、私が初めて手にしたのは十数年前だが、文章が難解のため数十ページを読んで放り出した。

それから一九五二年となり、エスタード紙に連載された「オス・セルトンエス」出版五十周年の特集記事を見て、再び同書に興味をもち、良薬をのむ気持でそれを全部訳破した時は何かしら偉大なものに接した昂奮を覚えた。それは二十代の頃に読んだフランス革命に取材したデッケンスの「二都物語」とユーゴーの「レ・ミゼラブル」からうけた感銘に似るものがあった。

今一つ私にとって幸いであったのは、エウクリーデスと親交のあった法学者、新聞人ブリニオ、パレット氏と相識り、同氏のエウクリーデスに対する人物観を詳細に聞き得たことである。また同氏の秘蔵するスクラップ帳を拝借し、トリストン・デ・アタイデ、ジョゼ・ヴェリッシモを初め、ジョアン・リベロ、アグリピノ・グリエコ、アフォンソ・アリノ、フェルナンド・デ・アゼヴェド、ウイルソン・マルチンなど文壇の権威のエウクリーデスに関する評論に眼を通すことが出来た。

その後私は「オス・セルトンエス」を抄訳し、その日本語をブリニオ・パレット氏に持参したところ、「何故全訳をやりませんか、『オス・セルトンエス』の翻訳は貴方の生涯の仕事としても悔はないと思います」といわれた。遺憾ながら私は翻訳の才能に乏しくそれに打ち込む情熱と時間的余裕がない。

ブリニオ・パレット氏は既に物故されたので、エウクリーデス・ダ・クーニャを直接知る現存人はおそらくないであろう。いうまでもなく「オス・セルトンエス」は純文学作品とは異り、研究書の要素を多分にもつものである。先ず愛国の至情とヒューマニズムに一貫する内容が強く人心に迫るが、科学的叙述といふか地理、人類、社会哲学、心理学的構成と分析が同書の特徴をなしている。しかも構想の雄渾と文体の壮麗且つ逞しさは他に類を見ない。エウクリーデスとしてブラジルの卓絶せる名作家（スタイリスト）という所以である。或る文芸評論家が「オス・セルトンエス」の文体を評して、山上の巨岩を望むようだ、とは眞を穿ち得ている。

また、アメリカ及びヨーロッパの著名新聞人は、エウクリーデス・ダ・クーニャはカーライルやデッケンスに比肩すると賞讃している。

「オス・セルトンエス」はサムエル・プットマンによって英訳され、ブラジル古典の最高峰 (REBELLION IN THE BACKLANDS) の表題で、シカゴ大学出版部から出され既に五版を重ねている。註Ⅱ同訳者の英訳書にジルベルト・フレレーの「カーザ・グランデ・エ・センザラ」がある。

エウクリーデスは、一八六六年一月に生れて、一九〇九年八月に没したから四十二才の短命だが、巨作「オス・セルトンエス」と、外相リオ・ブランコの要請により外務省委嘱技師として、ブラジルとペルー国境問題の現地調査の大任を果しただけで、

彼の生涯ほ栄光に輝くものである。

また彼の別の著書に

A MARGEM DA HISTORIA 2 CONTRASTES E CONFRONTOS

の二つがあるが、何れもポルトガルで出版され貴重な文献とされている。

さてエウクリーデスの人物素描だが、肖像写真に見る彼の風貌は、世間にさらにある普通人のタイプでとりわけ天才という感じではない。敢えて云えば顔面の線に神経質のところはあるが、それが彼の英敏と俊才さを表わしているのかも知れない。

彼は性格的に臆病であった反面、ことに臨んで大胆且つ情熱的などころがあつた。彼がリオのプライア・ヴェルメーリヤの陸軍兵学校の学生時代に共和運動に熱狂し、校則違反で放校処分をうけたことがある。寄宿舎では同室の寮生と語り合うのを避けるなど、人嫌いで変人的存在であつた。

ブラジル外務省発行の外交叢書「リオ・ブランコ男爵とエウクリーデス・ダ・クーニャ」に掲載される写真に、エウクリーデスが数名のサンパウロ法大生とイタマラチー宮にリオ・ブランコ外相を訪れた際に撮ったのがある。その中にはグラサ・アラニーヤ、セーザル・ヴェルゲーロ、カスペル・リベロなどがあるがエウクリーデスだけがひどく神経質な面相をしている。見方によっては、エウクリーデスはフロイドの研究課題の人物かも知れない。しかしそれなればこそ、若くしてあれほどの著

述をし、連邦政府とサンパウロ州政府の委嘱技師としてサン・ジョンゼ・ド・リオ・パルドの架橋工事、セントラル鉄道、その他の衛生施設、アマゾンの地理、地質、河川調査などを完遂したのであろう。

ところで数十にも達するエウクリーデス伝とモノグラフィアの殆んどが公人としての彼とその著作のみを語り、私人特に彼の家庭生活に触れているものが少ない。公人としての彼は文字通り非凡の人物でありながら、家庭の夫としては甚だしく偏屈の面があつたようである。彼は妻を愛しながらも時に粗暴となり、妻の挙動に猜疑心をもちつづけて苦悶するという悲劇的人物でもあつた。或る士官候補生がそれを見兼ねて彼の夫人に同情を寄せたことが却つて彼の疑惑を招き、それが原因となつて彼は暗殺される結果となつた。一九〇九年八月十五日、エウクリーデスは相手の士官候補生を葬ろうとしてリオ近郊ピエダーデを訪れたが、反対にその士官候補生の弾丸に斃れたのである。

世にいう偉人には、公人として非常に優れる反面何かしら欠点をもつが、それが人間的魅力となつていふことがある。エウクリーデス・ダ・クーニャの場合も正しくそれに通ずるものがあると思う。何時か「ジョナル・ド・コメルシオ」が、過去現在を通して最も傑れるブラジル人二十名は誰か、のアンケートを出したところ、エウクリーデス・ダ・クーニャがその一人に入つたとのことである。

他のことはさておき、彼が軍属土木技師でありながら著述家、社会哲学、地理、人類学者に併わせて新聞人として傑出していたところに少なからず敬服せしめられる。

言葉と文化

サンパウロの日語学校連合会の主催で、先日、全伯児童お話発表会のあったことは新聞に報ぜられたとおりである。

当日、私は審査員の一人として出席したが、百十余名の出場児童の純真且つ熱心な話に接して少なからず感銘し同時に緊張のせいか疲労を感じた。しかしそれは心持ちよい疲労であった。

私がこの審査員を受諾するに当って懸念したのは、私には子の養育と児童教育の経験がなく、従って児童心理をよく解さず、また常に大人の会話や声のみを多く聴き馴れているため児童少年の声音に対する感覚に乏しいことであった。それにしても今となって私は審査に最善を尽したことに悔いはなく、広い見地からは言葉と文化を結び合わせて大いに刺戟され、参考となるものがあった。

卒直にいつて、私はあのお話発表会の雰囲気にあつて日本にいる錯覚を感じたほど児童の話し方が立派であった。出場児童は各地方の予選に及第したものだけに何れも優れ、採点上（私

の場合)の優劣の差は極めて僅かであった。特に好感をうけたのは、彼等は如何にも児童らしい自然な話し方に終始し、青年の弁論大会にあり勝ちな大言壮語や絶叫的なものがなかったことである。また活弁句調は絶無であったといつてよい。例外としては或る少数の選手の声が余りに高過ぎて却つて内容をつかみ得ないのと、棒読み式というか暗誦風のものがあった。とかく棒読み式は、内容が借り物で自己のものでない印象を与え易い。しかしこれとても指導如何によつて矯正可能で、決して児童の素質的欠陥ではない。あの壇上で聴衆を前にして少しもひるむところなく、正しい日本語で和やかに話す態度たるや、従来の日系コロニアの環境に生え育つた児童とも思われぬほどであった。

何如かというに現在のコロニアの日本語は余りに乱れ、発音が濁っているからである。しかも出場児童には話しながら中断して原稿を見直すなど皆無で、時間的超過も殆んどなかったことは美事な出来栄えといふべきであろう。

それから、側面から選手各々の口の動かし方をよく観察するに発声学上からも正しかったのは果して教師や父兄の指導によるものであるか。更に抑揚と句ぎり(文章の場合の句読点)も正しかったのは聴くも心持よく、従つて審査の重要点を決する話し調は概して良好であった。敢えて云えば、この児童お話し発表会は話詞に主眼がおかれているため内容は第二次的となり、テーマも地元ブラジルよりはアジア、ヨーロッパ、北米

の偉人伝、お伽噺、伝説、寓話、によったものが多かったことである。それはよいとしても、ブラジルの風物、社会、歴史、事件に取材することも考えられて然るべしと思う。或いは各々の日常生活を題材とするも実感が出てよいであろう。もつとも数名の児童で、自身の父母や身近の問題について語ったのがあった。

選手一人当りの時間は幼年部で一分半から二分、少年部は二分半より三分であるから審査も内容まで及びかねて、語調が主とされたのは当然の成り行きである。

今一つ感服したのは、当の児童少年少女に司会させたことで、何等の時間と労力のソツがなく、順調にプログラムを進行した手際は賞讃に価いする。これは幼にして自主性とチームワークに対する責任感をもたしめ、集会を計画運行の実地訓練に真に効果的であり、農村の4H少年連動に相通ずるものがある。また注目されるのは今回の出場選手が率において男子よりは女子が多かったことで、これは研究課題ともなるであろう。

何れにせよ、第二回の児童お話発表会を以てこれだけの成果を挙げ得たのは、各々の学校教師と父兄の熱意、指導の宜しきによるものである。これは単に日語教育の限界からでなく、優れた当国の社会人育成の見地から欣びに耐えない。

今日では日本国に対する観念が戦前のそれとは根本的に異っている。偏狭な民族意識や独善的な意味の日語教育は排すべきだが、立派な日系ブラジル人（或いは日系社会人）を育てるた

めの日語教育は奨めて然るべきである。

現今では外国人の知識階級で日本語を学ぶものが少なくな
い。それはニッポン・ブームというよりはもっと根強いものが
ある。昔日の日本にオランダ文化を学ぶための蘭学があつた
が、現在は世界主要国に日本文化研究のための日本学が設けら
れた観すらある。この時にブラジルの日系人が日本語を修める
のは必要でこそあれ決して時勢に逆行することでない。また、
当今では自国語の他に 一、二の外国語を知るのは教養の水準
を高める事でもある。戦前には日本語を嫌悪したアメリカの
二世が、昨今は自発的に日本語を学ぶ傾向にあるとは何を物語
るであろうか。しかもそのような人物こそアメリカの社会の求
める人材であるといわれる。

また言葉に関連して考えられるのは、優れた文化を生むには
言葉を大切にせねばならないことである。そも一邦または一種
族が文化的に亡びるのは、言葉を失うことに初まる。

この点現在の日系コロニアで話されている日本語は何の影響
か日本語本来の美しさを失って甚だしく乱れ、雑音という感じ
である。優れた日本文化を当国に紹介し移植することは勿論よ
いが、それに先立って正しく美しく正しい日本語の話し言葉を復活
し、普及せしめたいものである。

ブラジル文化体系の執筆に当って

凡そ人々が歴史に興味をもつのは中年以後であるらしく、若い学生で歴史の研究をするのは極めて少ない。特に昨今は優秀の学徒が話し合わせたかのように原子物理に傾くのも時勢の然らしめるものであろう。事実、歴史の研究は道楽としてやるのはよいが、これで生活の資を稼ぐとあつては惨めである。

しかし日系コロンビアも半世紀を迎えんとする今日、コロンビア自体の歴史と共に広くブラジル史を学び且つ理解することも必要であろう。

ところで、サンパウロ日本文化協会の会報編集部の依頼で、私はこの頃本業の傍らブラジルの文化体系について書き始めているが、基本資料としてのポルトガル語のブラジル文化史のないうことに困惑した。そのため他の文献によつてブラジルの文化を辿るより方法はなく、ブラジル発見史から植民に初まり、産業史、経済、政治、社会史に併わせて宗教史（主にジェズイッタ史）を繙いたことは私にとつてよい勉強となつた。

又当国社会の特色をなすところの黒人文化と移民文化に関しては二、三の権威の著書を参考とした。わけてもブラジル文化の母体であるポルトガルの近代文明に眼を通しながら、自ら胸踊る感があつた。

日本の文明開化もポルトガルに負うところが大きいが、ブラ

ジルは開発以来三世紀に及んでポルトガルの属領植民地であった関係から、ポルトガルの風習、教育、宗教、思想的影響を根強く受けていることはいうまでもない。結局、ブラジル文化は西欧特にローマ文明の源泉を汲むものであろうか。

解りきったことではあるが、世界文明史を時代的に古代、中世、近代の三つに大別するとして、第一期は西暦紀元前エジプト文明から西欧に於いてのローマ帝国の没落（紀元四七六年）まで第二期は近東コンスタンチノープの崩落によるローマ勢力の滅亡（一四五三年）までであり、第期は一七八九年度のフランス革命までを指すであろう。つまりブラジルの発見は近代初頭に齎らされた訳で、その建国史はアジアやヨーロッパの先進国との比較で遙かに新らしい。従ってブラジルは若い国であり、見方によつては未完成の国でもある。

しかしこれだけの国が偶然出現したのではなく、四世紀半の歳月を経て内外共に琢磨されつつ現在に及んでいることに学ぶべきと思う。しかも広大無辺の領土内には、地域的に著しく異なる人口の分布状態を示し、その社会を構成する雑多の人種によつて当国特有の文化を生んでいる。善悪の批判は別として、ブラジル独特の文化と社会性を学んでこそ当国に対する尽きない興味湧くとも云える。

さて、開拓初期のブラジルには、三つの主な人口集団地があった。それは、サン・ピセンテ、バイア及びベルナンブーコで、後にマラニオンが加えられて四つの代表的集団地が出来

た。サン・ビセンテは、マルチン・アフォンソ・デ・ソーザによつて一五二二年に創設された村で、これに次いでジュズイツタ教団がピラチニング高原のサンパウロ村を設け、更にパナ、サンタ・カタリナ、リオ・グランデ・ド・スールが開拓され、又ミナス、ゴヤス並びにマツト・グロッソ開拓の歩が進められたのである。

バイアのサルバードルの創設者は、ブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザで、これは二百十一年間ブラジルの首都となり、それからセルジペを経てサン・フランシスコ平原に村落が見られるようになった。そもベルナンブーコでの最初の集団地ほ、ドアルテ・コエーリオの建設したオリンダで、此処を根拠としてポルトガル人はアラゴアスとセアラの開拓に当つたものである。十七世紀となつてはオランダ戦争が起こり、又フランス人がマラニョンに侵入したことが動機となつてピアウイー、パライー、アマゾン地方が開拓されることになった。

ここで、当国社会の特異性をなす地方文化と住民の風習伝統を対象的に観察すると面白いものがある。その代表的なのはバイアとサンパウロであろう。サンパウロ人（パウリスタ）は独立自営心に富み進歩的であつて自由主義者であるに反し、バイア人は概してポルトガル依存で、父祖以来の伝統を踏襲し、善悪いづれの意味にも極度に保守的である。植民時代からの古色を帯びた史的遺蹟が大切に保存されているのもそれを物語るも

のである。この点サンパウロ人は、他の援助なしに自己の問題を解決する自主性と進取の気象に富んでいる。新しい建設と前進のためには、敢えて古蹟をを破壊するのもその性格の現われであろう。サンパウロがブラジルの独立や共和運動或いは奴隷解放の政治的中心をなしたのは不思議ではない。

又サンパウロがラテン・アメリカ第一の工業都市となったのもそのためであり、サンパウロ以南のパラナ、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールの住民も、性格的にパウリスタに相似るものがある。

ポルトガルの近代文明史については、アンドウ・ゼンバチ氏の「ブラジル史」によく叙述されているが、ポルトガルがイベリア半島の西端を占める一君主国として、その国境と国家的立場がやや判然となったのは一〇九五年から一二七九年であり、以後一四一五年までにカスチラ王国（スペイン）とその貴族の圧政に耐えつつ次第に建国の基礎が固められたのである。

一四一五年以降は謂う所のポルトガルの *Periodo de Descobrimento*（新領地発見期）で、従来の沿岸航海から大洋航海に飛躍し、名実共に海国ポルトガルとなった。こうしたポルトガルの大洋航海と海外雄飛の気運が、コロンブスをしてアメリカ新大陸を発見せしめ、又ヴァスコ・ダ・ガマをしてインド航路を拓かしめた。それに次いで、カブラールのブラジル発見を促したことは語るまでもない。しかし、ブラジル発見当時のポルトガルは人口少なく、剩え王室は極度の財政難で、

ブラジル開発の投資は殆んど不可能の状態であつた。

一五一〇年頃の調べによれば、ポルトガルの全世帯数は、二八〇・五二八で一家族四人平均として一一二二、一一二人であり、この中の半数は女性で占められていた。更に未成年者を除けば実に働きに耐えるものは三十万人に過ぎない。その大多数は本土の農夫、漁民、軍人、官公吏或いは貴族であつて、インド貿易やブラジル開拓に当れる者は越く少数であつた。

このような困難な実情にありながらも、ポルトガルの屈強の男子は、カラヴユラ船や二重帆船に乗り大洋の波濤を破つて航海を続けたものである。それらの冒険児を讃えたカモンエスの詩の一句を次に引用する。

Vos, Portugueses,

Poucos,

Quantos, Fortes,

卿等、ポルトガル人よ

少数にして如何に強きか。

かくしてポルトガルの商船隊は西洋と東洋をつなぎ、或いは大西洋を航海して、まさに海国ポルトガル時代を現出した観があつた。やがてドン・ジョアン三世が王位についてからは、ドン・ジョアン一世以来の国家統一の偉業が完成された。それは、政治面のみでなく文化の成長に著しいものがあつた。その優れた文化的雰囲気から、ルイス・デ・カモンエスやベルナンジン・リベロー、サー・デ・ミランダ、ジル・ビセンテ、ドン・

ジェロニモ、ジョアン・デ・バツロス、フェルノン・ロペス、ペードロ・ヌーネスなどの詩人文学者を輩出せしめた。

ドン・ジョアン三世が行なった多くの文化事業の中で特筆に価するものに次の三つがある。

その第一は、王室の負担による奨学制度を設け、優秀の人材をコインブラ大学やバリー大学に遊学せしめたことである。一九二五年度の如きは、バリー大学在学のポルトガル王室の奨学生は三十名にも達したが、その中に将来のジュズス会の創立者イナミオ・デ・ロヨラとフランシスコ・シャビエルも加わっていた。

第二はジュズス会(ヤソ会士)の創立に多大の援助を与え、ブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザと共に土民教化のためにジュズイッタを派遣したことである。これがブラジル文化の曙光をなしていることを知らねばならない。

第三は、ポルトガルの最高学府コインブラ大学の本格的組織をつくったことである。コインブラ大学はリスポアを隔たること北東百十五マイル、モンデゴ河畔東方の風光絶佳の高台に所在している。これは一二九一年度にポルトガル王室によつてリスポアに創設されたが、一三〇九年からコインブラに遷され、後日再びリスポアに移転し、一五三七年となつてドン・ジョアン三世により最終的にコインブラに移され、根本的に改革された。コインブラ大学は、法学、医学、哲学、数学、神学部によつて知られていて、昔日のブラジルの名門の子弟で同大学に遊学

したものは相当の数に達している。

ブラジル発見とその発開史を学ぶには、順序としてドン・ジョアン一世の治世に始まり、ドン・アフォンソ五世、ドン・ジョアン二世、ドン・マノエル一世及びドン・ジョアン三世のポルトガル史を点検する必要がある。

以上、ブラジルの文化体系を綴るに際して、断片的に史的感想を述べたに過ぎない。前触れをするように恐縮であるが、出来るだけ完全に近いものを書きたいと希っている。もし特にお気付きの点があれば御教示を仰ぎたいものである。

クリスマスと七面鳥

西洋ではクリスマスのお祝いに七面鳥がつきものであるから、七面鳥のないことは貧民の嘆きとなっている。従って余り豊かでない家庭では小さな七面鳥にしてもこれをクリスマスのお食卓に飾ることがどれほど歓びであるか知れない。特に英国に於いてこうした習慣がある。

私がクリスマスによって七面鳥を連想するようになったのは、少年の頃日本の郷里の函館で「クリスマス・キャロル」の映画を観て以来である。当時はこれが有名なチャールズ・デッケンス原作の「クリスマス・キャロル」であるなどは知らなかったが、名優ルパート・ジュリアンの演じたスクルージ爺が

ひどく私の印象に残ったのである。一片の人情味もない強慾のスクルージ爺が憎らしいまでに感じられたが、クリスマス前夜の夢によってこのスクルージが大悟潤眼し、いとも心豊かな老爺となるとところに大いに打たれた。殊に少年の私に忘れられなかったのは、スクルージ爺が自分の事務所に永年勤める忠僕そのもののような書記に何等酬いることのなかったのを悔い、その家庭に大きな七面鳥を贈る場面である。以来、私はクリスマスと聞けば、七面鳥を思い出すようになった。

しかし、私が「クリスマス・キャロル」の映画で見た七面鳥は焼き鳥用として毛を剥がれたもので、本当の生きた七面鳥を見たのはブラジルに来てからであろう。来伯後間もなくソロカバナ線アバレーの一耕地の庭にいた数羽の七面鳥が頓狂な声でなっているのを見て成る程これが七面鳥かと意外であった。その後歳月は流れ、三十数回のクリスマスを経験した。又チャールス・デッケンスの主な著作は殆んど読んだが、中でも最も感銘を受けたのは、フランス革命に取材した「A TALE OF TWO CITIES」(二都物語)と「A CHRISTMAS CAROL」である。特に「クリスマス・キャロル」は時折読んで飽きない小説であると思う。

先日聖市の映画館で久し振りにこの「クリスマス・キャロル」が上映されたが、流石は英国映画だけに俳優の演技がよく、撮影と録音技術は素晴らしいものであった。クリスマス頌

歌の合唱と共そのプロローグに日く、「デッケンス不朽の名作クリスマス・キャロルは世のひと数百万の心を豊にし且つ歓喜を与えている……」と。元来デッケンスの小説は何れも重々しいまでの感じがあつて、気軽に読めるものは少ないが、単に刺戟すなくして奥深い人生への教訓に満ちている処に頭の下がるものがある。

さて話は「クリスマス・キャロル」の中心人物、スクルージ爺に戻るが、世間にはこのスクルージ爺が案外に多い。富むにつれて却つて心が貧しくなり、狭い世界に住んで余生を送るのはむしろ悲惨である。スクルージ爺はクリスマス前夜の友人の亡霊の訪れによつて悟りを開き、転心して社会に尊敬される人物になるが、我慾一点張りの生涯をおえる人は不幸である。

スクルージ爺は自分の書記の家庭に七面鳥を贈り、その不具の子の養育を援助して生き甲斐を感じずるまでに変つたが、これまでなれる老人は幸福であると思う。

クリスマスが近づくにつれて思い出されるのは少年時代に見た「クリスマス・キャロル」の映画と七面鳥である。次いで教会の鐘とスクルージ爺の微笑が眼に見えるようである。

孟蘭盆の一日

今年（一九五八年）は珍らしくも日曜と孟蘭盆が同日となった。とりたてて墓参の必要のない私は妻の外出後に一人で書斎に入ったが、あたりが静かに過ぎて却って気分が散じ、読書も出来ずペンも執れない。

庭の芝生に遊ぶ雀の囀りがはつきり耳に入るのは、常のように自動車の騒音がないからであろうか。騒がしくは気が落付かず、静か過ぎては考えがまとまらない、とは厄介な話だが人間には或る程度の雑音はむしろ必要なのであろう。特に社会の雑音は人生の行進曲であり刺戟でもある。

さて今日は来客もないのを幸い？ 「戦後のブラジル社会をのぞく」という表題で一文を草するつもりでペンを執ったのはよいが一向に進みそうもない、第一このテーマは茫洋たる大アマゾンの流れにも似て掴みどころがない。目標が明瞭のようで夜明け前の靄道を自動車で走る感がある。敢えて云えば戦後のブラジル社会の鳥瞰図を綴ることであろうが、何から書き初めるか途方にくれるばかりである。差当りこの方面の資料が豊富に見えていざ探すとなれば少ない。時には或る文献を手に入れてもそれが膨大に過ぎて概括的に要点を抽出することが困難である。また机上に多くの資料を積んでもそれを整理することは、文筆が本業にならない私には容易の業でない。

こう種々と理由を並べたてると、頭から湧き出るまま筆を運

ぶのは兎も角、多くの文献や資料を漁りながら一つの系統立ったモノを書き上げるのは相当の仕事である。

ところで、戦後のブラジル社会とは近來のことだが、これが昔日のブラジル社会を記述するよりも難事である。というのは当国に永く住むにつれてブラジルぼけの一現象として、この国の社会的動きや一切の事物に対して無感覚になり易いからである。つまり自身が当国の社会環境に浸っているためにこの国の社会事象を意識せずして時を過ごしてしまうのである。私は知合いの新聞人や著述家に会う時には、以上のテーマについてのよい智慧を借りるべく相談するが、これとて名案も出ない。中には「よしんば絶好の資料があるとしても、それを君に提供したらこちらが仕事にあぶれるではないか」と冷やかすのがある。

戦前の「エスタード」紙やリオの一流新聞は年鑑を出していたのでそれがよい参考資料となったが、戦後はいづれも年鑑を廃して農業、産経、婦人文芸の特集版を設けて読者サービスに つとめている。数年前からは「アニエンビー」や「ブラジリエンセ」などの高級総合雑誌も出ているが、これによって終戦直後のブラジル社会研究の資ほ得られない。最も適切な方法としては一流新聞社を訪れ、終戦から現在までの新聞に眼を通しながらメモをとることだが、そんな時間的余裕のない私にはこれも諦めものである。この点、外国の新聞、雑誌社から比較的要領よく編集されたブラジル紹介書が出版されているが、それは

一般の外国人には喜ばれるとしても概して記述が大雑把であるから、大して参考にはならない。特に近来は日本を始め各国共にブラジル・ブームを招来し、よく雑誌にブラジル特集記事を見うけるが、その殆んどが興味本位で参考資料となるようなものでない。少くとも当国に在るものがブラジルを論ずるに、今更リオのムラタ（白人と黒人の混血女）の美しさやアマゾンの大蛇でもないであろう。

読者に面白く読ませることは必要だが、余り興味本位に墮しても内容空疎でも得るところがない。さりとして記録と数字もうんざりする。そこで私は随筆や評論を書きながらもその中に、ブラジルの歴史、人物伝、史話などを盛るべく心がけているが、それが中々六ヶ敷しい。時には何ともつかないカクテルのようなものが出来て自分ながら呆れることがある。余り堅からず、同時に読んでタメになる随筆風の「戦後のブラジル社会の動き」を叙すべく机に向ったが、どうやら書けそうもなく、ペンを投げ出してレコード音楽を聴くことにした。

レコードも時折購入していると殆んど聴くこともなく保存するようになる。わけても二、三枚からなるセリエ版は全部を聴くのに一時間以上も要するから閑暇のない時には断片的に聴いて楽しむ他はない。

今日は約二ヶ月前に求めたハイドンのオラトリオ THE SEASONS（四季）を全部聴けて幸いであった。

恰かも孟蘭盆とて壮重雄麗なリズムと合唱を心行くまで鑑賞

するに適わしかった。予定した原稿は遂に書けなかったが、そのお陰でハイドンの名曲を聴き得たのは精神の糧を摂ったにも等しく、感謝である。

ヘーグ世界平和会議と

ルイ・バルボーザ

一九〇七年といえれば日本の笠戸丸移民がブラジルの外交史に輝やかしい記録を添えたヘーグ第二回世界平和会議の催された年である。従って一九五七年は、同会議から五十周年に当り、その年の七月十二日以来数回にも亘ってその回顧的記事が当国の各新聞に掲載された。又、大学や歴史地理学会の主催で、ルイ・バルボーザについての講演会が連続的に行われたが、それは、ルイ・バルボーザがブラジル代表としてヘーグ会議に臨み、ドイツ、ロシア、英国、アメリカ合衆国、フランス等の列強の代表を相手に小国の立場を擁護し、堂々国際道義の見地から平和問題を論じて、ブラジルを一躍有名ならしめたからである。

それまでの各国の外交官や政治家のブラジル観は、黒人と土人、又はその混血児から成る非文明の一野蛮国ということでは

あった。ましてや本格的な海軍力すら持たないブラジルが、世界平和会議に列して軍事問題を諭ずるなど片腹痛い位のところであったかも知れない

しかるに、ルイ・バルボーザの卓抜した識見と勇氣、傑れた雄弁は、さしもの議場を肅然たらしめ、列強の代表を瞠目せしめた事は、今から五十余年前のブラジルとしては空前の外交的成功であった。

このような歴史的出来ごとが、日本の第一回移民のブラジル着の直前にあったことを、日系コロンビア人は知らねばならない。

しかも日露戦争に敗れながらもロシアは、五大強国の面目と貫録を失わずして、ヘーグ第二回世界平和会議を招集し、そのロシア代表マルテンスとブラジル代表ルイ・バルボーザが論戦の結果、ブラジルがよく認識されたとは皮肉である。

凡そ、人は誰しもその生涯を通し、大小にかかわらず至上の輝ける時というものがある。それが自己のみでなくして一団体、一社会、或いは祖国の名におけるの榮譽であるなれば人生最大の誇りであろう。

ルイ・バルボーザの場合は、ヘーグ会議でブラジルの国際的地位を高めると共に、彼自身がブラジルのドトール・バルボーザから国際人ドトール・バルボーザとなり、「ヘーグ会議の鷲」の揮名で呼ばれたものである。

・ かつてフロリアーノ・ペイショット大統領時代には、政敵に

追われて外国に亡命したルイは不遇そのものであったが、一九〇七年度のヘーグ会議で、彼は至上の時を勝ち得たのである。法学者、政治家、新聞人、教育家、著述家としてのルイについては機会を改めて述べるとして、ここでは専らヘーグ会議の彼を語りたいと思う。

第二回世界平和会議は、アメリカ合衆国大統領セオドール・ルーズベルトの提案に基き、ロシア皇帝ニコライ二世によって招集され、一九〇七年六月十五日から同年十月十八日までオランダのヘーグで開催されたものである。同会議への列席国は大併わせて四十四カ国で、中南米からはアルゼンチン、ポリビヤ、ブラジル、チリー、コロンビア、キューバ、ドミニカ共和国、エクアドール、グワテマラ、ハイチ、ホンジュラス、ニカラグワ、パナマ、パラグワイ、ペルー、サルバドール、ウルグワイ、ベネズエラの代表が列席した。

この第二回世界平和会議は十四回の条約会議から成るもので、その議長に当たったのがロシア代表のネレドウフとマルテンスであり、六月十五日に始められて十月十八日に最終の調印を見た。

参考までに付け加えれば、第一回世界平和会議も同じくロシア皇帝によって招集され、一八八九年度にヘーグで催されたが、当時のブラジルは、一八八三年の海軍の暴動のために、海軍組織の改革と充実を必要とする特殊事情にあったので、同会

議への出席を拒絶した

しかし、第二回世界平和会議には米州全体の国が招集を受けた関係からもブラジルは同会議の重要性を認め、代表の詮衡にも慎重を極めた。そのころのブラジルの大統領は、アフォンソ・ペンナで外相はリオ・ブランコ男爵であった。リオ・ブランコ外相がヘーグ会議への派遣代表として第一候補に挙げたのは、ジョアキン・ナブコであった。ジョアキン・ナブコは、生粋の外交官で、風采優れ、その学識、教養、経歴、貫録共にブラジル代表の最適任とみられたのは当然である。

他方、アフォンソ・ペンナ大統領と一般民衆はルイ・パルボーズを適切とみる有様で、その選択に当感したりオ・ブランコ外相は、ジョアキン・ナブコに書面を送って彼の意図を打診した。その折のジョアキン・ナブコの返書には、ルイこそブラジル代表として最適であることをあらゆる観点から指摘し、自分は先にヨーロッパに赴いて準備工作につとめるであろうとあった。

そこでルイ・バルボーズがブラジル代表に決定されたが、当のルイはその重任を受諾するに先立って種々の点を考慮し、逡巡したことは無理からぬところである。

ルイが決断に迷った理由は、彼が外交畑の出身でなく、国会と異って国際会議に各国の代表と伍すには自身の風貌の振るわぬこと、また外国の外交界に友人知己をもたない等であった。事実ルイは体軀矮小で頭のみ大きく、一画臆病に見えるところ

もあつたので、国際場では至って目立たない存在であつたのである。しかし彼が熟慮の末、全能者の庇護を得て最善を尽くすのみと決意し、ヘーグ会議のブラジル代表の重責を帯びて起つことになった。

既述のとおり、第二回世界平和会議は、一九〇七年六月十五日にヘーグのビテンホッフ宮殿で開　幕されたが、それより数日前にルイ・バルボーザを長とするブラジル代表一行がパリを経由しヘーグに到着した。ブラジル代表の宿舎がヘーグ近傍のシュヴニンゲ海岸のパラーセホテルに選定されたことは、リオ・ブランコ外相の計らいによるものであつた。この宿舎の到着きのある宏壮な感じに、ルイとマリア・アウグスタ夫人は心から喜んだといわれる。同ホテルにドイツ代表一行も見られた。

会議の発会式を間近かに控えて、ルイは水も洩らさない再準備をなし、時にはマリア・アウグスタ夫人と共に海浜を散歩して、浩然の気を養うのであつた。やがて六月十五日となり、緊張と感激の裡に第二回世界平和会議が開かれ、議長であるロシア代表フレデリコ・マルテンスによつて開会が宣せられた。場内に居並んだ各国代表の中に特に目立つのがドイツのマーシャル男爵、ロシアのネリドゥフ、英国のサー・エドワード・フリー、アメリカ合衆国のブラウン・スコット、フランスのレオン・ボルジョアーであつた。議事の進行につれて会議場の雰囲気からルイ・バルボーザが洞察したのは、集つた三十有余の

小国代表にはほとんど発言の勇氣もなく、五大強国代表の提議に無条件で追従することであった。一人ルイは度々起立して實際負債や海軍問題を論じたが、少しも反

響を呼ばずむしろ冷笑に似たものを感じた。ルイは秘書を介して会議の進行状況をリオ・ブランコ外相に打電したが、ブラジルと弱小国にとっての快報をもたらし得ないゆううつと焦心にかられた。

しかるに、ルイは英国の「タイムス」の特派記者ウイアム・スチードを識ったが、彼がルイの傑出した法学者と新聞人的な人柄に心服してその主張を支持したことは絶大であった。ルイは今更のようにジャーナリズムの偉力を悟った。

会議は目を重ねて七月十二日となり、商船の武装と艦船の掌捕問題に及ぶや、ロシア代表マルテンスは傲慢と尊大の態度をもつて小国の立場を無視した掟議と論調に終始した。

そこでルイ・バルボーズは静かに小軀を壇上に運び、おもむろに国際法の平等を説き、一小国とてもその権利に変わるところなしと述べ、海運力保持問題を論ずる時は理路整然、遂に最高潮に達するや舌端火を吐く感があった。各国の代表は期せずして一斉にルイの弁舌に魅せられ、彼の演説が終ると同時に場内に万雷の拍手が湧き起った。その時のルイの名演説は全部フランス語でされたのである。

当日の会議終了後に、ルイは休憩室で多くの人々から祝福の言葉を受けたが、眞先きに彼に固い振手を交わしたのがドイツ

代表のマーシヤル男爵であった。

同日ルイはブラジルの家族に打電して曰く

(*Deus tem-me protegido sempre aqui, Rui*)

ヘーグ会議中の記念行事としては、アメリカのカーネギー財団の寄附による平和会館の建設礎石式の挙げられたことである。

当日もロシア代表のネリドゥフが祝辞を述べ、次いで数百人のオーケストラと、コーラス団による、ヘンデルの「ハレルヤ合唱曲」が奏された。ルイは壮麗な音楽に聴き入りながら、ブラジルの名においてヘーグ会議に最善の努力を尽くし得たことを感謝した。

それから数日を経て、国際儀礼としてブラジル代表の各国代表招待の晩餐会が、パラセ・ホテルで催された。それは特にアメリカ代表を主賓とするもので、当日の場内装飾には万全を期し、沢山の美しい花はロンドンから取り寄せられたのである。その盛大さはヘーグ会議余談として、永らく人々の話題に上ったほどである。

わけでも当夜は、マリア・アウグスタのブラジル代表ルイ・パルボーザ夫人としての来賓接待の立派な所作振舞いは人々をして讚嘆せしめた。会議開催中のルイが、会場への出席真実まで演説の草稿を訂正加筆する時に、マリア・アウグスタ夫人は自らルイに靴を穿かせるのであった。而してルイが会議場に見去った後には、マリア・アウグスタ夫人の敬慶な祈りの姿が見

られた。

約三ヶ月に及んだヘーグ世界平和会議の状況を詳細に綴ることは紙面の都合上許されないが、最後の調印を終えてから、ルイのみが少しくヘーグに残り、マリアアウグスタ夫人が先きに帰路につくことになった。

ところがルイ夫妻の結婚記念日が十月二十三日であったので、当日ルイは旅行中の夫人宛に誠意と愛情溢れる祝福と感謝の電報を送った。

かくしてヘーグ会議のブラジル代表の使命を果したルイは、ブラジルに戻り、カテテ官にアフォンソ・ペーナ大統領に迎えられて少しも高ぶるところなく、「自分は祖国の名誉のために努力したに過ぎないが、外国においてのブラジルの地位を高めることが出来たと信ずる……」

かつてのサンパウロ法科大学の同級生であったアフォンソ・ペーナとルイ・バルボーザには、語るどころ僅かにして互いに相通ずるものがあつた。

墓前の冥想

去る七月四日、私は十八年振りにノロエステへ旅行したが、それは上塚周平翁二十五回忌の追悼式に列席するためであった。しかもこの度のプロミツソン訪問は恰かも二十五年目であ

る。訪日の旅はさておき、当サンパウロ州内の縁故深い土地を訪れるに、かくも永い歳月を経ていることに今更のように驚く。

美しく舗装された市街を想像しながら駅に降りた私の眼に映じたプロミツソンは、昔のままの姿であったことが却って懐かしく親しみがあつた。余りに久し振りの私の来訪に、旧知の人々は何れも意外の面持ちであつたが、中でも間崎民夫妻の懇篤な歓待をうけた事は感謝に耐えない。他にも数名の先輩にお会いしたが、パウリスタ新聞紙上で知つた亀井杜雁さんを訪ねて語り合うことが出来たのは嬉しかった。

上塚翁の追伸式は仏式の法要と中央寺院でのミサから成り、記念的催しにはノロエステ連合陸上競技会と、念腹先生を迎えて瓢骨忌俳句会があつた。それらについてはパウリスタ新聞の記事として掲載されるであろうから、私はプロミツソン日本文化会館で語つたそのままの感懐を次に述べてみたい。

私は今から三十七年前一九二二年に渡伯し、同年の九月に当地プロミツソンに参り、上塚周平氏のお世話になつたものであります。従つてプロミツソンは私にとってブラジルでの故郷であり、揺籃の地であります。殊に上塚周平氏は、私の恩師に等しく、本日の上塚翁二十五回忌の追悼式に臨み、昔日のことどもを偲んで眞に感慨深いものがあります。

一九二二年と云えば上塚氏が当地のイタコロミー植民地を建

設されて数年に過ぎない頃と思いますが、その開拓と新興の氣に満ちた植民地の中心であるボン・スセツソ区の上塚氏宅においてブラジルでの私の生活が始まったのであります。特に一九二二年九月七日のブラジル独立百周年の記念祝賀祭が上塚氏宅の前面の運動場で催されたことなどは懐かしい思い出であります。あの当時、上塚氏が温顔に微笑を浮かべて青少年の運動会を御覧になって居られた様子が眼に見えるようであります。私はブラジルに渡った直後の、最も感受性の強かった少年期を、上塚氏の許に過ごした関係上、上塚氏の人柄に学んだことは少なくありません。それは上塚氏の人的魅力というか、人格的感化というのが当たっているのでありましょう。

その後、私はボン・スセツソ区の続きであるピント区において二年ほど働きましたが、あの薄暗いカンテラの灯の下でポルトゲースを勉強したなどは今にして忘れることが出来ません。もし私がこのブラジルについて少しでも学んだむのがあるとするれば、その素地はプロミツソン時代に養い得たものであります。それは当地の風物を通し、また上塚氏初め他の先輩の方々の御指導によるものであります。

私は、ブラジルの歴史を作った人物、ブラジルの歴史に描かれる人物について興味をもっているところから、偶々サンタ・カタリナの開発史に不朽の名を止どめる博物学者、フリツ・ミューラーの伝記を学びましたが、彼と上塚周平翁の生涯に相

似る点があると思います。

フリツ・ミューラーはダーウインの学説研究の第一人者であり、十九世紀の傑出する博物学者でありながら栄誉栄華を求めることなく、ひたすらブラジルの博物調査に投じ、学界に貢献しつつ四十五年をブラジルに過しました。その間ヘルマン・ブルメナウの協力者としてサンタ・カタリナの開拓に当り、祖国ドイツを一度も訪れることなく、愛するブラジルの地に骨を埋めたところが上塚翁の人物と生涯を彷彿せしめます。上塚氏は日本での最高学府の出身でありながら、第一回移民を引卒してブラジルに渡られて、移民と共に辛苦困難を嘗め、しかして新進地帯ノロエステ線のプロミツソンにイタコロミー植民地を建設され、次いで奥ゴヤンベー植民地を開拓されました。しかも世の毀誉褒脛に捉われず、専ら後進のために道を拓き、日系コロニアの基礎を築かれました。而して自身の開拓地プロミツソンに永眠されたところに拓人、先駆者上塚周平翁の面目躍如たるものがあります。

私は今までに幾度か上塚翁の墓に詣でることを希いましたがその機会を得られませんでした。

今回幸いにして恩師上塚氏の墓前に、翁の冥福を祈り冥想の一と時を得たことは大いなる感謝であります。

(一九五九年七月)

移民随話

今から二十数年前にみた映画で、現世紀初めにアメリカ合衆国に渡ったアイルランド移民に取材したのがあった。当時は未だトーキーの揺籃期とて、技術的には今頃の映画ほどの完全さはなかったが、数十名の移民を乗せた汽船がニューヨーク港に近づく時に、甲板に居並ぶそれ等アイルランド移民が、遙か霧の中に立つ自由の女神像を望んで胸を躍らす場面が忘れ難い。特に物語りの主人公が、「おお希望の新天地」と一人言しながら眼を輝やかすところが印象的であった。

あの映画のよさは、仕組みとセットだけがものものしくて内容貧弱な近頃のアメリカ映画を凌駕するものがあつたと思う。元来がアメリカ合衆国とブラジルは移民立国であるから、南北の差こそあれ、移民として移住したものには共通的の移民心理がある。この移民の悩みや歓びの境涯と感情を巧みに描き出していたことで、あのアイルランド移民の映画はとてもよかった。

ところで、ニューヨーク港の自由の女神像であるが、あれほどアメリカへの新来者に、上陸に先立って希望と信頼感を与えるものはないであろう。

移民にとっては尚更である。

リオやサントス港にも、移民を象徴する記念像のようなものがあれば如何ほどか新来移民の気を強くするか知れない。リオ

のグワナバラ湾を望んで立つカブラルの銅像も、リオ・ブラン
コ記念塔も実に見事であり、又、サントスのボニファシオ三兄
弟、バルトロメウ・ローレンソ・デ・グスモン侶、詩人ビセン
テ・デ・カルヴァーリオの銅像は何れも立派な芸術品である
が、移民国のシンボルともいふべき記念塔があつて欲しい。

人工衛生や原子論からいえば記念塔の建立など凡そ無意味か
も知れないが、人間の感情は物理や数字で割り切れない。

この見地から、日本移民五十年祭委員会がコロニアの物故者
の慰霊塔の建設を決定したことは当を得たものといえる。これ
は本質的には慰霊塔であつても、「日本移民の碑」とか「日本
移民記念塔」とするのが適わしいかと思う。

天体宇宙の現象から見れば、人間一個の生命は地上から泡の
ように消え失せるに過ぎないが、せめてブラジルにおいての自
己の存在が、あの移民碑によつて記憶されるとすれば自ら慰め
られるものがある。この意味では文字通りの慰霊塔でもあ
る。

もしサンパウロのイビラプエラ公園に、日本移民の慰霊塔が
建てられるなれば、それを訪れる人が絶えぬであろう。

話が何となくしんみりしたが、私の工場の顧客のユダヤ人
で、祖国パレスチナから移民としてブラジルに渡ると前後して
その弟がアメリカ合衆国に移住したというのがある。その弟が
先日リオの兄を訪れ、三十余年振りの再会とかで大騒ぎしてい
るところに私が行き合わせたものである。彼等兄弟は移民のた

めに大いに気焰を挙げ、「この気持はお前等には解かるまい」とて当国生れの息子連に大見栄を張るのがおかしかった。

しかし、この二人の老いた兄弟の再会の歓こびの裏面には、一世移民の宿命的な寂しさが感知された。

世界を我が家とするユダヤ民にも、移民としての心情には他国人と変るところがない。

此処で話を変えるが、サンパウロにおいての昔の移民を偲ばせるものとして何が残されているのであろうか。おそらくビスコンデ・デ・パルナイバ街の曾ての移民収容所が唯一のものかも知れない。あの建物とても戦時中は航室技術学校に使用され、現在はサンパウロ州移植民局とされているが、予算不足のためか朽ちかけたまま放置されているのは惜しいものである。

次に、笠戸丸移民にとって、サンパウロでの思い出の建物にはムニシバル劇場がある。この市立劇場ほ、一九〇三年度のアルブケルケ・リンス州統領、アントニオ・シルバ・プラードの市長時代に起工されて、一九一一年度のワシントン・ルイスの市長時代に竣工した。

笠戸丸移民で耕地から飛び出てサンパウロに住み、ムニシバル劇場の建設工事にピントールとして働いた人がある。プロミツソンの間崎三三一氏などがその一人である。従ってあの市立劇場には笠戸丸移民と同じ年齢と歴史がある訳である。序でながら、笠戸丸移民のブラジルに到着した一九〇八年度の大統領は、ミナス出身のアフォンソ・モレーラ・ペンナであり、外

相は有名なりオ・ブランコ男爵こと、ジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニーヨスであった。更にサンパウロの州統領はジョルジ・チビリツサで、一九五七年物故した前大統領ワシントン・ルイスが司法長官であった。当時のサンパウロ市の人口は三十六万であったからこの半世紀に二百数十万の増加を見ている。

眩惑的膨脹とは将にその通りである。この中で日系の数がどれほどを占めるであろうか。それが今回のコロニア実態調査で明らかになるのである。

さて、ある時、在ブラジル四十年以上の古豪が数人集つての懐旧談に、珈琲耕地での苦労や夜逃げなどが主で、その人達がブラジルに着いた頃の当国の社会、政治、文化について知る人の皆無なのは意外であった。これでは、ブラジルに旧いだけを誇つても話にならない。そのために日本人の一世は働くばかりで彼等の生活態度に社会性がないと批評されるでなからうか。

実際問題として鍬をひきながらブラジル語を習得し、商売に忙殺されつつこの国の社会、政治、

文化の万般を学ぶのは容易でない。もっともこれは強ち日本移民に限ったことではないであろう。この点を考えても、日本移民五十年祭を期して、せめてブラジルの外国移民史だけでも完璧なもの出されることが望ましい。少しく余談になるが、現在私はブラジルの移民文化史を書くための参考資料を集めている。最近手に入れたものでは、エンリッケ・ドリャ・ヴァスコンセロスと、エドアルド・ブラードの著述がある。前者は前連邦移民局総務であり、後者はサンパウロの名門の出で歴史家として知られている。

エドアルド・ブラードは、一八五〇年にサンパウロに生れ、フランス遊学の経歴をもつが、彼が一八八九年にパリ国際博覧会に提出したフランス語の「ブラジルの外国移民」は貴重な文献となっている。これを基礎としてリオ・ブランコ外相が、同じくフランス語の *Grande Encyclopedie* を書き、ブラジルの外国移民について詳述している。これらが笠戸丸以前のブラジルの外国移民史を研究するには優れた文献であるが、割合に近年のものに正確な資料が少ない。殊に各国移民の文化的要素と、当国の文化面に及ぼした影響を説いて記述しているものが殆んどない有様である。あまつさえ資料によって数字的にまちまちであるのは閉口せざるを得ない。

移民随話が少し固苦しくなったが、移民五十周年を機会に、一世移民の回想をまとめるのも面白い。ところが、回想記とか追憶記といえはややもすればじめじめした愚痴話になり易いが、苦闘を通しての何等かの研究談を随筆風に書くのが理想かと思う。(一九五八年三月)

昔のカフェー店と珈琲貴族

今から二十数年前までのサンパウロに特異の存在をなしたものに繁華街のカフェー店がある。ある広大な店内に沢山の卓と椅子が配置され、それに陣取った客がシーカラ一杯二百レースのカフェーを飲みながら世間話に花を咲かせた悠長さは近頃は見られない。しかもその話題たるや大抵はロテリアとピシヨ賭けである。そして雑談に飽きた客はポケットを軽く叩くために、二百レースや四百レースのニッケル貨で支払いをして外に出る。時刻將に午後四時、連邦ロテリアの抽籤の結果発表を神妙な面つきで眺め、自分の買ったロテリアの当選していないのを諦め、又明日に期待を托して帰路につくという寸法である。このように定職がないにもかかわらず貧乏でもない不可思議な市民が、曾ってのサンパウロに如何に多かったことか。

当時はオニブスに乗るためのフィラ(人列)もなく、又電車とても大して満員ともならず、悠々

と腰かけて夕刊新聞の社会面でも読みながら我が家へ。善悪の

理論はさておき、昔日のサンパウロには如何にも移民地的な風情があった。

ところがビシヨ賭けが法度となり、サンパウロ名物の大きなカフェー店が姿を消し、その跡に立派な構えの既製服店が現われて、俸給取りの未収入を目当てに月賦販売などやるようになってからすっかり世智辛くなった。昨今見るカフェー店は大規模の資本組織によるもの、或いはアメリカ流の能率的な設備のものが多く、凡そカフェーを味わいつつ飲む気分は出ない。尤もそんな客の相手では営業が成り立たぬであろう。人混みの中に割込んで大急ぎでカフェーを飲み、外に出て気がついて見れば上衣にカフェーの染みがついている始末である。わけでもない今は、サンパウロの何処で飲むカフェーもまずく、本当にうまいカフェーを出すところは暁天の星ほどもないのである。殆んどは文字通りの口汚しと云う代物で、人と話しながら無意識に喉を通すに過ぎない。あまつさえ、北伯流れの色の浅黒い男や女が生温かいカフェーを注いでくれるのは興ざめである。こう考えにつけ昔が懐かしく、あの風味のよいカフェーをニツケル貨一枚で、ゆっくり飲めた時代が忘れ難い。他方、街でキロ買いうる焙煎珈琲にもイカサマものが多く、純粹珈琲と宣伝しているのに相当の不純物が混ぜられているから他は推して知るべしである。或る粉末珈琲の如きは、プロパガンダに莫大の費用を投じ、景品付きの販売政策をとっている。その賞品券を欲しさに大して上等でもないカフェーを求めるのが一般の主婦の心

理であろうか。むしろ品質本位の宣伝が永続性があると思うが必ずしもそれが大衆に受けにくいようである。

この点、私の家では田舎の親戚から時折焙煎珈琲を送って貰えるので、これこそ正銘の純粹珈琲を飲めることが感謝である。お蔭でこの数年来は珈琲を買ったことがない。

次はカフェーの煎じ方だが、この国に永年居る人でも案外よいカフェーを造るコツを知らない。

先ず濾過用の布袋のよく乾いていることが第一条件であり、湿気のある布袋を用いればそれだけでカフェーの味が落ちるとは、モジアナの某ファゼンデーロの説である。

これから話は奴隷時代に戻るが、昔のファゼンデーロは見晴らしのよい場所にカーザ・グランデ（耕主の邸宅）を設け、そのベランダで四囲の景色を眺めながら芳香高いカフェーを賞味するのが楽しみであり、又それを客人に振舞うのが自慢でもあった。多くのファゼンデーロは自家用として一粒選りの珈琲を奴隷に摘ませ、それを陰乾して臼でついたというからこれほど良質のものはないであろう。奴隷の無給労力によるために、どのような贅沢でも出来た訳である。

さて、北部のパラーに発したカフェー栽培は次第に南下してリオ州からミナス南部に入り、次いで、サンパウロ州のパライバ平原に移植されたのが十九世紀初期である。当時のファゼンデーロは、北伯のセニョール・ド・エンジュニーニョ（製糖工場主）と同様に、セニョール・ド・カフェーと呼ばれ豪奢

な生活をしたものである。皇帝ドン・ペード二世がパライバ平原の巡遊の折に、待従に命じて帽子や鏡にカフェーの枝葉を飾らせて耕主連に敬意を表したなどの逸話がある。その時のドン・ペードロの日く、『近い将来にカフェーは、ブラジルの経済を左右する大産業たるであろう』と。今から考えるに彼の眼識も相当のものである。事実パライバ平原のカフェ栽培は最高潮に達し、資産を積んだファゼンデーロの当然の要求として名誉を欲し貴族に成ることにつとめた。

ここに於いて貴族の称号を獲得し、セニョール・ド・カフェーからバロン・ド・カフェーに転ずる者を続出せしめた。つまり、セニョール・ド・カフェーでは単に沢山の奴隷を所有する耕主を思わせるのみで優れた風格の主の感じが出ない。そこで金力にものを云わせて貴族に列せんとした事は、一両無理からぬ欲望であった。それは貴族が巾を利かせた君主国の有難さであろう。特にドン・ペードロ二世の治世に多くの珈琲貴族が相次いで現われたが、当時にして授爵税の制度のあった事が面白い。しかし、ポルトガル本国からの名門や国家に対する勲功によって授爵されたものは其のノブレーザ又はフィダルガに属し、金による買収組は『カルタス・ノーブレス』の綽名で區別されていたものである。

又、政治に参与した功労者で折角の授爵を謝絶した人の相当あることを附記せねばならない。参考までに授爵税の標準価を示せば、侯爵一コント、伯爵八百ミルレース、子爵六百ミル

レース、男爵四百ミルレースであった。これらの授爵税が国庫収入の重要な一部をなしたことは勿論である。

金や権勢で如何とも出来なかったものである。しかし、五カ年に及んだパラグワイ戦争にブラジルが戦い抜いて勝利を占めたのは、珈琲産業と珈琲貴族の納税に負うところが大きい。

カフェーによって資産を得たファゼンデーロは、その後、子弟をヨーロッパに遊学せしめ、自身はフランスのパリーに観光旅行をする豪勢さであった。

その頃パリーでは (UN RICHE BRAZILIEN) という言葉が流行した程で、それはブラジル人の珈琲成金を意味するものであった。ところ珈琲耕主の中には、ポルトガル以来の生粋の貴族もあつたのは事実で、その代表的なものはリオ州のファゼンデーロとして有名な、ノーバ・フリブルゴ伯爵ことベルナルド・クレメンテ・ピントである。特に二代目ノーバ・フリブルゴ伯爵の生活は豪奢を極めたが、その邸宅が現在の大統領公邸カテテ宮の前身をなすものである。このノーバ・フリブルゴ伯爵の数多い親戚の大部分は貴族であり、又その過半数がバロン・ド・カフェーであった。

帝政最後の一八八九年度のブラジル全土の貴族の数を爵位別に挙げると、侯爵七、伯爵二〇、子爵五四、男爵四一六である。このように男爵の数が際立って多いのは、金力によるバロン・ド・カフェーを意味するものであろう。

時代の推移と共にパライバ平原の珈琲耕地は衰微し、新しい

珈琲地帯がカンビーナス、イツー方面に伸び、新手のファゼンデーロがどしどし出たが、それらの耕主には進歩的な理想象が多く、比較的自己の名誉慾に捉われるところがなかった。むしろ政治への関心をもち、子弟の教育に熱心であった。

そうした雰囲気に生え育ったのが、将来の第三大統領プルデント・デ・モラエスと、第四代大統領カンボス・サーレスである。この二人の逸材は珈琲貴族ならぬファゼンデーロの子息であった。彼等は農家の出身でありながらも奴隷解放を唱え且つ共和主義者であったのは、真心からブラジルの発展を希望したからである。又、後日にプルデンテ・デ・モラエスとカンボス・サーレスは確固たる珈琲政策の樹立に少なからず尽くしている。結局、良い経済政策は個人的名著よりは高度の愛国道義を根本とするものであらねばならない。

珈琲貴族が宏壮な邸宅に奴隷にかしづかれていた間は彼等個人の幸福はあったとしても、ブラジル国家の真の繁栄はなかったのである。

しからば現在の当国の社会情勢はどうであろうか。世界有数の珈琲産出国でありながら、庶民の大半はカフェーも滞足に飲めない。矢張り、余り昔ならぬ二十数年前の大きなカフェー店が、街の目抜きを占めていた頃がよかったような気がする。

ピアーダの妙味

サンパウロでの私の畏友先輩に、幾人かの座談の巧者がいる。その代表人物を挙げると、古野菊生、鈴木威、鈴木悌一、宮坂国人、山本喜誉司さんなどがある。他にもいることは確かだが急には頭にうかばない。

座談の巧者は別の意味ではユーモリストであり、それ等の人 が話術に長じているのはピアーダを取入れることがそのコツを なしているようである。

古野菊生さんはとうとうと話しまくる方ではないが、真面目な顔をして時にアツというようなピアーダを飛ばすことが上手だ。また古野さんは、ブラジルの隠語の研究でコロナの第一人者でもあるが、それなどが話の中にブラジルの面白さをもたせる一つの要素となっているかと思う。

鈴木さんはピアーダにかけてはコロナの著名の存在である。集会の席では門外不出のピアーダを披露して人々を煙に巻き、哄笑させて悦に入っている。

次に鈴木悌一さんと来ては、およそ道楽の極致を尽したかのような深淵さとウマサが話の中にある。彼が年齢の割合に老けて見られるのもその故であろう。田舎のオッサン連を説得する手際は相当のものだが、結局は彼の人と成りの然らしめるところだ。コロナ実態調査はけだし適材を得たものだ。それから少しく老人組では宮坂御大がいる。南銀の総元締めとして株主

総会や幹部行員を一堂に集めて一席つかうのが得意だ。宮坂さんの座談は彼なりの一つの型があり、上品なユーモリストとしての定評がある。これまた話し半かばにピアーダを入れることが上手だ。

山本喜誉司さんの話し方は場所柄と相手によって融通無碍、とくにモノゴトを円満にまとめる話術にかけてはこの人の右に出るものはない。それは頭の鋭さに加うるに政治的才能に長けるからだ、その腕の冴えを表面には見せない。適当にユーモアを配しながら話を進めるうまさは山本さん 独特のものと思う。この人もたしかにピアーダの巧者として一角を抜いている。

ところで、大武和三郎氏の葡和辞典にPIADAが冷かし、嘲弄となつているが、失礼ながらその何れも適確な訳語とは云い難い。これはヒナや小鳥の噂りの意味にもなるが、ブラジル人のいうピアーダは諧謔を盛った一口話又は落し話に当るのである。

当国人の話し上手とはきまつてピアーダのうまい人である。しかもピアーダには軽妙な面白さも味が湧く。

事業に成功して表面的に豊かな暮らしをするだけでは本当のブラジルの生活のよさが解らない。この国の山河風物に融けこむ境地になるには、先ず人を理解することから始まらねばならぬ。それが、それにはコトバの妙味を会得するのが肝要だ。そのコトバも読本式のものでなく、いわゆるピアーダを知る時に、一層

の面白さが出て来る。したがってピアードを話せないのもさることながら、ピアードを聞いて理解し得ないのは悲哀ですらある。

謹厳そのもののドン・ペードロ二世も、皇帝よりは私人としての家庭生活を好み、ピアードをこよなく愛したといわれる。

第二次大戦に英米の兵士が塹壕の中で弾雨を浴びながらピアードを語り合って笑う場面をよく映画に見るが、人はどのような緊張すべき時にもこの位の心の余裕をもちたいものである。悲壮そのものの気持でいるのが必ずしも能率的ではない。むしろ緊張を要する時ほど心のユトリを必要とするであろう。万策尽きて悩みぬいている時に或る人がピアードを発して人々を笑わせたために、偶然名案が出たなどの実例もある。

日系コロンビア人も、数名集つてはその話題が、カフェー相場やトマトの作柄を出ないのは情けない。わけでも外国人との交際にピアードは教養を意味し社交の武器でもある。とくにオクスフォード型の英国人があの鹿爪らしい顔つきで、話の中に上品なピアードを入れるのは立派な社交術である。

ここで話を少々外ずらすようだが、二十数年前に私が英国人の英語教師についてた時、その教師は会話にまくピアードを入れたものである。しかし辛うじて普通の英語会話をやる私にはピアードを入れるどころでなかったが、それにつとめたことがとてもよい会話の修練になった。ある時には私がピアードのつもりで話したのがピアードともならず、それが却って面白いとて

大笑いされたことがある。

五十年を経た日系コロニアも笑いの哲学などと理屈めいたこととでなくとも、明るい笑いをもつためにも、私共の生活の中にピアードを入れたいものである。

昨今は私共仲間の集会は相当多いが、一つ趣向を変えてユーモリストの集りでもやって大いにピアードを飛ばせるのも愉快であろう。そうした笑いの中からコロニア人の家庭生活と事業経営指針を得られるかも知れない。

リンドイア鉱泉の余徳

一九五七年十一月十三日のパウリスタ新聞に私は「鉱泉郷リンドイア」の拙文を書いたが、邦字紙に寄稿してあれほど反響のあつたことは嘗てない。モノを書いて反響があるとすれば概して悪評されるのが関の山で褒められることは殆んどなく、また暇をかけて文献や資料を漁って書き上げたものが必ずしも一般うけがしない。従って、骨を折って書いたものほどよい意味の反響がなくて張合いがない、とは。ペンを執る者の共通感かと思う。

この点、リンドニア紀行は偶然の手柄で、かなり世間の話題に上ったようである。これとても私の文章のよさが認められた

のではなく、その内容が病氣療養にふれていたもので人々の注目をひいたのであろう。折角描いた絵の芸術的価値よりは、カンバスと絵具代を計算されたようなものかも知れない。

それにしても、あのリンドイア紀行が新聞に載ってからは、毎日のように電話や書面で問合わせがあり、また見知らぬ人が来訪して何かと訊ねる始末。そのために拙宅は、健康相談所の観を呈した。

ある日には街を歩行中に度々呼びとめられてリンドイア鉱泉について問われるなど、私は恰かも名医のようにまつり上げられて却って閉口した。

しかしこれは笑いごとでなく、コロナにはそれほどに難病に苦しむ人の多いことを物語るものである。

一見健康そうな人で、中年以後ともなれば人知れず何かしら持病に悩んでいるらしく、あれこれと方法を尽くしたあげく、せめて鉱泉療法でもと考えるのであろうか。時には冷静な第三者には馬鹿げて見える療法に頼り、それに大金を投ずる人もあるが、永年の固疾不治の病いがふとして癒るなれば、と思いつむのが病人心理であろう。イカサマのクランデーロや〇〇師が登場する所以である。昨今は心理学応用の病氣治療法が多いが、これには立派な科学的根拠があるので、その専門医で名声を博しているのがある。

ところが、この精神分析を看板として怪しげな和製や伯製フ

ロイドが出現し、まぐれ当りでも病の癒る人があるや、その即製フロイドは半神的存在ともなる。尤もこれは強ち日系コロニアやブラジルだけの社会現象ではなく、他国の知識人の間にも見られるから不可解である。

凡そ病気と精神修養はつきもののように、病んだことが人間修業の動機となっている人も少なくない。曾つての頑固おやじも年老い、病体となってしみじみ人生を悟り、病気手当てのためには大金を惜しまない心境になっているのがコロニアの一面でもある。

結局は一世の病いも、コロニア苦闘史の所産に他ならなく、今日の礎を成した背後には過労による「持病」が潜在していたと云える。偶々経済と心の余裕が出来るに及んで「持病」が表面に現われ、その療養に懸命になっているのが老令の父母と孝行息子の婆であを。「パ紙」に私のリンドイア訪問記が出た時には恰かも先聾の福川薩然氏がリンドイアの湯治宿に居られた由。同氏が私に宛てた書面に日く、「私の病気養生のため、息子連が先日当地につれて来てくれました。只今パウリスタ新聞の貴方のリンドイアの記事を読み、実に同感であります云々。」私は内心福川氏はよい子息を持たれたと感服し、同時に失礼ながら蒲柳の質の見本のような福川氏は撰生家として知られるだけに、頑健を誇る人よりも造かに長寿を保たれるものと思つた。

さて近来は、休養を兼ねてこの鉱泉水地巡りをする人も増しつつあるのは、コロニアの物心両面の余裕の誕生として喜ばしいが、セーラ・ネダラやリンドイアはサンパウロ州内で距離的にも近いにもかかわらず比較的知られていなかったようである。

そのせいか、過ぐる日私がリンドイア紀行を書いてから同地を訪れる邦人が急に多くなったとは万更お世辞でもないらしい。リンドイアの医師某氏と某ホテル支配人が、私にあの新聞記事を是非葡訳して送って欲しい、と熱望するほどであった。こうなると、何だかりンドイア鉱泉のプロパガンダをするようだが、医者でもない私は単に感じたことを書いたに過ぎない。

ところで問題の鉱泉水療法だが、暇が充分あつて湯治場に永逗留の出来る人は別として、私のようにそれが許されないものはリンドイア鉱水の常用が適切かと思う。私には過去に自慢するほどの苦闘の経験もなく、立志伝の人物でもないのに、近頃は如何にも苦労人らしく胃酸欠乏を原因とする胃腸疾患に困っている。過ぐる年リンドイアを訪れてあの鉱水を飲み且つラジウム鉱水で場の洗浄をやったが、その効果顕著のようである。

そして約二年前からビン詰のリンドイア水を飲んでいられるも適量を規則的に飲むことが肝要で、何でも飲みさえすればよいのではない。食事の折に多量を飲んでも害こそあれ、大して効果はなく、むしろ空腹に飲むのがよい。このことはリンド

イアの医師の処方にも特に注意されている。

今年に入ってから私は薬用塩酸の補給もせず、養生法として毎朝冷水浴をし、家に在る間はつとめてリンドイア水を飲むが、便通もよく、食慾増進し、しかも消化不良のために不眠に悩むということもない。近頃では胃が自ら酸を分泌しているかにも感ぜられる。特に朝起床後、直ちに大コップ一杯のリンドイア水を飲むのが特効がある。

それから、リンドイア水にも三種類ほどあるが、イルモン・ス・カリエリ商会のものが最も著名であり、それも新鮮なものがより効き目のあることはいうまでもない。

私の宅では、イルモン・カリエリ商会に電話で注文して配達して貰って、絶えず新しい水を飲むるので好都合である。

私は家では時間的に書斎に居る方が多く、読書や書きものに熱中しているとつい「水」を飲むのを忘れて妻から叱られることが度々である。その折の妻のいうに、「胃ガンになって苦しむよりは水を飲む位は何ですか」と。私は胃ガンと聞くと世の中が暗くなつたかに感ぜられ、大きくうなずいて机上のコップの水をがぶりと飲む。

夜は就寝前、同じく枕頭にリンドイア水を置き、目の覚める毎にそれを飲むが、そのため小便を催し、度々起きるのは止むを得ない。

そんな起きてはよく眠れないだろう、と云われるが、これ

も習慣の問題で、夜半に二、三回起きても結構よく眠れるから面白い。何れにしても胃ガンになるよりはましである。

記念塔の美

「二つの銅像の歴史」

水爆や人工衛星の時代に、偉人傑物の銅像を建立してその遺徳を偲ぶのはおよそ野暮な話かも知れないが、数多くの建物にも勝さつて一つの銅像が都会に一段の美を添えている事実がある。

ローマ、ベルリン、ウイーンなどは銅像の都とまでいわれるが、ブラジルでも北伯の町やリオに見る銅像には実に美しいものがある。差当りサンパウロの日本人街の中心をなすリベルダーデ広場に、デオゴ・フェージェの銅像がなければ殺風景なものである。

私の好きな当国での代表的な銅像には、マラニヨンの詩人ゴンサルベス・デーアス、バイアの詩人カストロ・アルベス、カンピーナスの作曲家カルロス・ゴメスなどがある。他にも海の詩人といわれるサントスのビセンテ・デ・カルヴァーリオの銅像は、彼が思索する様を現わし実に印象的である。

外国での一、二の例を挙げてみるに、アメリカのワシントン

のリンコルン・メモリアルにあるリンコルンの冥想する像は、如何ほどか人々に感銘を与えるであろうか。これがロツケンロールを踊り狂うアメリカの一面でもある。またノールウエーの首都オスロに建つ文豪イプセンの銅像もこよなく芸術的である。

このように一つの都会を美しくするのは人々の心も豊かにすることであり、もしその銅像の人物が、優れた科学者、芸術家、政治家であれば、知的に成長期にある少年少女に及ぼす影響も大きいであろう。

戦前の日本やドイツにあったような英雄崇拜思想は排けるとしても、社会に多大の福祉をもたらした天才偉材の功績を帳消しにすることは無いと思う。現実主義、実利主義はある程度は肯定すべきだが、歴史的に由緒ある記念塔を取除いてその場所に野菜を作り、故人の遺続を称えるための胸像を設けるよりは貧民にパンを施すのが功德になるというのも味気のない話である。

さて記念塔に関連して思い出すのは、リオのプラッサ・チラデステスにあるドン・ペードロ一世の銅像である。リオでの数多い銅像の中で最も名高いのが、あの馬上のドン・ペードロの銅像だが、この広場の不潔なことは驚くばかりである。場所からして夕暮れともなれば、あの辺に怪しげな女性が現われて媚を売り、下層労働者が群をなしてフット・ボールや猥談に花を咲かすありさまである。この感じがサンパウロのルス公園に似

ている。

それから問題のドン・ペードロの銅像と来ては曾て一度も掃除もされたことのないような惨めさである。これではブラジル独立宣言者の英姿も興ざめといわざるを得ない。像一面が永年来のホコリにまみれ、青銅の錆がにじみ出ているのは、シダーデ・マラビリョーザの恥である。コバカバナ海岸がどんなに美しくとも、当国の初代皇帝の銅像がこの状態では話にならない。もつとも、あの銅像のホコリと緑青が歴史的記念であるというなればそれまでである。

しかし今では不潔の広場の称あるプラッサ・チラデンテスは、昔はプラッサ・コンスチイソンと呼ばれて美しい広場であったらしく、それなればこそあの場所がドン・ペードロの銅像建設地に選ばれたのであろう。ところであの銅像の除幕式の挙げられたのは一八六二年三月である。

このドン・ペードロの銅像建立案の起ったのは、ブラジル独立二年後の一八二四年で、翌一八二五年五月十一日のドン・ジョアン六世の誕生日を期して上院で問題の銅像建設が可決された。ついで銅像建設委員会が組織され、史家ハドック・ローポの提案によりの銅像凶案と模型を募集することになった。それは、ブラジル人と外国人を問わず広く芸術家に呼びかけたものである。当選模型には一コントの賞金が設定されたのを見ても、当時はこれが如何に大金であったかが想像される。

かくして、応募模型の中から候補に選ばれたのが「独立か死か」の記念塔原型作者であるジョアン・マシミアノ・マフラ（ブラジル人）と、ルイス・ジオルジ・バツブ（ドイツ人）、ルイ・ローシエ（フランス人）の三名であった。

更に厳密な審査の結果、ブラジル人ジョアン・マシミアノ・マフラの模型が当選し、フランス人の彫刻家ルイ・ローシエが作業監督としてフランスに赴き鑄造に着手したのが一八五五年十月である。それは銅像建設案が出てから三十一年目で、昔の人はひどく気長であったことが知られる。

その後この銅像がハーブル港から船積みされてリオに着荷したのが一八六一年十月であるから鑄造開始以来六年を要している。この銅像の完成が永びいたのは資金難の問題のためで、一つの銅像を設けるにすらも、かくも長い歳月と数十名の新聞人、政治家、芸術家を動員しているのである。

それが今では全く手入れもされずにあるのは、ブラジルの歴史を忘れているにも等しく真に遺憾である。

もう一つ皮肉な対象としては、ドン・ペードロ一世の建てられているのがチラデントス広場で、当のチラデントスの銅像が連邦議事堂の前面にあることである。

あながちリオだけでなく、サンパウロにもドン・ペードロの銅像と同じような例があるが、史的記念物はあたうる限り大切に保存したいものである。それが究極は愛国心にも通ずるであろう。映画館をのみ多く設けるのが必ずしも文化都市の誇りで

はない。

カリオカの由来

先年、日本からブラジルの工業視察にやって来Y氏とレストランでフェジョアーダ・カリオカを食べたことがある。Y氏はイカモノ食いでは人後に落ちないと自慢していたが、素焼の鍋の中から睫毛のついた豚の眼の周囲の皮が現われたのには少なからず驚いたらしい。ユーモリストのY氏は「こりゃ、豚の表情を食べているようだ」と云って大笑した。

フェジョアーダを食べ終ったY氏が「一体カリオカとは何のことかね」と質問してきたので、「カリオカとはリオ市民またはリオ生れの人です」と答えたら、「いや、そのことはリオで聞きましたよ。ボクの知りたいのはどういう理由でカリオカの名称が生れたか、その由来です。」Y氏の好奇心は私を窮地におとしこんだが、こんな質問をされては当のカリオカでも困ることだろう。

Y氏とフェジョアーダ・カリオカを食べたお蔭で私はカリオカとは何かという課題をもってそのレストランを出た。そこで当夜、家に帰ってから、二、三の文献を調べた結果、カリオカについておよそ次のような謂を知った。

航海家ゴンサイ・エコーリヨがリオを発見した当時からコレア・デ・サーがリオのゴヴェルナドールであった頃にはグワナラバ湾に注ぐ十七の小流があった。その一つがカリオカ川だ。水源をコルコヴアド山脈のパルメーラスに発し、・ラランジェーラス溪谷を経てから二条に分かれ、その一つがフラメンゴ海岸に流出し、他の一つがグロリアの修道院近くに注ぐが、これがリオ・カリオカと呼ばれたとある。

カリオカは土人語で『白人の家』を意味するとか。グワナバラ湾に注ぐ十七の流れの中でリオ・カリオカの水は水晶のように美しく、文字通りの甘露であったところから、リオ住民の貴重な飲料水とされた。これは東京の多摩川みたいなものだ。

ところで現在はカリオカの名前だけあって、川そのものは下水に混じって地下溝を流れている。サンパウロの歴史に名高いタマンドアチーの流れも昔はパウリスターノ（サンパウロ人）の飲料水であったのが同じく下水溝となり、臭気鼻をおう真黒な濁水と変り果ててチエテ川に注いでいるのと変りない。

カリオカの排水溝の海に注ぐ地点にその史的由来を刻んだ記念碑が建てられたが、それはほとんど人目をひかない。場所にあった。リオ市庁に保存されている古文書によると、カリオカ川が海に注ぐ地点に石造りの大きな建物があったので、これを見たタモヨ土人が『カリオカ』と呼んだことがカリオカの発端のようだ。この石造の家が誰によって建設されたかは明かでないが、一説にほリオの発見者ゴンサロ・コエーリヨといわれ

る。しかしそれは推察であって明確な記録はない。

十七世紀半ばにこの問題の右造りの家にペードロ・マルチン・ス・ナモラードが住んだことがあるとか。その場所が現在のトラベッサ・ウンベリーナで、カストン、ベルナルドがリオ市長時代は前述の記念碑が建てられた。

人文地理学者テオドーロ・サンバイオによればACARY・OCAは魚の群集する場所の意味でもあると。事実、昔のカリオカ川の海に注入する所には沢山の魚がいたらしく、土人はそれを経ると同時にカリオカの水も飲んだことだろう。つまり数多い流れの中で特にカリオカの水を土人が飲んだのはそれが良質であったことを物語るものである。

さてゴンサロ・コエーリョがリオを発見した後、初代ゴヴュルナドールのエスタシオ・デ・サーが初めて吸水場を設けたのがカリオカの川口サプカイトバである。これは後にグロリアと改称された。エスタシオ・デ・サーがリオ村を建設した地域はボン・デ・アスーカルの岩山の麓からカラ・デ・コンの一部分に過ぎなかった。ブラジル第三代総督メン・デ・サーがリオを訪れたのを機会にリオ村はモーロ・デ・カステロ（現在のエスプラナーダ・ド・カステロ）に向って拡大された。その頃から相当永い間リオ住民は奴隷にカリオカの水を運ばせたものだ。現在のルア・ド・カテテがその水運びの通路であったことを知る人は少ない。奴隷を所有しない人はカリオカの水をアグ

アデーロ（水売り）から買ったものである。このアグアデーロは初め土人であったのが次第に黒人に変っていった。アイレス・デ・サルダーニャがゴヴェルナドルとなってからカリオカの水を水道管によってサント・アントニオ広場に運ばれ、そこにシャファリス（給水場）がつくられたが、その水道設備が不完全のため折角の清水が汚水となって不衛生きわまるものであった。これが現在のカリオカ広場である。ゴームス・フレレのゴヴェルナドル時代に問題の水道管は取り壊された。何れにせよ、飲料水に困難を極めた当時のことであるからリオの住民にとってカリオカの水は実に貴重なものであった。従ってリオの人達は他からの訪問者に対して最大級の形容詞を用いてカリオカの水を自慢した。

特に他のカピタニアカリオを訪ねる者は、リオの住民が余りにカリオカの水を賞讃するので冷かし半分に「そらまたカリオカが始まったぞ」というのが動機となって、遂にはカリオカがリオ住民の代名詞となった。このようにカリオカはカリオカ川に始まり、タモヨ土人のつけた名前であることそれがリオ人の代名詞となったことを知った私は翌日Y氏にその旨を伝えて面目？ を施した。

ついでのことだが一八五三年にリオに『オ・カリオカ』という新聞が創刊された。それから画家ペードロ・アメリカがヨーロッパの遊学から帰った時『ア・カリオカ』という題名の大作

を発表した。それはカリオカの清流の岸に水の精を描いたものであった。それがギリシャの水の精の女神を表わしたので世間の非難的となった。何故かなればカリオカそのものが土民語であり、あまつさえ当時はジョゼ・デ・アレンカールを筆頭とするインデアニズモ（土人文学）の開花期であったからである。ペードロ・アメリコがどうして土人の女性を描かずにギリシャの女神を表わしたかが問題となったのである。それほど世評を騒がせたペードロ・アメリコの代表作『ア・カリオカ』も今では美術館の一触に放置されたまま人々から忘れられている。

ガルボン・ブエノ街の変遷

邦人商店街の中心であると同時に、サンパウロの盛り場の一つとなったガルボン・ブエノ街には他の場所に見られない趣きがある。そのオモムキとは、必ずしもこの街に漂う日本的な臭みではなく、日伯折衷と新旧共存の交響樂的な感じである。

移民五十年祭には三笠宮殿下の歓迎門が建てられたなどは、さすがにガルボン・ブエノ街なればこそであり、このルアがサンパウロの日系コロニアのヘソをなしたというのも過言でない。その歓迎門の下を多くのブラジル人が通っても何等の不自然さもない。コロニアの成長は日伯交錯の中に調和を生むまで

になったことを悟らされる。

ところで、およそ繁華街は真昼よりは夜景が美しくしいが、ガルボン・ブエノ街は街燈の点じられる頃の夕刻に一層の風情がある。

孫の数人もありそうな邦人老夫婦が、シネ・ニテロイでマチネーを見物しての帰りらしく、ゆるやかに歩を運ぶ傍のボールで、ヒゲを生やした若い二世の群が大声で雑談しているのは現実のコロニアの一面である。

またガルボンブエノ街に接続するリベルダーデ広場のバス発着所には幾つかの人列がつづき、その中にも沢山の日系人が見られる。今から二、三十年前との比較で、さてもこの一帯は著しく変ったものと思う。

遠い昔はさておき、戦前まではリベルダーデ広場の周囲に高層建築とてなく、従つてあの広場に立つデオゴ・アントニオ・フエージョの銅像を見下ろすことは出来なかつた。今ではサンパウロ日本文化協会の建物からもリベルダーデ広場が眼下に眺められる。このように人口三百万を越えたサンパウロは文字通りの立体都となりつつある。

何れにせよガルボン・ブエノ街の一带はひどく変つたが、一つ昔のまま変らないのは、帝政ブラジルの大政治家デオゴ・フエージョの銅像である。私がこの銅像によつて連想するのは東京上野の西郷隆盛の銅像だが、それは二つの銅像が似ていると

いうのではなく、デオゴ・フェージョと隆盛の人物、その数奇な生涯に相通ずるものがあるからである。

僧侶として教育され、重大な外交使命を帯びてポルトガルに使いし、後に政治に参与して上院議員、執政官となり、たまたま政府と意見相容れずして一八四二年の革命に参加し、その首班者として捕縛されたデオゴ・フェージョの運命は、西郷隆盛を彷彿せしめる。あの隆盛の侶呂でもなく軍人、政治家、学者の何れでもない茫洋たる線の太い感じが、デオゴ・フェージョに酷似している。

このデオゴ・フェージョの銅像の真近かに、日本から贈られた石燈籠が立てられて面白い対象なしている。

さて問題のガルボン・ブエノ街だが、このルアはいうまでもなくリベルダーで広場に発してタマンダレ街で終わっている。私が見た田舎からサンパウロに出て殆んど最初に住んだのがガルボン・ブエノ街であるから、このルアに対する印象は深い。

それは一九二七年であった。ガルボン・ブエノ街の七十九番（旧番号の）にあった「農業のブラジル社」に入社した私は以来数年をここで過ごした。当時このルアは、現世紀初めに建てられインペリオ型の住宅が軒をつらね、僅かに二、三の食料雑貨店があっただけである。際立って大きな建物としては、マテルニダーデ・マリア・ピアという産院があったのみで、他は何れも同じような型と大きさの住宅で、それに進歩性には乏しいが好人物という感じの人達が住んでいた。それらの暇人が夕暮

れには窓から顔を出して街行く人々を批評する悠長さであった。また街路樹の下に恋をささやく男女がよく眼についたが、その街路樹は近頃めっきり少なくなった今はアパート風の建物も見られるが、三十年前のガルボン・ブユノ街には二階建以上の高い建築はなく、近所の映画館ではサンパウロ広場のシネ・サンパウロがあつたに過ぎない。私のいた農ブ杜から二軒へだてて聖州義塾があつたが、その頃同塾には半田知雄、河合武雄、大原豊、浅見哲之助などの快男児がいた。

それから同じく農ブ杜の向いにブラジル人の歯科医の住宅があり、そこに幾人か娘がいたが、数年の間に殆んどが結婚して、末娘が一人となった時に私はファグンデス街に移転した。その末娘が奏でるピアノを聴きながら私は原稿書きをやったことが思い出される。

ブラジルの作曲家エンリツケ・オズワルドの作品を知つたのもその頃である。

またガルボン・ブエノ街には同仁会があり、このルアにつづくファグンデス街にはブラジル時報社と医師高岡専太郎氏の住宅があつた。更にサン・ジョアキン街には日伯新聞社が存在し、タマンダレ街に海興支社のあつたことを思えば、約三十余年前からガルボン・ブユノ街がサンパウロの日本人街の中心をなしていたともいえる。

映画館の生態

往年は活動写真といわれたのが映画となり、近来はシネマが世界共通語となった。

事実シネマは社会の活写図であり、動く写真であることに変わりなく、アメリカ流のムーヴィーとモーション・ピクチュアがぴったりする。しかし昔日との比較で製作技術が著しく進歩し、規模が大きくなったことは驚くばかりである。加うるに映画の内容を決するストーリーと監督、俳優の質的向上を挙げねばならない。特に昨今は各国の映画会社の競争のためか名映画が相次いで出される。

また映画祭や映画講演会の催しは最近十年來の傾向だが、戦前を思い併わせて感慨深いものがある。これは映画界の長足の発展であると同時に、ものすごい世智辛さを意味することであろう。

映画工業の先駆者セシル・デミール翁が、アメリカの半砂漠の一角、ハリウッドにシネマ撮影所を建設したのは遠い昔の話だが、以来彼が永い生涯を映画事業に捧げ、快心の巨作「十戒」を完成して長逝したことは映画界に一転換期をもたらしたかのようである。

それは世界の映画人に反省をうながすことでもある。ところで先日、人々の話題に上っているシネラマをみた。なるほど三つの映写機を用いるためか、写真を組み合わせるように画面に

薄い線をひくのがキズだが、これが従来のシネマスコープと異なるシネラマの実感を与える。ステルフォニコの立体音の出るのもその特徴であり、合唱音楽などはさながら本物を聴くに等しい。

これはシネマスコープの一段と進化したものらしいが撮影に特殊の装置を要するせいか、現在のところ劇モノには不向きで風景や記録映画が主である。従って、ヘンデルのオラトリオの「メシアー」の合唱や歌劇「アイーダ」の一場面、水郷ヴェニス、アメリカのフロリダ遊覧地、アイルランド風景などが現われる。最後にアメリカのワシントンを出しに景勝地の空路旅行を見せるが、これは本当に機上にあるかの錯覚を起さしめる。しかもソートレーキ市のモルモン派声楽団の合唱が入られていて、アメリカ礼讃の宣伝めいたところは多分にあるが、コロラドやヨセミテの大渓谷の真上を飛ぶ豪快さを味わうだけで入場料百クルゼイロの価値はある。このシネラマがどの程度に普及するかは別とし、今のところでは物珍らしい範囲に止どまるのでなからうか。ただあのシネラマの説明により映画の誕生から現在に至る史的変遷を知り得たのはよい参考となった。

結局シネラマの出現は、テレビへの対抗策の一つと想像されるが、この点日本映画にはアメリカや西欧映画に見られない特色というか持ち味がある。「羅生門」に初まり「地獄門」「無法松一生」が国際映画賞を獲得したのはそれを物語るであろう。

過日、松竹映画社の披露した「椅山節考」も日本的な感じと特徴を表わした優秀作品であることは疑いをいれない。特に歌舞伎情緒を取り入れた仕組みとセット、撮影技術は素晴らしい。しかしこの映画のテーマは、全体を通して少しの華やかさもないから知識階級には理解されるとしても大衆ウケがするかは疑問である。殊にアメリカやヨーロッパならぬ当国ではこの懸念がある。「無法松の一生」と「椅山節考」は何れも文化映画としても優れるものだが、テーマそのものが地味でアメリカ映画のような派手さが少しもないのは、当国の映画ファンを対象とするには一考を要するのではなからうか。

興味本位の見方からは外国人の作った日本映画、たとえばハリスと唐人お吉物語の「黒船」(英語の題名はバーベリアン・アンド・ゲーシヤ)などが一般に歓迎されたようである。あの映画は、当の日本人には史実と日本風俗をゆがめた不満はあるとしても、映画市場を広く外国に求めるにはそれに適わしい良心的な考察と工夫はあつて然るべしである。

テーマの深さと地味の一点張りが必ずしも文化交流に役立つ、営業的に実績を挙げるとは限らない。如何に崇高な道義感と人生哲理をテーマとしても画面が暗澹と悲惨に終始するだけでは、いわゆる大衆うけしない恐れがある。

ほかに最近見たものでは、日活映画の「勝利者」がある。これは優美なバレエと獣性の拳闘に対象的に取材し、その中に恋

愛の葛藤を描いたところ、テンポの早さなどはアメリカ的の感じがあつて秀作と思つた。せつかく中央区の一流映画館で上映したにもかかわらず割合に客入りがよくなかつたのは、宣伝の不充分と、まだ一般当国人の日本映画に対する興味薄によるのであろう。

従つて、ブラジル人に目標をおく場合はそれに適応する宣伝活動が必要である。それは強ち莫大な経費を投ずることではなく、映画批評家を始め報道関係との緊密さを保つことが考慮されねばならない。いかに日本ブームとはいえ、ブラジル人の日本映画熱は、アメリカ、フランス、イタリア映画との比較で、まだ遠く及ぶところでない。それだけに、当国での日本映画の将来性がある訳である。来年三月には、日本映画祭が催されると聞くが、それに先年サンパウロ四百年祭への出品映画「妻」のようなものを持込まれてはそれこそ災難である。また映画使節としては、たとえ少人数でも一流の俳優なり監督を派遣すべきである。この点は、アメリカの映画会社に学ぶものがあると思う。

優秀な俳優は、映画の多量生産のため矢つぎ早やに酷使するばかりでなく、折にふれて外国を訪問させ視野を広めしめることが肝要である。それが俳優自身を磨き、併わせて日本映画の宣伝ともなれば決して不生産的な企てではない。

他方当地サンパウロにも有志によつて映画研究会が生まれたことは時宜を得たものである。

いうまでもなく映画の文化的影響は想像外に大きい。

文化講演などと銘うって著名科学者や名士の講演会をやっても聴衆が幾何もない時に、映画披露会ともなれば超満員の盛況である。やはり娯楽そのものが教養に結びつく見地から映画が圧倒的に歓迎される所以であらう。

それなればこそ映画業者には、営利のみに捉われない責任と使命観が必要である。それが究極は業績を挙げることであると思う。

亡友と豚の足

アニヤンガバウーの旧お茶の水橋が夜のサンパウロに詩的情緒を添えていた頃である。ライト電力会社の近くにドイツ人経営のハイデルベルヒというレストランがあつた。

ある三月の夜、九時過ぎであつたと思うが三浦老（日伯新聞）と高野富継に私を加えての散歩途上そのレストランにシヨップを飲みに入った。私は元来が酒にかけてはさっぱり駄目なので、一杯のシヨップをもてあましていると、三浦老は氣を利かせてか、何か食べようといひ出した。そこで高野の提案で豚の足の料理が選ばれた。三浦老は得意になつてオースタリー人のボーイに何かドイツ語で話しかけていたが、その折に豚の足をアインスワインとかいったように聞こえた。それが相対性原理

のアイNSTラインに似ているので私の記憶に残ったわけである。

なるほどメーザ(食卓)に運ばれたのは、レポーリヨ (キヤベージ)をそえた豚の足の丸煮で、それが脂皮で包まれて毛が数本見えるのが如何にもグロテスクで食慾をそそるところか胸が悪くなるようであった。更によく観察すると、一對の足は蹄が除かれた関節から下の部分で、厳正に言えば豚の足でも脚でもなくスネというのが当たっているとも考えさせられた。それはなんのことはない、一本の丸い棒の恰好だが、少くとも涎を催すようなシロモノではない。高野は一人で悦に入りながら、「この味が解るようでないけりや本当の食通でないんだ。」

さすがの三浦老も一對の足の一本だけ食べてから、向う側に陣取った北欧系らしい二、三の美事な体格の女性の批評を始めた。ニッポン語とは重宝なものである。やがて私達がほろよい気嫌で帰る段取りになってから、ボーイが三浦老に訊ねるに、「どうでしたか、豚の足の味は。」

毒舌家の三浦老も微笑みをうかべて

「ん、うまかったよ、しかし自分等は夕食をすませてからやって来たので充分食べられなくて残念だが、この次には空腹で来て豚の足を四本も食べるよ」と。

高野はにやにや笑うだけであった。

私はサンパウロに出る以前、田舎で百姓をしていた時に近所の豚がバナナ畑の中を人糞を探し回っていたのを思い出し、あ

の足で糞を踏みつけたであろうなどと考えると、少しばかり食べた豚の足が胃につかえて吐き出しそうであった。お茶の水橋を通りながら高野はタバコをくゆらせて、「豚の足は食べつけるととても好きになるよ、人間は時にくだらないものに興味をもつように、イカモノを食べて胃の腑の悟りを開くんだね。」と喋っていた。

三浦老は軽くうなずいて感慨深げにサンパウロの夜景にみとれ、何か別のことを考えているようであった。そして三人はラルゴ・ダ・セーの街角のカフェー店で熱いカフェーを喫し、それぞれ家路に向って別れたのは十一時であった。

それから数カ月が過ぎ、私は豚の足を食べたことも忘れた。ところで或る日、行きつけのレストランで昼食をしていたら、ドイツ人らしい血色のよい中老紳士が私のすぐ横側のメーザにやって来た。彼は、おもむろに眼鏡を拭いてからメニューを見ていたが、ボーイに命じたのはどうやら豚の足のようであった。しかもその注文が振るっている。「前足でなく後足を持って来るように」と。

しかるにボーイが運んで来たのは前足らしく、件の中老紳士がしきりに苦情をいうのがおかしかった。

だがボーイは、「それは後足です」とて一歩もひかない。私は彼等の口論を聞きながら、好奇心からメニューを手にとって見れば、ペ・デ・ポルコというのはあるが、それには後足と前

足の区別はない。私が見るに皿の上の二本の足は、後足とも前足とも識別しかねるが、例の客は遂に解剖学の説明をして、これは後足でない、と主張する始末。それがいかにもドイツ人らしく融通性に乏しくて科学論をひっさげてボーイに詰問するのが面白い。

しまいにボーイもうなずかるを得なくなったので、その人の曰くに、

「話が解ればそれでよろしい、後足がなければ前足でもかまわない。前足を出して後足だといっているから腹が立つのだ」と。

彼は豚の足を食べながら私に話しかけるに、

「豚に限らずすべての動物の肉には前足より後足に味があります。もつともニワトリは二本足だが、これも足に本当のうまさがあります。特にニワトリの足には膠質が含まれているから栄養価は大したものです。」

次第に語る内に、その人はまさしくドイツ人で郷里はドレスデンの由、職業は医者とのこと、専門の解剖学で豚の足の論証をされてはたまらないと思った。

その後も時折そのドイツ人の医者と同時刻に、一緒にレストランで食事をしながらよく話合ったが、彼は奥さんに死なれてヤモメ暮しをしているとか、外で食事をする理由が解った。彼は話好きで豊富な話題をもっていた。彼は少しも遠慮なくあたりはばからず大声で話すので時には冷々することもあった。

それから数カ月を経て私は結婚して家庭をもったのでレスト

ランで昼食する必要がなく、約二年後の或る雨降りの日に、久しぶりにそのレストランに入った。昔から顔見知りのボーイが言うに、あのドイツ人の医者は数カ月前に脳溢血で逝くなったとのこと。

あの血色のよい精力絶倫の彼が死ぬとは、医者であった彼も自身の急病には勝てなかったのであろうか。

三浦老といい、ドイツ人の医師、それから高野富継の何れも冥土の人となったが、彼等はあの世でも毒舌や皮肉を飛ばせて笑っているであろう。

さて去る年、イビラプエラ公園の日本館で日本衣裳展が催された時に、タビをはいたモデル人形の足を見た義弟の子が、「これは、へ・デ・ポルコのようなだ」と。

私はそれを聞いてよく見ると、人形の足の恰好が、恰かも豚のヒズメの割れている感じに似ている。如何にも当国生れの子供らしい観察をするものと感心した。同時に豚の足と関連して三浦老や 高野富継、ドイツ人の医師のことを思い出した。

セマーナ・サンタの一日

今年も復活祭が間近となったが、当日はラジオ放送局がいつせいに宗教楽または宗教的な雰囲気をかもし出す音楽を放送す

る習わしがある。日語ラジオの放送プログラムは、どんなものが計画されているであろうか。さて騒然そのもののカルナヴァルが過ぎてから四旬祭の間は殆んど結婚式も挙げられず、復活祭を迎えてすべてが心機一転する。この意味からもカトリック数国、とくに当国では復活祭が宗教的にも商業的にも年度変りの観がある。

ところで問題の復活祭だが、一年を通じて一、二回より教会に顔を出さない私とても、この日には宗教音楽を聴きながら冥想のひと時をもつ神妙さがある。それがラジオでもレコードでもかまわない。

今年（一九五九年）はあたかもヘンデル逝去二百周年であるから世界的にヘンデルの宗教音楽が多く放送されるのではないかと想像される。

いかにも殊勝らしいことをいうようだが、復活祭当日は外出を避け、家で静かにオラトリオのレコードでも聴くのが好きである。その心境が祈りにも通ずると気ままな解釈を試してみる。一つには購入したのみで殆んど聴かない古典楽レコードもあるので、復活祭はそれをゆっくり鑑賞するにふさわしい。

しかし同じく古典音楽というなかでもバッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルトに傾倒する私は、それらの代表的なレコードを集めたいと思うが、希望する指揮者や楽団、演奏家などの諸条件の揃ったものが容易に手に入らない。どうやら本とレコードは探す時に見当らないで偶然に発見する場合が多いら

しい。しかもその見つけ出した折には皮肉にも金がない始末である。幸か不幸かレコード店に知合いのある私は、店主から「支払いは何時でもよいからお持ちなさい」と奨められるまま、つい買い過ぎて後悔することがたびたびある。

ところでレコードを購入しても、その全部を聴かずして数カ月も過ぎるのは稀でない。というのは、時間と気分的余裕が一致しないためである。わけでも二、三枚の組となっているレコードは完全に聴くに「二時間もかかるので僅かの時間を利用することが出来ない。いきおい多忙の時にはある楽章を聴くだけである。しかしバッハやヘンデルの巨作ともいべきオラトリオの類は、全部ここで考えられるのは、画家、彫刻家は究極はその至上芸術を宗教的なものに求めて寺院の壁画を描き、聖人の像を刻むが、作曲家も各々の晩年の作品には宗教音楽が多いようである。従って著名作曲家の殆んどが多少にかかわらずミサ曲やオラトリオを作曲していることが注目される。バッハ、ヘンデルはいうまでもなく、ハイドンやモーツァルトにも宗教的な作品が多く、歌劇を主とするヴェルデーの作品に「レキウム」の宗教音楽があるのは何を物語るであろうか。

ちかごろはクルゼイロの暴落のためレコードの輸入盤は余りに高価でなかなか購入できない。そこで内国製を求めることになるが、希望するレコードが手に入らない難点がある。しかるに先日、それこそ偶然だが二、三年探していたメンデルスゾーンのオラトリオ(ELIJAH)のレコードを発見し、矢も盾もたま

らず財布の底を叩いて購入した。それは内国盤ならぬ輸入盤で高価ではあったが買って悔いはない。

「エライジャー」はブラジルの「エリアース」だが、あのユダヤ系の富裕な商人の家庭に生れ育った温和な気質のメンデルソーンの作品とも思われぬ壮重雄麗な感じである。

このレコードも三枚から成っていて未だ全部を聴いていないが、復活祭にはゆっくり聴くのを楽しみにしている。

宗教音楽に関連して日系コロニアの文化面を見るに、圧倒的に勢力を占めているノド自慢が動機となって本格的のクラシック音楽や音楽に精進する人が次第に現われつつあるのは喜ばしい。

器楽はもちろんながら、もし日系コロニアに傑れた音楽団が組織されて、クリスマスや復活祭にそれを聴けるなれば、と想像をしてもみる。しかしこれは決して私の夢に終ることはないと思う。

リオ市の建設史

先日、首都移転の直前リオを訪れたが、ホテルの窓から望むグワナバラ湾には尽きない思い出があった。眼前のボン・デアスーカルは頂上は恰もヴェールを覆ったかに薄霞で包まれ、

対岸のニテロイは夢の町のように浮んでいた。この美しい湾内で過去に幾多の史的場面が展開されたが、今それを想起して懐しさを禁じ得ない。

ゴヤスの大平原に設けられた新首都ブラジリアの歴史はこれから始まるとして、旧都リオにはその創設から三百九十五年の歴史の流れがある。

いうまでもなく一七六三年にブラジルに太守制が布かれ、副王が任命されると同時にバイアからリオに首都が遷されたが、その後も二百年を経ている。

さてリオのグワナバラ湾が発見されたのはカブラルのブラジル発見から三百年後の一五〇三年である。それはポルトガルの航海家ゴンサロ・コエーリヨによつて発見された。

一五〇〇年にカブラルの探険隊がバイアの一角を発見してから、その新天地の所在を確認するべく数回に亘つてポルトガルの探険隊が繰出された一五〇二年にポルトガルを船出したゴンサ・コエーリヨは有名なフロレンスの航海家アメリカ・ヴェスプッチを伴つてブラジルのサン・ロツケ岬からラプラタ海域の探険をやつたが、その途次一五〇三年一月にグワナバラ湾を発見した。当日のグワナバラ湾は靄で覆われていたために川と間違えそれをリオ・デ・ジャネーロ（一月の川）と名付けたことは私共の常識でもある。

ところで毎年一月二十日に挙行されるリオ市の護神サン・セバスチオン祭とリオの創設日とを混合する人があるが、それは

誤りである。一月二十日はリオの開拓者並びに初代ゴヴェルナ
ドール（ガヴァナー）のエスタシオ・デ・サーがグワナバラ湾
に侵入したフランス軍と闘って勝利を占めた記念日であり、し
かもその日がサン・セバスチヨンの祭日であった関係からサ
ン・セバスチヨンがリオ市の護神と決定されたのである。従っ
て一月二十日はサン・セバスチヨンのお祭りであってリオ市の
創設日ではない。またリオ本来の名称もサン・セバスチヨン・
ド・リオ・デ・ジャネーロであることを附託せねばならない。
これからリオの創設史を綴るとして、一五〇三年には、単に
グワナバラ湾が発見されたに過ぎなく、実際のリオ市の建設はそ
れから六十一年後の一五六四年に着手されている。

而して一五六五年の三月一日が公けにリオ市の創設日と決定
された。リオにはプリメーロ・デ・マルソ（三月一日）という
ルア（街路）があるが、あれはリオ市の創設日を記念してつ
けられた名称である。又リオが開設当初からビーラ（村）でな
くしてシダーデ（町）の資格をもったことバイアのサルバ
ドールと同じである。リオが創設された一五六五年のポルトガ
ルは王ドン・セバスチヨンが幼年期であったので一つにはそれ
に敬意を表してサン・セバスチヨン・ド・リオ・デ・ジャネー
ロと命名された。

ポルトガルの王室がリオの開拓を初める以前、既にフランス
軍がグワナバラ湾の一部分を占領してそれを根拠としていた。

そこでポルトガル王室は貴族エスタシオ・デ・サーを初代ゴヴエルナドールとして派遣し、リオの防衛と市街の建設に当らしめた。

エスタシオ・デ・サーが一五六四年二月にリオに到着するや、直ちに要塞を築いてフランス軍への挑戦準備をしたが、彼は充分の戦闘力をもたなかったので如何なる作戦をなすべきかをサンパウロ村の創設者パーデレ・マノエル・ダ・ノブレガに相談した。エスタシオ・デ・サーはノブレガ神父と協議の結果、約一年間サン・ビセンチに止ったというから昔の戦争には悠長さがあつた。その間彼はサン・ビセンチの住民を説得し大勢の人々を連れてリオに戻り、戦争準備と共に市街の建設に乗出したのが一五六五年の二月であつた。その場所はボン・デ・アスーカルとカラ・デ・コンの中間に当る。かくして同年三月二十日を期し、公けにサン・セバスチオン・ド・リオ・デ・ジャネーロの創設日とされたのである。その後エスタシオ・デ・サーはブラジル軍を指揮してフランス軍と闘いながらゴヴエルナドールの役目をつとめた。

一五六七年の一月にはいよいよ総力を挙げてフランス軍に對抗し、ここに大激戦が交えられた。当時のブラジルの総督はエスタシオ・デ・サーの叔父メン・デ・サーであつた。

メン・デ・サーはバイアの軍隊を動員してこの闘いに参加し、多大の協力をしたことがブラジル軍の勝利の大きな原因となつている。他方マノエル・ダ・ノブレガ神父がフランス軍と

同盟を結んだタモヨ土人との和解工作に尽したことは史上名高い逸話である。

ブラジル軍とフランス軍の最後の決戦は一五六七年一月二十日で、その日の激戦でエスタシオ・デ・サーは致命的の戦傷をし、それから三十日後の二月二十日に逝去した。

このようにエスタシオ・デ・サーはリオの創設者であると同時にリオ防衛の犠牲となったのである。

フランス軍はグワナバラ湾の一つの大きな島を根拠地としていたが、それが現在のイリア・ド・ゴヴェルナドールである。戦闘に破れたフランス軍はカーボ・フリオ方面に逃亡し、その後もパウ・ブラジルの伐出しをやったが、後日ブラジル軍の追撃によって完全に放逐された。

以上の物語りにより、リオの開拓は先人開拓者の貴い犠牲と流血の歴史であることが知られる。

この点はサンパウロの創設史と異るところがない。

エスタシオ・デ・サーの死後はその後継としてサルバドール・コレーア・デ・サーが任命されたが、総督メン・デ・サーも約一ケ年リオに在ってリオ市街の建設に協力した。当時メン・デ・サーはリオ市街の中心をモーロ・デ・カステロ（現在のエスプラナーダ・ド・カステロ）に遷し其処にサン・セバスチヨンの要塞を築きまたジユズイッタ教団の神学枚を設立せしめた。それにつづいて農園や住宅地が現われたが、それは

現在のプライア・デ・フラメンゴからボタ・フォーゴにかけてである。

サルバドール・コレア・デ・サのリオのコヴェルナドールの任期は一五六八年から一五七一年の四年間であった。その間に彼は再度のフランス軍の襲来に備え、グワナバラ湾の曾てのフランス軍の根城である島に要塞と政庁を設けた。それ以来この島がイリア・ド・ゴヴェルナドールと呼ばれた。サルバドール・コレア・デ・サーは初代から子及び孫の三代に亘ってリオのゴヴェルナドールをつとめているので、さながらサルバドール・コレア家によって、リオが建設された観がある。十七世紀以後のリオの代表的ゴヴェルナドールにはフランシスコ・デ・メーロ・ヴァスコンセーロス、アントニオ・デ・アルブケルケ、ゴームス・フレレーレなどがある。何れにせよリオには旧都の香りと風格がある。あの多くの史蹟、特に旧寺院と修道院、旧学院、シャファリース（給水場）、記念像、植物園、公園、博物館などはリオならではの見られぬものである。

ブラジルの首都がリオからブラジリアに遷されても、昔ながら変らないのは青緑色の海とそれを囲む数十の岩山の美である。今後のリオは名実共に世界の文化都、観光都としての声価を發揮すべきである。

最近ブラジルは偉大な新聞人を失った。それはエスタード・デ・サンパウロ紙の重役プリニオ・パレット氏であるが、去る六月二十九日（一九五八年）の新聞に載った同氏の訃報に接して愕然とした。

フットボール試合のためにストックホルムに遠征したブラジル選手が、スエーデン選手との決勝戦で遂に優勝した報に人々が熱狂し、歓声を挙げている時に、曹操界の偉材プリニオ・パレットは忽然として他界した。

プリニオ・パレットは新聞人としては勿論、法学者、弁護士、著述家、政治家としても著名であり、また社会文化慈善事業に尽した功績は実に大きい。

私は二十余年来エスタード紙を見ているが、特にプリニオ・パレットの *BILHETES AVULSOS* (社会端評) を欠かさず読んで来た。それは法律問題を主とした社会、教育、道德に関連した短評で、氏独特の卓見と思想的深さに常に敬意を表していたが、同氏の死と共に今後あの高い風格の文章に接し得ないのが遺憾である。

プリニオ氏は体躯小柄で日本人に似た容貌であったせいか、私は初対面にして親しみを感じ、その後数回お会いするにつれてその人格を畏敬するまでになった。

同氏は一九二七年にジュリオ・メスチタ氏が逝去して以来、エスタード紙の重役として最近に至っているが、実際の社務の

主宰者はジュリオ・メスキータ・フィリヨでプリニオ氏は専ら自身の法律事務所に在って週一回の社会論説欄に執筆して来たものである。

私がサンパウロのボア・ビスタ街のプリニオ氏の事務所を訪れて同氏に初めて面接したのは、一九五二年の七月頃であった。

それはブラジルの古典書「オス・セルトンエス」の出版五十周年を記念した時で、エスタード紙は数回に亘ってその特集記事を掲載した。ところで、或る日のエスタード紙に「オス・セルトンエス」の著者エウクリーデス・ダ・クーニャについてのプリニオ氏の論説を見た私は、直接同氏に面会して何かと聴くことを熱望してお訪ねしたものである。

突然の私の来訪にプリニオ氏は意外の面持ちであったが、次第に語る間に年来の知己のように懇切に私の質問に答えられたのは感謝であった。当時のプリニオ氏は七十才位であったと思うが、二十台の若人のような頑刺さで血色のよい面に微笑をたたえ、鋭いほど活気のある眼を輝やかせて歯切れのよい口調で話されたことが第一印象として私の記憶にある。それは如何にも教養高く、不偏不党の主義理想を以て永年言論界に君臨した大元老という感じであった。

いうまでもなく同氏の専門は法学であるが、文学者としても名声高く、特に文芸批評家として聞こえている。多くの作家や著述家は著作を発表すると同時にプリニオ氏に一部を寄贈して高

評を仰ぐのを名拳とたようである。昔日のエスタード紙を始め
コレイオ・パウリスターノ、デアリオ・ダ・ノイテにはそれ等
書評がよく見られる。プリニオ氏の書評は、通り一遍の儀礼的
のものでなく、贈られた書を丹念に読破した上で忌憚なく且つ
誠意溢れる批評を加えている点に打たれるものがある。

さてプリニオ氏と語る間に、「オス・セルトンエス」の著者
エウクリーデス・ダ・クーニャと同氏が親友であった由、従う
て世間に知られていないエウクリーデスの人物についての一面
を聴き得たのは望外の幸であった。前世紀末、一八九六年のプ
ルデンテ・デ・モラエス大統領の折にバイアのセルトン地帯カ
ヌードスに邪教徒の叛乱が起り、その討伐に中央軍が派遣さ
れ、一年にも及んで悪戦苦闘の結果ようやくそれを鎮圧したこ
とは社会心理学の見地から北東ブラジルを学ぶ上の大きな問題
となった。当時軍属土木技師のエウリーデス・ダ・クーニャが
エスタード紙の特派員として戦乱の現地に向った。その頃のエ
ウクリーデスは三十才で、プリニオ氏はエスタード社への入社
間もなく、十四才の校正係りであった。

「オス・セルトンエス」はエスタード紙に連載されたエウク
リーデス・ダ・クーニャのカヌードス従軍の現地報告を収録し
たもので、これが後日サンパウロのサン・ジョゼ・ド・リオ・
パルドの鉄橋架設工事の監督中に脱稿されたことは周知の通り
である。エウクリーデスはプリニオ氏より十六才年長であった
のであたかも兄弟のような交わりをした。プリニオ・パレット

は一八八二年にカンピーナスに生れ、一九〇二年度にサンパウロ法科大学を卒業した。十四才の時にエスタード社に入社したのが新聞人としての発足であって以来五十余年を言論界に挺身しているから同氏の生涯こそ新聞人に終始したということが出来る。

一九三〇年のサンパウロ革命にブリニオ・パレットは司法長官となり、次いで一九三二年度の護憲革命直前にはジョアン・アルベルトの後継として執政官に任命されたが、就任を見ずして革命酣断となり、サンパウロ臨時政府の言論部長となった。

また一九四〇年にはゼツリオ政権のエスタード・ノーボ（新国家制）が樹立され、エスタード紙が反ゼツリオ政府の色彩を帯びるところから連邦政府の弾圧が及ぼんとした折にプリニオ・パレットは頑強にこれに対抗し、遂に監禁されたことがある。そこに厳正な国家観念と言論道に立脚した同氏の新聞人としての面目躍如たるものがある。

三年前、私が日本語に要訳した「オス・セルトンエス」を参してプリニオ氏に見せたところ、「何故全訳をやりませんか、この書こそブラジルの古典書として世界各国に紹介する価値がある」といわれた。

サンパウロのサンタ・カーザ（慈善病院）維持会会長であった同氏が先日語られるに、

「人は子供の頃から各々の分に応じて社会慈善事業に尽くす

公徳心が養わるべきです。よく世間では自分が金持ちになつたら社会事業に尽くすであろう、といいますが、それでは一生何ももせずして終らねばなりません。人が自己の本業に勤勉であるのは当然のことで、それ以外に少しでも社会の福祉のために働きたいものです。それが自身の心を豊かにし社会を明るくすることです。」といわれたのが数カ月前のことだが、今にして思えばあの時の同氏との面会が私にとって最後であった。

上塚周平氏とその周辺の人達

ノロエステのプロミツソンは、私にとってブラジルの生れで故郷に等しい。何故かという、今から三十五年前、忘れもしない八月三十一日の大正天皇の天長節に、ソロカバナのアーレー奥の珈琲耕地を飛び出した私は、一直線にノロエステの上塚周平氏を訪れ、それ以来約四年をプロミツソンに過ごしたからである。それはブラジルに着いて直後の事で、あの四年間に私は少しくポルトゲースを習得し、又農村生活を体験した事が、当国を知る上の基礎をなしている。従つてプロミツソンは私のためのカンテロー（苗床）であり、成長の地というのが適切であろう。特に忘れ難いのは、あのプロミツソン時代に知遇を得た人々であるが、その中には恩顧を受けた上塚氏を初めとして、物故された人も少なくない。今過ぎし日を回顧して感

慨深いものがある。

プロミツソン一帯は、ノロエステ特有の砂質の大きな波状地をなし、変化に乏しい風景であるが、私はその平凡な眺めに尽きない懐かしみを覚える。この頃は、私自身が中老になった故か折に触れて昔日を思い出し、プロミツソンの人達の面影が眼前に浮ぶのである。

故人では上塚周平氏の他に桑野延書、佐々木光太郎、村崎豊重氏などで、現存者は間崎三三一、鈴木貞次郎、鈴木季造、坂本律蔵、池戸忠次郎、飯田彦光、安良良耕、渡辺新太郎、野村秀膏氏等から受けた印象が深い。私が初めてプロミツソンの地を踏んだのは、一九二二年九月二日の午前九時過ぎであった。

パウルーでエートル・レグルー行きの切符を買ったつもりがプロミツソンとなっているので駅名の変ったことを知った。

上塚植民地の古い地名は土民語のイタコロミーで、土を盛り上げたブーグレの墳墓のあったことが思い浮かぶのである。

ひどく曲りくねったノロエステ鉄道を旅し、体一面に埃を浴びた私がプロミツソン駅に降りた時の胸中ほ悲壮そのものであった。そして約八キロの炎天下の道を歩いてボンスセツソ区に着いたのが午後三時頃であったかと思う。

当日ほ、ブラジル独立百周年祭直前の日曜日とて、上塚氏宅の前の広場で村の青年達が運動競技の練習をしているところであった。私は胸の高鳴るのを压さえて上塚氏宅に近づいたところ、ベランダで足のビショ掘りをやっていた百姓爺の風采の人

が上塚氏であるのに少なからず驚いた。私の脳裡には、指導者的な党首たる風格の上塚氏を措いていたからである。これがノロエステの邦人植民地の建設者として有名な人物であるかと暫し意外の感に打たれたのが、私の上塚氏から受けた偽らざる初印象である。しかしあの時の私に感に耐えなかったのは、上塚氏が私の意中をよく理解され、家族同様に自分のところに居るがよい、といわれたことであった。上塚氏に面会するまでの私の不安の念は去り、慈父に接するような気持になったものである。

当夜は特に客人待遇を受けて、離れの客間に寝かされた私は予期しない幸福感と興奮のために却ってよく睡れなかった。

上塚氏自らが私を客間に案内して言われるに、「若し夜半に小便がしたければわざわざ便所に行かなくとも此処からしてヨカですよ」とて窓口を指差したのがおかしかった。

あの頃の上塚氏宅には、常に数人のカマラダとも食客ともつかない独身青年がいた。つまり気が向けば働くという手合いで、時には上塚氏のビンガ（甘庶酒）飲みの相手をして天下を論じていたものである。この点は真面目に毎日欠かさず働いた方である私が、上塚氏宅で初めにやった仕事は山伐りである。それは山伐りの請負人夫が故意に伐り残した枯木と椰子（コケーロ）を伐ったのであるから、今考えるに相当の難労働であった。上塚氏は人好しのところがあるのでエンプレテローカ（コケーロ）を伐ったのであるから、今考えるに相当の難労働であらうまく欺され、「枯木を残したのは契約違反」とて怒ったが

どうにもならず、結局私等が枯木伐りをやらされたのである。

ところで、山伐りが終わってよいよ山焼きをやるうとする時に、奇遇というか私達の移民輸送監督であった沖周一郎氏が来訪され、同じく上塚氏の所で高等カマラダ（日雇人）として働くことになった。

あの当時は寺田、宋木、茨木、八重野、瀬尾などの独身者がいたが、沖氏と私が最も腕力に乏しく、除草をしても一番後におくれたものである。そして、疲れきっているにもかかわらず、風呂を浴びて夕食を済ませりや、数キロの夜道も遠しとせず、モツサ（娘）見に出かけたのであるから将に意気軒昂である。

帰路に満月を望みながら大声で詩を吟じたが、エンシヤーダ（鋏）を曳くのは半人前でも、朗吟には自信があったのである。しかし運命の皮肉か、あの頃の働き仲間の豪の者の殆んどが死んで、沖氏と私が健在であるとは。

さて家庭の人としての上塚氏を叙すと、同氏は何かしら満たされぬものがあつたらしく、それをピングでまぎらしているようであった。従つて、ピングを好んで飲むよりは、酒気なしでいられない中毒の状態にまで進んでいたのは痛々しいものがあった。

今一つは、上塚氏の将来の協力者として日本の郷里から呼寄せた令甥が病死されたために少なからず落胆して居られたかにも見えた。

上塚氏はピングを飲まない時は手を震わせながら話をしたものであるが、或る晩など寝につく前に私としみじみ語ったことがある。

上塚氏は熊本県の出身で、渡伯前に東京帝大の法科に学んだ人である。その頃の旧師である志賀重昂氏がブラジルに来られて上塚氏を訪れた時は、さすがの上塚氏も恰も子が親に甘えるようなところがあつた。私には上塚氏があれほど満足そうに見えたのは初めてであつた。

何しろ上塚氏はノロエステの重鎮だけに、絶えず来客があつた。或る時には、日本から経済視察団が前後して二度もやつて来たが、その都度上塚氏宅が宿舎で、私達高等カマラダは寝台をそれらの賓客に提供し、物置きに寝る始末であつた。上塚氏は冗談半分に、「こんな馬鹿らしいこはナカバイ、この頃は自分のカマ（寝台）に寝ることもナカタイ。」とこぼしたものである。

一度などは山科礼蔵氏を団長とする視察団が来訪し、上塚氏宅の前庭に歓迎のアーチを設け、一行の到着と同時に花火を揚げたところが一頭の馬が暴れ出して、視察団員の一人が落馬して大騒ぎを演じた。

プロミツソンの地元の人としては、コレゴ・アズールに立派な珈琲園を所有し、モダンな住宅を構えていた鈴木貞次郎氏が来訪されたこともあつたが、私などは見向きもされなかつ

た。

それから、間崎三三二氏が毛並みの美しくしい馬を走らせてくるのを度々見たが、あの頃の間崎氏は頑健そのものであった。又美貌の間崎夫人が楓爽と馬を飛ばせて来られた姿が未だに私の眼に見えるようである。

やがて馬の時代が過ぎ、フォードやシボレー車が出現するようになってプロミツソンも世智辛くなった感がある。

一九二三年頃であったかと思うが、上塚氏は、リンス奥のゴヤンベーに第二上塚植民地の建設準備に取りかかった。その協力者として故山板寛一氏がビリグイから時折上塚氏宅に来られたが、長身の同氏がおそろしく早足なので私が一緒に歩いて閉口したことがある。しかも山根氏は、食卓に向うと眼を威からせて話もせず早く食べる癖があった。

或る日の午後であったが、バウルーで謄写刷りの聖州新報を出していた香山六郎氏と山根寛一、竹内礼蔵などの快男児が勢揃い、それに私達高等カマラダが加わって気焰を挙げたことは、ノロエステの邦人植民地初まって以来の壮観であったかも知れない。

ピンガを相当飲んだ上塚氏は、笠戸丸移民を引連れて耕地で苦労したことや、サンパウロのコンデ街の話に熱中し、何かのはずみに椅子から転げ落ちて大笑いであった。

上塚氏は椅子の上にあぐらをかく癖があったからである。あの背をかがめて椅子に乗る上塚氏は実に瓢骨の名に適わしい。

それは、植民地の創設者とも思われない素朴な百姓爺の姿である。その後私はプロミツソンを去り、同じくノロエステのラウロ・ミューレル駅の一耕地で苦勞をし、サンパウロに出たのが一九二七年の三月である。而して「農業のブラジル」の雑誌社で働くようになってから上塚氏と文通をし、同氏の俳句を時々送って貰った。あの瓢骨の文字が私の限底に未だに残っている。

上塚氏は人から上塚翁と呼ばれるほど実際の年齢より遙かに老けていた。物質に恬淡であつた同氏は資産を積むことなくし世を去つたのは決して不幸ではないが、何かしら晩年の寂しさがあつたようである。

しかし、凡そ拓人の最後は上塚氏のそれに共通するものがあるのではなからうか。見方によっては、上塚氏が再び日本の郷里を訪れることなく、自身の開拓地プロミツソンに骨を埋めたことは其の幸福と言えるであらう。

ブラジル音楽の巨匠

ビラローボスを語る

一九五九年十一月十七日の午後四時、小雨煙るリオの文部省とイスチット・ナシヨナル・デ・ムジカ（ブラジル音楽院）

に半旗が掲げられた。それはブラジル楽壇の巨匠、世界的作曲家エトール・ビラローボスの訃を報じ弔意を表すものであった。

病氣静養のため一九五九年度のアメリカへの演奏指揮の旅行を中止したビラローボスは一時重態と伝えられたが、その後小康を得、危機を脱したのにもかかわらず、再び病状悪化し、リオのアラウジョ・ポルトアレグレ街五十六番の自宅で尿毒症のため七十二才を以て他界した。

リオを初め主要都の新聞は一斉に彼の写真と共にその死を報じたが『ブラジル音楽の妙調絶ゆ』の表題は全ブラジルはいうまでもなく、各国の音楽愛好家の悲しい話題となった。それほどに作曲家並びに楽団据揮者ビラローボスの名声は内外に聞こえ、その芸術の独創性は現代音楽の白眉といわれる。

文相クロビス・サルガードの提言によりビラローボスの遺骸は文部省のサロンに安置され、それを訪れる多くの市民の焼香を終えて葬儀となり、消防隊の先導する葬列が市立劇場の前を通過する時にブラジル交響楽団が葬送行進曲を奏した。その肅然たる室気の中に人々の感涙に咽ぶ声が聞こえ、ブラジルの生んだ偉大な作曲家の風貌を偲ばしめるものがあった。およそ現代のブラジルの芸術家でビラローボスほど世界に著名の存在をなしたものは少なく、彼はまさしく一世を風靡したといつて過言でない。

一五〇〇年のカブラルの探険隊によるブラジルの発見は史家や文学者によって叙されている。つまり文章によるブラジル発見はあらゆる面から語られているが、ビラローボスは彼独自の創造力をもって音律による『ブラジル発見』を完成した。それは黎明に初まるブラジルの山河、海浜の美を謳い、青空の下に果てしなく展げる緑の森林と小鳥の嘲りを表わし、土人の生活や動物を描く妙なる旋律の叙景詩であり、大自然のパノラマである。この純ブラジルの感覚の表現はビラローボスの特異性であり、彼によってブラジル音楽に独特の境が開拓された。卒直に評して彼の音楽には一つの型破りの感があつて万人好きのしない点がある。従つて彼の芸術についての批判は人各々によつて異なるが、その飽くなき精力と独創的才能には感服せざるを得ない。今、私は音楽辞典としての著名のGROVES'S DICTIONARY OF MUSIC AND MUSICIANSを播きながらそれに五ページに亘つて記載されるビラローボスの小伝と作品カタログを見て今更ながら彼の人物と芸術への感銘を新たにした。彼は少年期に作曲を始めて七十二年の生涯を閉じるまで五十余年の作曲生活をした驚異的人物である。殊に彼の青年と中年期の活躍が目覚ましい。その精力絶倫さと旺盛な創造力、大胆にして自由潤連な作風が彼の個性を表わしている。或る知名の音楽批評家がビラローボスをして二十世紀のモーツァルトと称讚したのは適評である。勿論ビラローボスの個性とモーツァルトの芸術的感覚は異なるが、あの尽きない源泉のような創作熱と驚く

べき多作家であったことが両者相似ている。ビラローボスの作品カタログを見てその膨大さに一驚を喫するが、ギター、ピアノの小曲からシンフォニーの巨作を合すれば八百数十に達するであろう。彼の作品にはブラジルの児童情緒やカリオカ（リオ市民）に取材したピアノフォルテ曲を初め、ブラジル奥地の住民と黒人をテーマとして民謡風の歌曲、歌劇、バレエ曲、合唱楽、教会音楽、室内管絃楽、ソナタ、ピアノ及びバイオリン協奏曲、シンフォニーなど夥しい多数ある。その中で代表作はバキアナス・ブラジレーラスと交響楽の要素を帯びるシヨロスである。それ等については後述するとしてビラローボスの生い立ちから述べることにする。

エートル・ビラローボスは一八八七年三月五日にリオ市に生れた。それは彼の父ラウル・ビラローボスが二十五才の時である。ラウル・ビラローボスはリオの帝室図書館に奉職する教養高い一市民であった。こうした教養人の常として経済的には恵まれなかったが、何時も彼と意気投合する友人がラウルの住居に集まり、ピアノ、バイオリン、チェロを弾き、芸術を論じて気焰を上げるのであった。このような雰囲気に生い育ったエートルが幼にして音楽に興味をもったことは不思議でない。

ところで或る日、ラウルが当時六才のエートルにビオラを買って与えたのが動機となってあの頃リオの巷間に流行を極めたカリオカの唄『シヨロス』を覚え、それに合せてビオラを弾

く器用さであった。しかし一八九九年、父ラウルが三十七才の若さで逝去し、母ノエミアは十二才のエトールを抱えて寡婦生活に入ることとなった。それにしても気丈の彼女は夫亡き後もエトールの教育には厳格そのものの態度をとった。他方、非凡の音楽的素質をもつエトールがその方面に自由奔放に伸び行く様を見る母ノエミアの心中には苦々しいものが感ぜられた。それは一人息子のエトールが通俗な街頭芸人となることを怖れたからである。そして立派な職業の医師にでもなることを切に希った。当のエトールは母の希望や理想には頓着なく、ひたむきに音楽を目指し、一九〇〇年に彼の最初の作曲であるギター独奏曲『パンケカ』を発表した。彼は暇があれば家を飛出して街頭に現われ、ブラジルの奥地を知るべく北部に向って出発した。この彼のブラジル各地の行脚は八年にも及んだ。中でもバリアの風物に学び、作曲の素材を得たことは少なくない。北部から中央部、更に南部への冒険旅行は彼をして眞実のブラジルを学ぶための絶好のものであった。彼の作品にブラジルの感じが滞っているのは青年時代の自由な旅を通して会得したものがその素地をなしているのである。特にセルタネージョ（カポクロや黒人系の奥地）の住民の生活とその風習、農村風景に深く愛着を感じたことが彼の愛土と祖国愛の根底をなしている。

この奥地旅行は数度に及んで行なわれたが旅からリオに戻った閑暇に彼はブラジル音準院に入り、プレソノ・ニーエンベル

グやフレデリコ・ナツシメントに師事して本格的な音楽指導を受けたがこれは短期で中絶した。彼がパラナの旅行中に旅費を使い尽してパラナグワの一工場で働きながら作曲などのエピソードがある。こうした自由とボヘミアンの放浪性が彼の作品に感知される。

彼が北部の諸州や中央部のミナス、南部パラナ、マット・グロソの旅にあつてはその土地のローカル・カラーをテーマとして画家のスケッチのように断片的に作曲したものが後日の代表作となっている。それ等の中で特に知られるのが『ダンサ・カラテリスチカス・アフリカーナス』『ダンサ・ドス・インジオス・メスチサス・ド・ブラジル』である。また大アマゾン をテーマとした作品には交響楽の『アマゾナス』『アグア・ド・アマゾナス』『ウマインジア・ビルジエン・エ・モッサ』などがある。彼の一九一二年度の主な作品には歌劇『エリザ』があり、同年初めての試みとしてバイオリンとピアノフォルテの幾つかのソナタ・ファンタジアを作曲した。

一九一三年にビラローボスが放浪の旅を断念してリオに住居を構えた時には大きな鞆一杯の作曲の草稿があつた。それは何れもブラジル奥地の土人や混血児、またはセルトンの風景を題材とするものであつた。彼がピアノ、バイオリン、チェロ、クラリネットの四重奏のほかにシンフォニーの作曲に乗出したのは一九一五年以後であり、特に『アマゾナス』はその巨作である。彼の交響楽は従来の古典楽と趣きを根本的に異にするとこ

る革命児的な性格が感ぜられる。彼がシンフォニー『アマゾナス』を発表したのは三十才の時である。当時彼の作品に対して轟々たる非難の声が起ったが、彼はそれをよい意味の刺戟として新しい芸術の分野開拓に情熱を燃やし、次々と作曲に没頭した。ビラローボスの作品は音楽でなくして粗暴なりと酷評されたのもその頃である。

ビラローボスの芸術の創造力は彼独自のもので巷の騒然たる雑音の中で僅か数時間で一つの作品をもにするなど是他の作曲家には見られないことかも知れない。或る時アメリカの新聞記者がビラローボスにニューヨークのマンハッタンの写真を示し、これによつて何か作曲するようにし、半ば好奇心から求めたところ二時間足らずで、『ニューヨーク・スカイライン』の表題の一曲を書き上げた逸話がある。ビラロボスが善悪何れの意味にも盛に世評に上っていた一九一六年度にリオを訪れたピアニストのアルツール・ルビンスタインはビラローボスのピアノフォルテ曲を公開の席で自ら弹奏し、口を極めて賞讃した。特にルビンスタインが後日好んで弾いたものにピアノフォルテ曲の『プロレ・デ・ベビー』がある。

自己の芸術を生むには傍若無人の態度を持したビラローボスとても印象楽派の権威ドビシーには深く敬服し、敬慶の念をもつてそれに学んだ。また彼の芸術には無意識の裡にもストラビンスキーの影響をうけているともいわれる。

一九二三年にビラローボスは最初のヨーロッパ旅行をした

が、パリイではラヴェールに学んだところが多大である。彼がヨーロッパから帰ってからは南米諸国の演奏指揮旅行をした。わけでも一九二七年頃のリオとサンパウロ両市での活動は彼の生涯を通しての最高潮であった。一九二九年に彼は再度のヨーロッパ旅行をし、パリイを根拠として各主要都で彼自身の作品の演奏指揮をして好評を博した。一九三〇年以後は前述の

BACHIAAS RASILEIRAS の作曲に全力を注いだ。

これはバッハの作品にブラジルの感覚を盛って編曲したプレリュード、フーガ、アリア、トカタ、ファンタジアなど数種の曲から成るものである。また彼は合唱楽の作曲とその指揮にも当ったが、一九三一年にはサンパウロで一万二千人の合唱の指揮をしたことがある。次いでリオで一千名の楽団と三万人の合唱を指揮し、一九四〇年と一九四一年のブラジル独立記念日には四万人の学生の合唱の指揮をしたなどは世界でも余り例を見ぬものである。

一九四二年にビラローボスはリオ音楽学校校長に推され、一九四三年にはニューヨーク大学からドクター・オブ・ミュージックの称号を贈られ、同年アメリカ各地で自作の演奏指揮をするなど、彼にとって栄光の年が相次いで訪れた。

一九四七、一九四八年に彼はヨーロッパの代表都を訪問したが、その間ロンドンのBBCで彼の作品の演奏指揮をして世界的作曲家の貫録を高めた。

往年、私はリオの市立劇場でビラローボスに会い数分間語ったことがある。その折に彼からうけた印象は実に澁刺たる若さということであった。彼はあの若さをもって彼独特のブラジル音楽を生み、芸術の研鑽に終始したのであろう。

洋上の誕生（小説）

これは二十余年前の移民船の航海情景に取材し、ブラジル領海での一つの誕生をテーマとして小説風に描いたものである。特に登場人物のモデルとてないが、全く架空のものでないことを前置きしたい。

作家でもない私が好奇心からこの一筋を綴ったが、これが移民五十周年を記念するコロニアの小さな明るい話題ともなれば幸いである。

昭和九年〇月〇日に神戸を出帆したブラジル向け移民船S丸が、最後の寄港地である南阿のケープ・タウンを出て航海をつづけること九日が過ぎていた。掲示板の船の所在からすれば、向う五日にしてリオ・デ・ジャネーロ入港の予定である。それは神戸を出てから五十一日目の午後で当時の南大西洋は薄寒さを感じさせ、恰も日本の晩秋の候であった。渡航者名籍によれば百八十一家族の移民に九名の自由渡航者を加え、総人員

九百二十一一人となっている。

幸い一人の病死者もなく、C室で四人の子供が麻疹に患った他には悪疫の発生も見ず、しかも何等の不祥事件も起らない至極平穩の航海であった。

甲板の此処彼処に組をつくった人々が、軟かい日光を浴びながら楽しそうに語り合っている。

『相変らず監督さんの元気な声が聞えてますね。』

といいながら一人の老人が上部の一等船室を見上げた。それは一番先端の一等室から移民輸送監督の松永亮平の快活な話し声が洩れていたからである。

ここで松永亮平の人物を紹介すると、彼は当時二十三才で、ブラジルへの再渡航に際し、移民輸送監督の任に当たったものである。

彼は東京外国語学校のスペイン語科に学んで、大正〇年に渡伯し、某珈琲耕地の通訳として数年過ごし、その後同志を得て植民地の建設に乗出したが、父の訃に接し、家庭事情のために日本の郷里を訪れたのであった。

その頃の松永を知る人は、誰しも彼が日本で結婚して再渡航することを想像したが、当の松永は意外にも独身のまま日本を発ったのである。

『では、トラホームの重患者は一人もないのですね、それは有難い、何しろ一人の死亡者も出さなかった上に、病人とトラホームの重患者がないという記録は、日本のブラジル移民史に

初めてのこともかも知れません。これもひとえにドクター初め衛生班の諸君のお陰です。』

ブラジル着を数日後に控えて最大の頭痛の種であるトラホームの重恩者のないことは、移民輸送監督の松永にとってこの上もない歓こびであった。

『ところで佐伯君、奥さんのことが心配だろうから、君は席を外して行って見給え。』

『いや、僕が居たとて何にも出来ないし、それに、側で見ているのはこちらがたまらんですよ。』

佐伯慎造は、日本の〇〇県立某女学校教師であった関係から、船中での教育班長をつとめていたが、妊娠中の妻美智子はその日に産気づいて、隔離病室に収容されていたのである。

佐伯と美智子は約一年前に結婚し、東京の〇〇〇〇会でブラジル渡航についての講習を受け、彼等夫婦に佐伯の実弟憲次を加えて家族を構成し、ブラジル移民として渡航中であった。

東京の〇〇〇〇会は、海外雄飛を志望する青年子女の指導講習所として、日本においての唯一の存在で、その特色は、宗教的雰囲気の中に海外事情を学ぶと共に精神練磨をなすことであった。

同会の会長〇〇氏は、海外発展のリーダーとしての権威で、南北米の旅をすること数回幾つかの著書がある。

『それもそうだね、ドクターIと看護婦さんが二人もついているのだから心配のこともあるまい。』

一見少しの屈托もない磊落家の佐伯の言を聞いて、それ以上に強いるところがなかった。

今監督の室に集っている十数名の人々はいづれも室長又は班長で、明後日の送別会の打合わせのためであった。

リオ入港の前日では余りに差し迫っているし、上陸の準備もあるので、特に二日前を送別会に選ぶことに相談がまとまったのである。

『検疫の予行練習は今までに七回もやりましたから、おそらく当日はまごつくことはないと思います。これからは夜更かしをして眼を充血させないように、監督さんからも注意して頂きたいのです。』と云うのは衛生班長の田川という中年の男であった。

『承知しました、それでは明後日の送別会も夜でなく午後にしましょう。』

夕刻になって少し風が加わり、船の左右動揺がし始めて、甲板で遊んでいた人達もそれぞれ船室に引返したようであった。

『もし船酔いしている人があるかどうか一巡りして来ます。』というのは若い助監督の杉谷であった。

『まさか今頃、船酔いでもあるまい、もう皆航海に馴れているから。しかしこれも義務だからすまんが一つ見て来てくれ給え。』

杉谷は急いでE室の方へ降りて行った。狭い船室（ハッチ）

一つ当り、約二十五家族が共同生活をしているから、日か経るにつれて風紀がみだれ不衛生ともなり勝ちであるが、今までの五十余日の航海によく秩序が保たれ、また重病者の出なかったのは不思議とも思われるほどであった。

下に降りた杉谷は、E室からD室に歩みを進めたが、船酔いに坤吟する人もなく、明後日の送別会のかくし芸の稽古などをする人々が見えて微笑ましかった。

ところで、D室の巡視を終えてC室に向う途中の隔離病室の前を通り過ぎようとする時に、杉谷の耳に突如産声が響いた。その瞬間、杉谷は何だか別世に居るような錯覚を感じた。空には曾て見ないほどの沢山の星がまたたいていた。やがて隔離病室の扉が開かれて看護婦が一人走り出るや、『おや吃驚した。誰かと思ったら杉谷さんね、わたしこれから佐伯さんへお知らせに行くのよ、赤ちゃんが生まれたから。』

船体の動揺は夕刻よりも激しくなったが、船中を歩き馴れている若い看護婦はすたすと佐伯の居る監督室へ駆けつけた。

『佐伯さん、お目出度う！』

『えッ、もう産れたですか、夜半かと思っていました。』

『ええ、とても安産でしたよ、そして男の子なの。』

乗船以来、余り丈夫でなかった妻のお産については少なからず心配していた佐伯は、看護婦の話がよく耳に入らぬほど上気していた。

お目出度う！　の言葉は十余名の人々の口から相次いで出さ

れたが、中でも人一倍喜こんだのは松永であった。

『これで本船の人口も一人増えて九百二十二人になった訳だ。それが佐伯君の長男でしかも日系ブラジル人の誕生だ。』
佐伯は日系ブラジル人という言葉を初めて聞いたが、それが他ならぬ自身の子のことなのである。松永は、ブラジルに向う船中、特にブラジル領海で生れた子は国籍上ブラジル人たることを佐伯に説明した。

『さあ佐伯君、早速奥さんの処へ行つて上げ給え、それから船長にも報らせて誕生証明を貰わなければならん、サントスに着いたら出生届けもせねばならんし。』

松永は一人ではしゃいでいるかに見えた。隔離病室の前に立止った佐伯は、中に入るのを暫く躊躇し、僅か数時間に起つた一つの誕生という神秘と厳粛さに興奮した。船医は満面に笑みをたたえて、どうもお目出度う、奥さんが思ったより御元気なので安心しましたよ』佐伯は口も利けずに船医の前に頭を下げらるばかりであった。

『本船がリオを経てサントス入港までに七日あるし、サントス碇泊中の五日を加えれば十二日になるから、その後数日をサントスの日本人旅館に過ごして、貴方の家族だけは後から配耕されるように、監督さんと相談してお取計い致しましょう。』佐伯は船医の厚意をしみじみ感謝した。

妻の横側には、誕生間もない嬰兒が看護婦に見守られていた。佐伯は、松永の云った日系ブラジル人の言葉を思い出して

我が子の顔を見つめ、自らに祈りたい心境になった。

それから二日を過ぎ、リオ入港の三日前に送別会が催される、ことになった。口宴が特に大きかったのでそれに仮舞台が設けられて、渡航者全員九百余名に船長と他の高級船員も出席し、司会者である園芸部長の指名によって岩田船長が初めに挨拶した。

『この度のブラジル航海は私にとって九回目ではありますが、総ての点で今回ほど平穩の旅をしたことはありません。

七千五官トンの本船に、千人近い人々が共同生活を営むのでありますから何かと不自由勝ちであります。皆さんがよく協力されて自治生活の実を挙げられたことは感服の他ありません。

わけでも、航海中に一人の死亡者もなく、流行病の発生も見なかつたことは、私の最も歎びとするところであります。これは、一つには松永氏の如き名監督を得たからでありましょう。

どうか皆様がブラジルに於きまして理想郷の建設に御健闘あらんことを願って止みません。』

岩田船長の後に、松永は人々の喝采を浴びながら壇上に立った。日頃は冗談に終始する彼も、今日は珍らしく緊張の面持ちであった。

『皆さん、待望のブラジルの地を踏むのも此処三日に迫りました。航海中は再渡伯の方々のお話を聴かれて、大体のブラジル事情はお解りになったであります。いよいよ現実のブ

ラジルが皆さんの前に展開されます。

皆さんがサントスに着かれましたならば、移民会社の指図によつてそれぞれ耕地に配耕されますが、ほとんど全部の耕地に日本人の契約者が居りますから、それ等の指導を受けることが出来ます。そして耕地での契約期間が終えれば、その後は自由に如何なる方面にも働けるのであります。

珈琲耕地の労働は決して生やさしいものでありませんが、およそブラジルに渡つた各国の移民にとつて耕地生活が登竜門をなしているのであります。

かくいう私も、七年間は耕地の通訳として働き、具に耕地生活を経験しました。現在は植民地の建設中でありますが、これもまた前途に相当の困難と犠牲のあることを覚悟して居ります。

御承知の通り、月本人のブラジル移民史は明治四十一年に始まりまして、過去二十数年の間に幾多の邦人が開拓の犠牲となつて逝れました。私がここで特に皆さんに強調したいのは、敬虔な態度で先人開拓者に学んで欲しい事であります。新来の眼には、ややもすれば旧移民の生活や事業経営が遅鈍にも映じ易いのでありますが、その中から何ものか教えられる点を見出して頂きたい。

今一つ大切なのは、近来ブラジルの朝野でしきりにいわれている日本移民の同化問題であります。これは簡単に諭せられません。私が主張する同化の根本義は、私共が日常生活を通して先づブラジルを学び、而して理解し、自らブラジルの山河風

物一切を愛し得る境地になることでもあります。

また積極的同化は先方のよきものを取入れて当方のよきものを先方に与えることであって、善悪の識別もなく漫然と移住国に融合するのが必ずしも同化ではありません。こうした事について話せば如何ほどでもありますが、余り長談義は禁物ですから私の挨拶はこの位にしておきます。

終りに一つ付け加えたいのは、一昨日、教育班長佐伯さんの奥さんが目出度く男児を出産された事であります。即ち本船の丸において、日本人を両親とする日系ブラジル人が誕生したことになります。しかも、私が名付け親となって洋一と命名されたことを併せて披露致します。この佐伯さんの長男洋一君が、長じて優れた日系ブラジル人たることを、皆さんと共に祈りたいと思います。』

万雷の相手に送られて松永は降壇し、それに次いでA室長の山科氏から、全員を代表しての感謝と別れの辞が述べられたが、人々の中から婦人のすすり泣きの声が聞こえるのであった。

それから船医と司厨長からの感想やら送別の言葉があり、その後は余興となって各室の芸達者の人々によってかくし芸が披露された。

松永も皆からは是非一芸と所望されたが、全く無芸の彼は、ブラジルの詩人カストロ・アルベスの作詩、奴隷の境涯を謳った

ものを朗読して、その意味を説明した。

『こんな席でしんみりした話をするのはへんですが、本船のS丸は小さいというても七千五百トンであります。昔ブラジルがアフリカから黒人奴隷を入れた当時は、僅か百トンか二百トンの帆船に六、七百人から九百人も積んだ記録すらあります。それ等の黒奴には衰弱と病いのために航海中に死んだものが沢山あります。

ところがブラジルの各方面に、人道上から奴隷制度への反対の声が起こり、次第に気運が高まって遂に奴隷解放の実施されたのが一八八八年であります。

その熱烈な奴隷解放論者の一人が先きに述べた詩人カストロ・アルベスであります。

ブラジルの、最も早く開発されたバイアがカストロ・アルベスの郷土であります。故略、バイアの首都サルバドールに彼の銅像が建てられています。皆さんが今後ブラジルをよく知るためにもこのような物語りを記憶して頂きたいのであります。』

常でない松永の真面目な話に、座が少しく白けた感があったので、助監督の杉谷が大声をはり上げて佐渡オケサを唄えば、人々はそれに和して笑声が一しきり起った。かくして和気あいあい裡に送別会の終ったのが夜九時頃であった。

それから二晩が過ぎて、いよいよ明朝リオ入港となった。

松永は助監督の杉谷を伴って、初めて隔離病室の佐伯夫妻を

見舞った。佐伯と妻の美智子が微笑みをうかべて松永に礼を述べ、

『私もブラジルへ着く以前に責任が増えましたよ。』

といえは、

『そうだね、ブラジルを養育する大きな責任があるね、しかし張合いのある楽しい責任だ。』

とて、松永は性来の屈托のなさそうな笑声を出した。佐伯夫妻の室を辞した松永は、しばらく甲板に立止って、遙かに明滅するカーボ・フリオの燈台の灯を望んだ。そして彼は、過ぎし五十余日の航海を思い、且つ移民輸送監督の責任を無事に果し得たことをひそかに感謝した。

ブラジル史話 風物記

カボクロの感覚

進歩性はないが平和の象徴

在伯三十八年、いうところの先駆移民ではないが古いことではひげをとらない私は、マカコ・ベリーヨ（古猿）の仲間入りが出来そうである。それは一面カボクロ化することであり、善悪いづれの意味にも同化の一現象でもある。しかし、このカボクロの感覚こそ最もブラジルのなものに通ずるかも知れない。

そのブラジルのものとは、文明の先端に行くテレビやシネラマ、ジェット旅客機ではなく、当国の特異色ともいうべき風土俗謡 (Aspectos Felicioricos) の感じと味わいを如実に現わしたものである。思いつくままを挙げると、カボクロ、カイピーラ、ジャンガデーロ、エンジェーニョ、ピングア、ボイアデーロ、サン・ジョアン祭、ガリンペーロ、パパガイオ、アグレガード、ヴァケーロ、カーロ・デ・ボイ、アグアデーロ、ムシユンゴ、モカンボ、シユラスコ、シャルケアーダ、カイサーラなどがある。

ほかにもまだ沢山あるが、それらを地域的に北部、北東部、

東部、中央部、南部に分けて記述すれば、面白いものが出来そうである。日系コロニアへのペン奉仕というては僭越だが、本紙（サンパウロ新聞）と協力のつもりで『ブラジルのなもの』についてこれから時々執筆してみたい。それを後に一括して出版すれば、日本からの新来者のブラジルを識る一助にもなる、と慾の深いことを考える。

まず初めにブラジルの土人に次ぐ先住土着民であり、多くのバンデランテの祖先であるマメルコ（白人と土人の混血児）に敬意を表わす意味でカボクロをテーマとして語りたい。ところでカボクロを叙すには人類、社会学、文化、文学的の見方があるが、ここではその何れにも偏さない風物誌的な読みものとしてペンを進めることにする。

日曜の朝、庭の樹間から洩れこむ陽光を浴びながら珈琲をのんでラジオのスイッチを入れると、聞きなれたアナウンサーの声でカフェ・カボクロの宣伝文句が出てくる。

『エ・タ・カフエズイーニョ・ボン』

これはカイピーラ語というが、代表的なカボクロ語を表わしたもので、案外大衆ウケがするらしい。これが宣伝についての庶民心理のねらいどころであろう。たしかに神経を酷使する都会人には、カボクロの語を聞くだに精神の憩いともなる。

私は珈琲をのみながら、古びた銅銭色の顔に皺を刻んだ遅鈍そのもののカボタロの容貌を描き、アルメーダ・ジュニオール

の麗筆になるカイピーラの絵を連想した。

地理、人類学者テオドーロ・サンパイオの言によれば、カボクロはツピー語のCa?boeの『山野から来たれるもの』を意味する慣習語であって科学上の術語ではない。またカボクロは『親愛なる者』の代名詞でもある。

事実カボクロには概して進歩性はないが平和の象徴といわれるほど鬪争を好まない。割木とサペ、練土壁の粗野な茅屋に起臥し、小面積の土地にミリーヨ、マンヂョカ、フエージョン、バタタ・ドーセ、バナナを作り、数羽のニワトリを飼って、金はなくとも食べるにコト欠かない。朝夕は天を仰いで氣象観測をし、病気ともなれば適宜に薬草療法を用いる。もし同族に困窮する者があれば彼等は挙って労力奉仕により援助する。これはムチロンという相互扶助の制度であり、共存共栄の精神である。つまり彼等には金融機関や生活安全保障は無用の長物である。アマゾン上流のカボクロには土人と同じく採集狩猟の原始生活をしているのが多い。彼等には名誉心も一躍巨富を積む野望もなく、一日十四時間の睡眠をとり、年令を数えることなく暮すのが理想である。そのせいかカボクロには九十才、百才などの長寿者が稀でなく、彼等の社会こそ全く別天境である。終日眼の色をかえて駆け廻る都会人にカボクロの生活は皮肉な対象といわざるを得ない。十九世紀を通して外国の著名科学者や旅行家がブラジルを訪れたが、それ等の旅行記には、必ずブラジルの住民としてのカボクロ生活が綴られている。その何れを

読んでも興味深く、現代人の参考となる点が多い。

さてカボクロは当国の人口構成に重要な役割をなし、現在ではブラジル全土に分布するが、都市よりは糖業地、農牧社会に多いことはいうまでもない。カボクロはセルタネージョ（奥地住民）または土着民の同義語であるが、人類学的には土人でも黒人でもなく、白人と黒人の混血児でもない。厳正にいえばカボクロには二つの型がある。その一つは白人男性と土人女性の混血児と、他の一つは土人男性と黒人女性の混血系である。しかし率において前者の方が多く、体質的にも智能的にも優れているのは当然である。またカボクロは類型的にパルド、クリポカ、クリオーロ、カフーズ、タプイオなどに分けられるが、学者によってその学説論証と分類法が必ずしも一致しないところにブラジル人類学研究的の複雑さがある。今では白人と土人、土人と黒人の混血原型の他にそれ等の数代に亘る雑婚による子孫が多く、従って人類学上の分類は煩雑を極める。ましてや土人各々の族を論ずるにおいてである。人類学が専門でない私が、うっかりこの問題にふれると泥沼に足をはめこんだ結果になる怖れがあるから、この辺で止めるのが無難であろう。

今度は統計学的にカボクロを述べるとして、そもカボクロの発生地は北東部からアマゾンにかけてであるが、ほとんど雑婚の影響をうけない典型的カボクロ（パルド）は特にアマゾン人口の主要部分を占める。

一九四〇年度の人口調査では、アマゾン全体のカボクロは四

十八パーセント、白人四十パーセント、黒人八パーセント、他の四パーセントが雑となっている。この中に日本人が入っているであろう。更にアマゾン盆地のみではカボクロが六十パーセント、パラ州では四十六パーセント、アクレ直轄区では三十パーセントを示している。

アマゾン、パラ州以南の諸州のカボクロは夥しく雑婚の影響をうけている関係から、原型カボクロの研究は不可能に近い。しかし同じくアマゾンのカボクロという中でも上流地帯のリオ・ブランコ、ソリモンエス、リオ・ネグロと中流地帯のマザーラ、タパジヨス、下流地帯のトカチンス、マラジヨ島ではそれぞれカボクロの骨格風貌に差があり、生活様式も一様でない。

いづれにせよアマゾンの大部分のカボクロは耕作よりは採集狩猟と漁撈によって生活をし、勝れたカノエーロ（丸木舟の漕縦者）であることは、南部のカボクロと異なる。

今や世の中は総ての面に超モダーンの抽象派的の動きが見られるが、その中にカボクロが時代錯誤の存在をなすこそブラジルの的といえるであろう。

しかもカボクロはカボクロなりに生きて行くところに理論で解ききれないブラジルの面白さがある。カボクロになり切っても悲哀だが、カボクロの感覚に磨きをかけ、進歩性をもたせる時に其のブラジルのよさがあるのではあるまいか。

サン・フランシスコ河奇蹟

ボン・ジュズス・ダ・ラパ

ボン・ジュズス・ダ・ラパは

誰の願いも拒否しない

貧者も富めるものも

罪なきものも罪人にも

これはサン・フランシスコ河の奇蹟といわれるボン・ジュズス・ダ・ラパに祈願するためにはわざわざ遠隔地から彼の地を訪れる参詣者が口ずさむボン・ジェズス讃仰の歌の一節である。

バイアには二つの大きな宗教祭りがあるが、その一つはアルバドールのセニョール・ド・ボン・フィン祭であり、他の一つはこれから語るボン・ジェズス・ダ・ラパのお祭りである。

およそ総ての宗教には科学や理翰を超越する半ば狂信的なものがあり、事実それによつて不治の病いが癒やされ、また永年の望みが叶えられたなどの話を聞くことがある。ブラジルではノッサ・セニョーラ・アパレシーダを初め幾つかのそうした信仰の奇蹟ともいうものがある。

神様に等級をつけては失礼だが、サン・フランシスコのボン・ジュズス・ダ・ラパは参詣人の多いことではブラジル全土の第二位か第三位を占めるかと思われる。

「エストアード・デ・サンパウロ」の少壮記者ルーベンス・ロドリゲス・ドス・サントスが二カ月余に亘ってピラボラを振り出しに、サン・フランシスコ河を航下しながらあの流域の盆地（ヴァーレ・ド・サン・フランシスコ）を視察した記事が同紙に連載されたのを、興味深く読んだ。

ブラジルの人類社会、地理、経済学の研究のため、サン・フランシスコ地帯はぜひ学ばねばならぬものだが、これが案外当のブラジル人にも知られていない。サン・フランシスコ河は福音の河といわれるだけにヨルダンやナイルにも似て、その流域の畢魅地を潤おし、住民に与える利益には計り知れないものがある。

地理的にみて、サン・フランシスコ河はその上流をミナスのギア・ローペン郡のカナストラ山脈に発して、北部に向ってゆるやかに進路をとり、パウロ・アフォンソの岩礁と懸崖を経、更に東部を横断して大西洋に注いでいる。その流れはゴヤスの大平原とミナスのデアマンチーナの原野を悠然と眺める如く、全長三千キロ、メートル、俗にサン・フランシスコ盆地といわれる面積は七十万キロメートルである。またこの河はミナス、バイア、ベルナンブーコ、アラゴアス、セルジッペの五州にわたって流れ、その流域盆地に所在する都市と農村の人口は五百万に達する。

さてサン・フランシスコ河の地理的叙述はこの位にとどめ、本論のボン・ジユズス・ダ・ラパ（ボン・ジユズスの洞窟）に

筆を進めよう。

サン・フランシスコ河の流域に、沢山の石灰質の岩山や断層のあることは有名だが、その科学的調査を実地にしたのが十九世紀末にブラジルを訪れたドイツ人の博物学者フリーデリヒ・フォン・マルチュースとその協力者スピックス並びにアメリカ人の地理学者オルパイル・ダービーである。

サン・フランシスコの石灰層は何れも夥しく大きく、あるものは川床からその沿岸数キロメートルも続き、硬質で暗黒色の岩層が露出する様はまさしく偉観である。

しかし、これを自然界の絶景として眺めるには美しいが、もし企業家が投資の対象とし、セメント工業を頭に描くなればその感じは異なるであろう。

天然資源の開発という経済的見地からは、サン・フランシスコの石灰層を放置するのはモツタイないが、もし彼処に大がかりなセメント工業でも起されるなれば天与の絶景が破壊されるかも知れない。ブラジルが生んだ著名の地質学者モラエス・レーゴの学説では、サン・フランシスコの石灰層はシルレア紀の地殻変動によって形成されたものとされている。中でも特に知られるのがボン・ジェズスの洞窟である。この洞窟はブラジルばかりでなく、世界の地質学者の研究題材ともなっているが、その所在点は南緯一三・一五度、西経四三・二五度である。

サン・フランシスコの石灰地帯は、ボン・ジェズス・ダ・ラパから下流のカリニャーニャヤ、またはシケシケを経てジャコ

ピナに及んでいる。この地域はいうまでもなくバイアだが、ミナスではマキネ或いはラゴアサンタの石灰質洞清が奇景美において名高い。このラゴア・サンタによって連想されるのは、五十余年の生涯をあの一帯の地質、考古学の研究に捧げたデンマーク生れの科学者ピーター・ルンドである。

ボン・ジエズス・ダ・ラパはサン・フランシスコ盆地の質朴な住民の信仰的であり、その敬虔な祈りとボン・ジエズス祭は彼等の伝統的風習となっている。

ボン・ジエズス・ダ・ラパはサン・フランシスコ河の奇蹟といわれるだけに、その奇景は神のなせる業というほかはない。永年の水蝕のために常山のみが河岸に吃立し、さながらゴシック建築の趣きを呈し、天然の大寺院の観がある。

純朴なサン・フランシスコ盆地の農民はその絶景を望んで神の天地創造の感にうたれ、自ら祈りを捧げる心境になるという。地理人類学者テオドロ・サンパイオの曰くに、ボン・ジエズス・ダ・ラパはインドのパゴダ建築を思わせ、卓絶する天為の神堂であると。この洞窟は黒色なりにも少しく灰色を帯びる石灰岩から成っている。

地質学者オルバイル・ダービーがあの一帯の石灰山の調査をなしたのは一八八〇年の頃といわれる。ボン・ジエズスの最大の石灰岩には周囲千八百メートル、巾四百メートルに高さ九十メートルのものがある。

またこの洞窟の周囲にはピラミッドや教会の尖塔、鋸の歯、

或いはサボテンに似る形状の巨岩が所々に聳え、日本での妙義山をほうふつせしめる。しかもその背後に大平原がつづいて大自然のパノラマが展開される。ボン・ジュズスの洞窟の入口は、その岩山の西部に所在し、河の水面から二十メートルである。十七世紀の初めに托鉢僧フランシスコ・ダ・メンドサがこの地帯の踏査を企て、かの幽巖無比の神境に達して感嘆おく能わず、ここに礼拝堂を建立し、ボン・ジュズス・ダ・ラパと名付けた。

史家ペードロ・カルモンは、これをして宗教的バンデーランテの偉業と称讃している。この礼拝堂は巾六メートル、高さ五メートルの天然アーチ型の岩窟の中に造られている。現在の洞窟の入口は二つあって人工的に作られたものだが、内部に進むにつれて沢山の石筍（乳洞石）が見られ、そのあるものは周圍一メートル以上のものがある。

特に面白いのはコーバ・デ・セルペンテ（蛇の穴）といわれる乳洞石で、これが一九三六年の頃からパーデレ・ビラノーバによって洗礼器に使用されている。

毎年五月から八月にかけてサンパウロ、マット・グロツソ、ゴヤス、セアラなどから、多くの巡礼や参詣人が・ボン・ジュズス・ダ・ラパに集合する。特にボン・ジュズスのお祭りは八月五日だが、その前後には何百隻もの船が群集して非常な賑わいを呈する。

鉄道、重工、金融業の先駆者

マウア子爵の偉業

石川島重工のブラジル進出が人々の話題に上っている今日、当国の鉄道、重工、金融業の先駆者であるマウア子爵の名が思い出される。もし私として数名を限って過去の著名ブラジル人の伝記を書かしめるなれば、その中にマウア伝を入れるであろう。それほどに彼の人柄に魅力を感じるのは私だけであるまい。およそブラジルの都市や街路、広場には人名のつけられているものが多いが、何処へ行っても必ず目につくのがマウアの名称の公園や大通りである。

一九三一年であったが、リオの『ジオルナル・ド・コメルシオ』が国内各州の首都にブラジル国家に最も功労あつた人物の記念像を設けるとして、誰を推すべきやの輿論を喚起したところ、期せずしてマウアが最高点を占めた。それはマウアの遺徳の表われであろう。

さて十九世紀には世界を挙げて偉人傑物が現われたが、ブラジルにも各分野に卓抜する人材を生んだ。十九世紀といえば英国が石炭を燃料として蒸気機関を動かすことによって産業革命を現出した時代だ。ブラジルでも旧来の帆船が蒸気船にかわり、エンジンヨーニョが蒸気動力によって生産能率を著しく増すことになった。この蒸気動力に着眼したのがマウアであり、彼

によつてブラジルの鉄道と重工業に先鞭がつけられた。

ところで英国に始めて鉄道が設けられたのは一八二九年であり、アメリカ合衆国では一八三〇年だが、それから十四年後の一八四四年にリオ、ペトロボリス間の鉄道の一部分が開通した。この鉄道はマウアによつて実現されたもので、当時男爵であつた彼とマウア夫人に敬意を表して開通式に試運転された機関車に『バロネーザ』と命名された。こゝの機関車こそブラジルの鉄道史の発端をなすものである。

他方マウアの鉄道建設は執政官デオゴ・フェージョに負うところが大きく、一八三四年に既にフェージョがリオ、バイア、ミナス、リオ・グランデ・ド・スールをつなぐ鉄道網を計画したことは驚くべき先見である。

またサントスとサンパウロ間はブーロの背によつて悪条件のカミーニョ・ド・マールを経て物資輸送をしていたが、一八六七年のサンパウロ鉄道の開通により、その難問題が解決された。同時にサンパウロ州とその隣接州の産業の発展を促したことは著しいものがある。このサンパウロ鉄道もマウアによつて建設ぶれたが、彼が英国の資本団体の参加を得てあの世紀の大事業を完成は並々ならない苦心と努力があつた。

更にマウアがリオ州ニテロイのポンタ・ダ・アレアーに設立した製鉄所はブラジル最初の重工業であつて、ここで建造された汽船がパラグワイ戦争に出動してはなばなしい戦果を挙げている。

歴史にみる通りブラジルがポルトガルの属領植民地であった期間はいうまでもなく、一八四〇年までは対英協定のためにエンジューニョを主とする農工業のほかには独自の工業をもち得なかつたが、マウアの努力によって当国は工業の面に独立することができたのである。他にマウアについて特筆を要するのは彼が金融界の草分けであることで、カーザ・マウアの設立に初まり、ブラジルに銀行の繁栄につくした功績は多大である。

またブラジルとヨーロッパの海底電信の架設、リオ市の瓦斯燈工事、アマゾンの河川航路の開設など、人間一代の事業としてはその広汎にして規模の大きさに驚嘆する。

しかしマウアをして単なる好運児と評するのは誤りである。彼は十五才の時に商店員として身を起して以来、七十六才で長逝するまで数奇の生涯を送っている。彼は精力絶倫の努力家であり、創意と勝れた識見、非凡の実践力にあわせて傑出した人格があらゆる事業を完成しているのである。

私は今までに幾つかのマウア伝を読んだが、その度に彼の人と成りに感銘を深くした。その六十年に亘る奮闘の生涯を限られた紙面に綴るのは不可能だが、いまマウアの人柄と偉業の一端を語ることに少なからぬ感激を覚える。

マウアの本名ほエリネウ・エヴァンジェリスタ・デ・ソーザで一八一三年にリオ・グランデ・ド・スールのウルグワイ国境近くのアロイオ・グランデに生れている。従って彼はいうところのガウーシヨである。郷里で初等教育を終えたエリネウはリ

才市に出て或る呉服店の店員となった。しかしその商店が破産状態となり、主な債権者のリチャード・カルツサーという英国人が債務整理をなした後にエリネウを自身の商会に雇い入れることになった。これがエリネウの性来の才能を發揮する絶好の機会となった。

エリネウのパトロンである英国人カルツサーは優れた教養を備えた円満な人格者であったので短期にしてエリネウの人物を見抜き、その将来を囑目した。かくして数年が過ぎてカルツサーは英本国に帰ることになり、当時二十六才のエリネウにカルツサー商会の全責任が委ねられた。

エリネウはカルツサー商会に働き初めてから熱心に英語を学び、英国型の紳士教育をうけたことが、後日に彼が国際人として活躍するに大いに役立つている。彼は商業英語を第一にシエークスピアアやジョン・スチエアート・ミルの実利哲学を学んだのは二十才前後の頃である。カルツサー商会の経営に最善をつくしたエリネウの努力は酬いられて業績大いに挙げり雇人の数は以前の数倍ともなった。しかし彼は雇人各自の人格を尊重し、決してカイシエーロ（番頭）の言葉を用いずに協力者、紳士として接し、彼の商会には和気満ちて一つの大家族の観があった。リオのサンタ・テレザのマウアの邸宅は彼の事業本営であると共に多くの従業員の休息場でもあった。人はよりよく働いて能率を挙げるには充分休養をとらねばならぬとの見地から土曜日の正午から日曜日に休業する制度をマウアが卒先

して実行したのがブラジルのセマーナ・イングレーザ（英国週）の始まりである。

マウアは三十八才でブラジル銀行の前身であるバンコ・ド・コメルシオ・インドストリア・ド・ブラジルの創立員となり、ついで国会議員に選出され、議会ではナブコ・デ・アラウージョなどと相並ぶ雄弁家であった。

バイアとジュアゼーロ間の鉄道、レシフェとリオ・サン・フランシスコの鉄道建設も彼によつて実現されたものである。

の他隣邦ウルグワイとの外交、通商問題に関してもマウアは立派な政治家の働きをしている。

一時はウルグワイにおいてのマウアの名声は隆々たるものでまさにマウア王国の觀があつた。

十五才の商店員から出発して英国系商会の経営責任者となり、重工、鉄道、金融、或いは船舶事業に活躍する傍ら政界にも縦横の働きをしたことは敬服に値する。

しかしながら晩年の彼はカーザ・マウアと銀行業の凋落のため八方奔走したにもかかわらず、時に利あらずして破産を余義なくされた。それは運命の冷酷か、さなくば社会の不条理というべきか。

おそらくマウアはブラジルの古今を通じての大事業者であるが、その私生活は質素の一語につき、全盛期にあつても敢て豪華な大邸宅を造営することもなかつた。而して一八八九年十月二十一日、ブラジル共加国誕生の直前、ベトロボリスの私邸

で七十六年の生涯を終えた。

世界に誇る毒蛇血清と

ブタントン研究所

サンパウロのインスチット・ブタントンはコロニアでは俗にブタントン蛇研究所として知られ、初めてサンパウロを訪れる人の殆んどが見学する場所となっている。

ブタントンには、ブタントン研究所と目下建設中のシダーデ・ウニベルシタリア（大学村）並びに歴史的記念物カーザ・ド・バンデーランテの三つの名所がある。

ところでブタントン研究所は何時誰によって創設され、又どのような歴史をもつか余りに知られていない。

しかし、ブタントン研究所の名はコロニアの人々に何となく親しみのある感じを与え、同研究所から配給される毒蛇の血清を連想させる。あの血清のお陰で、毎年約四千八百名の当国の農村人が毒蛇の犠牲から救われているのである。

周知のように、ブタントン研究所にはブラジルの各地で生け捕りにされた毒蛇が送付され、それと交換に毒蛇の血清が配給されている。最近数年間の統計では、一カ年平均二万の各種の毒蛇がブタントン研究所に送られ、それによって血清が調製されるが、その血清はブラジル全土に配給される他に外国にも送り

出されている。その他、天然痘の予防種痘や癩病薬までが同研究所に於いて調製されている。

今やブタントン研究所は、リオのオズワルド・クルース研究所と共にブラジルでは云うまでもなく世界に誇る存在をなすものである。

有名なパリーのバストウル研究所は余り目立たない古色な建物であるが、ブタントン研究所も同じく質素な建物を構えているに過ぎない。しかしあの地味な建物が、貴い人命救済の殿堂であることを忘れてはならぬであろう。

しからはこのブタントン研究所の創立者は誰であろうか。それはピタル・ブラジル博士で、一八九七年度に設立されたものである。同博士はブタントン研究所の他に、リオのニテロイにもピタル・ブラジル研究所を設立した人で、細菌病理学の権威である。このピタル・ブラジルは、ミナス州南部のカンパーニャに一八六五年四月二十八日に生まれた。そこで同氏は、ピタル・ブラジル・デ・ミネーロ・デ・カンパーニャとも呼ばれ、それが恰も本名ともなっている。

彼の生家は非常に貧しく勉学の費用も出し得ない状態にあったので、彼は全くの苦学によってリオの医科大学を卒業し、粒々努力の結果遂にブラジル有数の科学者となったのである。

ピタル・ブラジルは郷土ミナスのカルダスで小学枚を了えるや、サンパウロに出て印刷職工を初め、種々の労働に従事しながら高等学校を卒業し、次いでリオの医科大学に入ったのが彼

の二十才の時であった。彼の医科大学在学中は、その学資を得るために家庭教師をやり、又は休暇を利用して鉄道技師の助手としてモジアナ鉄道の建設工事に働くなど、文字通りの苦学力行によって、あの頃とても最も困難とされていた医科大学を首席で卒業した、稀に見る努力家であった。

一八九一年度のリオ医科大学の卒業式に臨んだピタル・ブラジルは感激の涙に咽んだというが、その折の彼の心境は察せられるものがある。医科大学を出た彼は、早速サンパウロ州のポツカツ市で開業医として働くことになった。

ところがその当時のブラジルの各地には、黄熱病を初めチフス、ペストなどの悪疫が発生し、又農村では毒蛇の被害で死亡する人の多い事実を目撃した彼は、臨床医を断念して流行病の撲滅と毒蛇の研究に挺身する決意を固めた。そのために彼は、サンパウロに出て著名の細菌学者アドルフオ・ルッツを訪れたのである。その当時アドルフオ・ルッツの研究所には、少壮科学者オズワルド・クルースとエミリオ・リーバスが居た。人も知る通り前世紀末には、リオやサントスの港町により多くの黄熱病、チフス、ペストなどの発生を見たので、ピタル・ブラジルは最初にサントスの衛生状態の実地調査をなし、同時にオズワルド・クルースと協力して、リオでの悪疫防禦にも尽している。

その後、彼が毒蛇の血清とペスト・チフスの予防注射薬の調製の目的でサンパウロ郊外のブタンタンに研究所を設けたのは

一八九七年、彼は齡三十三であつた。

而して第一回の毒蛇の血清を世に送つたのが現世紀第一年度の一九〇一年であり、それはビタル・ブラジルにとって終生忘れることの出来ない歎びと感謝の日であつた。

その血清はリオ州のカンボスで毒蛇に暖まれた一農夫に試験され、見事にその生命を救うことが出来たのである。

この噂さは忽ちにして全ブラジルに広がつたことは当然である。ブタントン研究所はひきつづいて毒クモ、サソリの血清の外に、ペストやコレラの予防注射薬の研究にも成功したが、偏にビタル・ブラジルの不撓不屈の努力に負うものである。

ブタントン研究所の設立された場所は、一つの農場であつて、面積は百六十ヘクタールと云われ、その中に研究所本館と附属施設が見られた。特に大きな厩と牛舎及びモルモット代用のコバイアの飼育場があり、常に約百五十頭の馬と数十頭の牛が飼育されて現在に至っている。それらの馬や牛は血清の培養に用いられるのであるが、ここで参考の一端までに毒蛇血清の調製順序の概略を述べてみよう。

先ず初めにあのパン焼窯に似た蛇の飼育場から取り出した毒蛇から毒を抽出する。その毒を特殊の乾燥法によつて約二十四時間乾かす。この乾燥された毒素は或る液体に溶解され、その極く微量を健康体の馬に注射することに血清の培養が始まるのである。

この、馬への注射は六カ月間つづけられるが、回を重ねる毎

に次第に毒素の分量を増し、六カ月を経てからの最後には相当の分量を一度に注射する。もしこの最後の分量を初めての馬一千頭に注射すると仮定すれば、その全部が死滅するほど強烈な毒を含むものである。つまり、六カ月に亘って徐々に微量の毒を注射して来たために、馬そのものが毒に対する免疫体となっているから、最後に多量の毒を注射しても馬は死ぬことがないのである。

この学理を簡単に説明すれば、およそ動物の血液には外部から侵入する害毒と闘う自然の力が備わっているが、注射の都度次第に増される毒に対する戦闘力が馬の体内に養われ、遂には猛毒の侵害に耐えるほどの強力な血液となるものである。

こうして、毒の注射を完了した馬の体から、一週間に一回、四週間に及んで血液が抽出され、それによって調製されたのが、いう所の毒蛇血清である。

この血清を毒蛇に噛まれた人に注射すれば、体内の毒を消滅する作用をなし、その人の生命を救うことが出来るとは一つの神秘を見る感がある。

しかしこれは決して神秘でなくて、泣派な学説の実証であり、その複雑極まる研究に成功した人がビタル・ブラジルである。

以上毒蛇の血清の調製についての説明をすれば何でもないことのようにあるが、ビタル・ブラジルがこの研究に如何ほどの熱情と精魂を傾けたかは人々の想像にも絶するであろう。

毒蛇の血清の研究に成功したビタル・ブラジルの名は世界に知られ、彼がヨーロッパ諸国や北米合衆国での医学会議に、ブラジルを代表して出席したことは度々である。

さてビタル・ブラジルの毒蛇血清に関しての逸話の一つに次のようなものがある。

それは、現世紀初めにリオでの国際医学会議の席上、或る外国の科学者が、ビタル・ブラジルの研究についてその実験を見ない限り学説のみでは信じられない、と陳べたのである。そこでビタル・ブラジルは毒蛇と数十羽の鳩を取寄せ、人々の前で血清の実験を行ったものである。初めに毒蛇から抽出した毒を鳩全部に注射し、一定の時間を経るとそれらの鳩が瀕死の状態になった。やがてビタル・ブラジルは一部分の鳩に血清の注射を施したところ、その鳩だけが生き返って元気を回復し他のものは悉く死に絶えたのであった。

この事実を見た各国の科学者は、ビタル・ブラジル博士の手を握って祝福の言葉を贈ったとのことである。

その後、ビタル・ブラジルはブタントン研究所を去ってニテロイに至り、別の細菌学研究所を立て、インスチット・ビタル・ブラジルと命名し専らその経営に当った。しかるに再びサンパウロのブタントン研究所から招かれて、一九二四年度に重ねて同研究所長の任についた。

しかして一九五〇年五月八日に彼は八十五才の長寿を完うして他界したことは実に生き甲斐のある生涯と云うべきである。

う。その間彼が科学者として社会への貢献は六九年の永きに及んでいる。

彼の名の Vital Brasi が恰も『ブラジルの生命』を意味するかの響きを人々に与えるのも故なきでない。

北東ブラジルのジャンガダ

初めに念のため一言。ジャンガダを日本流に筏（イカダ）と考え、ジャンガデーロを筏師として鴨緑江節を思い出すようでは北東ブラジル（ノルデステ）のジャンガデーロが解らない。しからはジャンガダとジャンガデーロはどんなものか。なるほどジャンガダは数本の木を組み合わせたイカダ式のものではあるが、これにマストを立てヨットと同じように操縦自在の三角形の帆をつけた漁舟である。そしてジャンガデーロはその操縦着であり、漁師である。

このジャンガダはペルーとボリビア国境のチチカカ湖の『トラ』というカノア舟に似ている。

ところで日本の大洋漁業の進出のおかげでマグロが食べられるようになり、ブラジルの水産業に新時代を生みつつある今日、昔のままのジャンガデーロが存在することこそブラジルのといえるであろう。

バイアからセアラまでの北東ブラジルの海浜風景の特色はいうまでもなくココ椰子とジャンガデーロにある。この二つが青緑の海と白色の砂原にどれほど詩的情緒を添えているか知れない。なぎの日には遙か海面に胡蝶のように点々とジャンガデーロの帆に見えるのはこよなく美しい。海辺では出発をまつジャンガデーロが、丸棒の滑り台にのせたジャンガデーロに網や食糧、飲用水をつみこんでいる。やがて準備をおえるや、メストレの合図と共にジャンガデーロはしぶきをあげて海中に滑り出す。それを見送る子供づれの女や老人が、空と沖合いを眺めて祈るような面持ちをしている。

日焼けしたジャンガデーロの顔は赤銅色をおびて不屈さをあらわし、たくましい筋肉と強敬そのものの体格は永年の海上生活による鍛錬を物語るものである。

微風にそよぐ椰子の葉は舟出するジャンガデーロを祝福するかに見え、外国の画家らしい人がそれをスケッチしている。晴れわたった青空には一片の浮雲もなく、海水にぬれた白砂はキラキラと光り、波打際にカニの逃げまどう様が微笑ましい。眼を後方に転ずると椰子の樹林からほど遠からぬところに粗野な家があり、その近くに破れかけた網が干されている。暑さのためか家の陰に山 羊、豚、ニワトリとやせ犬が一緒に寝そべっているのが面白い。このようなジャンガデーロの村が、セアラの首都フォルタレーザ近傍の海浜に多く見られる。

ジャンガデーロの住居は、質素というよりは全くの荒小屋に

過ぎなく、瓦屋根はまだしも上等の方で椰子の葉で覆われ、土壁のものがほとんどである。その中に寝台ならぬハンモックを吊って彼等は寝る習慣があり、それはアマゾン流域のカボクロや土人の生活に似ている。日常の食物もタピオカ（マンジオカの澱粉）またはフアリーニャ・デ・マンデオカで作った油揚げと乾魚、カルネ・セツカが主である。彼等の家族は数人、十数人から成るのが多い。こうした環境に生れた子供が成長し、頑強なものがジャンガデーロになるのである。

南部ブラジル、リオ・グランデ・ド・スールの牧牛地帯でのガウーシヨに馬は最も大切なものだが、北東ブラジルのジャンガデーロにとってジャンガデーロは彼等の生命である。そのためかジャンガデーロを建造するとそれを洗礼して『ノツサ・セニョーラ・アパレシード』とか『ノツサ・セニョーラ・ダ・コンセーション』『サンタ・マリア』『サンタ・テレジーニャ』などの聖女の名が主につけられる。これはジャンガデーロに生命を托す彼等の完教的な心情のあらわれでもある。そうかと思えば『カリニョーザ』『リジェーラ』『ヴェロース』など、慈愛、快楽を意味する名称のものもある、ジャンガデーロには海洋学や海洋生物学、航海学の科学的知識はないが、永い間の経験と六感でと魚族の移動状態を探り、気温、温度、風の方向によって気象観測をする。彼等には払暁に舟出して夕暮れに帰るもの、或いは夕刻に出発し徹夜漁撈按をして早朝に帰るもの、または数日を海上に過ごすものがある。日本でのビク籠は北東ブラジ

ルでは「アンプーラ」といわれ、これが一杯になるか否かで幸運と不運が決められるわけである。しかしかにかに大漁とは云えジャンガーダに積めるだけであるから、その量は大型漁船との比較にはならない。概してジャンガデーロには大きな欲望はなく、中には一隻のジャンガーダすら持たず、所有主から借りうけ、漁獲の歩合制で生計を立てているのがある。よしんばジャンガーダが自己のものでも肝心の漁獲は中間商人に好利を占められるなど、これは何処も変りない。

セアラと聞けばセツカ（旱魃）を連想せしめるが、漁村に住むジャンガデーロは農作とは直接の関係がなく、専ら海によつて生きている。彼等の唯一の屈託は明日の天候であり、順風と大漁を希いつつ寝につき、未明にハンモックから起きて空を見渡し波浪の音をきくのが第一の日課である。♠ジャンガデーロは陸地にあつては温和そのものの面つきをし動作も大して敏捷でないが、ひと度ジャンガーダに乗つて出発するや彼等は冒険児の血に燃え海の英雄と化す。あの順風をうけながら帆をあやつる様は意気揚々たるものがあり、そのひと時に生き甲斐を感じているかのようである。ジャンガーダの乗組員はメストレと共に三人または四人で、メストレは操舵手であると同時に潮流と風の方向によつて帆の操縦を指揮する。他の者がそれに忠実に従う呼吸の一致は見る眼も美しいつまり彼等の間には自ら礼儀と情誼が保たれているが、これこそチームワークの極致である。彼等は、時によつて陸地を離れることや、ニレグア

のところでは漁獵することもあるが、そのような陸地の近くではロバロ、ボニータ、ビクワラ、マリンキタス、サブルースなどの魚が主に獲られ、大洋においてはカヴァアラ、カンダグロ、アラバイアナ、セリガード、カラピタンが獲られる。それ等には猛魚もあつて釣り上げるに相当骨が折れるが、ジャンガデーロは巧みに一撃をくらわして釣針からとるコツを心得ている。彼等は魚各々の習性をよく知っているにもかかわらず、それを書き残すことをしないのは遺憾ながら無学で科学性にかけるためである。

普通ジャンガーダの大きさは巾十から十二パルモ（一パルモは二十二センチ）、長さ三十パルモ位の小型のものであるが、それは「パケテ」と呼ばれる。ジャンガーダの用材にはアマゾンの湿地の特産樹「ピウバ」が主であり、これは軽くて堅牢、水中にあつて腐らず、日晒らしにして割れ目を生じない特徴がある。

さてジャンガーダは何時から北東ブラジルに現われたかについての明確な記録はないが、一八三一年にアフリカよりの黒人奴隷の輸送禁止令が出てからのようである。

当時は黒奴の輸送防止のため大型船舶の建造が許されなかつたために、小舟による沿岸航海が始められた。バイア、リオ・グランデ・ド・ノルテ、セアラでは小舟よりはもつと容易な方法としてジャンガーダを造り、これによつて物資を運んだ。ところがこのジャンガーダで国内の奴隷密輸送をやつたものがか

なりあった。それは政治的に努力のあったセニョール・デ・エ
ンジェーニョが、半ば強制的にジャンガデーロに奴隷の密輸送
をさせたことが想像される。

しかるに一八八三年三月のある日のことである。

セアラを発してリオ・デ・ジャネーロに向った勇敢な一人の
ジャンガデーロがあった。それはジャンガデーロの大親分フラ
ンシスコ・ジョゼ・ド・ナツシメントで、「今日限りセアラの
ジャンガデーロは奴隷の輸送を断固拒絶する」旨を中央政府に
通達するためであった。これが動機となって一八八四年にセア
ラが率先して奴隷解放を実施した。

それはプリンセーザ・イザベルによってブラジル全土に奴隷
解放が発布される四年前の出来事である。

その後北東ブラジルではジャンガデーロが漁労に用いられるよ
うになり現在に至っている。しかもジャンガデーロの海に生き
る冒険魂は彼等の伝統的精神となっている。

バイア以北の漁民にはジャンガデーロとその家族の心境を
歌った俗謡があり、喜びと悲しみの感情をよく現わしたものが
ある。

ああ、やつと嵐が止んだ

一隻、二隻、三隻、

テレジーニャ、カリニョーザ、

サンタ・マリアが帰った

そして日が暮れた

だがテレコの姿が見えぬ

しかしジャンガデーロは強い

きつと戻るにちがいない

オーイ、オーイ

歴史的名所

サン・クリストヴァン宮

豊富な樹林に囲まれるペトロボリス離宮（現在の帝室博物館）が恰も植物園の観があるのに反し、サン・クリストヴァン宮の周囲には老木の疎林が見られるだけで、むしろ乾燥した感じである。しかし、リオの歴史的名所を語るにはサン・クリストヴァン宮を無視することは出来ない。

あの冬枯れの木立ちの間を、落葉を踏みながら望むサン・クリストヴァン宮は、曾っての皇居としては質素の一語に尽きるが、帝政ブラジルの歴史はあの建物の中に終始しているのである。

サン・クリストヴァン宮の内部には、フランスの名高い美術師によって数回に亘って美装が施こされたというにもかかわらず、フォンテンブローやチェリー宮殿に見るような豪華さはな

い。



サン・クリストヴァン宮の庭園

ところで、このサン・クリストヴァン宮をブラジル帝政史の舞台に例えるならば、それに様々の人物が登場するであろう。もし私に戯曲をものにする才能があれば、サン・クリストヴァン宮を主題として三幕位のものを書きたいと思う。

サン・クリストヴァンはキンタ・ダ・ボア・ビスタの別名で知られ、現在は公園になっていて国立博物館と動物園がある。その博物館が帝政期のパラシオ・イムペリアル即ち皇居であった、サン・クリストヴァン宮はその名称である。

パラシオの前面に湖水を望みながら立つドン・ペードロ二世の銅像は、何かしら過去のことを物語るかのようなのであるが、事

実彼は、その生い立ちから祖国ブラジルを追放されるまでの生涯の大部分を、サン・クリストヴァン宮に過ごしているのである。

これからサン・クリストヴァン宮の歴史の概説を試みるとして、この建物は元来が皇居として建造されたものではない。初めはユリアス・ローペスというポルトガル系の素封家の邸宅であつて、それはリオの中心地から遠く隔たる場所であつた。

そこにエリアス・ローペスは、百数十アルケールの土地を所有し、一つの農園の趣きをなしていた。それは十八世紀末で、ボア・ビスタスとは土地の名前であり、またキンタは莊園或いは農園を意味するから、キンタ・ダ・ボア…ビスタをボア・ビスタ農園と訳するのが適切かも知れない。サン・クリストヴァンとは、リオの市稗が拡大されるにつれて開設された一つの地区の名称である。つまり、サン・クリストヴァン宮は土地の名に因んで付けられたものである。

ここで話は十九世紀初頭に飛ぶが、一八〇八年度に、ポルトガルの王子ドン・ジョアン六世が、ナポレオンの侵略戦を遁れてブラジルに遷居したことが当国の社会、政治、文化の面に大きな変革を齎した。

ブラジルに到着したドン・ジョアン六世は、十八世紀のリオの名総督ゴームス・フレレーレの宮邸であつた建物に住居を構え、同時にそれを政庁として使用した。

しかしてドン・ジョアン六世がポルトガル並びにブラジルの

王に即位し、リオにおいて戴冠式の挙げられたのが一八一八年である。前述のユリアス・ローペスのサン・クリストヴァーンの邸宅を買収し、それに王盾を遷したのもドン・ジョアン六世であり、それは一八一八年度末である。その後一八二一年にドン・ジョアン六世は、長男ドン・ペードロ（一世）を摂政としてブラジルに残し、ポルトガル本国に引揚げたので、彼がサン・クリストヴァン宮に住んだ期間は約二年に過ぎない。

やがて一八二二年となり、摂政王子ドン・ペードロ二世によってブラジルの独立が宣言され、彼が皇帝となるに及んでサン・クリストヴァン宮は皇居となった。

当時サン・クリストヴァン宮に大掛りの改装工事が行われ、その工事監督に当たったのがマノエル・ダ・クーニャというリオの有名な画家であり、その折に描かれた天井の絵と壁画が今も部分的に見られる。

このサン・クリストヴァン宮において一八二五年十二月二日払暁に、ドン・ペードロ二世が呱呱の声を挙げたが、それがブラジルの帝政史に新しい頁を添えることになった。ドン・ペードロ二世の洗礼名は、ドン・ペードロ・デ・アルカンタラ・ジョアン・カルロス・レオボルド・サルヴァドール・ビピアノ・フランシスコ・シャビテール・デ・パウラ・レオカジオ・ミゲル・ガブリテル・ラファエル・コンザーガというおそろしく長いものである。

母君レオポルジナ皇后は、それまでに四人の息女を生んでいた。五目目の男児の誕生は、父ドン・ペードロ一世をして如何ほど歓こぼせたか知れない。モロー・ド・カステロの砲台と海軍埠頭の軍艦から放たれる皇太子誕生の祝砲を聞きながら、ドン・ペードロはレオポルジナ皇后の額に接吻を与え感涙を流したといわれる。

しかし、それから一年を経てレオポルジナ皇后は他界したので、ドン・ペードロ二世は、生後僅か十三カ月にして母に死別した。次いで一八三二年にはドン・ペードロ一世の退位となり、当時僅か五才のドン・ペードロ二世に帝位が譲られたことは改めて述べるまでもないであろう。父ドン・ペードロ一世が幼いドン・ペードロ二世のすやすや眠る枕元に惜別の誓いを残して去るところは実に劇的である。

このようにドン・ペードロ二世は、サン・クリストヴァン宮に生まれて、十三カ月にして母を失い、また五才の時に父と生別し、十四才で成年式を挙げて帝位につき、一八八九年十一月十五日の軍部革命によってブラジルから追放されるまで、六十年余の歳月をサン・クリストヴァン宮に送っているのである。従ってサン・クリストヴァン宮の歴史は、ドン・ペードロ二世の伝記に等しく、また彼の生涯は君主制のブラジル見史であるというも過言でない。

ドン・ペードロ二世が、愛する祖国を追われ、異郷に在って最も懐かしみを感じたのはサン・クリストヴァンであった。彼

の幼年期、重臣ジョゼ・ボニファシオから教育され、皇帝と
なつてからは、イタリー、シシリー王家の息女テレザ・クリス
テナ姫と結婚して二人の息女を得ている。その息女の一人は、
後日に奴隷開放をしたプリンセーザ・イザベルで、他の一人は
結婚後オースタリーのビエンナで逝去したプリンセーザ・レオ
ポルジナである。この二人の息女は、何れも結婚までサン・ク
リストヴァン宮に住んだので、ドン・ペードロ二世夫妻を加え
全部で四人家族であつた。

又、プリンセーザ・イザベルがフランス系の貴族ガストン・
ド・オルレアン・デュー伯爵との結婚後短期間サン・クリスト
ヴァン宮に住んだことがあるので、その頃は五人家族で少しく
賑やかであつた。皇帝の宮廷ともあればさぞかし華麗なもの
と想わされるが、サン・クリストヴァン宮は極めて簡素で、他の
貴族や富豪の邸宅の方が遥かに豪華なものがあつた。そのため
に、外国の国賓や著名人がサン・クリストヴァン宮を訪れ、皇
帝の謁見を得る毎にその質素さに意外の感に打たれたようであ
る。また重臣や閣僚会議がサン・クリストヴァン宮で行われた
こともあるが、各サロンに安楽椅子すらも十分に置かれていな
かつたので不自由を感じたといわれる。サン・クリストヴァン
宮がかなり家具調度を整えたのは一八七八年度からで、それは
陸軍大臣オゾリオ元師の提案によつてなされたものである。

ドン・ペードロ二世の治政には、皇室予算として一カ年八十
コントス国庫から支給されたことが記録に見られるが、サン・

クリストヴァン宮の維持費と皇族の生活費は比較的僅かで、その大部分は社会慈善事業、奨学金、または芸術家の後援に充てられたのである。また生活予算のかなりの部分を息女二人の教育費に当てたものである。

ドン・ペードロ二世の帝位について以来の最大の贅沢は前後三度外国へ旅行したことであろう。

彼は学者肌で温容な反面、実に厳格で、宴会やバイレなどの催しを余り好まなかつたようである。

宮廷での舞踏会でも、彼は半ば苦々しい表情で人々の踊るのを眺めていたとは面白い。又、一体に彼は私生活には無関心のところがあつて、特に食事の時には余り語りもせず早く食べ終るので、陪食に預かる人連は閉口したようである。この急いで食事をする癖が、彼の健康を害する一つの原因をなしている。

しかし彼には少年の頃から早起きの習慣があり、毎朝五時に起床したが、それは晩年まで続けられた。そして本を携さえて広大なキンタ・ダ・ボア・ビスタの庭園を散歩し、木株に腰かけて読書をするひと時が彼の最上の歓びであつた。

彼がブラジルを追放された頃は、サン・クリストヴァンの或るサロンは図書館を思わせるものがあり、一万数千冊の蔵書があつた。

またドン・ペードロ二世は、儀式めいた場所に出るよりはサン・クリストヴァン宮に自身の家族と共にあることを好んだ。この点彼は眞に家庭本位で良い父であり立派な夫であつた。

即ち、サン・クリストヴァン宮は、ドン・ペードロ二世には皇居であると共に、神聖にして最も楽しい家庭であったのである。

世紀の中央寺院

聖市のカテドラルの歴史

現在のサンパウロのセー広場のカテドラル（中央寺院）は完成されたかに見えるが、未だ正面の左右に設けられるべき聖塔が不足している。

最近、この聖塔の完成運動が起されているが、これを機会に世紀の中央寺院の歴史を辿って見よう。

何でも出来上ったものを見る時はそれが容易に造られたかと思われるが、世界各国の実例によっても一つの大寺院の建設には多くの歳月と莫大な浄財並びに当事者の涙ぐましい奉仕のあつたことを知るのである。

サンパウロの中央寺院も起工以来今日までに、並々ならない努力と奇特家の多大の奉仕のあつたことはいふまでもない。



永年に亘るあれほどの大工事であるから作業も各々専門に分かれ、或る部分の完成は親の代から子に及んでいるものがある。

ところでサンパウロの中央寺院は最初の原始的な建物から第二次建築を経て現在に至っているので、その歴史を語るには今から四世紀前に遡らねばならない。

周知のように、サンパウロ・デ・ピラチニンガ村は一五五四年度に創設されたが、それから約三十年間は絶えず蛮族の襲撃を受け、ジュズイッタ教団の僧侶や住民は少なからぬ災害を破っている。しかしこのような犠牲が却って住民に不屈の気力を養わしめたのである。そして次第に村が成長するにつれて彼

等拓人の間に自ら信仰が湧き、ジェズイッタの学校と教会の他に中央寺院を要求する声の起ったのが一五八八年の頃である。

当時は小さいながらも村会が組織されていたので、或る日の村民会議によって中央寺院の建設が決定された。それは一五八八年の二月七日と記録されている。

十六世紀のことであるから煉瓦などはあるはずもなく、部厚いタイパ壁で中央寺院が築かれることになった。その工事請負にルイス・アルヴァレスとドミンゴス・ルイスという男が選ばれた。

ところが工事中にこの二人の請負師は資金難のためにそれを中絶し、折角の建築も完成されずして放棄されたのである。

かくして一六〇一年となり、村会の決諫で村民各自が一人宛の奴隷を奉仕的に出して、未完成の寺院の工事を進めることになった。しかし種々の難問題が生じ、またしても工事は進まぬまま一六〇二年を迎えた。

そこで中央寺院の建設実行委員が組織され、それに選ばれたのがサンパウロ村の人望家ブラス・エステーベ、バルトロメウ・ブエノ及びドミンゴス・アフォンソの三人であった。当時、この中央寺院の完成督励のために住職としてローレンソ・デアス・マツシヤード僧が、バイアからサンパウロ村に派遣されている。

而して一六一二年にようやく中央寺院が完成されたが、その

時には既に土台やその他の部分が朽ちかけていたといわれる。遺憾ながら当時数年間の記録が不足するために、話題の中央寺院の建設地が現在のサンパウロの何処に当るやが分からない。しかし大体セー広場からキンゼ・デ・ノベンブロ街の間ではないか、と想像されている。

サンパウロ村の住民奉つての奉仕によって完成されたタイパ造りの中央寺院は、二、三十年を経る間にひどく朽ち果てて倒壊の危険を生じたことは皮肉である。

従つてこの中央寺院は取りこわされ、その後永い間ジュズイッタのコレジオ教会で礼拝や宗教儀式が行われたものである。かくして中央寺院の第二次建築工事の始められたのが一七四五年で、その場所は現在のセー広場のカイシヤ・エコノミカ・フェデラール（連邦貯金局）の敷地の一部分に当たっている。この中央寺院の建設資金として、ポルトガル王室から三万クルザード支給されていることが注自される。

しかし、この第二次建設の中央寺院も完成から五十年を経た現世紀の初めに取りこわされたのである。その時に聖ポールの壁画も寺院と運命を共にして消滅したが、それは画家アルメーダ・ジエニオールの麗筆によるものであった。

当時のセー広場は、今日の五分の一ほどの両横にすぎなかった。それから数年が流れ一九二二年一月二十五日にサンパウロで催されたブラジル全土の大司教会議によって、現在のカテドラルの建設が決定されたがその建設敷地として選ばれたのがサ

ン・ゴンサーロ広場に画したサン・ジョゼ劇場跡を主とするもの、即ち今日のセー広場である。

建築設計は幾度も改められ、マシミアノ・ヘールの設計を第一候補に挙げ、ヨーロッパでの寺院設計の権威者の再検討を経て最後の決定をみたものである。それが現在のカテドラルであり、ゴシック建築の粹ともいうべきものである。

このようにして一九一四年から一九一五年にかけて基礎工事が始められた。

この中央寺院は長さ百十一メートル、巾四十六メートルで内部に八千人を容れる面積を擁している。

又聖塔の高さは地上から九十七メートルで、サンパウロ全市が展望可能である。

つまり現在のサンパウロの中央寺院は、着工以来四十五年を経ていることを知り、当事者の堅忍不撓の努力に頭の下がるものがある。

この大寺院の内部装飾と外部の聖徒像についての詳細な説明は割愛するが、それ等の聖像は彫刻師オノブレ・モンテフスコの三十六年間の力作であり、彼は往年他界したことを特に記す次第である。

サンタ・カタリナの開拓史と

先駆者ヘルマン・グルメナウ

先日、サンパウロのインスチット・ハンス・スタデンを訪れ、南伯サンタ・カタリナ開拓史の研究資料を探す序でにブルメナウ百年祭の記念出版物を手に入れることが出来た。

その主なのはブルメナウ百年史で、これはドイツ語版の他に *Centenario de Blumenau 1850 ~ 1950* としてブラジル語で綴られ、ブルメナウ百年祭典委員会から出版されたものである。

同書は六百ページから成り、ブルメナウの建設史に始まってその創設者ヘルマン・ブルメナウと主な協力者である博物学者フリツ・ミューラーやビクトール・コンデルなどの伝記が網羅され、移民五十年祭を挙げようとする日系コロニアにとって少なからず参考となるものがある。

ブルメナウ百年史の他に「イタジャイー平原のドイツ人植民史」と「ヘルマン・ブルメナウ伝」が同じく一九五〇年度にインスチット・ハンス・スタデンから出されている。またイタジャイー平原の参考文献としては、農務省発行の *O Vale do Itajai* がある。

以上四つの書を一読した私は移民初期の邦人コロニアを思い併わせて感銘を深くせしめられた。

ところで、サンタ・カタリーナの開拓史とドイツ植民の指導

者ヘルマン・ブルメナウに関して詳細に書けば大冊の書物ともなるので、今回はその概略と半世紀を迎える日系コロニアについての感想を述べてみたい。

サンタ・カタリナはブラジルのドイツ人コロニアの代名詞ともなっているが、イタジャイー平原がその経済、文化の中心であり、しかもブルメナウがイタジャイーの心臓に相当することはいままでもない。

このブルメナウの創設百周年記念祭の催されたのが一九五〇年度であるから、同地においてのドイツ人植民史は日本の笠戸丸移民に先立つこと五十八年である。

更に一八二四年度のリオ・グランデ・ド・スールのサン・レオポルド植民地の建設に始まる南伯ドイツ人コロニアとの比較で、日系コロニアは八十四年新しいことになる。ブラジルへの移民を開始した当時のドイツと日本の社会情勢及び各々のブラジル移住の動機は必ずしも同じではないが、ドイツ人と日本人は性格的に何かしら共通する点があるのでこの稿を綴る興味が湧く。

さて、ドイツ移民と日本移民の性格と集団移住についての批判は別として、良い意味でその特徴を活かした結果が南伯でのドイツ植民の成功を齎し、サンパウロを中心とする日系コロニアをしてブラジルの産業経済への多大の貢献をなさしめたものであるろう。

しかしサンタ・カタリナの土地は豊饒といえるものでなく、

辛うじて中位に属す程度であるが、そこにドイツ移民が根をおろして五アルケールレス、十アルケールレスの小面積を耕作し、主に有畜と酪農を加味する集約農を営み、高度の産業組合制の合理化によって立派な業績を挙げている。

数百、数千アルケールレスの大規模の農業を見た眼に南伯ドイツ人の農業経営はおよそ派手さはなく、あくまで堅実で投機性を避け、家庭生活に潤いをもたらしめることが主眼をなしている。従って彼等は一滴千金の夢を抱かぬが徐々に経済の基礎を固めて日々の生活を楽しんでいるのである。

日曜には必ず教会に集って礼拝を行ない、午後は近隣挙ってバツハやベートーヴェンの音楽な鑑賞し、夕べには一家の団樂に子弟にカントやゲートルを語り聞かせることに歓びを感じている。

そうした彼等の環境にドイツ的のものがあるのは当然だが、それがブラジルにプラスとなつてもマイナスにはならぬと信じている。

百年祭を挙行了した当時のブルメナウにはドイツ人一世は極めて少なく、大部分が二世を越えて三世、四世が第一線に活躍していた事実と、ようやく五十年を経る日系コロニアとを同時に論じ比較することは、当を得ぬかも知れない。

邦人コロニアでは移民五十年祭を拳げるに当って殊更にジャーナリズムの協力などが要望された

が、ブルメナウの百年祭には、祭典委員会に始まり言論界その

他総ては歩調を一つにし、ブルメナウ百年祭一色をなした観があったといわれる。さりとして彼等は底抜けのお祭り・騒ぎに終始したのではなく、意義ある記念事業に予算を計上し、その一部は恒久企画としての公益文化方面への地味な働きをしている。時に彼等の垢抜けした宣伝は、ドイツ本国並びにブラジル全土に百パーセントの効果を示したことに学ぶものがある。

一八五〇年九月二日、イタジャイー・アスー河畔への最初のドイツ移民の到着の日を期して百周年の記念式を挙げ、ブラメナウ百年祭の歌を高らかに歌ったブルメナウ人はサンタ・カタリナの開拓によつて愛するブラジルの発展に尽したことを誇りとしている。

ブルメナウを訪れる人はあの先駆者ヘルマン・ブルメナウと博物学者フリツ・ミューラーの銅像を望んで、自ら襟を正さしめられるであろう。

ここで典型的ゲルマン族の性格の極端さを指摘すれば、概して融通性（協調性）に乏しく、頑固なまでに自説を主張することであるが、それなればこそ、科学、芸術、その他の分野に卓抜する人材を生んでいることは否めない。

この点日系コロンビア人は正直勤勉であるのはよいが、ややもすれば永住地ブラジルに対する見解と生活態度が卑屈ともなり勝ちである。

自分はブラジルにお世話になっているとか、又は私達はブラ

ジルに置いて貰っているという居候心理は改めたいものである。半世紀を過ぎる今日、帰化人であると否とにかかわらず、当国の社会人としての態度を持し、自らブラジル人となる気構えこそあつて然るべしである。それにはこのブラジルの風物一切を理解して、眞に愛し得る心境にまでならねばならない。

五十年祭を挙行するに際してコロニア人各員の立場から養国ブラジルに対する謝恩の念を新たにするのは美しい心情の発露ではあるが、同時に自分は外国人であるとの気持から脱すべきであろう。勿論、傲慢不遜の行為は慎しまねばならない。

サンタ・カタリナのドイツ人コロニアの先駆者ヘルマン・ブルメナウを語るとして、彼は偉大な指導者であると共に終生ブラジルを愛しつづけた人であることを前提したい。殊に彼は哲学者であつたので、開拓初期の南伯ドイツ人コロニアがこのような優れた指導者を得たことは幸いであつた。

先ずイタジャイー平原の地理歴史的概説であるが、同平原の面積は一万五千平方キロメートルで海岸山脈とジュラル山脈に源を発するイタジャイー・アスー河が貫流して大西洋に注いでいる。この河口に青年外交官アントニオ・デ・メネーゼス・ヴァスコンセーロスの建設したイタジャイー港がある。これはイタジャイー平原開発の目的で一八二〇年度に創設され、始めはコロニア・デ・サクラメントと呼ばれた。

サンタ・カタリナでの最初のドイツ入植地は、一八二九年度に建設されたサン・ペードロ・デ・アルカンタラである。一

八三五年となつてはサンタ・カタリナのプロビンシア政府がイタジャイー平原の柘植計画を樹て、同時にドイツ移民の誘入案を議会に提出出している。その翌年、一八三六年度にイタジャイー・ミリン沿岸のポシーニヨとベルジオールという部落に、サン・ペードロ・デ・アルカンタラのドイツ人を入植せしめた記録があるが、これは大して業績を挙げていない。

この実例によつても、如何にゲルマン族とても良い指導者と組織力なくしては植民事業の成功を収め得ないことが知られる。

こう考える時に、サンタ・カタリナのドイツ人コロニアの本格的建設はヘルマン・ブルナウによつて着手されたというも過言でない。

ヘルマン・ブルーノ・オット・ブルメナウは、一八一九年十二月二十六日に旧ドイツのブルンスウィック公爵領地であつたハッセルフィルドのハルツという小邑に生れた。そこはブロッケンから二十キロで標高四百五十メートル、馬鈴薯と小麥の産地として知られ、美しい牧場と絵に描いたような樹林がつづいていた。冬期には寒気厳しく、後世紀にも亘る旧家の血統をひく住民には自ら強靱と剛健性が養なわれていた。

この一帯、特に西部ハッセルフィルドの幾つかの村落は十世紀の頃カルビン派の信徒によつて建設されたものである。ヘルマン・ブルメナウの生れたブルメナウ家も幾代かに及ぶ素封家

であるがその系図の説明は省略する。

ヘルマン・ブルメナウは長じて薬剤士の資格を得ると共に、郷里のアーランゲン大学の哲学科を専攻し、その学士号を帯びた頃に祖国ドイツの国情に照らして移民問題に興味を持ち、熱烈な研究を始めた。若きヘルマン・ブルメナウはブラジルの植物調査に生産を捧げた植物学者フォン・マルチユースから、少なからぬ人格感化と将来の運命を決する上の大きな影響をうけている。また彼はその当時のドイツの博学者といわれたアレキサンダー・フンボルトと相識り、同時に母方の叔父に当るヘルマン・トロンスドルフによつて創造されたトロンスドルフ化学工業研究所で、有名な博物学者フリツ・ミューラーを知るに及んでドイツの移民問題を語り合い、期せずして植民地建設のためにブラジルが話題に上った。

アレキサンダー・フンボルト博士は一八〇〇年度にブラジルの動植物研究の目的でアマゾンを訪れたことがある。また博物学者ブリツ・ミューラーもダーウインの学説研究家として名高く、実地にアマゾンの探索をした経歴をもつので、ヘルマン・ブルメナウは種々ブラジル事情を聴くことが出来た。次いで彼は、一八四四年度にランスと英国に旅行し、ロンドンのプロシヤ領事館で知ったのが領事ハン・ヤコブ・スチュールツであった。このスチュールツは、その以前プロシヤ駐在のブラジル名誉領事の任にあつた関係から、ヘルマン・ブルメナウは彼

によってもブラジルについて教えられるところがあった。

しかし当時のドイツではアメリカ合衆国への移民熱が盛んで、ブラジル移民説などは一笑に附される有様であった。

ヘルマン・ブルメナウのブラジル移民の可能性の研究は二年にも及び、ハンブルグに本部を置くドイツ移民保護会の後援のもとに帆船「ヨハン」に乗じて実地調査のためにブラジルに向ったのが一八四六年三月で、彼は二十六才であった。

リオ・デ・ジャネイロを経て南部ブラジルに到着したヘルマン・ブルメナウはサンパウロ、パラナを振り出しにリオ・グランデ・ド・スールとサンタ・カタリナを綿密に踏査した結果、将来の植民地建設にイタジャイー・アスー州の流域な候補地に挙げた。彼は先住ドイツ人フェルナンド・ハクラトと、その一帯の地理に精通するカボクロ、アンジエロ・デアースをガイドとして、いよいよイタジャイー・アスー河をカノアで遡上ることになった。

河口から約六十キロの地点に達したヘルマン・ブルメナウは、炎暑の中にも健康そのものの気候肥沃の地味と天を蔽う天然林に感歎した。そして小鳥の囀りを聞きながら胸を躍らせつつ郷里の父母に書面を認め、ドイツ民のブラジル移住のために挺身する決意を固めた。

彼はリオの中央政府とサンタ・カタリナのプロビンシア政府との植民地建設並びにドイツ移民導入についての折衝を重ね、便宜上、彼とフェルナンド・ハクラトの名義のブルメナウ・ハ

タラト拓植会社を組織した。

彼等二人の拓植会社と中央政府との間に成立した契約は相当永い条文から成るものであるが、その中に中央政府が向う十年間ドイツ移民一人当たり二ミルレース、次の五年間は一ミルレースの補助金を与えること、又ドイツのハンブルグにイタジャイー平原拓植会社を組織してこれにブラジル政府指令の代表者を駐在せしめる、などの条項のあることが注目される。

他方サンタ・カタリナ政府との交渉も予想以上に永びき、ヘルマン・ブルメナウとプロビンシア統領ジョゼ・フェレーラ・ブリトの間に契約調印を見たのが一八四八年四月三日であった。

これらのブラジル政府との交渉と契約成立までには幾多の迂余曲折があり、ヘルマン・ブルメナウがサンタ・カタリナとリオの間を往復すること度々であった。当時の交通不便のこととて、これにどれ程の時日と労力を費いやしたかは想像に難くない。

在伯二年余にして総ての实地調査と政府との交渉の任務を終えたヘルマン・ブルメナウは、現地の準備をフェルナンド・ハクラトに托し、彼は第一回の移民募集と本国においてのブラジル拓植会社設立のためにドイツに引揚げることになった。

ところが、本国の移民政策はアメリカ合衆国やチリー、アルゼンチンを目指すもので、ブラジル移民の宣伝には猛烈な反対を浴びせられるのであった。

ヘルマン・ブルメナウは政治的圧迫とあらゆる妨害に耐えつ、一年余を経てようやく十七家族のブラジル移民応募者を得ることが出来た。それらの大部分はプロシヤ、ブルンスウィック、サキソニア地方の出身者であった。

このようにしてヘルマン・ブルメナウに率いられる十七家族から成る第一回イタジャイー平原開拓に着手したのが前述の一八五〇年九月二日である。その折のヘルマン・ブルメナウの懐中にあつた開拓資金は伯貸二十五コントであり、イタジャイー・アスー河岸から大森林を見上げた彼の胸中は悲壯そのものであつた。ところが目的地に着いての彼の大きな失望は協力者フェルナンド・ハクラトの背徳行為を知つたことであつた。彼のドイツ滞在中にされるべき植民者を迎える準備施設はほとんど未完成で、肝心の製材所などの設置が不完全のため使用不可能の有様であつた。あまつさえ、フェルナンド・ハクラトに托した開拓資金は悉く消え失せた上に、ヘルマン・ブルメナウの人身攻撃が流布されるなど、彼の信賴した人物から裏切られた憤りは想像に余りあるものがある。

こうした困難な第一歩を踏み出した彼は、十七名の植民者の絶体的な支持と協力を待て土地測量、住宅の建築、食糧補給のための主作物の栽培を始めた。

かくする間に二年日の一八五一年を迎えて新しく八家族が到着し、一八五二年度には十二家族が入植したが、その中に著名の博物学者フリツ・ミューラーとその家族が加わっていた。

その頃までに土地ロツテ（区劃）の正式分譲をうけたものは十二家族であつた。

ブルメナウの開拓史を見ると、最初の十年間が言語にも絶する苦闘期で、この間にヘルマン・ブルメナウは生命も縮めるほどの悪戦をつづけている。しかし彼は蛮勇型の拓人でなく、剛健不屈に加うるに冷静な科学者の風格を備えていたために、万難を排して総てを組織的に計画し進めたことが遂にブルメナウ植民地の建設を成功に導いたものである。

しかるに、如何にヘルマン・ブルメナウとしても相次で資金難に困窮の極に達し、止むなくリオに赴いて実状を訴え、皇帝ドン・ペードロ二世の理解ある計らいによつて十コントスの長期借款を得たことは、彼にとつて天にも上る感謝と歡びであつた。

中央政府から十コントスの援助をうけた彼は新しい産業企画を樹て、博物学者フリッツ・ミューラーの助力と共に着々見るべき業績を挙げた。

彼等の植民地から輸出産物として初めて生産したのは葉巻煙草であつた。一八五三年度の生産表には五万五千本の葉巻煙草と、七樽の甘蔗酒、二十四樽の砂糖が記入され、植民地の人口は百四名に達した。このように初期の植民計画は遅々として進まず、四年を経て人口ようやく百三十八名を算えるに過ぎなかつたが、その中にあらゆる職業と技術者があつた。

これから後のブルメナウ植民地の建設史は割愛する。

植民地の開拓に三十四年の間断ない努力を傾けたヘルマン・ブルメナウは、或る事情に強いられて一八八四年度に祖国ドイツに帰ったが、その後もブラジルの移植民事業に余生を捧げ、一八九九年に八十才にして長逝した。彼こそブラジルの山野風物を死に至るまで愛した拓人であり指導者である。

史的広場の回想

ブラジル共和国の誕生と

サンタ・アンナ広場

サンパウロのプラサ・マレシヤル・デオドロを歩きながら考えさせられるのは、あの広場にブラジル共和国の宣言者デオドロ元帥の名前がつけられておりながら彼の胸像すらも建てられていないことである。そして全く縁もゆかりもない医学者ルイス・ペレーラ・バレットの堂々たる銅像が存在するのは奇異の観がある。

またプラサ・ダ・レプブリカとても同じでデオドロ元帥の胸像はおろか、共和宣言の記念碑もない。もつともあの広場は面積が狭小であるから、もし馬上のデオドロの銅像でも建てるならば周囲との調和を欠くであろう。しかし曾っては共和主義者の代表人物がサンパウロに多く現われ、その政治連動の中心を

なしたところから、サンパウロにも一つ位のキンゼ・デ・ノブロンブロに因む記念塔があってもよさそうなものである。結局サンパウロはブラジルの経済の心臓であり、生産の都としての存在に過ぎないのであろうか。

この点リオには、海岸を間近かに控えるプラサ・パリスの前方に特にプラサ・マレシャル・デオドロ・フォンセツカが設けられ、そこにデオドロ元帥の銅像が見られる。

あれは彫刻家モデスチーノ・カントとオノリオ・ペサーニヤの共作になるもので、馬上のデオドロが軍帽を振り上げて共和国万歳を叫んでいるところを表わしている。この銅像とてもプラサ・ダ・レプブリカに建立されるのが一層当を得たものと思われる。

何れにせよデオドロ元帥はブラジルの共和制樹立の大立役者であり、屋上の雄鶏が黎明をつげるように彼の数語の叫びによつて六十七年の君主制が終局をつげてブラジル共和国が誕生したのである。

その「デオドロ伝」が史家マガリヤンエス・ジュニオールの麗筆で描かれ大型ブラジリア叢書として最近出版されたが、上下二冊から成る尤大なものである。これほデオドロ・ダ・フォンセツカの伝記であると共にブラジルの帝政から共和制への変遷史でもある。キンゼ・デ・ノブロンブロ革命については、多くの歴史研究家や著述家はその史実を辿りがなら各々の見地から共和制樹立の意義を語っているが、四世紀半のブラジル史を通

して僅か一日の軍部革命で当国の政治社会にあれほど大きな変化をもたらしたものはない。その事命の動機と性格は異なるとしても、重要性においてフランス革命にも匹敵するであろう。

マガリャンエス・ジエニオールの「デオドロ伝」の内容と筆致は部分的にカーライルの「フランス革命」を思わせるものがある。さてブラジルの歴史を植民、帝政、共和制の三つに大別するとして、キンゼ・デ・ノベンブロは共和制樹立の序曲である。

その共和宣言が一八八九年十一月十五日にリオもサンタ・アーナ広場（現在のプラサ・ダ・レプブリカ）でデオドロ・ダ・フォンセツカ元帥によってなされたのであるから、今年ほブラジル共和国の誕生から七十周年に当る訳である。従って数多いリオの広場の中でプラサ・ダ・レプブリカほど名高いものはない、あの広場が一部ブラジル史の縮図であり、多くの歴史的输出の舞台ともなっている。

このプラサ・ダ・レプブリカが現在の名称のつけられたのは共和宣言の後で、それまではカンポ・デ・サンタ・アンナと呼ばれ、更にその以前はカンポ・デ・アクラマソンともいわれ、執政政府の時代にはカンポ・デ・オンラと称されたこともある。

カンポ・デ・サンタ・アンナに続いて当時カンポ・デ・サン・ドミンゴが広大な面積を占めていたが、この二つの広場には判

然たる境界もなく、恰も一つの大野原のようであった。

十七世紀中葉までのリオは人家がまばらに見られる程度で、サンタ・アンナとサン・ドミンゴ広場一帯は灌木の茂る湿潤地で、その附近には素封家メンデス・アルメーダとゴンサロ・ヌーネスの農園があった。

カンポ・デ・サンタ・アンナに最初に設けられた建物はサン・ドミンゴ教会であり、その信徒の大部分はブラジル生れの黒人であった。同教会は市街の成長に伴って取り壊され、一七三五年度に新たに建設されたのがサンタ・アンナ教会も他に移転し、その跡に設立されたのがドン・ペードロ二世停車場である。

サンタ・アンナ広場に接続するサン・ドミンゴ広場は、現在のプラサ・チラデントスを中心として、ルア・ダ・コンスチツイソン、ルア・ビスコンデ・ド・リオ・ブランコからルア・ウルグワイアナまでも占める広大なもので、ここに於いて一七九二年四月二十一日に、ブラジル独立革命の犠牲としてミナス人のジョアキン・ジョビ・ダ・シルバ・シャビヤール（チラデントス）が絞首刑に処されたことは歴史に記される通りである。チラデントスの処刑された場所の近くにはエメレンシアナ・ダタス・デ・カストロ夫人の農園が所在し、そこには沢山のカジユの樹林があったので別称カジユ園で知られていた。

一七六三年にはポルトガルの王室直属の VICE-REI (副王) がリオに派遣され小王政が布かれてからはリオ市街に幾多の改

良工事が行われた。その第一番にサンタ・アンナ広場とサンドミンゴ広場が手入れされ、此処で市民の種々の宗教行事やお祭が行われたものである。

一八〇八年度にドン・ジョアン六世がポルトガルから到着の折はサンタ・アンナ広場で市民の盛大な歓迎会が催され、また一八二二年十月十二日にはドン・ペードロ一世のブラジル皇帝即位の宣言式が挙げられた。

その後、ドン・ペードロ一世の皇帝退位とポルトガル本国への引揚げのために執政府が設けられ、その間サンタ・アンナ広場がカンポ・デ・オンラと呼ばれたことは前述の通りである。やがてドン・ペードロ二世の成年式挙行と共に帝位について一八四〇年以後は、カンポ・デ・アクラマソンと称されるようになった。

その頃、同広場には約六万本のあらゆる種類の植物が植えられ、恰も植物園の観を呈した。それらの老樹の或るものは未だに見られ、それがあの広場に如何ほど美観を添えているか知らない。

話が前後するが、一八一一年度にローペス・デ・バツロス大佐の設計によってサンタ・アンナ広場の一角に、リオ兵団の兵営工事が起され一八一八年に完成した。これはロドリゲス・アルペス大統領の任期中に改装工事が施こされたが、その建物が現在の陸軍省の前身である。つまり陸軍省は昔日のサンタ・アンナ兵営そのままの敷地を占めて今日に至っているのであ

る。

ところで、サンタ・アンナ広場とサンタ・アンナ兵営にとって、キンゼ・デ・ノベンブロ革命ほど大きな出来ごとはない。一八八八年のプリンセーザ・イザベルによる奴隷解放以来、帝政打倒の気運が表面化し、軍部の蹶起による革命の勃発したのが一八八九年十一月十五日の早暁である。

フロリアノ・ペーショット将軍に率いられた一部陸海軍のサンタ・アンナ兵営到着と同時に、革命軍の絵司令官デオドロ元師はベンジャミン・コンスタンを伴って、兵営の二階の一室で緊急会議を開きつつあった臨時政府の首相オーロ・プレート子爵（アフオンソ・セルソ）を訪れて革命軍の要望を伝えた。

そこでオーロ・プレート子爵は、沈痛の面持でペトロポリスの離宮に病氣静養中の皇帝ドン・ペードロに宛て急電を發した。

電文の内容は、「海相ラダリオ男爵を除く臨時政府間僚は、陸海軍を代表するデオドロ元師、フロリアノ・ペーショット将軍、参謀副官ベンジャミン・コンスタンの訪れを受け、緊急会議の結果閣僚の総辞表を皇帝に提出す、即刻皇帝の裁決を仰ぎ度し」とあった。それは臨時政府の辞表であると共に皇帝の退位を促すものであった。

ドン・ペードロはその電報を手にするや、いよいよ来るべき日の到来を悟り、急遽ペトロポリスを降ってオーロ・プレート子爵と会談の後、退位の署名をなし、ここに五十年に及んだ第

二期帝政の最後となったのである。

他方デオドロ元師は、フロリアノ・ペーシヨット將軍と共にサンタ・アンナ兵營の門外に出で、おもむろに馬にまたがって軍帽をかざし、「ビーバー・ア・レプブリカ」と叫んだ。当時のデオドロ元師は半ば病弱であつたので、それは精魂を打ち込んだ叫びであつたことが想像される。

ここで述べねばならないのは、キンゼ・デ・ノベンbro革命は、皇帝ドン・ペードロに対する個人的反感によるものでなく、アメリカ合衆国やフランス共和国、アルゼンチン共和国の実例に照らし其の国家の進歩と繁栄は共和制によつてのみ得らるべし、との輿論が、軍部の帝政革命となつて表われたことである。

ドン・ペードロ二世は、稀に見る人格と教養を具えた傑出した皇帝であることは国民の等しく尊敬するところであつたが、彼には後継の男児がなく、しかも如何に優れた皇帝とても所詮人間である限り、その生命に永遠性がない。しかるに共和制なれば、国民の最も信頼する人物を大統領に推すことが出来るといふのが一般の声であつた。

云うまでもなく、キンゼ・デ・ノベンbro革命は僅か一日にして一滴の血も流さずに終結を見たのであるが、それはドン・ペードロ二世の、ブラジル国民を愛する至誠の決意によることを知らねばならない。

そうした劇的場面が、今から七十年前のリオのプラサ・ダ・

レプブリカにおいて繰りひろげられたのである。

(一九五九年十一月)

モンテローロ・ロバット

純ブラジルの児童文学を生んだ愛国著述家

ブラジルの文壇にサンパウロ州出身の著名人が現われたのは比較的新しく、十九世紀末からであるが、中でもモンテローロ・ロバットはその作品を通して愛国心を鼓吹した点で特異の存在をなすものである。

殊に彼の代表作「ウルペス」や「ジュカ・タツ」には当国の奥地の実状が種々の面から描き出されているので教えられる処が多い。

これ等の作品は欧州文学の影響を全く受けずして純ブラジルの背景と構想によって綴られている。しかもモンテローロ・ロバットについて特筆せねばならないのは、伯国の児童文学の先駆者たることである。

元来この国には児童少年のために安心して推奨し得る読みものに欠けていたところに着眼し、童心をより良く導くためにアデルセンやグリムス兄弟の童話の翻訳をなすと共に、ブラジ

ルの国情に最も適す児童文学を書いたことで彼は第一人者であろう。

又彼は単なる理想家でも机上の文学者でもなく、時には農園主となり、又は出版会社を経営し、米国の旅から帰ってはブラジルの経済独立のために鉄と石油資源の開発を叫び、私財を投じて石油試掘をなすなど、多彩にして変転極りない生涯を送っている。

彼が一九四八年七月四日に急逝したことはブラジルの文壇に計るべからざる損失であり、実に巨星去った感があった。当時モンテローロ・ロバットの肖像写真が各書店に飾られ弔意を表したことを人々は記憶するであろう。特にあの太く一線に続く彼の眉毛が特徴をなし印象的である。これから彼の生い立ちの概略を述べてみよう。

彼の本名はジョゼ・ベント・モンテローロ・ロバットで一八八二年四月十八日にパライバ平原のタウバテに生れている。

祖父トレメンベ侯爵はタウバテの旧家の出であって果樹園やパライズ耕地という大きな農場を所有し、経済的には恵まれていた。モンテローロ・ロバットは幼少の頃はジュカの綽名で呼ばれ、三人の子の中で彼が唯一の男児であった。パライバ平原に育った彼は、父と共に狩猟に出かけては山野を駆け廻り、土人の子供達と遊び戯むれたものである。

彼が六才の折、皇帝ドン・ペードロ二世がパライバ平原巡歴の途次、祖父トレメンベ侯爵の家に宿泊したことがあったが、

その時学者肌にて貴公子風の皇帝から彼は深い印象をうけている。

その後奴隷解放令が発令されてブラジルの社会に一大変革を齎らした。当時小学校に入ったモンテローロ・ロバットには高度の道義観が勉学の根底をなしているのである。

郷里タウパテの中学校を了えた彼は十四才にして聖市に出て大学予科への入学試験を受けたが、葡語が最小点であったとは将来の文学者として皮肉である。

彼は十五才の時に父を失い、次いで母に死別し、彼は祖父にとって唯一の「望み子」であった。従って祖父の希望によって彼は聖市の法科大学に入学している。

周知のように聖市法大は必ずしも法律家のみでなく、むしろ著名の文学者や政界人、新聞人を輩出していることで全伯に誇る存在であった。

当時の聖市は市内の各所に大きな農園が散見されたが、法大生はベレン区にあった果樹園や、キンゼ・デ・ノベンプロ街のカフェ・グワラニーに集合しては雑談し、気焰を挙げたものである。

モンテローロ・ロバットが未だ聖市法大に在学中に彼の朋友ベインジャミン・ピニエーロスがピンダモニャンガーバに週刊新聞を創立したについて、彼はその協力者として社説から論説、社会面に至るまで健筆を揮ったのが、彼の文筆家としての初登場

をなしている。同時に彼は聖市法大生の機関紙「オンゼ・デアゴスト」にも執筆し、彼の名は広く知られた。

かくして一九〇四年、モンテローロ・ロバットは法大を卒業し、郷土タウバテの友人知己がその祝賀会を開いた際の挨拶が奇智に富んで面白い。

「今日の祝福は私よりは祖父トレメンベ侯爵が受くべきである。何故かなるに私は祖父の志に基いて法大に学んだに過ぎない。しかも私は学校よりはロザリオ広場（法大附近の学生の寄り場）で時を過ごした方が多い。」

事実彼は法学には殆んど興味なく、ひたすら文学に精進したのである。

法大を卒業した同年、二十六才にして彼はタウバテに帰り、文壇への進出を目指し、キップリングやモーパッサンに傾倒してコント作家たるべくペンを執ったが、快心の作も出来ずして失望したことは度々であった。そこで画家になることも考えたがそれも成らず、あれこれと逡巡し懊悩するうちに或る機会に恵まれて、パウリスタ、ソロカバナ、モジャナのテラ・ローシア地帯の旅行に出かけ、その旺盛な生産振りに接して彼は新しい生命力の躍動を覚えた。

次いで彼はパライバ平原のアレーアス町の判事として赴任したが、新進地帯の活気と比べて廃墟にも等しい旧邑と進歩性に欠ける住居が彼をして退屈ならしめたのは当然である。このよなアレーアス町には大して事件や犯罪も起らず、従って若い

判事の仕事とでもなく、時折りサンパウロに出て文化の風に浴すのがせめても慰めであった。こうした環境にあつては文学への情熱も湧かずシエークスピアを読み始めては間もなく投げ出すのであつたが、或る日に週間タイムスを見るうちに一つの面白い記事を発見し、それを翻訳してエスタード紙に掲載し、八十ミルレースを得たのが彼の文筆による最初の報酬であつた。それは一九〇八年であつたが、当時彼は結婚して家庭を待たつた。

一九〇九年からアレーアス町に於いての自身の生活に取材して、「田園の判事」や「歪める口」のコントを書いてサントスのトリブナ紙に掲載した。更に「燈台」と二、三の評論をフオンフォン誌に発表した頃に、長女が生れた。

彼は引きつづいて幾つかの短篇小説を書いたがその程度で彼の創作慾を満足せしめるものでなく、飽き足らぬまま休職をとつて聖州各地を旅して思索し作品の構想を練つたが何も手につかぬ有様。大いに金も欲しいが、さて如何にして儲けるやで煩悶するのが関の山であつた。

ところが一九一一年三月に祖父が逝去して彼の生活を一変せしめた。つまり彼は唯一の相続人として祖父の農園の経営に当ることになり、文学は一時断念する他はなかつたのである。

しかしその間の田舎生活によつて、モンテローロ・ロバット独自の田園文学の生れたことが注目されねばならない。その頃の作品に、(Caboclo como Piolho da Terra)がある。

このようにして一九一三年となり、ミーリョやフェジョンの耕作に従事しつつ彼が眞に学び得たものは、都会のみに在ってペンを執る文筆家には想像もつかぬものである。

一九一四年の十一月に、彼は(Velha Praga)の表題の田園散文詩をエスタード紙に載せたが、著名人からの称讃の書面が机上に山積した。

そこで彼はいよいよ文筆に専念する決意をし、農園を売却して欧州見学に出かける予定を立てたが、欧州大戦の勃発となつて折角の計画に一頓挫を来たした。大戦中に彼は幾つかの優れた作品を発表して世間の好評を博している。

一九一七年に彼が三百頁から成る〈SACIPERERE〉を出したのが俄然センセーションを喚び、多くの文壇人からの激讃を浴びた。当時彼は農園を売却した金で、経営難にあつた(REVISTA DO BRASIL)を買収してその経営に乗り出した。同時に代表作「ウルペス」も脱稿の運びになり、経済的にも、創作の点でも得意の絶頂にあつた。

ここで少々説明を要するのは、「ウルペス」は初めからモンテローロ・ロバットが附した表題ではなく、或る日彼が連邦衛生局長アルツール・ネーバと共にイグアペ地方への旅行中に、脱稿近い著作の内容を語ったところ、ネーバは「ウルペス」としては、と提案したのでその名がつけられたことである。そこで一九一八年に彼は画家ウオース・ロドリゲスの表紙図案によつ

て「ウルペス」を出したが、これは案に反して大して売行きを示さなかった。その時の計算では初版一千部を売るに少なくとも五年を要すると云う悲観的なものであった。当時伯国の文学界は沈滞期にあつて、コエーリヨ・ネットの作品にしてもポルトガルで出版される状態であつた。しかし「ウルペス」が余り売れる可能性がなく思われたのは発売当初であつて、程なくブラジルの風土を題材とした内容が大評判となり、初版から二版、三版が忽ち売り尽くされる盛況を呈した。ルイ・バルボーザにしても、その演説にモンテローロ・ロバットの「ウルペス」を称讃したほどである。

このように、「ウルペス」は沈み勝ちの伯国文壇に覚醒の巨弾を投じた感があつた。かくして「ウルペス」は当国の農村社会についての興味ある研究課題を提供し、凡そ読書人の寄る処では同書が話題となつたものである。次いで「ジェカ・タツ」も出され、これ亦好評噴々たるものがあつた。

「ウルペス」によつて成功したモンテローロ・ロバットは、永い間の宿望であつた出版業を始めることになつた。何故かと云うに、その頃のブラジルの出版界は貧弱で或るものはポルトガルやフランスで出版されていたからである。かくして創立されたのがモンテローロ・ロバット出版会社である。参考までにその後に出された彼の代表作を年度別に挙げてみる。

シダーデス・モルタス

一九一九

ネグリーニャ

一九二〇

オンダ・ヴェルデ

一九二一

一九一八年末に出版会社を設立した彼は、その翌年に専用の印刷工場も所有したが、文筆家の彼には商人としての辣腕がないために、余りに理想に捉われて営業的に実績が挙げられず、遂に破産した。一つには一九二四年度の革命とそれに続く一九二五年度の大旱魃が大いに影響している。

しかしこのようにして破産した彼は出版業に対する望みを放棄せず、又してもコンパニア・エジトラ・ナシヨナルを設立した。それは彼の抱く夢の実現であり、当国に読書熱を起して書物の洪水を起すことであった。さて一九二一の或る日、出版会社の事務に疲れたモンテローロ・ロバットが友人トレド・マルタとシヤデレスのゲームをしている間に、相手のマルタが冗談半分に「よく泳げずして水流の中に死んだ小魚の童話」を語つたものである。それを何気なく聞いていた彼は大きなヒントを得て児童文学への興味を待ったのである。直ちに彼は友人から聞いた通りの「小魚の物語り」を書いたが、それについて様々の構想がわくのであった。そして「上向きの鼻の少女」を書き、同年有名な（O SACI）を發表して曾ての「ウルペス」同様の好評を受けた。

その他の児童文学書はお伽噺帳として三、四十頁の美しい挿

画入りのものを出したが印刷が高価につき、貧しい児童には購入不可能と知り、それを一般向きにするなど、彼はあらゆる面に気を砕いた。それ等は大人が読んでも面白く大いに学ぶものがある。しかも文章の美しさは純真な童心を培うに最適で恰かも月世界を望むような感を受けるのである。「上向きの鼻の少女」などは当時五万部の売行きを示したが、ブラジルとしては空前絶後のことである。その他のモンテローロ・ロバット児童文学書にのみついて述べても相当の紙面を必要とするので、それは別の機会に譲ることにする。

彼は一九二七年に伯国政府委嘱の商務官として家族同伴で渡米し、数年を過ごしたが、その間に鉄と石油の問題を深く研究したことは広く知られている。現在、ブラジルの重要課題となっている国産石油資源の開発を考えるにつけ、モンテローロ・ロバットの名が連想される。

彼は北米から帰国後は特に石油問題を叫び、そのために一書を公けにしたことは周知の処である。更に彼は私財によって石油の試掘をして失敗したが、それが一つの大きな刺戟となつていたのである。彼は内国石油問題のため南北を遊説し、入獄したこともすらもある。最後に加えたいのは、モンテローロ・ロバットの外国文学の翻訳である。それは夥しい数に上るが主なものにコナンドイル、ウエールズ、デッケンズ、キップリング、マーク・トローウエンなどがある。

このように彼は多端な生涯を送り、一九四八年七月四日のアメリカの独立記念日に他界したのは皮肉である。

ドン・ジョアン六世

日本移民にとって特に記念すべき一九五八年度が、ブラジルとポルトガルにも意義深い年であるとは面白い廻り合わせである。それは、この年が笠戸丸移民の五十周年に当たると同時に、ポルトガル王室がブラジルに遷居して百五十周年になるからである。

およそ四世紀半のブラジル史を通して、このポルトガル王室のブラジル移住ほど当国の政治、社会、文化の成長に大きな影響を及ぼしたものはない。世界各国の歴史を見ても、首都を他に移した実例はあるが、一国の王室或いは政府が本領土ならぬ遠い大洋を隔てた植民地に遷居したことは、女王ドーナ・マリア一世時代のポルトガルを以て唯一とするであろう。しかもそれが小人数ではなく、一万五千人の大勢が、三十数隻の艦船によつてポルトガル本国からブラジルに移住したのであるから、人類史始まって以来空前絶後の出来ごとといふべきである。この大事件が十九世紀初め、一八〇七年来から一八〇八年の一月にかけて展開されたが、その史的物語りの主人公が摂政王子ドン・ジョン（後のドン・ジョアン六世）であり、実にこれが

ブラジルの政治文化に新時代を生む動機となっている。

コロニアの人達には、ドン・ジョアン六世の名は縁遠く聞こえるかも知れない毎日のように手にする五首クルゼーロ紙幣の肖像の人物がドン・ジョアン六世であるから、よく見直して頂きたいあの肖像のドン・ジョアン六世は女性的な感じであるが、事実彼は背丈高く堂々たる体躯に似せず表面的に柔和で、典型的貴族の風貌を備えてた。

ブラジルの舞台俳優では、ジャイメ・コスタがドン・ジョアン六世の当り役で、一九五八年三月八日、ポルトガル王室のリオ到着百五十周年を記念して、彼がドン・ジョアン六世に扮し、他二百余名の俳優がそれぞれポルトガルの王族や貴族、政府高官に扮装して昔日の絵巻図をリオ市街に現出したことが当時の新聞に報ぜられた。一つ苦笑に耐えないのは、王室移住団の航海中に、特に婦人の頭髪を侵すシラムミ発生し、ドン・ジョアン六世の妃ドーナ・カルロッタは、そのために断髪を余儀なくされたことである。さなきだに余り美人でなかったドーナ・カルロッタとて、リオ到着の折の彼女の容姿は推して知るべしである。このドーナ・カルロッタこそ、当時十才のドン・ペードロ（後日のドン・ペードロ一世）の母君であった。

さて問題のドン・ジョアン六世であるが、彼は傑れた政治家であり、洗練された文化人であった。その政治家としての手腕は、徳川家康を想わせるが、ドン・ジョアン六世がバイア到着間もなく、カイルー子爵（ジョゼ・ダ・シルバ・リスボア）の

提案を容れ、鎖国状態にあったブラジルを開港し、諸外国との交易に乗出したことは、徳川の政策とは全く反対である。

順序を顛倒したが、何故にポルトガルがブラジルに王室を遷したか、その経緯を語るとして、ナ・ポレオン戦争について述べねばならない。

ところで、ナポレオン戦争に関しては、あらゆる書物で知り尽くされているので、今更めてそれを書くのは蛇足になるが、ポルトガル王室の遷居以来ブラジルの政治文化に顕著な発展を見たのは、間接に革命児ナポレオンに負うところが大きい。つまり、ドン・ジョアン六世はナポレオンのポルトガル侵略戦を遁れてブラジルに移住したからである。

トラファルガーの海戦に破れた風雲児ナポレオンの目指す唯一の強敵は英国であり、その攻撃作戦として対英の通商封鎖に全力を奉げ、ヨーロッパ各国の加盟を得たにもかかわらず、ポルトガルのみがこれに応じなかった。

当時ポルトガルの女王ドーナ・マリア一世は病態のため、王子ドン・ジョアンが摂政の任にあつたが、彼がリスボア港外に待機中の英国艦隊に望みを托しつつ、ナポレオンから差遣された交渉使節の提言を拒絶したところは相当の豪胆さである。

この報に接したナポレオンは己れの期待の裏切られたことを憤り、ジュノー大将を総司令官とする二万六千の兵力をもってポルトガル侵略戦を敢行することになった。

そこで英国は、この危機を避けるべく王室を一時的に、植民

地ブラジルに遷居せしめるようにドン・ジョアンに勧告した。

ドン・ジョアンは初めこの王室遷居案には頑として耳を傾けなかったが、時局の険悪化に鑑み、熟慮の末、大英断の下に王室のブラジル移住が決行されることになった。

ドン・ジョアン六世は、先ずレコール大將(後のブラジルにおけるラグーナ子爵)に命じて、敵軍通過の要路にあるセゼレ橋を破壊した。これによってジュノー軍の進軍を二日間遅滞せしめたとは大きな成功であった。

他方ドン・ジョアンは大洋の横断に少なからぬ恐怖を抱き、敵艦隊の奇襲や海賊に対する周到の用意をなし、大挙一万五千人を引具しての祖国出発が数日中にされたことは驚くべき手並みである。

かくして準備万端を整えた王室移住団は、三十数隻の艦船に分乗し、リスボア港を出帆したのが一八〇七年十一月二十九日の午後であった。この輸送船艦の半数は英国の軍艦であったところから、如何に英国がポルトガル王室のブラジル移住に援助を与えたかが解かる。

こうした出来ごとを夢想だにしなかったジュノー大將は、二万六千のフランス軍の精銳を率い、ポルトガル撃滅の自信満々としてリスボアに乗込んだのはよいが、それは王室移住団の出發した直後であったとは皮肉である。ジュノー軍が陸路スペインを経てリスボアに入るまでは、寒氣や物資欠乏のため想像に余る難行軍をつづけたことを思えば、ジュノー大將が齒を食い

しばって残念がったのは当然である。

後日ナポレオンが、セント・ヘレナに孤島の月を望みながら、自分の手から巧みに逃れたのは、ポルトガルの彼（ドン・ジョアン六世）のみ、と述懐したといわれる。

或る歴史家は、ジュノー軍がリスボアに侵入するや、王家移住団の艦列最後の帆が遥か水平線上に消えんとしていた、と劇的に叙している。

このポルトガル王室移住団の艦隊司令官はマヌエル・ダ・クレーニャ・ソート・マヨール中将で、副司令官はジョアキン・ジョゼ・モンテロー・トーレス少将であった。

このようにしてリスボア出発から五十四日の航海を了え、バリアに着いたのが翌一八〇八年一月二十二日であった。

当日はあいにく悪天候で、トードス・オス・サントス湾内の波浪高くして上陸不可能のため、ドン・ジョアンは一夜を港内に明かし、二十三日に上陸した。何しろ一万五千人もの大勢であるから、その上陸が三日間にも亘って行われたことが当時の記録に見られる。ドン・ジョアンは同年の三月初めまでバリアに止どまり、その間に開港令を公布したことは既に述べた通りである。

次いでドン・ジョアンのリオ到着は、一八〇八年三月八日で、当日の王侯貴族、政府高官の上陸の豪輩さは、リオの歴史初まって以来のものであった。港内の艦隊からの発砲に呼応し

てリオ要塞の礼砲が轟き、リオ市民の歓呼に迎えられてドン・ジョアン一行は上陸した。

それから数日を経、ポルトガル王室の輸送と警護の任務を無事に果した英国艦隊は、順風を帆にうけ、ユニオン・ジャック旗を掲げ、意気揚々として帰路についた。

ポルトガル王室の遷居によって、リオの空気は一新され進歩的なものが感ぜられるようになった。殊に一八〇八年十一月二十五日付の法令を以て、外国移民の導入と外国人に対する土地所有権が認められたことは、当国の社会に一般の進歩性を劃した。それまでにブラジノルに渡った外国人はコロニザドール（拓植民）、悪い意味ではインヴァゾール（侵入者）であつて、公けに認められたイミグランテ（移民）ではなかつたのである。それから約十年を経過し、一八一九年度に千六百八十三人のスイス移民によってノーバ・フリブルゴ村が形成されたが、これがブラジルにおいて正式に認められた移民村の創めをなしている。

ひきつづいて、リオ・グランデ・ド・スールのサン・レオポルド、カシアス、ベント・ゴンサルベス並びにサンタ・カタリナのサクラメント、ジョイン・ピーレ、ブルメナウにドイツ移民を主とする植民地が創設された。

周知のようにドン・ジョアンは一八一八年度に、リオにおいて載冠式を挙げ、ブラジルとポルトガルの王に即位してドン・ジョアン六世となったが、その前後に彼によって実現された文

化事業は相当のものである。

リオでの主な文化施設には、植物園、博物館、工芸学校、海軍兵学校、美術学校及び美術館、薬学校等があるが、それらについては何れ稿を改めて書きたいと思う。

ドン・ジョアン六世が優れた文化人であることは先に述べたが、彼がポルトガル本国の王室に在った時には、自ら宮廷楽団を組織し、その指揮者となったことを見てもその人柄が偲ばれる。

又、ドン・ジョアン六世によって、ブラジル最初のインプレッサ・ナシヨナル（官報）が発刊された。

現在リオの自然科学博物館と動物園のあるキンタ・ダ・ボア・ビスタは、いうまでもなくドン・ジョアン六世からドン・ペードロ二代に亘る宮廷であつたが、あの広大な荘園と建物は、エリアス・アントニオ・ローペスというポルトガル人の豪商が貴族に列するために、一八〇八年度にドン・ジョアン六世に献上したものである。従つて、あの高台に立つサン・クリストヴァ宮には、ドン・ジョアン六世からドン・ペードロ二世に及ぶブラジルの王政と帝政の歴史が秘められている訳である。

ドン・ジョアン六世は、長男ドン・ペードロをブラジルに残し、一八二二年四月二十六日に本国ポルトガルに去つたが、それもこれがブラジルの独立に大きな動因をなしている。

又、見方によっては、一八〇八年度の彼のブラジル移住が、

ブラジル独立の動機となっているとも云える。

ドン・ジョアン六世は、一八二六年三月十日に五十九才で長逝した。

ドン・ペードロ一世の横顔

九月七日のブラジル独立記念日が近づくにつれて独立運動の主要人物の面影が浮ぶが、あのイビランガ丘上に「独立か死か」の叫びをしたドン・ペードロ一世の生涯ほど多彩にして小説的のものはない。

彼は、一七九八年にポルトガルに生まれて、一八三四年に同じくポルトガルに長逝したが、ブラジルの独立宣言をした時に、彼は二十四才の摂政王子であったから、若くして既に世紀の偉業を遂げているのである。

彼は、一八一七年度に十九才でポルトガル及びブラジルの王子となり、又一八二一年にはブラジルの摂政の任につき、一八二二年には遂にブラジルの独立と共に皇帝に即位し、一八三一年度の退位までに目まぐるしい政変や動乱を経験している。

ドン・ペードロは、その比較的短かい生涯を通じて、ポルトガルとブラジルの二重国籍を有し、又ブラジルとポルトガルの二つの王冠を戴き、その後二度の結婚によってオーストリー王

家とフランス皇室並びにドイツのハウスブルグ王家との直接間接の血縁をもつなど、その伝記を学んで興味深いものがある。

数奇且つ変転極まりない彼の人生には、E uma Vida Fascinante の語が如実に当てはまるような気がする。彼の人柄を簡単に表現すれば、善悪の両端を併せもつ非凡の天才児であり、少なからず暴君風のところもあつたが、それが彼の人間的魅力ともなっているのである。従つて、ドン・ペードロの人物観は、歴史家や著述家各々によつて必ずしも一致していないが、ほとんどの書に放縦気ままの性格が描かれている。さりとしてそれだけで彼の人と成り全体を批評するのは当を得ぬであろう。彼には、事実自由奔放の性癖はあつたが、同時に俊才の素質を備え、特に語学に堪能で芸術をよく理解したことはドン・ペードロ二世に相通ずるものがある。

わけでもドン・ペードロ一世が文才に富み、詩人としての豊かな天分をもっていたことが、ドン・ペードロ二世にも影響しているといえる。つまり、ドン・ペードロ二世の詩的風格は偶然の賜物でないことが知られる。唯ドン・ペードロ一世がオーストリーの王女レオポルジナと結婚後に、ドミチラ・デ・カストロ夫人（マルケーズ・デ・サントス）を宮廷に招じて愛人としたボヘミアンの態度は、謹厳高潔な学者肌のドン・ペードロ二世と全く相反している。しかし、そうしたドン・ペードロ一世を、単に色恋に溺れた振舞いと見るのは当たっていない。彼は英才に多い性質として、理想とする女性を熱愛しまた熱愛さ

れることに生甲斐を求めたものである。それは強ち貞淑や賢婦型の人ではなく、燃えるような情熱を感じ得る女性であったことが想像される。つまり、レオポルジナはよき妻であり母であつて、ドン・ペードロに誠心から敬愛を捧げたが、彼の渴望する情熱さに欠けていた感がある。しかしながら、当のドン・ペードロがレオポルジナに相応わしい良き夫であつたかは疑わしい。

次はドン・ペードロの親子関係であるが、彼は最初の結婚によつて一男四女を恵まれたことは子福者として欣ばしい限りであつたが、ドン・ペードロ二世が五才の時に生別してポルトガルに去つたことは歴史に見る通りである。この点、彼等父子は家庭的に幸福であつたとは言えない。むしろ一国の王子又は君主なるがための悲劇であり、王冠による拘束であらう。

これからドン・ペードロ一世の生い立ちを見るとして、彼とナポレオン一世とに奇異な因果関係のあることを悟るのである。運命の星によるのか、ドン・ペードロは、ナポレオンがエジプト遠征をなした一七九八年に生まれ、ナポレオン崇拜の雰囲気の中に養育されたことが、彼の将来に大きな影響を及ぼしている。彼は幼年期に、フランス軍人を模倣した服を着用して、ナポレオンを稀代の英雄と讃えて父ドン・ジョアン六世を始め側近者を困らせたものである。

ところで、一八〇三年にナポレオン軍の総司令官ジュノー大將が軍事条約改正のためにリスボンを訪れた時の印象は、当時

五才のドン・ペードロにとって忘れ難いものとなった。

その後ナポレオンは、対英経済封鎖の目的で、ポルトガル対英国の通商協定の破棄をドン・ジョアン六世に迫ったがそれに応じなかったので、ナポレオンは怒ってポルトガルの攻略を企て、ジュノー大將を司令官とするフランス軍の精鋭をポルトガルに向けたのが一八〇七年であった。

そこで、軍略家としてよりは優れた政治家であったドン・ジョアン六世は、巧妙にナポレオン戦争を脱し、ポルトガル王家をブラジルに遷すべく家族を伴ってリスボンを出発したのが一八〇七年十一月二十九日であった。

トラファルガーの海戦に破れ、更にワートルローの敗戦によつてセント・ヘレナに流刑された風雲児ナポレオンは、孤島に配所の月を望みながらポルトガル攻略戦を追回し、「自分からうまく逃れたのはポルトガルの彼（ドン・ジョアン六世）のみである」と口吻をもらしたものである。さて、リスボンを出発したドン・ジョアン六世の帆船が大西洋を渡って次第にブラジルに近づき、一八〇八年一月二十三日にバイアのトードス・オス・サントス湾に着いた時にドン・ペードロは十才であつたが、夢に描いていた新天地を目のあたりに見て胸を躍らせた。

ドン・ペードロが天才的素質をもっていたことは先に述べたが、彼のブラジル移住前は一定の教育方針によらず数名の教師の指導を受けている。殊に科学と芸術については、型にはまっ

た教授法によらなかつたことが、彼をして自由に思索し、知識欲を伸ばしめた。ドン・ペードロが物心つくに当って、最初に読み書きを教えたのがマリア・ジュノペ・パ・ド・レーゴという女教師と、アントニオ・デ・アラビダ修道士である。

彼は幼くてフランス語を習得し、或いはラテン語の詩を読むなど驚くべき早熟さを示した。

又、彼の教育に関して最も大きな影響を与えたのは、ポルトガルの前デンマーク駐在大使ジョアン・ラデメーカーである。ドン・ペードロは、このラデメーカーとフランス系の僧侶レナート・ボアレーについて、主としてフランス語を学んでいる。又彼は、ブラジル移住後は英語の勉学にもつとめ、その洗練された会話は、彼の息女達の宮廷教師であつた英国人のマリア・グレアムを驚かしめたほどである。何ずれにせよ、彼の語学の才能は相当のもので、敬愛する人物に対してはよくフランス語の詩を書き綴って贈っている。文学的価値はさておき、フランス語とポルトゲースの彼の作詩は夥しい数に上るであろう。その代表的なものに、レオポルジナ皇后の死に接して綴つた詩、又は第二皇后アメリアに贈つたものなどがある。

更にマルケーズ・デ・サントスに捧げた詩はかなり多く、それらの事実からして彼は典雅の野性ともいふべき人柄であつたことが知られる。彼には女性的なまでに感情の繊細さがあるかと思えば豪放粗暴のところがあつた。

それから芸術面であるが、ドン・ペードロの父ドン・ジョア

ン六世並びに祖父ともに宮廷楽団の指揮者であったところから、彼は少年の頃にヴァイオリン、フルート、ファゴット、トランペートを奏する器用さであった

特に彼はハイドンとベートーヴェンを好んで研究する他に、進んで作曲学を修め、二十才台には幾つかの宗教音楽を作曲し、それが後日にハンブルグやウィーンで演奏された記録がある。ブラジルの独立後に広く歌われたブラジル国民歌は、ドン・ペードロ一世の作曲であることは今日では余り知られていない。

彼がブラジル皇帝退位後にパリ滞在中、度々巨匠ロシニと相会し、音楽について論ずることに多大の興味をもったものである。

次に彫刻と絵画にもドン・ペードロは少なからず熱意を示し、結婚後にリオの美術学校での授業を楽しみとし、或る期間は数カ月に亘って通いつめたほどである。あのリオの美術学校は、ドン・ジョアン六世によって創立されたものである。

レオポルジナの死には、その柩の上部のジャカラランダの木に、ドン・ペードロ自身が丹精こめて彫刻を施こしている。このレオポルジナの遺骨は、サント・アントニオ修道院に葬られていたが、サンパウロ四百周年を卜してイビランガの独立記念塔の納骨堂に遷されたことは人も知る通りである。

今一つドン・ペードロについて述べなければならぬのは、彼が十六才の頃からフリーメーソン連動に加担したことであ

る。

フリーメイソンは秘密結社と訳されていて、中世ヨーロッパの石工組合から出発したもので、相互扶助と友愛を高唱し、次第に組合員を増して世界的に強力な組織を形成したものである。これは遂に芸術、政治、社会運動にまで発展し、十七世紀となつては反ローマ教会の氣勢を揚げ、殊にポンパル侯の総理大臣の時代にこの運動はポルトガル全国を風靡した。

ブラジルでは一七九六年度に、カルメリッタ派の前僧侶アルメイダ・カマラによつて、フリーメイソンが設けられ、その後この運動はミナスのヴィラ・リーカとデアマンチーナに及び、一八〇一年度にはリオにフリーメイソン・ブラジル支部が設立された。それから二年を経てジョゼ・ボニファシオがその首長となり、次いでドン・ペードロがこれに参加し、結社員の黒服を纏つて夜間の会合に出席したことも度々あつた。

ブラジルでのフリーメイソン運動が最高潮に達したのは、独立直前の一八三年から一八二二年の五月にかけてである。

ドン・ペードロ自身がこのような急進的（或いは進歩的）な思想に傾き、実際運動に投じたことは、彼の血脈に革命児の血が流れていたからであらう。こうした彼の情熱に併わせ、ジョゼ・ボニファシオやゴンサルベス・レード、ジョゼ・クレメンテ及びレオポルジナ皇后などの背後の力が、遂にブラジルの独立を宣言せしめたものである。

ドン・ペードロは非常な精力家で、特に乗馬を得意とし、一朝必要時には駒に鞭打って短時間に長距離を突破することが自慢であった。

一八二二年の独立工作中には、四月二十一日にヴィラ・リーカを發し、二十五日の夕刻八時にサン・クリストヴァン宮に着くなど、或る折には八十レグアを三日間で馳けつけるという盜れるような体力があつた。

サンタ・カタリーナとリオ・グランデの旅の如きは、九十六レグアを驚くべき短時間に着き、当時のレコードといわれた。

独立の翌年、一八二三年六月に、彼はリオ郊外で疾走中、馬から落ちて肋骨を二本折つたが、一人で杖をついてサン・クリストヴァン宮の階段を登り降りしたという、王族に有り勝ちな生白い柔弱型でなく時には粗暴に見えるまでの剛健不屈さがあつた。又彼には、事に臨んで熱血児であると共に、時に冷血漢にすら感ぜられる点もあつた。

あのイピランガ丘上の叫びは、一八二二年九月七日にドン・ペードロが警護兵を伴つてサントスからサンパウロへの帰途に起つた偶然の出来事であるが、当日彼は少しく不快であつたにもかかわらず馬を飛ばせつづけて、予定よりも早くあの場所にさしかかったのであつた。

最後に、彼が豪放な性格であつたにしても、常にジャーナリズムの動きには細心の注目をなしたことを附言したい。

当時リオの代表新聞であったデアリオ・フルミネンセに、ドン・ペードロが匿名で執筆したことは一つの逸話ともなっている。

退位後のドン・ペードロについては、何れ機会を改めて語りたいと思う。

ドン・ジョアン六世と

作曲家ジョゼ・マウリシオ

一九五九年はヘンデル逝つて二百年、ハイドンの役後百五十年に当たるところから、ヨーロッパの主要都での演奏会は古興樂に集中された観があつた。ブラジルではバイアのサルバドールで催された音楽祭がその一例である。

さてブラジル音楽にバッハ、ヘンデル、ハイドンに比肩するものがあるや否や。この質問に対してはパーデレ・ジョゼ・マウリシオの作品をよく学ぶ時に答え得ると思う。

ところで或る時、ブラジル音楽史の古い文献に眼を通しながら二、三の面白い事実を知った。

一八六二年に、リオのプラツサ・チラデンテスにドン・ペードロ一世の銅像を建立するに当って、ドン・ペードロの作詩作曲の『ブラジル独立』の楽譜をセードロの函に収めて埋めたというのがその一つである。

また特に興味深く読んだのは、ブラジル古典樂の始祖ジョゼ・マウリシオと、彼の芸術的天分を認めて多大の援助を与えた文化人としてのドン・ジョアン六世である。

およそブラジルの音楽史はジェズイッタの土民教化に始まるが、十八世紀中葉までの作曲家の大部分は同教団とフランシスカン・カルメリッタ派の僧侶や修道士であった。

その実例として、リオ州ヴァソールラ郡のサンタ・クルース農園（リオ市から八十キロ）には、ジェズイッタ教団によつて組織される黒奴の楽団があつたが、一七五九年のボンパル旋風による同教団の追放のためそれが中絶した。

また他の古い記録では、十七世紀にバイアのセニョール・デ・エンジュニーニョ（製糖農園主）のパルタザール、アラゴンが、フランス系カルメリッタ派の修道士の指導の下に黒奴の楽団をつくり、それが永年に亘つて世評に上つたことが見られる。

何れにしても十八世紀末までは、ブラジルから世界に誇るほどの音楽家、特に作曲家は現われていない。しかしその頃は、未来の栄光の作曲家パーデレ・ジョゼ・マウリシオ、ヌーネス・ガルシアの技術的練磨と成長期であつた。史家アルフレッド・デ・トウネーは『ジョゼ・マウリシオ伝』の執筆中に世を去つたため、他の著者のマウリシオ伝が公けにされたのは近来のことである。従つて、ジョゼ・マウリシオがブラジルの音楽史上でどのような重要な地位にあるかが比較的知られていない。彼

の数多い作品の中で、宗教音楽の『レキウム』が最近ようやく「レコード」となって出た程度である。

ジョゼ・マウリシオは作曲家として傑出するばかりでなく、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルトをブラジルに紹介した功労者でもある。この点はメンデルスゾーンがバッハの研究に努め、永年埋もれていた『マタイ受難曲』を一八二九年に彼自身の指揮で世に紹介したにも似るものがある。

ジョゼ・マウリシオは一七六七年にリオ市に生れた。両親が黒人系であったので彼も黒色の肌を持っていたが非凡の音楽的素質を有し、ジュズイッタの門に僧侶たる教育をうけつつ音楽に精進した。しかも音楽の基本的指導はサルバドール・ジョゼ神父からうけたのみで、その後は彼の独学と優れた天分によって作曲家となったものである。

彼は長じてパーデレであると同時にリオのセー寺院聖楽団教師であり、ドン・ジョアン六世の懇請によって多くの宗教音楽を作曲した。

ここで少しくドン・ジョアン六世について語ると、彼が摂政時代にナポレオン戦争を遅れ、約一万五千人の大勢と共にポルトガルからブラジルに王室を遷したことは史上稀有の大事件だが、そのお蔭でブラジルが広く世界に知られ、特にリオ市が文化都の資格をもつに至った。

ナポレオンが英本国の軍事通商封塞の目的でポルトガルに対英テルシット条約の破棄を迫るや、英国はドン・ジョアンの態

度如何によつてポルトガルを一举に攻撃すべく艦隊を送つてリスボアを包囲した。それと時を同じくしてフランス軍の精鋭二万六千が、司令官ジュノー大将に率いられ、スペインを通過してポルトガルに接近しつゝあつた。

フランスと英国の何れに加盟すべきやに遽巡したドン・ジョアンは、大英断をもつて英国首相カニングの提案を容れ、病身の母ドーナ・マリア一世を伴つて植民地ブラジルに亡命するところは実に劇的である。

その折、音楽愛好家の彼は多くの蔵書の中から古典音楽書を持ち出すことを忘れなかつた。彼の音楽に関する蔵書は尤大且つ優れるもので、ドン・ジョアン四世から伝わる中世及びルネサンスの楽譜などがあつた。

ドン・ジョアン六世は摂政の時に彼自らが宮廷楽団を組織し、その指揮者であつた事実からしても単なる音楽愛好家ではなかつた。

また彼はヴァイオリンとオーボエを奏でる器用人でもあつた。

ドン・ジョアンのブラジル移住団には、ヨーロッパ各国に知られていた作曲家マルコス・ポルトガルが加わっていた。マルコス・ポルトガルは歌劇の作曲家として名高く、彼がジョゼ・マウリシオに与えた芸術面の影響は非常に大きい。

ポルトガルの亡命政府がリオに到着した時に、ジョゼ・マウリシオは四十才の働き盛りであつた。

ドン・ジョアン六世の後援を得たジョゼ・マウリシオは、その技能を最大限に発揮し、飽くなき精力と創造力を動員して多くの宗教音楽を作曲した。わけてもカンタータやオルガン曲に美しいものがある。

おそらくドン・ジョアン六世の滞伯期間がジョゼ・マウリシオにとって幸福の極地と生産の輝やかしい時であったと思うが、当時の作品の中やオラトリオはバッハやヘンデルをほうふつせしめる。

やがて一八一三年に、リオに、リスボアのサン・カルロス劇場を模倣したサン・ジョアン劇場が竣工したのを機会に、ヨーロッパの名高い音楽家とオペラ歌手を招聘したなどは、ドン・ジョアン六世の人柄を物語るものである。中でも特異の存在をなしたのがハイドンの愛弟子でありタレーラン家のピアニストの、シグモン・ネウコンであった。

ネウコンは直ちにジョゼ・マウリシオの敬慕の師となり、彼から少なからぬ指導をうけたことは、ジョゼ・マウリシオ個人よりはブラジルの楽壇に新時代を劃す結果となった。

つまりハイドンの芸術は弟子ネウコンを通し間接にブラジルの音楽界に影響を及ぼしているのである。このような文化的雰囲気は将来のブラジルの初代皇帝ドン・ペードロ（ドン・ジョアン六世の長男）が成人した。いうまでもなくドン・ペードロ一世の少年期からの音楽好きは、父ドン・ジョアンやジョ

ゼ・マウリシオ、シグモン・ネウコンに負うところが多大である。

またドン・ペードロ一世の妻マリア・レオポルジナは、オースタリーのレオポルド大公の令姪であり、そのレオポルド大公がベートーヴェンの後援者であったことを知るにつけ、面白い縁故といわざるを得ない。

ジョゼ・マウリシオは、ドン・ジョアン六世のポルトガル本国への帰還九年後の一八三〇年に六十二才で他界した。

彼の巨作は一八一六年に完成したミサ曲の『レキエム』である。この楽譜はバロージョ・ネットの監修によって一九三三年に出版され、同年ビラローボスの指揮の下に公開演奏された。

バイアの特徴

バイアーナ

(VOCE JA FOI A BAIA NIGA?)

<NAO>

<ENTAO VA>

この訳文をあえてつけないが、これはバイアへの招待の名文句で、日本調に云えば『バイアよいとこ、一度はお出』の意味にも通ずる。

さて、バイアを知らずしてブラジルを論ずるなかれといわれるだけに、バイアの風物のみを叙しても大冊の書となる、そのバイアとは主に首都サルバドールのことだが、此の町の特徴は多数の教会と黒人系の住民であろう。とくに黒人女がサルバドールの風土色を代表するものである。

もし世の中に黒バラがあるとすればバイアーナはそれに相当し、彼女たちによってバイア独特の美が保たれているとも云える。

バイアーナを文字通りに訳せばバイア生れの女性だが、通俗的にはバイアの黒人女（ネグラ・バイアーナ）ということになる。それには、黒光りのするような漆黒から褐色糖を思わせるムラタまでの幾つかの雑婚系統がある。

ところがナベ墨のような黒色の女ほど性温順で何となくブラジルの的な親しみを与える。あの古色を帯びた初期コロニア風の家々の立ち並ぶ街路に、黒人女が大きく長いサイア（スカート）をふり動かしながら悠然と歩を運こぶ様はサルバドールの特異風景である。従つてもしサルバドールから黒人女の姿が消え失せて白人の女性だけになったとすれば、古寺の中に電気冷蔵庫を据えたような不釣り合いになる。

一五四九年三月二十九日、ブラジルの初代総督トメー・デ・ソーザの便乗船が風光明媚のトードス・オス・サントス湾に投錨した。そしてサルバドールの町が建設され、それがブラジル

め首都となった。そこでサルバドールにはシダーデ・デ・ト
マー・デ・ソーザの別称がある。つまりブラジルの建国史はバ
イアに発し、またバイアがブラジル人の発祥地でもある。

しからばその当時のブラジル人は人類学的にどんな系統かと
いえば、先住民の土人と白人（ポルトガル人）の混血児が主で
ある。それについてアフリカ系の奴隷女と白人の混血児（ムラ
ト）がブラジル人として登場することになった。

いうまでもなく十六世紀末に始まる砂糖工業の勃興により、
アフリカから黒人奴隷の入れられたのがネグラ・バイアーナの
起源となっている。

開発当時のブラジルに移住したポルトガル人の男子はほとん
ど白人女性を伴っていなかったので必然の結果として土人女性
と関係を結びその混血児のマメルコが生れた。その後アフリカ
から黒人が入れられるようになってからポルトガル人は土人女
性を顧りみなくなつたというから、黒人の奴隷女にはよほど肉
慾を満たす魅力があつたらしい。それ以来『ポルトゲースはネ
グラが好き』の通り言葉が出来たほどである。

或る精力絶倫のポルトガル人は、幾棟かのセンサーラ（奴隷
小舎）に数十人の奴隷女を擁し、無慮百十数人の子を産ませ
た、との実話がある。こうなると人間よりは種馬的存在であ
り、多産系の白色レグホンも顔負けといわざるを得ない。

これはブラジルの開招初期に渡来した植民者の自由奔放な性
行為であり、その副産物としてのムラトやムラタがどしどし生

れた。しかもそれ等の混血児がアフリカから輸入する奴隷以上の相場となったのは皮肉である。そこで採算上ブラジルでムラトを生む方が面白く、或るセニョール・デ・エンジュリーニヨの如きは屈強の男子に賞金を与えて奴隷女との性交をなさしめた、とはまさしく獣行為であり、いかにも殺伐な開拓期ブラジルの空気を思わせるものがある。

特に体質的に優れ、且つ器量の実しいムラタは人々から大いに歓迎され、その価格はアフリカ直来の奴隷女の数倍ともなった。

このようにポルトガル人はアングロ・サキソンや北歐民ほど血の純潔に捉われずに移住地の土人や黒人と混血したところに、植民期ブラジルの民族構成の特異性がある。また奴隷時代には、子をもつ黒人女で白人である主人の子の乳女(アマ・レイテ)をつとめたのが沢山ある。これは俗にマエ・プレータといわれ、自分の子ならぬ他人の子を育てる役目であり、そうした奴隷女の悲喜の感情と哀れな境涯を歌った幾つかの民謡がある。

サン・パウロのパイサンズー広場のあまり自立たない場所にマエ・プレータの銅像があるが、あれは典型的ネグラ・アフリカーナの容貌をあらわしている。現在老齢にある名門のブラジル人の父母や祖父母、奴隷女を乳母として養育されたものが相当多いことが想像される。

バイアーナに親しみがわくのは一面このような過去の事実

よるかも知れない。つまり、現在のブラジル人の祖先の乳母としての情愛につながるものがあるからだ。この親しみが当のブラジル人ばかりでなく、外国人にも共通するところにバイアーナの魅力がある。

ところで必ずしも全部の奴隷女が白人の子を産んだのではなく、数代にも亘って彼等同志の結婚をして純黒人の子孫を持続しながら現在に至っているものも少なくない。バイアではそれがいうととろの生粋のネグラ・バイアーナである。

およそ十六世紀末から十七世紀半ばまでにブラジルに入れられた大部分の奴隷はパンツー族であり、後になってスダン族が入れられた。そのためかパンツーとスダン文化がブラジルの黒人文化の主流をなしている。それは特にバイアーナの風習や宗教式に大きな影響を及ぼしていて、一見奇異に感ずるが、これがまたバイアの特徴ともなっている。

先ず、バイアーナの服装から述べるとして、あのカルナヴァルの踊り子さながらの大きく長いサイアをはいて頭上に頭巾を巻き、肩にショールをかけ、大げさな首飾りと耳飾り、腕環を付けているのが特徴である。この中で頭巾はスダン地方の回々教徒の服装を代表するものと思われる。

さて、サルバドールの守護神は、セニョール・デ・ボンフィンであり、これは曾てカトリック教会に属したがその教会が黒人に強奪され、爾来黒人バイアーナのものとなった。セニョール・デ・ボンフィンの祭典は現在では黒人特有のもので、その

宗教儀式は迷信に終始し、見てみると馬鹿らしく退屈なシロモノでもあるがそこにまたバイア色が表われている。

このお祭り当日にはネグラ・バイアーナはあらゆる工夫をこらした盛装をする。刺繍した大きなサイアに絹布の頭巾、しかもビロードの靴をはき、頭上に沢山の花を飾った鉢をのせて市街をねり歩くのはけだし壮観である。結局サンバ踊りの服装はこれを模倣したものだ。

が、その他にも黒人の宗教儀式として名高いものにカントンプレーやマクンバがある。

サルバドールの市街には名所にバイアーナの食物を売る野外店のあつまるのが目立つ。それはサルバドール名物ともいうべき焼餅やお菓子、団子、その他のバイア料理で、その代表的なのが『カルルー』『カンジーカ』『コカーダ』『ツツー』『クスクス』『ペ・デ・モレキ』『アカラジェス』『アブラース』などである。大体においてバイア料理の特徴は胡椒で調味されていることで、これはあの暑い気候のせいであり、この点はインドやマレー料理に似ている。外国人の観光客がこのバイア料理を立食いしているのもサルバドール独特の街頭風景である。また話し合わせたかのように白いサイアをはいたバイアーナが愛嬌をふりまきながらお客に応待する様も微笑ましい。

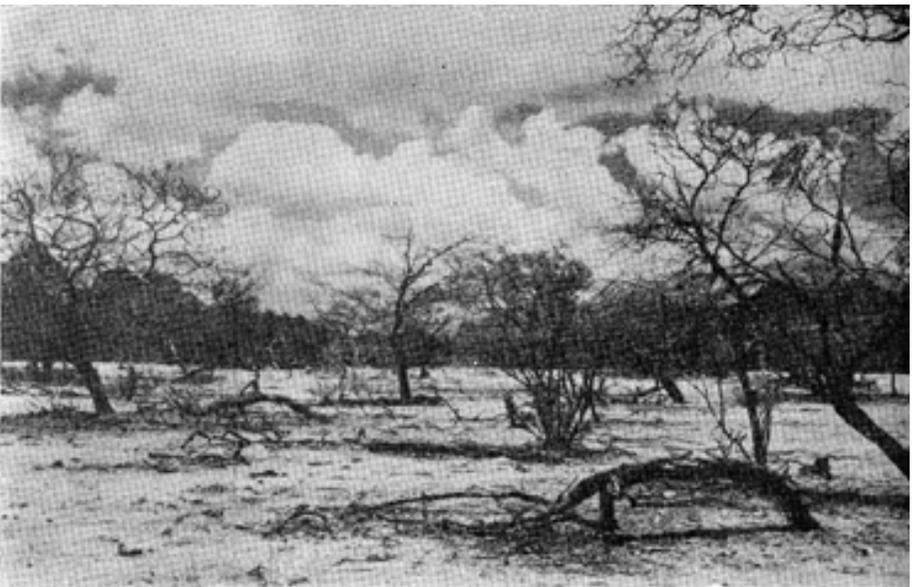
ネグラ・バイアーナは、たしかにバイアの花である。

熱風吹きまくる半砂漠地帯

カアチンガ

過日、バイアとベルナンブーコ州境近くのペトロリーナを本拠として、サン・フランシスコ盆地とカアチンガ地帯の農業調査を専門に努力している岸陸弥氏が令嬢と共に来訪された。そして国民の研究と体験談を聴けたのは大いに参考となった。おそらく現在、北東ブラジルの半砂地帯の農業の研究に挺身する日系人は岸氏をもって唯一とするであろう。私は同氏と語りながら日系人の中にこのような熱情家のあることに誇りと力強さを感じた。

岸氏はカアチンガ地帯に栽培されたメロンをわざわざ持参されたが、それを試食するにアメリカの帝国平原に作られるキャントロープと同様の美味さである。またかつては耕作不可能といわれていたサン・フランシスコ沿岸の乾燥地が今ではブラジル第一のセボラ（玉葱）の産地となりつるのは何を物語るであらうか。しかもその生産期が南部諸州と正反対であるためリオヤサンパウロの市場に年中を通じて多量のセボラが現われるようになった。これは北東ブラジルの篤農家のお蔭といわねばならない。特に品質においてノルデステ（北東部）産のセボラは優秀で味もよいとの定評がある。



炎天下の乾燥地カアチンガ

アマゾン開発も西部への進出も必要だが、同時にサン・フランシスコ盆地やノルデステの旱魃地帯の農業経営も考究されて然るべしである。しかし何事でもメーザ・レドンダ(円卓会議)の理論だけでは解決されない? 実際に現地に乗出して自然の猛威に挑みながら農民を指導し、開拓と生産に献身する人物こそ要望される。

ブラジルの中央政府ではCOMISSAO DE VA-LE DO SAO FRANCISCO (サン・フランシスコ盆地開発委員会)やノルデステ産業振興委員会を組織して、これに莫大の予算を計上しているが、何ほどの実績もあげていない現状である。ノルデステの各

地に築かれているアスーデ（人工貯水池）にしてもそれが殆んど乾からびて一滴の水もないのはどうしたことであろうか。これではノロデステの開発と早魃防禦も遠い理想論である。

さてサンパウロやパラナのみを知る人にはカアチンガとはどんなものか想像もつかない。甚だしいのはカアチンガを『悪い臭気』と早合点する人がある。カアチンガは珍しくもCATINGAと書く。つまりAが二つ続く綴りがブラジル語では変わっている。私がカアチンガの単語を初めて知ったのはエウクリーデス・ダ・クーニャの名著『オス・セルトンエス』を読んだことにある。同書の第二部『土地』の地理的描写にノロデステのセルトン地帯のカアチンガについて詳述されている。

『オス・セルトンエス』の本論をなすカヌードスの叛乱は十八世紀末にバイアのセルトンに起った社会的悲劇である。あの一年余にも及んでカアチンガの炎天下に展開されたジャグンソの叛乱を単なる一揆といえればそれまでだが、その原因と叛乱の性格がよく究明されねばならない。云いかえれば何故にカアチンガが叛乱の舞台となったかである。

『オス・セルトンエス』には著者エウクリーデス・ダ・クーニャ自作のバイアのカヌードス一帯の地団が挿入されているが、それによるとケマードス以北のモンテ・サント、タンベ、カルデーロン、ロザリオ、カヌードス、ジョアゼーロは何れもカアチンガ地帯に所在することが知られる。

カアチンガは俗に MATA BRANCA (白い森林) といわれ、ノルデステに存在する旱魃地である。北東ブラジルに散在するカアチンガの総面積は五十万平方キロメートルと推定される。参考までにカアチンガ地帯の占める面積の比率を各州別に記せば次のようである。

ベルナンブーコ	六六パーセント
パライバ	六五〃
リオ・グランデ・ド・ノルテ	六五〃
アラゴアス	六三〃
パイア	三八〃
セアラ	三五〃
ピアウイー	二三〃

このように或る州の如きはカアチンガが全面積の半分以上であるのを見てもカアテンガの利用耕作法を考えることが如何に大切かが解る。

一つ重要問題は北東ブラジルの河としてはサン・フランシスコ河とその支流があるだけで、他にほとんど小川とてなく、従って如何にして配水と灌漑をなすやである。バイア、のバザ・パリス川も川とは名のみで乾いた大川床が一つの線をなしてつづいているに過ぎない。カアチンガは低雲で覆われることは極めて稀で、常に薄気味悪いまでに透き通った青天から強烈な日光の直射をうけている。その酷熱たるやサンパウロ、パラ

ナの暑さとほ全く異なり、労働者のシャツやズボンが汗と洗濯よりは太陽熱のために短期間に破れるとは驚くばかりである。

カアチンガには判然たる季節的变化はないが俗にヴェルデといわれる冬季が三ヶ月から六ヶ月、『セツコ』という夏季が約七ヶ月だが、ともすると冬季なしに二十ヶ月も乾燥期のつづくことがある。その時は文字通りの熱砂地獄で、数ヶ月も熱風吹きまくるとは聞くだに怖ろしい。特に夜間の風が物凄く、いまにも家を吹き例さんばかりとはそれを実際に経験した人でなければ想像もできない。このような土地の住民に限って熾烈な愛郷心があり、時に彼等は地方に出稼ぎしても郷土に降雨があった便りに接すれば急いで帰って行くのは涙ぐましいものがある。そして彼等の常食である

フェージョン・デ・コルダというカアチンガ特産の豆を蒔きつける。この豆の味は義理にもうまいとはいえない。

カアチンガ地帯の住民のほとんどはカボタロ系でよく粗食に耐え、概して体躯小柄で痩せているが強靱な体質であることが注目される。カアチンガの雨量は実に不規則でセアラ州の例を見るに最も降雨の多い三月から五月にかけて五〇〇から一、〇〇〇ミリ、或は五〇〇ミリ以下の年もある。平均気温は最低二三・六〇度、最高三二・二二度である。もし奇蹟的に順調な降雨に恵まれるなればカアチンガ特有の植物が一斉に伸びて緑色を呈する果しもなくつづいている。

植物にはカアチンガ特有のサボテン科と灌木が見られるが、

それ等についてはエウクリーデス・ダ・クーニャの『オス・セルトンエス』に詳細に叙されている。牧草ではよく早魅に耐えるカピン・パナスコとカピン・シモーゾがある。これの栄養価は相当のもので牛馬は好んで食べる。サボテン科では代表的なのはカベサ・デ・フラード、マンダカルス、シケシケ、ジュアゼーロ、マカンビラスなどでこれは山羊や牛の飼料として貴重なものだ。

しかしこれ等のサボテンにはトゲがあるので農民は丹念にそのトゲを除いて山羊に与える。さすがに牛はシゲシゲのトゲの附いたままをよく食べるがその事と胃の頑丈さに感心する。カアチンガの植物のみを研究しても興味つきないものがあるが、中でもカベサ・デ・フラードはその名の通り円球で、僧侶の頭の形状をしているのが面白い。

あの青空にカアチンガの象徴のように堂々と伸びてメキシコの砂漠地帯のサボテンを思わせるのがマンダカルスである。シケシケは多くの枝を張り小さな沢山のトゲをもつのが特徴である。カアチンガと聞けばシケシケを連想せしめるほどこれはカアチンガの代表的サボテン科の一種である。

灌木ではウンブゼーロとイコがよく知られている。中でもウンブゼーロはこんもり笠のように茂り、カアチンガの住民の間では『聖なる木』とされている。

カアチンガの灌木はどれを見てもすくすくと成長しているものではなく、枝の所々に瘤を形成して湾曲するのは強烈な早魅へ

の抵抗を物語るものである。

カアチンガは北東ブラジルのセルトンにのみ存在する特殊の農民社会であり、地理、地質生物学的見地から幾多の研究素材を蔵している。

。パライバ出身の天才画家

ペードロ・アメリカ

パライバ州から数名の傑物が出ているが、その中の一人が天才画家ペードロ・アメリカである。

彼の生涯について述べるとして、伯人画家で祖国ブラジルの他に芸術の国フランスやイタリアで彼ほど名声を博したものはないであろう。

曾てイタリアのフロレンスに於いてペードロ・アメリカの個展が催されるや、ドン・ペードロ二世はテレザ・クリスチナ皇后を伴ってその発開式に臨んだといわれる。当時、ペードロ・アメリカの個展参観者は十万人に達する空前の盛況を呈し、彼の名は欧州全土に知れわたったのである。

リオ市の国立美術館には特にペードロ・アメリカのサロンが設けられて彼の力作が蔵されているのを見ても、如何にその作品が伯国の誇りであるやが解る。又、聖市のパウリス博物館の伯国独立記念堂に飾られる『イビランガ丘上の叫び』もペード

ロ・アメリカの作品で、国宝的名画であることは敢えていうまでもない。

今から百十年前、パライバ川のアレーア町にダニエル・エドアルド・デ・ファイゲレードと呼ぶヴァイオリン弾きがいた。尤も道楽は彼の音楽で、本職は小さな雑貨商であり、その妻もグランデーロ・、デ・メーロという老音楽家の娘であった。

アレーア町は古色を帯びた小邑ながらも練瓦造りの中央教会とグランデーロ老人やダニエルによって組織される音楽バンドをもつことでも有名であった。このアレーア町こそ伯国の天才画家ペードロ・アメリカの誕生地である。

彼は温厚な人物で音楽愛好家の、ダニエル・デ・ファイゲレードの子として一八四三年四月二十九日に生れている。幼少めペードロ・アメリカはペドリーニョと呼ばれていたが、彼は六、七才の頃から木炭や鉛筆をもって牛、馬、犬、鳥を描き人々を驚かせたものである。或る時には、昔日のパライバでの名僧といわれたセラフィン師の肖像を紙片に描いたのが少年の作とも思われぬほど優れているので大評判となり、人々から乞われるまま彼は百枚もの同じ肖像画を作り上げている。

数多いペードロ・アメリカの少年期の逸話として次のようなものがある。彼ほ或る日、父の店の白い壁に、店内に並べられていた椅子の絵を描いた。その絵が恰かも実物同様なので、それにかけてようとして壁際の空間に転んだ一老人があった。次いで彼はその椅子の絵の上に一羽の鶏を描いたが、それを人々が

評して「実物の鶏との差は囁かないのみだ」と。

それ等は絵画に対する基本的指導を誰からも受けることなくしてペードロ独自の考えと器用な手によって描き出されるものであった。アレーア町の住民は誰言うともなく、あれほどの天才児は万難を排してリオ市に出し、国立美術学校に入れるべきである、と力説した。

ところでペードロにとって好機が到来した。それは一八五二年度であるが、フランスの博物学者ルイ・ジャック・ブリネーを団長とする十数名の科学者で組織された博物調査団がフランスから着伯し、パライバ州旅行の途次アレーア町を訪れた事である。如何にも教養高そうな立派な学者連が美しい馬に乗ってアレーア町に着くや、住民や物珍らしげに中央教会の広場に集合した。そしてふとしたことから調査団長ブリネーが天才少年ペドリーニョのことを耳に入れ、早速ダニエルの雑貨店を訪れたのであった。

如何に生れながらの天才児とても機会と環境を得ずしてはその天分を磨き且つ發揮出来ない。ペードロ・アメリカの画家としての将来は、実にこの博物学者ブリネーの訪問によって決せられたのである。

意外にも著名学者の訪問を受けたダニエル夫妻は大いに恐縮したが、その目的がペードロの描いた絵を見たいと知って二度驚愕した。やがて数枚の絵を見ていたブリネーの表情は感服を過ぎて怒っているかに見えた。そしてペードロに会いたいと

て、問題の少年がその面前に呼ばれた。ブリネーは少年ペードロに握手をしながら「実に素晴らしい、立派な画家だ」と満面に笑みを浮かべて称讚した。彼が語をつづけて云うに、(我が博物調査団は実物採集の他に沢山の標本図を描かねばならぬが、その画家がなくて困り抜いている。どうかペードロを画家として団員に加えて欲しい」と切望するのであった。

何しろペードロは当時九才の少年で初等教育すら完了していなかった。両親は返答に窮したが、当のペードロは喜んでブリネーの調査団に参加する決意を示した。外国の有名な博物調査団に少年ペードロが加わるのはアレーア町を初めブラジルの誇りであるとしてアレーアの住民の意気揚々たるものがあつた。

流石にブリネー調査団は、あらゆる必要物資を豊富に取揃えてある上に学者のみで組織されていたので、踏査旅行中にペードロは程々の学課について教えを受けたのは大きな恩典であつた。しかし交通不便の百年前のこととて、奥地の調査旅行には想像以上の困難があつた。炎天下の山野の跋涉、雨天の野営、藪蚊に攻められる真夏の夜の旅、或いは食糧欠乏のためマンジョカ粉と固形砂糖だけで十数日を過ごすなど稀でなかつた。ところがこのような試練によつて少年ペードロは見違えるほどの体格と健康な血色を帯び、加うるに専門の絵画の他に博物や語学の知識を大いに高めることが出来た。

かくして二年を経過し、ペードロは十才の時に立派な教養を身につけて懐かしい郷里アレーアの我が家に帰つたのである。

その翌年、ペードロは十一才となって永年の宿望が叶えられ、リオ市のドン・ペードロ二世高等学校へ入学と同時に宮廷所属の美術学校に入ることが出来た。この美術学校は、ドン・ジョアン六世の時代に貧しいながら天分に恵まれる若き芸術家援助の目的のために設立されたものである。

ペードロは高等学校に於いては総ての科目に優秀の成績を示し、又絵画に至っては卓抜する技能によつて教師を驚歎せしめた。当時彼はサン・ジョアン教会の質素な一室を宿舍としていたが、過度の勉学の疲労のためか、或る時遂に病臥し高熱に呻吟した。その頃のリオ市には黄熱病やコレラが流行し、決して現在のような近代的な衛生都ではなかったのである。しかし十数日を経て彼は小康を得、次第に健康を回復しつつ、或る時に思いがけないことが起つた。それは、突然皇帝ドン・ペードロ二世が彼の病床を見舞つたことであつた。当日の感激はペードロ・アメリカの生涯を通じて忘るべからざるものであつた。その後ペードロアメリカは、ドン・ペードロ二世の後援と年金を緒て欧州に留学することになつたのである。パライバ州の小邑アレーア出身の一少年にとつてこの上もない榮譽といふべきである。それは一八五九年、彼が十六才の時であつた。

芸術家憧れの都パリに着いた彼は曾て学んだフランス語が大いに役立ち、画道に修業を積む傍ら他の学課の勉学にも精励した処に資明さがあり、彼をして画家として大成せしめたものである。

彼がパリーの美術学校に於いて当時の画壇での著名人の教導を受けたことは幸福であった。又彼は余暇を利用して欧州各国を放浪し、北部アフリカまでも訪れている。その頃彼はローマ法王九世の肖像面を描き人々の絶讃を博した。

一八六四年となって彼は帰伯し、リオ市の美学校教師となったが、その期間に幾つかの大作を描き上げている。ペードロ・アメリカの傑作中の傑作として特筆すべきものに、パラグワイ戦争の史的名画「アバイーの戦闘」がある。この名画の完成に彼は二年余の期間と飽くなき熱情と精力を傾けている。事実この画面から受ける迫力は他に類を見ない。

その後ペードロ・アメリカはサンパウロ政府の懇請により「イビランガ丘上の叫び」を画題としてあの巨作を完成し、「アバイーの戦闘」と共に伯国の不朽の名画となったのである。ペードロ・アメリカは、リオ市美術学校在学中から中年までに二十数個の栄誉章を待っている。他に伯国皇帝とローマ法王よりの名誉授勲着である。

ペードロ・アメリカは一九〇六年、六十三才にして没したが、彼の作品を見るにつけ溢れるような強烈な筆致と高雅な風格が偲ばれる。

十九世紀ブラジル画壇の巨星

アルメーダ・ジュニオール

日伯毎日新聞がサンパウロのグロリア街三百二十六番の旧家を買収し、それを取り壊わして社屋を新築するとの話を聞き、好奇心から先日問題の旧家を見た。

この旧家は、画家アルメーダ・ジュニオールのかつての住宅であったことが家の前面壁の青銅版に刻まれている。その青銅版は一九五〇年五月八日のアルメーダ・ジュニオール生誕百周年を記念して設けられたものである。また前面の広場にラルゴ・アルメーダ・ジュニオール（旧称ラルゴ・サンパウロ）の名称がつけられたのは、彼の名を永久に止どめるためである。

ところでアルメーダ・ジュニオールの名によって連想されるのは、サンパウロのムゼウ・パウリスタ（イピランガ博物館）に秘蔵されるブラジル名画の一つである「パルチーダ・デ・モンソン」である。あれはアルメーダ・ジュニオールの代表作で、モンソン隊が僧侶の祈祷を得てボルト・フェリースを船出して奥地探険に向う場面を描いたものである。（註、モンソン隊とは十八世紀から十九世紀初期にか専ら水路によってサンパウロ奥地とマツト・グロツソの探険をした柘入団の総称、恰かもバンデイランテスのごときもの）。

十九世紀のブラジル画壇の惑星的存在としてはビートル・メーレレス、ペードロ・アメリコの二人と相並んでアルメーダ・ジェニオールを挙げねばならない。この中でビートル・メーレレスはサンタ・カタリーナの出身で、リオの帝室美術学校の名教授として間こえ、その代表作にはブラジル発見の「プリメイラ・ミサ」とオランダ戦争の「グワララペスの戦闘」並びにパラグワイ戦争の「リオシユエーロ海戦」がある。またペードロ・アメリコはパライバ生れで、その代表大作としては「アバイーの戦闘」と「イピランガ丘上独立の叫び」がある。

この点アルメーダ・ジェニオールの作品には比較的人物画が多く、特に晩年にはカイピーラやカボクロの生活に取材したものがあつて、その画面にはいかにもブラジルの味わいが溢れている。

彼の活動期はおよそ三つに分けられるが、第一はリオの美術学校時代、第二はフランス遊学中にアレキサンダー・カバネルに師事した期間、第三はフランスから帰って後の思想、技術的に円熟した彼独自の活動期である。

彼の本名はジョゼ・フェーテス・デ・アルメーダ・ジェニオールで、一八五〇年五月八日にサンパウロ（プロビンシア）のイッー市に生れた。

少年時代の彼は臆病小心で人前で自説を主張することもなく、鉛筆を持っては好んで人物を描き、単独でチエテ河畔に

立ってその風景に見とれ、種々の空想を抱いて胸を躍らせたものである。それが後日の大作「モンソンの出発」の構想をなしたともいえる。

そもブラジルが絵画や彫刻の芸術面に顕著な進歩を見たのはドン・ジョアン六世によって王制が布かれて以来であり、殊に一八一六年度のフランス美術使節の来訪に負うところが大きい。従つてこのフランス美術使節の訪れの刺戟がなかったなれば、あるいはビートル・メーレレスやペードロ・アメリカ、アルメーダ・ジュニオールの画家を初め、アレジャーニヨやメストレ・ヴァレンチンの芸術も人々に理解されなかつたかも知れない。

イターは十七世紀にドミンゴス・フェルナンデスによつて開拓された町で、その開拓史に由緒深い旧家や教会が多い。アルメーダ・ジェニオールは父母の慈愛を受けつつ豊かなカトリックの宗教的雰囲気の中に成長した。

歳月は過ぎ、彼が十八才となつた時に二十五才のペードロ・アメリカは皇帝ドン・ペードロ二世の後援の下にヨーロッパに遊学することになった。この報に接したアルメーダ・ジェニオールの両親は、わが子の画家としての素質を磨くべくリオの帝室美術学校への入学を切望した。当時ドン・ペードロ二世は将来有能の芸術家の保護者として国民から敬慕されていたが、その理解ある後援によつて芸術に精進した画家や音楽家は十指を屈するものがある。

アルメーダ・ジュニオールが郷土イツイを発つてリオに向わんとする時、ペードロ・アメリカはノルツセルの柔術展で入選の栄誉を得たのであった。さなきだに向上心に燃えていたアルメーダ・ジュニオールは一層発奮し、勇躍首都リオの地を踏んだ。

かくしてリオの美術学校に入学した彼が、ビートル・メーレスとフランス人のジュレー・シャワレルから指導されたことは幸であった。

それから数年が流れ、一八七六年度に彼は芸術の国、永年来の宿望の国フランスに遊学することになった。その当時のフランスの画壇にはコロ、カバネル、ルイ・ダピエ、デラコー、ジャン・クロ、プルドン、ボアリー、マーガリー・ジュラーなどの逸材が覇を競っていた。

アルメーダ・ジュニオールは六年間フランスに滞留したが、その間四度にわたってサロンに出品している。その作品の或るものは完成までに一年余を費やしているが、それらにはモンマーとルーヴル近傍の風景を描いたものが多く、筆致もフランス流の影響を受けているのは、一面当然である。

彼がフランスからブラジルに帰った直後二、三年の作品には宗教的な感じを表現したものがある。

その後はカボクロやカイピーラを題材とした純ブラジルの風致を盛ったものが多く、それらは何れも大作であって、あるものはパウリスタ博物館に秘蔵されている。

その代表作品を次に挙げてみる。

Caipira Picando Fumo	1893
Amoracao Interrompida	1894
Caipira Pintando	1895
Recado Dificil	1895
Cena da Roca	1895
Violeiro	1899

この中で特に有名であるのが最初に記した、カイピラが縄煙草を刻んでいるところを描いたものである。

アルメーダ・ジェニオールがフランスから帰ったのは一八八二年で、それ以来彼は連続的に夥しい作品を発表する精力絶倫さを示した。それは彼の運命の然らしめたところかも知れない。

なぜかなるに、彼は一八九九年十一月十三日に、ある女性問題のためにピラシカーバで暗殺されたからである。それは彼の四十九才の時で、ブラジル画壇の巨星去った観があった。

植民期の製糖工場

エンジエーニョ

「ブラジル風物記」の序幕として前回は総論的にカボクロに

ついて語った。そのカボクロと同じように、いかにもブラジルの響きを与えるものにエンジェーニョがある。

事実、このエンジェーニョほどブラジルの経済、社会史に叙され、また小説や民謡、風景画の題材とされているものはないであろう。従ってこれを、辞典で原始的な製糖工場と知るだけではエンジェーニョによってつくられた植民期ブラジルの社会経済の特異性と、それに因む文芸作品が理解されない。それは、カボクロを白人と土人の混血児としてのみ知るようなものである。

ところで大規模の新式設備の製糖工場が最大の生産能率をあげる現在、コロニア期そのままの古色蒼然たるエンジェーニョが稀に見られるのはまさしく前代の遺物という感じだ。しかしブラジルの国土は広い。その広大な国土に前世紀と現世紀が錯然と存在し、旧式のエンジェーニョでつくられた粗糖やラバゾーラ（蹄瓦型に固められた褐色糖）が土地の名物となり、一つの産業として成り立っているから面白い。しかもそのラバゾーラは純白の精製糖よりも栄養価値があるとは精白米と玄米の比較説にも似ている。

帰するところエンジェーニョにもカボクロ的な存在意義があるのかも知れない。ENGENHO・何とブラジルのなりズミカルの感じであることよ。私の眼前にあの円形を描きながら黙々としてモエンダ（甘藷搾汁器）を廻すブーロと、その傍に山積され

たバガソ（甘蔗の搾り汁）から漂う甘味をふくむ臭気、製造所からたなびく煙などのエンジエーニヨ風景が現われる。それはブラジル特有の田園詩であり、田園交響楽である。

北東ブラジルには作者不明の多くの俗謡があるが、その中にエンジエーニヨを歌っているものが少なくない。それらは豊かな風土色をあらわし、エンジエーニヨ独特の情緒が盛られている。それをカボクロが諷刺的に歌い、また黒人が哀調を帯びる声で歌う。



水が流れて

コペーロが動く

そしてカンナの汁が出る

泣くなよマリア

明日はヤマネコがやって来る

アイ アイ

ボンボコ　　ボンボコ

註Ⅱコペーロは甘蔗搾汁器を動かす水車式のもの。

植民初期のエンジエーニヨには水力によるものが多く、その水の流れと共に時が過ぎ、南部ではコーヒー産業の勃興によってエンジエーニヨは次第に姿を消した。しかしバイア以北の諸州、ベルナンブーコ、アラゴアス、パライバでは、いまだに製糖工業が牧畜と同じく主産業である。ただ往時と異なるのは、エンジエーニヨがウジナ・デ・アスーカルになり、セニョール・デ・エンジエーニヨが大資本組織の製糖会社となつたまでである。

そのあるものは広漠数千アルケールの甘蔗畑に縦横に鉄道を敷設して甘蔗の搬出をなし、中央に町を形成しているのは一つの企業体というよりは製糖王国の観がある。巨大な煙突から吐き出される黒煙が青空に線をひいて消え去るのは、何か知ら遠い昔を喚び起すかのようなのである。ウォルト・デズニーの映画なれば、ここで画面が転換して水の点滴と小流が現われ、それが落下して旧式のモエンダを動かすブラジルの糖業回顧の場面が展開されるであろう。その中に黒人奴隷の哀歌が入れられ、夕暮れにはエンジエーニヨの騒音に交って教会の鐘が鳴り響く。さて十六世紀半ばに、バイアやベルナンブーコにつくられたエンジエーニヨの大部分は水力を応用している。それは高い部分から注入する水でモエンダを動かす水車式のもので、これが「コペーロ」といわれたとは、食堂の給仕人と同義語であるのがおもしろい。

そのほかに水車式には「トラピシユス」「コビリエツテ」「ラステーロ」などといわれるものがあつた。

エンジニアニヨの動力に家畜(牛やブーロ)が使われたのは比較的後のことで十六世紀末となつてからである。

マウリシオ・ナツソー公と共にブラジルを訪れたオランダの画家の作品に、牛がモエンダを曳き廻すエンジニアニヨ風景を描いたのがある。当時はモエンダも鉄製よりは硬質の木でつくられたのが多かつたようである。鑄造技術の発達していなかつた頃としてそれは不思議でない。その木製のモエンダから流れ出る緑色のガラツパ(甘藷の搾り汁)をうまそうにのむ黒人女の表情が画面にあらわれている。

開発当時のブラジルから、染料のパオ・ブラジルが積み出されたのは歴史にある通りだが、これは原始的な採集産業にほかならない。そこで本格的な投資による産業は十六世紀中葉に起つたエンジニアニヨであり、これにブラジルの経済史を發している。そのエンジニアニヨがバイアから北部の海岸地帯に多く設けられたのは、気候地質が甘庶の栽培に好適であつたほかに砂糖市場のヨーロッパが距離的に近かつたためである。帆船による物資輸送には距離が重大視されたことは当然である。

ところが、十九世紀の蒸気機関の發明と蒸汽船の出現は産業革命をもたらし、距離は第二次的の問題となつた。ブラジルでは蒸気動力の応用と共に、従来のエンジニアニヨがウジナ・デ・アスーカルに變貌した。しかしそれ以前、水力応用なりに

も可成り大規模のエンジエーニョが各地に設けられたが、それは BANGUE (バンゲ) と呼ばれ、主にアラゴアスに見られた。遂にアラゴアスではバンゲがエンジエーニョの通称とまでなった。史家社会学者マノエル・ジエゲス・ジエニオールの「アラゴアスのバンゲ」という大冊の著書があるなどである。はかにもブラジル糖業史の文献は多く、その何れを見ても北東ブラジルの植民史は製糖業に緒を発し、貴族と豪農を主とするセニョール・デ・エンジエーニョ (製糖工場主) による自治村が形成されたことが知られる。そのセニョール・デ・エンジエーニョは司法、民事、軍事の行政権を有し、彼等の邸宅であるカーザ・グランデにおいての生活は豪賓を極めた。

これはヨーロッパの砂糖市場をもつ強身であり、もし開拓初期のコロニザドール(植民)が甘蔗栽培に着手しなかったなれば、ブラジルの経済、社会史は大いに変わっていたであろう。また多くの黒人奴隷を入れる必要もなかったと思われる。

つまり、北東ブラジルの社会は砂糖産業の上に建設され、セニョール・デ・エンジエーニョを中心とし、それに従属する奴隷とアグレガード階級によって人口が構成されたということが出来る。

ここでエンジエーニョの史的記録を辿るに、一五三三年にマルチン・アフォンソ・デ・ソーザが、マデーラ島から取り寄せた甘蔗苗をサン・ビセンテに栽培し、同時に設けたエンジエーニョがブラジルで最初のものである。これがエンジエーニョ・

デ・エラズモと命名された。

年代的にはマルチン・アフォンソより少し後れ、一五四二年にペルナンブーコの初代カピタニア長官ドアルテ・コエーリヨがオリンダに増設したエンジェーニヨが、北東ブラジルでのエンジェーニヨの発端である。甘蔗苗はシシリー島とカナリア群島から入れられたといわれる。

エンジェユーヨは概念的にコロニア期の製糖工場とされているが、中にはピंगा製造を兼ねるものもあった。そのまたピंगा工場とピंगाについて書けば、エンジェーニヨ以上に面白いものとなるであろう。

パウリスタ博物館

ムゼウ・パウリスタはコロニアでは『イピランガ博物館』で知られていて、サンパウロ市の名所の一つに数えられている。

同博物館は近くその内部組織が変更されるらしく、その直前にこのような記事を書くのは時宜を得ない感もあるが、歴史部と博物部に大別されることは従来と同じで、陳列室と標本、資料の配室が少しく変ると考えればよい。従って博物館の沿革には異なるところがないのでここでは主にその建設史の概要を辿ることにする。何故かというにパウリスタ博物館が如何にして設立されたかは当のブラジル人にすら余り知られていないからで

ある。ましてやコロニアの人達は同博物館がブラジル独立百周年記念として一九二二年に完成されたものと漠然と考えられているようだが、実際には一八九五年に竣工したことを知って意外である。また博物館の真正面のドン・ペードロ大通りを眼前に聳え立つあの独立記念塔の場所で一八二二年九月七日に摂政ドン・ペードロ一世が独立の叫びを挙げたと信ぜられている向きもあるが、これも間違いである。ブラジルの史上に有名な『独立か死か』の叫びをした地点は博物館の正面入口から二百五十メートル下手の噴水池の下部、現在歩道になっている所である。今にして思えばその場所に何か記念碑でも設けなかったのが遺憾である。



パウリスタ博物館前面のブラジル独立記念塔

さて概念的にパウリスタ博物館の内部組織を説明するに歴史、博物、考古学、人斯学、地質学、植物学、動物学から成り、特に歴史部は同博物館の誇りとするもので、大体次の時代別に区分されている。

○ブラジル発見初期

○コロニア（植民）・時代

○帝政時代

○共和政時代

サンパウロの開発史については海岸線の開拓に初まってカタピタニア時代とプロビンシア時代に亙り、多くの参考資料、地図、絵画、古器、模型などが集められている。

先ずムゼウ・パウリスタの所在地イピランガの説明をすることで、IPIRANGAはツピー語の転配したもので赤い水または赤い川の意味である。

昔日のサントスとサンパウロ間の旧道カミーニョ・ドマールがイピランガの草原を通り、カンプシー区を経て中央区に達した頃の記録によれば、当時のイピランガ地帯の主な地主はアントニオ・プロエンサ、ドミンゴス・ルイス、ジュゼペ・デ・カマルゴなどであった。これは旧約聖書に現われるアブラハム家族にも相似し、その血統のブラジル人の家族は夥しい数に上る。

一八二二年の独立宣言をなした当時としてもイピランガ一帯

は文字通りの荒野原であった。ブラジル国歌に謳われる由緒あるイピランガの小流（タマンドアチー川の支流）に沿って一つの農園があり、其処に白壁の家があったが、これが帝政時代の名女性サントス侯爵夫人の父コロネル・ジョアン・デ・カストロ・カント・エ・メーロの所有するシヤカラであった。この他に小川の上流に粗野な家が二戸あったが、それは十九世紀初期の建物で、未だに博物館前庭の左側に存在する唯一の史的遺蹟である。ドン・ペードロが独立の叫びをした地点は小川から四百五十メートルに隔たる丘上で、それは前述の通り噴水池の下手に当る。

ところで何時イピランガ丘上の独立記念塔の建立案が起ったかであるが、ドン・ペードロの独立宣言の翌年一八二三年に既にその声が挙がった。建設提唱者は政界法曹界の有名人が数名で、その建設案が当時のプロビンシア・デ・サンパウロ統領コングーニヤス・ド・カンポ子爵によって議会に提出され、基金募集案が一応可決された。この記念塔建設問題はリオの国会にも持ち出され、政界の大元老ジョゼ・ボニファシオと建設委員長イグアペ男爵との間に度々公文書が交換された。しかしながら労のみ多くして、折角の募金運動は奏功せず、遂に一八三一年のドン・ペードロの退位となって記念塔の設立は一時世間から忘れられた。かくして数年が流れ一八四五年、サンパウロの第十七代プロビンシア統領マノエル・ダ・フォンセツカ・リーマ元師となって独立記念塔の建設運動が再燃した。同年ドン・

ペードロ二世がクリスチナ皇后を伴って南部ブラジル訪問の帰途サンパウロのイピランガ丘上で過去を偲び、また記念塔建設地の実地検分をしたといわれる。それから十年後の一八五五年にコンセリエーロ・サライバを首班とする記念塔建設実行委員会が組織された。更に二十年を経過し、一八七五年にジョアン・テオドロ・シャビエルがプロビンシア統領となってようやく記念塔の定礎式が奉げられた。その時に記念塔を記念館に改めては如何、との意見が起った。当時の建設委員にはラマールヨ男爵を初めジョアン・メンデス・デ・アルメーダやデオゴ・デ・メンドンサなどの有名人がいた。

ここで面白いのは永年の募金運動が振わぬため中央政府の発案で『ロテリア・イピランガ』が特発行され、これによつて一挙に一千コントスの基金を得たことである。そこでいよいよ記念館設立が実現第一歩を踏出すことになり、その設計にはイタリア人の建築設計家トーマス・ガリデンチオ・ベツジが選ばれた。しかし設計は成ったが幾多の事情で起工ともならず、そのまま一八八四年に至りベツジとの再契約が結ばれ、一八八五年三月二十五日に待望の起工式が奉げられた。その頃には記念館をして物理学学校とするべくプロビンシア議会（県会）によつて殆んど決定されていた。ところが建築家ベツジは彼の設計はイタリア・ルネサンス風の流麗無比の堂々たるもので学校には不向きで、飽くまで芸術記念物として保存すべき旨を主張して止まなかつた。このように記念館の運命が決定せぬまま工

事は進められたが、一八九〇年から一八九二年まで工事が中絶し、その間に記念館をパンテオンまたは博物館とする案が有力となった。当時建造された建物は長さ百二十三メートルに奥行き十六メートルの二階建であるが、予算の関係からベッジ設計の原型通りには造られていない。

一八九三年までに要した建築費は一、七一五、一二四、六六一レースとなつてゐる。かくして一八九四年を迎えて同建物が博物館たる最後の決定を見た。その頃までジョアン・メンデス広場にあつたサンパウロ博物館をイピランガ丘上に新設された記念館に移し、一八九五年九月七日のブラジル独立記念日を期し、時の州統俵ベルナルジノ・デ・カンポスによつて落成式が挙行された。あらゆる見地からパウリスタ博物館の事実上の創設者はベルナルジノ・デ・カンポスであるところからそれを永久に記念する意味で同氏の胸像が名画『独立か死か』と共に飾られている。

このようにして一応は落成した博物館も内部の装飾などは未完成の部分が多く、また周囲は全く荒野で一片の庭園もない殺風景極まるまま十年余を経過した。一九〇九年となつて造園案が、造園芸術家アルセニオ・プットマンの設計によつてあの雄大な庭園工事に着手し、一九一二年に部分的に完成された。その後数年が過ぎてロドリゲス・アルベス大統領の折に別に独立記念塔の建立が決議され、その工事に着手したが一九一九年

七月でサンパウロ州統領はアルテノ・アランデス、サンパウロ市長はワシントン・ルイスであった。記念塔の建立と共に庭園を完成して博物館の威容に一段の美観を添え、ムゼウ・パウリスタはブラジルの誇りであるばかりでなく南米の名所となった。



さきにジョアン・メンデス広場にあった博物館をイピランガに移したことは述べたが、そもこれは骨董蒐集家コロネル・ジョアキン・セルトリオの所有であったものがサンパウロの歴史地理学会に寄贈され、更にサンパウロ博物館に属するに至ったのである。

イピランガ丘上のパウリスタ博物館の創設当初は博物、地質

学、動植物学、考古学、人類学に関する標本は極めて少なく、広大な建物も殆んど空間となっている有様であった。同博物館がやや充実したのはアルテノ・アランテスのサンパウロ州統領が当時からで、特にイツー市の博物館が合併されてからである。またカンポス・サーレス大統領の援助に負うところも大きい。建物の内部にも数回に亘って改装や装飾が施されているが、特にあの壮麗な大理石の階段は一九二二年のブラジル独立六百年祭に造られたものである。

一九二四年から一九二七年のカルロス・デ・カンボス州統領の任期に増築されて動植物部が新設され、またジュリオ・プレステス（一九二七—一九三〇）州統領の折に二つのサロンが設けられ、それにアルメーダ・ジェニオールの作品が集められた。進んで一九三六年、アルマンド・サーレスがサンパウロ州執政官となって航空界の先駆者サントス・ズモンの記念室と人類学部が新設され名実共に博物館としての全貌を備えた。パウリスタ博物館は階上階下の二つの陳列館に別館を加え、二つのサロンと二十八の陳列室、それに付随する回廊からなっている。

○中央サロンと階段

中央サロンに入って感歎おく能わぬのは数本の大理石の円柱と彫刻家ブリソララの力作であるバンデーランテの英傑アントニオ・ラボーズ・タヴァレスとフェルノン・デーアス・パエス・

レーメの石像である。また特に注目をひくものにドン・ペードロー一世の像もあるが、これは彫刻家ロドルフォ・ベルナルデリの作でドン・ペードロが独立の叫びをした時の服装を表わしている。他にウォース・ロドリゲス作の壁画ドン・ジョアン三世、探険家マルチン・アフォンソ・デ・ソーザ並びにジョアン・ラマリョと土民の酋長チビリツサの肖像は見逃してならぬものである。大理石階段の各円柱には彫刻家デジュストの青銅の鉢が配置され、その上の硝子玉の中にブラジル十八大河の水が入れられている。階段の上部にはミナス、マット・グロツソ、ゴヤス、パラナ、サンタ・カタリーナ、リオ・グランデ・ド・スールの開拓に尽したバンデーランチスの代表者の肖像が掲げられている。更に階段上方の壁にはブラジル独立運動の犠牲者チラデンテスの肖像画が見られる。

○サロン・デ・オンラ

これは博物館の栄光のサロンとも称すべきもので、ここに画家ペードロ・アメリコの国宝的名画『独死の叫び』と『アバイーの戦闘』が置かれている。このサロンの上方の壁にはドン・ペードロー一世、ジョゼ・ボニファシオ、ジョアキン・ゴンサルベス・レード、ジョゼ・クレメンテ、デオゴ・フエージョの各々直径二メートルの円形肖像画が配置されている。ここで今一つ特に人目をひくものにドン・ペードロ二世の皇后レオポルジナに抱かれる生後十一ヶ月のドン・ペードロ二世と四人の王女の

肖像画である。

○A西部の室

ここには十六世紀のサンパウロ州開発期の歴史的遺物が蔵められている。たとえばサン・ビセンテやイタニヤインの旧寺院の壁石、または先駆者ブラス・クーパスの所在地の境界石などである。

この室の中央には探険家マルチン・アフォンソ・デ・ソーザの署名した二通の書翰やサント・アンデレ・ダ・ボルバ・ド・カンポ村会の議事録が陳列されている。また一五七九年に書かれたアンシエタ僧の手紙も見られる。

○A九号室

これは『モンソン室』ともいわれ、画家アルメーダ、ジェニオールの名画が集められている。

『モンソンの出発』を初め『カノアの出発』『ボルト・フェリスの祝祷』『山中のモンソンの舎』『パラグワイにおけるモンソンの超遁』などがある。

○A十号室

コロニア（植民）時代に作製された地図及び旧書類。

○A十一号室

サンパウロ市の回顧史料。

○A十二及び十三号室

サンパウロ州の考古学研究資料。

○A十四号室

一八四〇年当時のサンパウロ市の模型、その他の資料②

○A十六号室

原始芸術品、コロニア時代の宗教芸術と旧家具。

○B九号室

航空界の先駆者サントス・ズモンの飛行機発明の研究記念物と参考資料。

○B十号室

発明家バルトロメウ・ローレンソ・デ・グスモンの記念物。

○B十二号室

ブラジルの人類学研究資料と標本。

○B十三号室

ブラジルの旧貨幣。

○TC四骨室 旧時代の武具、武器及び軍人の服装など。

以上挙げた他に地質、鉱物学の標本室がある。また約一万六千の鳥類、四千の哺乳動物、三千の鳥類、二千の蛇類の剥製と一二万の昆虫及び一万七千の軟体動物の標本が蔵されている。また三つのサロンと三つの室から成る図書部には三万部の図書が整然と置かれている。パウリスタ博物館の参観者は年平均三十五万人であるが、この中で日系が相当の率を占めるようである。

奴隷時代の遺風

アグレガード

ブラジルに永年住む人でも未だ知らないコトバが沢山ある。ましてや地域的に異なる方言、訛語には当のブラジル人ですら知らないものが少なくない。従って、コトバを通してこの広いブラジルの風土と習慣を学ばなければ単なる語学の研究では味わい得ない面白味がわいてくる。

ブラジルでは人口数十万以上の近代都市の外観を眺めるだけでは当国の本当の姿が解らない。其のブラジルのものは、都会よりはセルトン（奥地）にあることを知るべきである。特にセルトンの社会、人口構成、経済機構を学ぶことは当国をよく理解するために必要と思われる。早い話が都市の労働階級は労働法や労働組合によって擁護され、また各種の社会扶助施設もあり、貸金値上げの交渉が決裂すればたちまちストライキを起すが、セルトンには何等の労働法規も組織もなく、大地主と豪農がすべての面に絶対的な支配権をもっている。つまり大地主自体が法律であって、彼等の祖先以来の不文律が無条件で守られ、小国を思わせるような大耕地が一つの王国の趣きを呈している。

いうまでもなく一八八八年にブラジルの奴隷制度は撤廃されたが、奥地の大耕地にあってはモラル（道義）とコスツーム（習

慣)の上で奴隷制度が現存するとも見られる。

大耕地の労働者は昔日のように鉄鎖でつながれ監督の鞭で酷使されるのではなく自由労働ではあるが、永年来の風習と主従の道義で縛られ、耕主に対してはあくまで服従するところに矛盾が感ぜられる。しかし彼等の社会ではそれが矛盾でも不合理でむなく、そうした文字に書かれざる戒律が厳存し、秩序の保たれているのが奥地ブラジルの面白さである。その一面を物語るのが昔の奴隷の肩替りであるアグレガード (Agregado) である。

アグレガードは第三者から見れば鎖につながれざる奴隷ともいえるが、当のアグレガードはその境涯を不満足とせず、主人には絶対忠実にして職責を重んじ、彼等の生活と耕地内に平和が保たれているのは一つの別社会というほかはない。または封建と民主制の混合社会でもあるが、これは強ちセルトンばかりではなくブラジル全土に同じような傾向が見られる。

さてサンパウロ州を主とする農耕地での労働者は、大体コロノ、メエーロ (パルセーロ)、カマラーダの三つに大別される。これは日本人一世にとって懐かしく、かつ親しみのあるコトバだ。

コロノは耕地の契約労働家族であり、メエーロは収穫歩合制小作人、カマラーダは日雇労働者である。珈琲栽培の四年、六年契約もいわばメエーロ制であろう。

およそ農業移民でブラジんに渡った人は誰も以上の何れかを

経験している。これが当国の社会への登竜門でもあった。それは、コロノやメエーロを足台として独立農となり、次第に経済的成長を遂げて現在の地盤を築き上げたからである。

ところが、過去に契約耕地で苦闘を積んだ日系人で、おそらくアグレガードを経験したものはないであろう。否、日本人よりは造かに歴史の古いドイツ人やイタリー人にしてもアグレガードであった人は皆無といってよい。何故かなるに、アグレガードはその大部分が奴隷の血統をひく黒人系または土人（カボタロ）系の耕地労働者だからである。

そのためか、アグレガードは何であるかを知らない人が多い。もつともこのコトバは大武和三郎氏の新葡和辞典に載っていないし、カンジド・デ・フィゲレードの葡語大辞典にも農地労働者としてのアグレガードの説明がない。さすがにブラジル書籍院出版のアラリコ・シルベira著の『ブラジル百科辞典』にはアグレガードについてかなり詳述されている。それによると、アグレガードは大耕地の自由労働者ながらも、耕地内に無償で小面積の土地を耕作しながら居住する傍ら地主の必要に応じて農耕、牧畜、砂糖工場、その他の雑役をなし、それらの労働には応分の報酬を受く、となっている。また史家オリベエフ・ビアンナの著書『ポプラソンエス・メリジオナエス・ド・ブラジル』にもアグレガードに「について記載されている。

ブラジルの国土の広さは広大無辺という表現がよく当ては

まっているが、官有地はほとんどなく、大半は大耕主と豪農に占有されている。この点サンパウロ州にはラチフンジオ（大地主階級）は比較的少ない。マツト・グロツソ、ゴヤス、ミナス、リオ・グランデ・ド・スール及び北東の諸州には、大地主が広ぼう数千アルケール或いは数万アルケールもの所有地に前世紀そのままのブルゴ（自治村）を形成して、あたかも城主の生活を営んでいるものがある。概してこのような大地の近隣には小地主が存在しないから、最寄りの耕地まで数十キロも隔たるなどは稀でない。

こんな場所には警察権も及ばず、勢い耕主自らが法令を発し、耕地の内規を設けて治安と秩序を維持し、時には武力をもつて外部よりの侵害を防ぐほかはない。

当国の奥地では昔から現在に至るまで労力の不足が悩みの種で、大耕地にとって所有地の保護と農業生産を持続するに必要な労働人員を抱えることが大きな問題である。

ところで、アグレガードはコロノ、メエーロ、カマラーダの何れでもなく、しかも歴史の古い大耕地にのみ見られる特異の労働者である。これあることによつて大地主はその所有地を守りつづけることが出来る。アグレガードは守備兵の役目を兼ねる関係から、耕地中央の耕主邸宅から遠ざかる地点に居住し、耕主に命ぜられるまま、あらゆる賃仕事をする。耕地の仕事以外に借りた土地に作物を植え、ニワトリや豚を飼育するが、それは彼等の日常生活に必要なとする範囲に止どまる。

アグレガードは奴隷ではなく自由労働者には相違ないが、道義的には耕地に隷属する階級で、一朝コトあれば彼等は身命を賭して耕主のために闘うところはまさしくカパンガ(用心棒)でもある。

彼等には大して欲望もなく、粗野な家に住んで僅かの作物をつくり、一、二頭の牛と乗馬一頭を所有するのはモノ持ちの方である。アグレガードは数千頭もの牛群の世話をしながらも、それを盗んで自己のものとする邪心も起さず、主人には文字通り盲従する忠実さである。もしアグレガードが不正行為をしたことが発覚すればきびしい制裁をうける。現在の世にこのような労働制度と社会、人間のいることが不思議なほどだ。サンタ・カタリナのサン・ジョアキン平原では、アグレガードは専ら牧牛の仕事に従事し、農耕作業は僅かである。

サンタ・カタリーナの大地主にはサンパウロ州から移住したポルトガル系の白人が多く、それに従属するアグレガードは曾ての奴隷の子孫が大部分である。

彼等は時にカンペーロまたはポイアデーロとして牛群の輸送もやるが、その報酬に牛を分与して貰う習慣がある。何れにせよアグレガードの労働制は、州または地域によって一律でない。同じく南伯でもサンタ・カタリーナとリオ・グランデ・ド・スールで異なり、更にマツト・グロツソとゴヤスでは相当の習慣の差がある。

サンパウロ州でのアグレガードには、他州とは大いに相違す

る点があるが、その一例としてクーニャ郡を見ると、ここではアグレガードが『モラドール』『モラドール・デ・ファミーリヤ』『クリア・ダ・カーザ』などと呼ばれている。それは哀れむべき奴隷が解放されて自由を得たが、直ちに独立自営の道も開けず、旧主人の恩恵によってその耕地内に居住し、小面積の土地に作物をつくり、借地料代りに主家の雑役をするという習慣から生れた名称である。

同じくアグレガードでも『モラドール』と呼ぶ方が親しみの情があるがこの名称は北東ブラジルにも用いられているところがある。

アグレガードは大耕地の労働者として貴重なものだが、新しく大面積の土地を獲得して乗り込んでもこの労働制度は利用できない。つまり、アグレガードは祖先代々の大地主にのみ隷属する特異の労働階級だからである。

アマゾンの特産魚

ピラルクー

茫洋たる大江アマゾンには棲息する動物にも他に見られない風変わりで大きなものがある。先ず魚族を語るとしてアマゾンの特産魚ピラルクーが代表的のものの一つだ。またピラルクーのペスカドール（漁師）もアマゾン特有のもので、その漁獲作業は

アマゾンならでは見られない。それは謂うところの魚釣りではなくて捕獲である。おそらくブラジルの海洋や河川での漁撈でそれほど冒険かつ壮絶極まるものはないであろう。

ピラルクーの漁師の殆んどは土人或はタプイオ（マメルコ）といわれる土人と白人の混血児つまりカボクロ系である。

ピラルクーの漁期は六、七、八月のヴァザンテ（減水期）から十月末のエンシェンテ（増水期）前であり、この間にアマゾンの各地にピラルクーの漁師が現われてアマゾン独特の漁労風景を展開する。わけても七、八、九月がピラルクーの最適期であるのでこの期間に非常な活況を呈する。

ピラルクーは土人語であって『ピラ』は魚を意味し、『ラルクー』は『ピーシャ・オーレラ』と呼ぼるるアマゾンの野生植物の実で赤色の染料となるものである。アマゾンの土人の或る部族はこの実の汁で体を染める習慣のものがある。ピラルクーには腹部が赤色を帯びるのがあるところからこの名称がつけられたものようだ。ピラルクーはその大きさにおいてパラナ、パラグワイ両河のジャウーに匹敵し、またはサン・フランシスコ河のスルビンにも相当するであろう。

ピラルクーは魚族学の分類上 OSTEOGLOSSM に属し、学名は ARAPIMA GIGAS・CUVIER である。その形状は日本のドジョウに似て胴体は円筒形をなし、全体の大きさの割合に頭が小さい。背部は暗黒色で腹部は淡黄または白色を帯びるのが多い。

が、前述のように赤色がかったものもある。皮は非常に堅い鱗で蔽われている。背部の鱗は分厚のセルロイドのようで直径四、五センチもあるのは珍らしくない。またその舌の乾燥されたのはさながら鱸と同様で、これで、グワラナの実を摺りおろすとは面白い。

ピラルクーの肉がアマゾンの住民（主に土人と混血系）の主食物であるのはヨーロッパやアメリカ北部の食膳につきものの鱈にも似ている。ピラルクーの肉は乾肉と塩漬を問わず、その分析表によれば栄養価はバカリヤウ（乾鱈）を遥かに上廻るようである。アマゾンの土人やカボクロがとるピラルクーは二メートルから二メートル半の長さで重量は五十キロから八十キロである。一匹からその大小にもよるが二十キロ以上四十キロの鮮肉が得られる。

アマゾンでは農牧の盛んでない地帯では自然採集で生計を立てているが、ピラルクー漁業がその主なものの一つであり、それに従事するのが殆んど土人とカボクロであることを先きに述べた。アマゾンには植民期に極めて僅かの黒奴が入れたのみであるから黒人系の住民は少なく大部分は土人と白人の混血系である。

彼等の住家は河岸の高台を選んで建てられているが、その建築様式は土台となる数本の丸木を地中にさし込み、浸水を防ぐために床を高くしてある。屋根はブスー、クルアー、ウビン、イナジャー、ウアウアスーなどの藁で葺かれている。それ等の

家は住居であると同時に倉庫をも兼ねる。

捕獲したピラルクーはそれぞれ乾肉と塩漬に処理されるが、家の周囲は乾燥場となり、家の中は製品の貯蔵庫とされる。つまりピラルクーの漁師の住家は、寝室、台所に併せて魚肉の調理場と販売店でもある。

ピラルクーの漁師は相当の危険を冒すにもかかわらず、取立てていう彼等の服装とてなく、極めて普通の扮装で平然として漁獲に出かける彼等の服装の特徴を敢て挙げれば、辛うじて腰まである短かいシャツとミリシーという木の実の汁で赤色に染みたズボンを着用し、ツリマンゼー口の若葉で編んだツバの狭い帽子をかぶっていることであろう。しかも特に漁舟とてはなく、普通のカノアを用い、漁具には棒の先端に銛をつけたものを使用する。カノアは三メートルの長さに幅四、五十センチ、高さは二十五から三十五センチに過ぎない。これによって二メートル以上ものピラルクーを獲るのであるから文字通りの冒險である。この小型のカノアが用いられるのは操縦が容易で、浅瀬や木の茂みの中、細い水路を騒音を立てずに敏捷に活動し得るからである。彼等は早朝に起きて出かけるが、それは払暁というほどの早さではなく、太陽がかなりの高さの上からである。強風が起らぬ限り河面は鏡のような静けさで、その上を意気揚々として進む。カノアに積込まれる漁具は銛と綱、打撃用の棒、フアコン、身廻り品を入れる籠などである。一隻のカノアに二人乗込むのが普通で、後方にひかえる助手は漁師の

子であるのが多い。その助手が櫂を漕いで静かに航進する。漁師は舟上に起立し、手に銚をもつてしっかりと踏台に構えている。このカノアが沼の中や浅瀬をジグザグ型に航進し、或は河岸の茂みをつたって進む様が水面に反映して美しい絵を眺める観がある。

ピラルクーの季節はいうところのヴァザンテであり、この時期にピラルクーは食物を求めて湖沼や小流、浅瀬に群集する。ピラルクーの漁獲区域は非常に広汎だが、およそ次の地点を挙げることが出来る。

マラジョ島中央部の沼を中心とする地帯。

アラグワリー北部、マイクルー支流とその湖沼。

モンテ・アレグレ近傍。

タパジヨスとクルアー支流の左岸地帯。

ビーラ・フランカのラーゴ・グランデとその周辺。

トロンバタスとジャムンダ支流の左岸と附近の湖沼。

ツピナンバ島のアラリ潮。

リオ・ネグロ、リオ・ブランコ、ウアラペス支流に所在する湖沼。

ピラルクーの捕獲法として広く普及しているのはアルボン（銚）を用いるものである。銚は約三メートルの棒の先端につけられていて、それに長さ三十メートルほどの綱が通されている。銚は十センチの長さで、これがピラルクーに放射されて背

部に突き刺さると同時に棒が分離する。

漁師はカノアを漕ぎながら減少によって形成された沼や小流の中をピラルクーを探し廻る。そしてピラルクーを発見するや、それを目がけて銛を放射するが、この一瞬に漁師は息づまるほどに緊張して実に血湧く感がある。銛がピラルクーの体に命中すれば魚は猛然とあばれ狂うのをしつかりと綱を振りしめて巧みにあやつる。その間漁師は舟上に起立し、或いはしやがんで魚の疲れを待つが、時にはカノアが転覆せんばかりともなる。やがて徐々に魚をひきよせ、一撃をくらわせて舟上にひき上げる。それは規模こそ小さいが昔の捕鯨術を思わせる。

ピラルクーの所在点は水面に浮き出る泡によって知るが、これは相当の熟練と経験を要する。時には沢山の泡が相次いで現われて漁師を狂喜せしめる。捕獲された魚は河岸で初めに皮を剥ぎ、肉は適當の大きさに裁断して塩漬または乾肉とされる。地上約一メートル八十センチの高さに乾台が設けられ、それに恰も手拭いを乾したかのように配置される。乾上げられたピラルクの肉は三十五キロから四十キロの包みとされるが、その包装にはエンピーラやその他の蔓が用いられる。それ等の包みは湿気を防ぐためにジュラスと呼ばれる台の上に積上げて貯蔵する。ピラルクーの季節ともなればアマゾンの河岸に沢山の臨時の小屋が造られ、それぞれの漁区の親分とそれに従属する大勢のペスカドール（漁師）が出動し、また仲買業のレガトン（大型の函船）が河を上下して非常な賑わいを呈する。事実ピラル

クーによるアマゾンの漁業は同州の主産業の一つであり、これが大きな財源となっている。

ピラルクーの肉はアマゾン住民の主食物たるばかりでなく、その多量がマラニョン、セアラ、リオ・グランデ・ド・ノルテ、ベルナンブーコ、バイア、リオ、サンパウロ、マツト・グロツソなどの国内市場の外にベネズエラ、コロンプピア、ペルーにも輸出される。

(この一文はアマゾン風物誌の権威ジョゼ・ヴユリツシモ・ダ・コスタ・ペレーラ氏の著書を参考にした旨を附託する。)

パラグワイ戦史を飾る

リアシユエーロの海軍戦

六月十一日はパラグワイ戦史に輝やかしいページを添えるリアシユエーロの海軍戦記念日に当るのでその思い出を述べてみたい。

先ず初めに如何にしてパラグワイ戦争が起ったかを語るとして、ブラジルはパラグワイ戦争以前にウルグワイ戦争を経験している。

このウルグワイ戦争はアルゼンチンの独裁政治家マノエル・ローザが、ウルグワイとパラグワイをアルゼンチンに併合せし

めてプラタ帝国を建設する野望の下に始まったものである。そのためリオ・グランデ・ド・スールの一部分が少なからず戦禍を被ったので、ブラジル政府は遂に黙し能わずしてウルグワイ戦争に干渉することになった。そこでブラジルはウルグワイとパラグワイと同盟を結んで闘った結果、アルゼンチンのローザ軍を惨敗せしめてウルグワイ戦争は終局を見たのである。

それは一八五一年であつたが、平和になると同時に、ブラジル政府はパラグワイの独裁者カルロス・ソラノ・ロペスに対しブラジル商船のパラグワイ河の自由航行権を得るべく交渉した。何故かなるにブラジルは、国防と経済開発のためにマツト・グロツソに通ずる河川航路が必要であり、それには地理的にパラグワイ河を通過せねばならなかつたからである。

このパラグワイ河の自由航行権を認めることは、既に一八五〇年度の協定によつて大体協定済みとなつていたにもかかわらず、パラグワイ政府はブラジル側の申出に明瞭な回答を与えずして、アスンソン駐在のブラジル公使にパラグワイよりの退去を強制した。

ブラジル政府はこのパラグワイ政府の態度を諒解し衆ね、釈明を求めべくペードロ・ベレーラ海軍中將を特令全權使節並びに艦長とし、軍艦アマズナスをアスンソンに差し向けたのである。しかるに軍艦アマズナスがアスンソン到着前に或る地点で挫礁したので、止むなく公文書を送つてその意を伝えることになった。その後カルロス・ソラノ・ロペスは、ブラジルに特

使を派遣してジョゼ・マリア・ダ・シルバ・パラニーヨス（後のリオ・ブランコ子爵）と会談し、ブラジルの要求するパラグワイ河の自由航行権を一応認めることになった。

ところが、その後間もなくパラグワイ政府は何等の予告もなく一方的にこの協定を破棄した。このようなパラグワイ政府のブラジルに対する処置は、明らかにブラジルに妨害を加えるものであった。

それはカルロス・ソラノ・ロペスが、曾てのアルゼンチンのマノエル・ローザと同じくプラタ帝国の建設を望んでいたからである。

その目的遂行に、ブラジルが唯一の強力な障碍物であったことはいうまでもない。

カルロス・ソラノ・ロペスは、プラタ帝国建設の準備工作のために彼の息子フランシスコ・ソラノ・ロペスを外交使節としてヨーロッパ諸国を訪問せしめたほどである。

ところが、一八六二年にカルロス・ソラノ・ロペスは逝去し、その子フランシスコがヨーロッパ旅行で得た新知識にものを云わせて父の遺志を継ぎ、プラタ帝国の実現に乗り出すことになった。

当時のパラグワイは兵器製作工場と海軍工廠、造船所、更に二万八千の訓練された現役兵と六方四千の予備兵力を持つことでは他の南米諸国の追従を許すところではなかった。

その他に十一隻の軍艦を所有することも大きな誇りであっ

た。

その頃のアルゼンチンは殆んど海軍力を持たなかつたので、おそらくパラグワイが南米一の海軍国であつたというのも過言ではない。つまり、フランシスコ・ソラノ・ロペスは軍備の拡充をなしつつ、プラタ帝国建設のための唯一の強敵ブラジルを攻撃する機会をねらっていたのである。

ところで、パラグワイ戦争は、マツト・グロツソに向けて航行中のブラジル汽船「マルケス・デ・オリンダ」を宜戦の布告なしにパラグワイ軍が拿捕したことが導火線となっている。その時「マルケス・デ・オリンダ」には、マツト・グロツソのプロビンシア統領として赴任中のコロネル・カルネーロ・デ・カインボスが乗っていた。当時阻のマツト・グロツソ防衛力は極めて貧弱なもので、あの広大な地域に僅か千三百人の警備兵が散在していたに過ぎない。

汽船「マルケス・デ・オリンダ」の拿捕と同時にアスンソン駐在のブラジル公使にパラグワイ退去の旅券が手交され、此処にブラジルとパラグワイの国交は断絶されて戦時状態に入ったのである。

かくしてブラジルと戦端を開始したパラグワイは、一八六四年十二月十四日に、五隻の軍艦と三隻の武装帆船に更に三隻の輸送船から成る艦隊をもってパラグワイ河を上った。この艦隊の乗組員は四千三百人で、司令長官はソラノ・ロペスの義兄のバリオス大佐であつた。

他方約五千の陸軍がレスキン大将に率いられてマット・グロツソに進軍した。パラグワイ河を遡航したパラグワイ艦隊は、一八六四年十二月二十六日にコインブラ要塞に到着した。当時コインブラ要塞には、ボルト・カレーロ大佐を指揮官として百五十七人の警備兵が居たのみで、如何に勇敢なブラジル軍とても衆寡敵せず、同要塞がパラグワイ軍の手に落ちたことは止むを得ない。

パラグワイ軍は更に河を上流してミランダ、ドウラードス、コロンバを占領したので、南部マット・グロツソは完全にパラグワイ軍に占められた観があつた。

話は前後したが、パラグワイがウルグワイ及びブラジルのリオ・グランデ・ド・スールに兵力を向けるにはパラナ河の航行を必要とし、アルゼンチンの領地を通過せねばならぬので、それをアルゼンチン政府に交渉したところ拒絶された。そこでパラグワイ軍は無法にも、アルゼンチンのコリエンテスの一部を攻略して、そこに兵力を集中したものである。それでアルゼンチン政府は、ブラジルとウルグワイとの軍事同盟を結ぶことを提言し、謂う所のアリアンサ・トリプリセ（三国同盟）が締結され、三国の兵力を以てパラグワイと戦闘を交えることになった。その当時の連合国の兵力はウルグワイ一千、アルゼンチン六千、ブラジルは二万足らずであつた。これだけの兵力では到底パラグワイ軍を撃滅する可能性はなく、ブラジルは数万の義勇兵を募って闘つたことは周知の通りである。しかもこの

パラグワイ戦争は五カ年にも及んでいるので、その間ブラジルの払った人的と物質的の犠牲は実に大きく、皇帝ドン・ペードロ二世が著しく健康を害したのもその精神的打撃に負うものである。

さて問題のリアシユエーロ海戦であるが、アルゼンチンのコリエンテスとマツト・グロッソ南部を占領したパラグワイ軍はいよいよ確信を得、サマユタ又はリアシユエーロにおいてブラジル艦隊を撃破する作戦を練ったものである。而して一八六五年六月九日に、フランシスコ・ソラノ・ロツペスの命令によってパラグワイ艦隊はウマエタ近くのトレス・ボツカスに達した。それと時を同じくしてブラジル艦隊はコリエンテスから五哩隔たる処に待機していた。このブラジル艦隊は、旗艦アマゾナスを先頭に、イビランガ、ジエサニヨラ、ベベリベ、ベルモンテ、パルナイバ、アラグワ、イグアテミとメリアンの軍艦から成るもので、その司令長官はアルミランチ・バローゾであった。ブラジル艦隊の作戦はパラナ河を閉塞して敵艦隊の航下を不可能ならしめることであつた。ところが、パラグワイ艦隊はブラジル艦隊と合会してそれを一挙に撃滅する意気込みで、堂々パラナ河を下りつつあつた。

その敵艦隊は、タクワリー、アラグワリー、イグワシー、イボラ、ジジュイー、サルト・オリエンタル、ブラベベ、イビラの他に六隻の武装した商船に、ブラジルから拿捕したマルケス・デ・オリンダを加えた合計十五隻から成るものであつた。

このパラグワイ艦隊が、ブラジル艦隊を撃破すべく秘密裡にウマエタを出発したのが、一八六五年六月十日の夜半十二時であった。彼等の計画は、翌十一日の未明にブラジル艦隊の前方を包囲し、ブラジル艦隊一隻づつを目標として砲火を浴びせることであった。

その時ブラジル艦隊はリアシュエーロから約五哩の地点に待機していたが、六月十一日の午前九時となるや「敵艦隊見ゆ」の信号が挙げられた。アルミランテ・バローンは直ちに戦闘開始を命ずると共に「O BRASIL ESPERA QUE CADA UM CUMPRE O SEU DEVER」（ブラジルは各員がその義務を完了することを希望）の信号を旗艦アマゾナに掲げた。これがブラジル軍の士気を鼓舞した。当時の戦闘の有様が、画家ビートル・メーレレスによって描かれ、ブラジル名画となっている。

黒人の特殊部落

モカンボ

北東部ブラジルの風物で特筆すべきものにエンジェーニョ、ジャンガデーロ、レンデーラ（レース編みの女）、カアチンガ、アグレステ、ババスー椰子、カロア、アスーデ（人工貯水池）などがある。それに加えてモカンボもあるがこの単語すら余り知られていない。

MOCAMBO なんとなくアフリカ的なひびきのするコトバだ。事実これの語原はアフリカのモサンビッケあたりの土民語に発しているらしく、ブラジルの柘植期の荘園と奴隷小屋とは別の意味で、昔の遺風そのままの黒人系下層民の集団住居の名称である。

このモカンボは同じく北東ブラジルの特色という中でもその代表的なのがベルナンブーコの首都レシフェの近傍に多くみられる。モカンボの同義語はキロンボ (QUILOMBO) であり、それは往時の逃亡奴隷の隠れ場だが現在は最下層の黒人村というのが当たっている。奴隷制度の存在しない今日ではキロンボは荘園時代の名残りに過ぎないが、その肩替りである北東部のモカンボを直接にみて旧時代にいる錯覚を感じる。これが現実のブラジルの一面でもある。北東ブラジルを旅行する人がわざわざモカンボを訪れてカメラに収めるのは強ち好奇心からではないであろう。

さてブラジルの社会文化を論ずる限り黒人文化を無視されない。特に当国の「人間の地理学」を学ぶに当って北東部の黒人村であるモカンボは興味深い課題を提供する。それに関する名著がマリオ・ラセルダ・メーロの『ベルナンブーコと人間の地理学』及びジルベルト・フレレーレの『モカンボス・ノルデスチーノス』である。

ところでレシフェ周辺のモカンボは平面の沼沢がかった湿地であることが注目される。そのあるものは不衛生極まる泥土の

中に存在し、粗野を過ぎて全くの荒小屋である。

建物の特徴は湿気を防ぐためか床が少しく高く、マツサペ土でつくられた壁を椰子の葉またはカピン・アスー（牧草の一種）で葺かれた屋根だが、中には椰子の葉で壁代りとされているのがある。もう一つの特徴は錠前が一個も用いられていないことだ。それは盗難防禦の必要がないからであり、貧もこれまで徹底すれば天下泰平である。モカンボには稀に部分的にトタン板を用いた尾根もあるが、これが却て不調和な感じを生んでいる。

リオ市の岩山に群居する黒人のファヴュラ族には屋根をまばらにトタン板や瓦で葺き、その上にテレビジョンのアンテナを立てているのがあつてむしろ滑稽である。そして彼等は一年を通じて労役の報酬でカルナヴァル祭の衣裳を整える。それと同じように北東ブラジルのモカンボ住いの黒人は彼等特有の宗教祭のマクンバやカンドンブレーの用具を準備することに生き甲斐を感じずるとはまさしく理論を超越するものがある。

他方、北東ブラジルの海浜に平和郷そのものの野趣を添えるのがモカンボである。あの青空にそよぐ椰子林の下に原始的なモカンボの小農が立並ぶさまはノルデステの海岸ならでは見られない風景である。

ペルナンブーコの海岸のモカンボにはその壁が砂とマンゲ（海岸に存在する泥濘地）の錬土で造られたものが多い。椰子

の葉の屋根とマンゲ壁のモカンボに住む者には金殿玉楼の主にすら経験できない生活の味わいがあるとは面白い。この感じは哲理で解ぐ他はないであろう。

モカンボは一定の建築様式や型があるわけではなく、その代表的なものとしてレシフェ近傍の一例を挙げたに過ぎない。しかし北東部の諸州の中でアラゴアスのモカンボがアフリカのスタンやモサンビッケ、コンゴ地方の黒人の住家の原型に最も類似するといわれる。

ここでモカンボの前身であるキロンボについて少しく語るとしてブラジルの黒人奴隷史の一端を述べねばならない。

ブラジルの黒人文化はバンツー文化の影響を大いにうけているが、それは主にアンゴラ、コンゴ、モツサンビッケの黒人によってもたらされたものである。それ等の黒奴は労働者としてブラジル土人よりは体質と智能的に勝れていた。それだけに黒奴の全部が必ずしも従順でなく、あるものは莊園主の苛酷な仕打ちに反抗心をもち、脱走を企てることになった。つまりブラジルでの奴隷史が始まると間もなく逃亡奴隷が現われる結果となったのである。その脱走が単独か二、三の小人数の場合はカピトン・ド・マツト（逃亡奴隷の捕縛隊長）によって容易に捕えられて刑罰に処され、それに耐え得ずして自殺して相果てた沢山の奴隷哀話がある。遂には黒人の中から脱走奴隷のリーダーが現われて組織的に逃亡を計画し、而して彼等の隠れ

場や集団村を形成したが、それをキロンボと呼ぶことになった。従ってこれに集合する逃亡奴隷はキロンベローロである。それ等のキロンボが主に山間や叢林の中、または敢て沼沢地を選んで設けられたのは追跡者と捕縛隊の眼をくらすためであった。このキロンボが最も大規模な形で発展したのは十七世紀にアラゴアスの一角に建設されたパルマーレス黒人共和国である。この黒人共和国が一六三〇年から一六九七年までの長い間存続したことはブラジルの奴隷と社会史に特記さるべき大事件である。他には幾多の黒奴の反乱戦がある。

十七世紀半ばから十八世紀にかけては北東ブラジルの各地にパルマーレス黒人共和国を模倣したキロンボが形成されて荘園主をひどく困惑せしめた。このように相次いで起るキロンボ事件のためにポルトガルの王室令が發布され捕えられた逃亡奴隷にはFUJIAOを意味するFの焼印が押され、また片耳を切取られることになった。しかも再度の脱走奴隷には九日から十三日に及んで鞭打ちの重刑が行なわれたが、それに耐えられるものは殆んどなく大部分は死滅する有様であった。しかし皮肉な現象として脱走奴隷に対する処罰が残酷を極めるほど逃亡者を増し、各地にキロンボが形成された。あるものは各要所にスパイや警備員を配し、巧妙な手段によって獣皮、天然採集物と弾薬その他の必要物資とを交換して持久戦を張ったことは驚くほかない。

ミナスの金鉱地や農耕地でも度々黒奴の反乱が起ったが、一

七五六年四月十五日にリオ・グランデとリオ・ダス・モルテス盆地に生じた奴隷の一揆は未だ人々に語り伝えられている。それは同地の白人男性が悉く殺害された稀有の事件であった。

アニヤングラの綽名で知られるバンデーランテの孫に当るバルトロメウ・ブエノは一七五七年に六ヶ月に亘ってキロンボの討伐戦をつづけたほどの実説もあるが、他にもキロンボをめぐる物語りは多く、如何に莊園主が逃亡奴隷に手を焼いたかが想像される。何れにせよキロンボに関する史的物語りを集めても一冊の書となるほどだが、それは他日に譲るほかない。ただ昔日の逃亡奴隷が郷土アフリカの建築様式によつて急造の隠れ場を設けたのがキロンボと称され、その遺風の現在に及んでいるのがモカンボであることを知る必要がある。このモカンボはリオ州以南には見られなく、ミナス以北、特に北東部に多く存在するのは過去に多数の黒奴を使役して産業の繁栄を見た因果といわざるを得ない。殊にブラジル有数の大都レシフェの周囲に沢山のモカンボがあるのは何によるであらうか。これはノルデステ研究の一つの課題である。

モカンボも帰するところリオ市の山上族（ファヴェユラ）に類似し、最下級の貧民の存在する限りこれは絶えぬであらう。モカンボはブラジルのみに見る黒人社会かも知れない。

ルイ・バルボーザの滞英通信

ドレーフス大尉事件

先日、サンパウロのメトロ映画館で「ドレーフス大尉の裁判」の映画を観た。これは一八九四年から一九〇六年まで及んだフランスの軍事裁判で、当時おそらくこの問題ほど世界の話題に上ったものはない。

フランスの陸軍省勤務のアルフレド・ドレーフス大尉が、スパイ行為を働いてフランス軍当局の秘密をドイツ大使館に密売した、との嫌疑のため証拠不十分にもかかわらず、軍法会議で不当の判決をうける。しかし当のドレーフス大尉はあくまでも己れの無罪を叫びつづけ、また彼の家族と彼の同僚軍人一名、弁藩士、新聞人が法の正当の裁きを主張し、不撓不屈の努力の結果、ドレーフスは十二年目にようやく青天白日の身となるのである。

これは厳正な言論の勝利を物語ると同時に世の人々に多大の教訓を与えた。

ところで一八九四年には、あたかもルイ・バルボーザが、ブラジルの政変を避けて英国に亡命中であったが、彼の滞英通信 *Cartas de Ingraterra* の中にドレーフス事件を詳細に報告し、彼の見解が述べられている。

このルイ・バルボーザの通信は、リオのジョナル・ド・コメ

ルシオに連載されたが、あの頃の当国の知識人で、ドレーフス問題の不当の裁きに痛憤しなかつたものはなかつたといわれる。

しかもアルフレド・ドレーフスは、フランス陸軍大尉の位を剥奪されて、仏領ギヤナのデヴィルス・アイランド（悪魔の島）に流刑に処され、愛する妻子と別れて語る人もなく五カ年の永い歳月を過ごしている。

仏領ギヤナといえば、ブラジルのアマパ領との接統領地であり、その海域の孤島にドレーフスが無実の罪に悲憤の涙を流していたことが、心ある人々の同情をそそつたのは当然である。

ルイ・バルボーザの滞英通信には、ドレーフス問題はフランス軍当局の償うべからざる汚辱事件であると喝破している。

そもこの事件の発端は、エスターヘジーという同じくフランス軍人がスパイとなつて暗躍し、ドイツ大使館に宛てた書面の筆蹟がドレーフス大尉の筆蹟と酷似するところから、それを唯一の証拠としてドレーフス大尉を容疑者と見なし、執拗なまでにあらゆる手段を尽くして遂に彼に有罪としての判決が下されるのである。

公衆の面前でドレーフス大尉の奪位式が行われ、人々から売国奴の痛罵を浴びながら、「自分は無罪である。フランス万歳」と叫ぶところは想像するだにも悲痛そのものである。このド

レーフス大尉事件のためにエンサイクロペデア・ブリタニカは一頁余のスペースを割き、事件の経路を詳しく収録している。人間である限り時に法の通用を誤らないとは誰も保証し得ない。しかしこのドレーフス大尉事件の教えるところは、フランス軍当局が軍部の威信にのみ重きをおいて裁判の公正と慎重を欠き、一人のフランス軍人を社会的に葬り去ろうとした軽卒さである。

この問題のために当時のフランスの大新聞は、論調を二つにしてフランス政府と軍当局を糾弾した。特に弁護士であり新聞人の、ジョージユ・クレーマンソー（後のフランス政府首相）と、文学者エミール・ゾラのペンの活動が注目される。

エミール・ゾラが、新聞「L'AURORA」に寄稿したドレーフス問題に対するフランス政府首相宛の弾劾文は、フランスは勿論世界各国の輿論を喚起した。ゾラはその過激な政府攻撃のために収監されたが、新聞人として主張をまげるところがなかった。

ドレーフス大尉事件は、フランスにおいての前世紀末の出来ごとであるが、現在とてもこのような法の裁きの誤りが、何れかの社会で繰返されないと断言できない。それにつけても肝要なのは、民衆の冷静な理性と公正な言論の批判である。

ペトロポリスの紫陽花

ドン・ペードロ二世の外国旅行を偲ぶ

二十数年前に私が初めてペトロポリスに行った時は恰かも紫陽花（あじさい）の季節であった。

その頃ペトロポリスの山荘に居られた著述家A・T氏を訪ね、広い庭園に咲く紫陽花を眺めながら語り会ったことが記憶される。

紫陽花は強烈な日光の直射には弱く、ペトロポリスやテレゾポリスのような山岳地特有の常に包まれて軟かな陽光を受ける土地に最も通している。

A・T氏と私の話題は期せずしてドン・ペードロ二世に向けられ、彼が殊のほか紫陽花を愛したことを知った。A・T氏の日くに、「紫陽花は同じく青色でも非常に変化に富んでいる。時には藍色と赤色を帯び、又は淡黄色を含み、成いは濃紫色と褪青色を併わせもつ。従ってこの花は変心を意味して愛人には贈らない習慣がある。しかしその反面変化と刺戟の象徴ともなっている。

あの穏健なドン・ペードロ二世がこの花を愛した理由もそこにある。彼が生活の中によい意味の変化と刺戟を求める進歩性に燃えていたことは、前後三度に亘ってヨーロッパへ旅行したことによっても知られる。彼は外国旅行を通して如何ほどか見

聞を広め、また祖国愛の念を深めたか知れない」と。

それ以来、私はドン・ペードロ二世を、皇帝よりは旅人としての彼の手柄に魅力を感じ、紫陽花を見る時に彼の面影が浮かぶのである。

おそらく十九世紀の一国の君主で、ドン・ペードロほど広く世界各国を訪れて多くのことを学んだものはないであろう。

五カ年に及んだパラグワイ戦争は彼に少なからぬ精神的打撃を与え、健康を害う原因ともなった。そこで転地療養のためにも彼は政府重臣の反対を押し切って、念願のヨーロッパ旅行をすることになった。ドン・ペードロ二世の私生活は質素を極め、唯一の散財は図書の購入であつたので、どうか外国旅行は許してほしい、というのが彼の本心であつたらしい。息女イザベルを摂政として宮廷に残し、愛妻テレザ・クリステナと側近者三名を従えてリオを出発したのが、一八七一年五月二十五日で、これが彼の第一回のヨーロッパ旅行である。

ポルトガルのリスボアに到着するや、彼は次いで彼の幼年期の継母であつたドーナ・アメリカを訪れた。曾て十七才の金髪美人もその時は六十才の容色衰ろえた老婆となつていた。

ドン・ペードロはポルトガル宮廷の型通りの歓迎の宴に臨んだ他は自由に市内を歩き廻り、博物館、天文台、大学校を見学したことは如何にも彼らしいところがある。

リスボアを出発した彼は、旅程の都合上先きに英国に向つた。ドヴァーからロンドンに着いた彼は、英国観光の一外国人

夫妻としてホテルに投宿する気安さであった。

儀式めいたことを好まない彼ながらもビクトリア女王を儀礼訪問したところ、女王に手厚いもてなしを受け、オスボーン宮に賓客として二日間滞在した。

彼のロンドン訪問の目的の一つは、進化論で有名な博物学者チャールス・ダーウインを訪れることであつたが、遺憾ながら当時ダーウインは外国旅行中で不在であつた。ダーウインは一八三二年度と一八三六年度にブラジルを訪れている。

ロンドンの訪問を終えたドン・ペードロはスコットランドに達し、あのハイランドの山岳と青色の湖に感歎し、文豪ウォルター・スコットの詩や小説に描かれる風景に接し、心自ら躍る感があつた。ドン・ペードロは特にアポット・フォードのウォルター・スコットの山荘を訪れ、文豪の面影を偲んで暫し冥想した。

スコットランドから彼は帯びドヴァー海峡を渡ってベルギーを訪い、ブルッセルを経てナポレオン最古の古戦場ワートルローに在りし日の英雄を偲んだ。

その後ドン・ペードロはドイツに入り、ケルン、エッセン、ハンブルグ、ベルリンを訪れ、ポツダムではウイルヘルム・カイザー一世と会見した。ウイルヘルム一世はプロシヤの王であつたのが、ビスマークの政治的成功によつて遂にドイツ国の王となつたもので、ドン・ペードロが彼と面談した時はその歴

史的出来事から六カ月目であった。

またベルリンにおいてドン・ペードロは作曲家で革命家のリヒャルト・ワグナーにも会い、あの人の気を揺がすようなワグナーの名曲に感銘を強くしたことが彼の日記に書かれている。

ドイツを去ったドン・ペードロは、オーストリーのビュエナ、ブタペストを訪れ、トリエステを通過して水郷ヴェニスに達し、更にミラノに於いて詩人アレサンドロ・マンゾニと会見し、心行くまで歓談した。性来が詩人肌のドン・ペードロが、当時八十六才の老詩人マンゾニと語り合う中に自ら相通ずるものがあった。

北部イタリアからドン・ペードロは方向を近東にとり、アドリアチカ海を経て地中海の東部に達し、遙かにクリート島を望んで哲人ソクラテスと紀元前のギリシヤ文化に思いを馳せた。やがて彼がエジプト滞在中に、ブラジルでリオ・ブランコ子爵の功績によってベンテレ・リーブレの法令が公取された報に接した。ベンテレ・リーブレとは、ブラジル生れの奴隷の子の自由を認めるもので、ここに奴隷解放の第一歩が印されたのである。

ドン・ペードロは、ローマ教皇レオン九世に謁見し、同日イタリア皇帝ビトリオ・エマヌエルと会見している。イタリア訪問後、彼はフランスに赴きバリーだけに三カ月止まり、その間に多くの著名人と会談した。中でも文豪アレキサンダー・デュマや科学者パストウルと語り合うことの出来たのは大いなを満

足であつた。

彼がパリでビートル・ユーゴーと親しく面談したのは二回目のヨーロッパ旅行の折であり、それは一八七六年度のことである。

第二次外国旅行には、ドン・ペードロはアメリカ合衆国を経由してヨーロッパを訪れたが、アメリカではフィラデルフィア国際博覧会で、電話の発明家アレキサンダー・グレハム・ベルに援助を与え、ドン・ペードロによつて初めて電話の試験の行われた逸話がある。

次にドン・ペードロのアメリカ旅行中の大きな収穫は、清教徒の都ボストン近郊において詩人ロングフェローと会談したことであろう。当日は幸いにして哲人エマーソンがロングフェローを訪れたので、ドン・ペードロは一日にしてアメリカの名高い詩人と哲人に接することが出来たのである。

それからドン・ペードロはカナダの一都会を訪れ、ニューヨークから北大西洋を横断して英国に向つた。

ベレン河岸の野外市

ヴェル・オ・ペゾ

ベレン市はパラ州の首都で、大西洋を陥ること百二十キ

ロ、アマゾン河口、グワジャラ湾の右方に所在する港町であることはいうまでもないが、その河岸風景のヴェル・オ・ペゾ VER-O-PESOが同市の創設当時の特色として名高い。

およそ何処の国にも港町には共通する河岸(かし)風景というものはあるが、ベレンのそれには他に見られない一種独特の雰囲角が感ぜられる。それは人間と色彩と騒音の交響楽というのが当たっているであろう。

ベレンのヴェル・オ・ペゾは河岸(埠頭)につづく野外市で、キンゼ・デ・ノベンブロ街に初りシケーラ・カンボス広場(但しロジオ広場)に通ずるアペニータ・ポルトガルの右側に沿って展開される極めて大規模のものである。その埠頭のカノアや帆船が連らなっているが、それは単にアマゾンのカボクロによって操縦されて早暁に河岸につけられ、荷揚げまたは荷積みされる光景もベレンのヴェル・オ・ペゾ特有の眺めである。帆船の型にも多種多様あるが、大体モンタリアス、パリヤ、ボテス、ヴェレーロ、ヴィジレンガなどで、それに魚や農産物を積み、マラジョ島初め近傍の小島からやって来るのである。

こうして早朝からヴェル・オ・ペゾの河岸に野外市が開かれて非常な活況をみせる。このヴェル・オ・ペゾの賑わいはブラジル随一の定評がある。河岸は一メートルの隙間もないまでに着けられる数多の舟の帆は赤、朱、褐色など様々でさながらテクニカラー映画の観がある。中にはマストに沢山の小旗を翻がえしているのもあるなど、ベレンのヴェル・オ・ペゾは文字通

りのお祭り気分を呈する。

空地という空地は全部利用されて至るところに商品が並べられる。その雑踏の中に客と売子の問答がかまびすしく、それはあらゆる人種と階級を網羅し、あたかも人間市を見るようである。

ベレンの埠頭は幾つかの河の合流点に位置し、また市街が砂質と粘土層の上に形成されているために干汐には泥濘と化するがヴェル・オ・ペゾの河岸の特徴である。従って多くの舟は満潮に乗じてベレンの埠頭に競って入り込むのでその混雑さは推して知るべしである。満汐と風の好条件に恵まれるなればそれぞれの帆船が未明に出発してヴユラ・オ・ペゾに向って航進する様は実に美しい。

ヴェル・オ・ペゾに集合する者には仲買人、卸商、小売商、地主、農業者、航海家、運送屋など種々の職業と階層がある。彼等は何れも金儲けをねらってはいるが大して慾望もなく善良な市民である。またアマゾンのカボクロ系住民の間には犯罪はほとんどなく、常に平和が保たれていることは白人社会の学ぶべきものがある。

ベレン近傍には比較的肥沃な生産地が多くあるところから昔から農産物の集散市場をなしていた。一六一七年の頃はベレンの人口は数百に過ぎなかったが、その当時からヴェル・オ・ペゾの野外市があつて住民に重宝がられたものである。それが現

在までも継続していることは特筆に価する。

河岸に着けられる帆船には舟子の所有に属するもの或いは歩合制で所有主から借りうけているのがある。その荷揚げする騒音に売子の叫び声が混り喧騒そのものである。商品の主なものは魚類、フュージョン（豆）果物、マンジヨカ澱粉、バナナ、アバカシー（パイナップル）、カニ、食用亀、薬草、縄煙草、土器、鉢、草花などである。この野外市は河岸に沿って驚くほど長く、高級雑貨を除く外は何でも購入できる便宜がある野外市の所々に輪をなして踊る者に和して歌い且つ笛を吹き鳴らす光景も眼につく。

昔ベレン市が形成される以前、ビリ河口カピン・ダ・タバ・デ・パラナス―部落の近くに小さな港があつたその場所に税関が設けられて荷揚げされる物資に課税されたものである。つまり商品の重量によって税金を徹したが、それがカーザ・デ・ヴェル・オ・ペゾと呼ばれた。そのヴェル・オ・ペゾが習慣的転地名とされ、遂にはベレン名所の埠頭と河岸の名称となつた。同時にこれが野市の代名詞となつたのである。

ベレンでは河岸のヴェル・オ・ペゾの騒音と共に夜が明けるが、それは一日の活動の序曲でもある。また黄昏に見るベレンの河岸の美しさは格別である。ベレンの一日は河岸のヴェル・オ・ペゾに初つてヴェル・オ・ペゾに終るといふも過言でない。

佐藤 常 蔵

◇ 明治四十年生・在ブラジル三十八年

現住所 RUA CANDIDO NASCIMENTO・

101 S・PAULO—BRASIL

◇ 出身地 北海道函館市

◇ 大正十一年渡蘭・農業経営数年・雑誌「農業のブラジル」の主幹を経て現在織物工業に従事旁々文筆に親しむ。

◇ サンパウロ日本文化協会理事

日伯文化普及会理事

サンパウロ学生会理事

著書 ブラジルの風味

著者との協定により検印を廃止

ブラジル風物記

昭和三十六年五月二十日印刷
昭和三十六年五月三十日発行

¥ 450

著者 佐藤 常蔵

発行者 株式会社 帝國書院
東京都千代田区神田神保町三ノ二九
代表者 守屋紀美雄

発行所 東京都千代田区
神田神保町三ノ二九

株式会社 帝國書院
電話東京側〇八三〇一四

Printed in Japan